

このファイルは「琵琶湖の研究」を出版するための参考資料として作成しました。

「琵琶湖の研究」は文庫版320ページの書籍としてQuarkXPress3.3で仮編集しています。内容は次項からの目次の通りですが、確定はしていません。琵琶湖でバスのリリースが禁止される2003年4月1日以後の状況を見届けた上で、すべての原稿をそろえて内容を確定したいと思っています。すでに現ファイルで320ページがほぼ埋まっていますが、Editorialの内容が増える分、ホット情報の項目から不要な部分を削って、最終的に320ページに収まるように調整する予定です。

著者による校正は、Editorialについては現状でほぼ完了しています。ホット情報以降はページが動くので、確定してから校正するつもりです。目次についても同様です。

ファイル名 「琵琶湖の研究」 b 03/03/25

琵琶湖の研究

ゴールデンウィークに突入した琵琶湖でバス釣れてます (2002/04/28) 150
 ゴールデンウィーク後半に突入。琵琶湖のバスも連休かか!! (2002/05/03) 154
 釣れる釣れないは腕次第のゴールデンウィーク後半 (2002/05/06) 157
 琵琶湖北湖、南湖も池原ダムもビッグバス釣れてます (2002/05/14)
 まるで梅雨のような琵琶湖。北か南か迷う季節 (2002/05/16)
 南浜漁港のゴミが減った理由は? (2002/05/26)
 真夏のような北湖で下野正希プロがSOPキャラクター (2002/05/28)
 四十肩テニス肘加藤誠司プロが琵琶湖戦3位入賞 (2002/06/03)
 6月上旬の琵琶湖は天気よ過ぎてバス釣れてません (2002/06/05)
 琵琶湖利用適正化条例の要綱案を滋賀県が発表 (2002/06/19)
 琵琶湖にひさしぶりの雨。梅雨の好機到来か!! (2002/06/21)
 リリース禁止反対イベントを急ぎよ開催。匿名運動も (2002/07/04)
 真夏のような七夏の琵琶湖。水泳よりもバスフィッシング (2002/07/07)
 加藤誠司プロとその一味。なんだかんだで大忙し (2002/07/09)
 琵琶湖の水位が急上昇。釣行にはくれくれも注意を!! (2002/07/10)
 立て続けの台風でひどい濁りになった琵琶湖 (2002/07/16)
 アングラーのボートが増え始めた夏休み直前の琵琶湖 (2002/07/19)
 台風一過。二過。三過。いよいよ夏本番の琵琶湖 (2002/07/28)
 夏休みの琵琶湖にアングラーが少ない理由 (2002/08/07)
 お盆休みの琵琶湖にアングラーが少い理由 (2002/08/07)
 お盆休みに突入した琵琶湖で杉戸繁伸プロが爆釣!! (2002/08/10)
 早くも秋の気配が漂い始めたお盆休み終盤 (2002/08/18)
 台風3号の影響で琵琶湖は一気に秋にかわるか? (2002/08/19)

バスも釣ってる下野正希プロ。日戦9位入賞 (2002/09/01)
 真夏の暑さがぶり返した琵琶湖。それでもパターンは秋 (2002/09/02)
 琵琶湖バス釣り人協議会が滋賀県に意見書を提出
 琵琶湖レジャー利用適正化条例案を滋賀県が発表 (2002/09/20)
 リリース禁止に対する公開質問状を日釣振が知事に提出 (2003/09/21)
 秋本番の3連休第二弾初日は絶好の釣り日和 (2002/09/21)
 杉戸繁伸プロがゲストと2人でバス2尾の大爆釣!! (2002/09/28)
 雨が降っても水位は上昇せず。それでもバスは入れ食い (2002/09/30)
 リリース禁止条例の審議が滋賀県議会でスタート (2002/10/01)
 台風2雨で水位が上昇しパターン急変 (2002/10/03)
 秋の好天に恵まれた3連休中日。岸もボートも大入り満員 (2002/10/13)
 3連休最終日はバスもアングラーもスローダウン (2002/10/14)
 琵琶湖バスのリリース禁止条例が滋賀県議会で可決成立 (2002/10/16)
 新たなるフェーズに突入したリリース禁止問題 (2002/10/17)
 リリース禁止条例に対し早くも提訴の動き (2002/10/17)
 リリース禁止に関して県知事が意向を表明 (2002/10/24)
 秋の後半に突入した琵琶湖。近江舞子の岸釣りが好調 (2002/10/26)
 秋の後半を飛び越して冬の初めみたいな琵琶湖 (2002/10/27)
 琵琶湖は寒くなってもまだシャローのミノーが好調 (2002/11/02)
 微妙に風向きが変わってきた琵琶湖バスのリリース禁止 (2002/11/07)
 11月上旬の雪景色でパターン激変の琵琶湖 (2002/11/10)
 平日でもアングラーが絶えない近江舞子石積み突堤 (2002/11/15)

- 琵琶湖の岸釣り好シーズンの連休。南浜は小バスが好調 (2002/11/23)
 クリーンアップ琵琶湖に参加。ゴミはあいかわらずきこや (2002/11/26)
 岸釣り好調の近江舞子。最後の数釣りのチャンスか (2002/12/04)
 近江舞子舟たまりが好調。石積み突堤のバスはどくどく (2002/12/15)
 滋賀県知事が適当と認めた? 審議委員・加藤誠司プロ (2002/12/18)
 琵琶湖周辺に積雪。年末年始の釣りに影響必至か? (2002/12/27)
 下野正希プロ近江舞子で2002年ラストパッシング (2002/12/30)
 正月の琵琶湖は荒天続き。近江舞子のバスは行方不明 (2003/01/04)
 正月休み最終日も大荒れの琵琶湖南湖 (2003/01/05)
 NHKの受信料支払い拒否の理由 (2003/01/07)
 正月明けの3連休初日はのんびり穏やか (2003/01/11)
 3連休最終日も穏やか。近江舞子はマメバス天国 (2003/01/13)
 琵琶湖周辺に積雪。いよいよ厳冬期に突入か? (2003/01/16)
 県漁連会長らの恐喝未遂事件。メディアの反応に注目!! (2003/01/22)
 アングラーがとてもしない極寒の週末 (2003/01/25)
 琵琶湖で続発する事件のニコースを見て思ったこと (2003/01/26)
 世界水フォーラムで琵琶湖の浚渫船は消えるか? (2003/01/31)
 水位、水温ともに落ち着いた琵琶湖。そろそろ一発狙いの季節か? (03/02/06)
 琵琶湖は冬のどん底。平日の釣り場はガラ空き (03/02/14)
 ミノーにケツドサイス。琵琶湖の春がスタートか? (03/02/22)
 リリース禁止まで1カ月の琵琶湖にバスアングラー戻り (03/03/02)
 春とは名ばかり。3月に吹雪の琵琶湖 (03/03/09)

- ニコースステーション琵琶湖特集放送延期の理由 (03/03/17)
 アメリカのイラク攻撃と外来魚リリース禁止の共通点 (03/03/20)
 世界水フォーラムで南湖の浚渫船が消えた (03/03/22)
 リリース禁止前最後の3連休の琵琶湖は意外と平穏 (03/03/24)

今月の琵琶湖

- 1月 常吉リグ、ネコリグに続く岸釣りの新テクニク発見!! 296
 2月 年末年始の雪と1月中旬の温かい雨の影響は? 297
 3月 雪が少なく絶不調の琵琶湖。春の準備をお早めに 299
 4月 スポーニングが早くて釣るのが難しい春の原因と対策 301
 4月 (改訂版) 異常なくめの春。早くも3月末には大釣りのチャンスか? 303
 5月 南湖はドアフター。北湖のプリスポーンに期待したいゴールデンウィーク 305
 6月 琵琶湖と池原ダムで連日SOP。河畑文哉プロだけなせ釣れる 307
 7月 バスがトップで釣れそつで釣れないときの新対策 309
 8月 台風2連発の急増水と濁りがサマーパターンにどう影響するか 311
 9月 エルニーニョと日本のバスフィッシングの関係 313
 10月 アングラーが多い秋の連休を賢く乗り切るための方法 315
 11月 リリース禁止条例が滋賀県議会で可決成立。その影響と環境問題への危険 317

く変貌しています。なかでも琵琶湖における外来魚リリース禁止条例の施行前と後の変化については、バスフィッシングの将来を占う意味で全国のバスアングラマーから注目を集めています。

琵琶湖バスのリリース禁止はまだ始まったばかりで、これが最終的にどんな状況に落ち着くかは今なお判断を許しません。リリース禁止とそれに対してバスアングラマーが取った行動の結果はまだ出ていませんが、何がどういう理由で起こり、それがどんな結果をもたらしたか、その間の出来事を記録することはすべてのバスアングラマーとバスフィッシングの将来のために重要だと考えます。そこで著者がホームページに展開した情報を本書にまとめることにしました。

12 ページからの「Bassingかわら版Editorial」は、リリース禁止条例の要綱案が公表され、議会で可決成立に向かっているさなかにホームページでの連載がスタートしました。一般の釣り情報と一緒に扱っていく硬派な内容で、1〜2週間に1本のペースでバスフィッシングにまつわる様々な出来事を解説しています。元々のスタートがリリース禁止条例に触発されたこともあって、内容の大部分は琵琶湖バスのリリース禁止に関することです。

ページからの「琵琶湖ホット情報」はBassingかわら版の中心記事であるBBCホット情報からの抜粋です。Bassingかわら版では96年のスタート時から一環して琵琶湖のバスフィッシング情報を多く扱ってきました。本書では、リリースが禁止されたことで琵琶湖のバスフィッシングがどうか変わったかを見ていただくために、リリース禁止の1年前からの情報を選んで掲載しています。そこでタイトルも琵琶湖ホット情報としました。

296ページからの「今月の琵琶湖」は、サンケイスポーツ大阪版の連載記事をホームページに転載していたもので、1995年7月から2002年11月まで続いた中から2002年の11回分を本書に収録しています。本書に掲載以前の情報はホームページをこらんたいだければ幸いです。

「琵琶湖の研究」というタイトルは、小泉内閣の道路4公団民営化推進委員会のご意見番（その前は行革断行評議会委員）として注目を集めた作家、猪瀬直樹さんが特殊法人の問題点を突いた著書「日本の研究」をヒントに目させていただきました。詳しくは琵琶湖ホット情報2003/01/26（ページ）を「じぶんくたさ」。

バスフィッシングを取り巻く状況は本書の発刊以降も刻一刻とかわり続けています。本書の中でもたびたび触れています。リリースが禁止されたからといって琵琶湖へ行かないのではなく、たとえ釣りはしなくても、バス釣り場としての琵琶湖へ足を運んでその様子を見守り続ける必要があると著者は考えます。そういう努力を続けないと、琵琶湖というすばらしいフィールドを放棄してしまうことになりま。す。ですから、本書を読んで安心するのはなく、これを行動のきっかけにしてください。皆さんが考え、行動していただくためのヒン



著者略歴 服部宏次（はっとり・こうじ）週刊釣りサンデーの記者を経て、95年フリーランスとなりBivako Bass Communications(BBC)を設立。96年からは自らのバスフィッシング情報ホームページ「Bassingかわら版」を運営。琵琶湖を中心に活動を続けながら、書籍、雑誌、新聞、テレビ、インターネットなど様々なメディアを通じてバスフィッシングの魅力を広く紹介している。ソルトウォーター、フライ、磯釣りなども得意で、現在は和歌山県新宮市の三輪崎漁港を基地とするゲームフィッシングポイント・ワイルドキャットのキャプテンとしても活躍。1969年生まれ。大阪府東大阪市在住。

Bassingかわら版Editorial

きわめておめでたくて救いようのない全体状況 Bassingかわら版 Editorial (2002/09/18)

バスフィッシングを取り巻く現在の嵐のような状況を少しでも正しく皆さんにお伝えするために、今回から新しいコーナーを設けることにした。これはいわばBassingかわら版の社説のようなものである。

お坊ちゃん、お嬢ちゃん方には面白くないかもしれないが、はっきり言って今のお子様向け釣り雑誌の数々には分別ある大人が読むに耐える記事がまったくとってよいほど載っていない。それでは面白くないので、子供にはわかりにくいのを承知で大人向けにキーボードを叩き続けることにする。内容が内容だけに、文体もいつもの情報とはかえることにする。フィッシングライターなどと称しながら、実はお子様向けの文章しか書けない方々に、プロなら内容に合わせて七色(ダムじゃないよ)の文体を使い分けざるがらいいのことはしていただきたいという願いを込めて……。

9月17日に小泉首相が平壤を訪れ日朝首脳会談が行われた。そのテレビニュースの中に街頭インタビューの場面があった。拉致された人達のうち6人が亡くなっていったことについて、街頭にいる人達(テレビの都合に合わせて選択は行われているが)に話を聞いて、予想の範疇をまったく越えないどころでもありそうな意見を引き出すという、あれである。その場面の中に軒並み出てきたのが、「まさか亡くなっているとは思いませんでした」という感想だ。

これって、亡くなっているとは思わなかったんじゃないかと、今日この日まで拉致問題のことなんか真剣に考えたこともなかったというのが本当のところなのではないのか。それが今日になって突然、20年も前に拉致された日本人が連れ去られた先の国で死んでたという重大な事実を突きつけられて狼狽したあげく、「まさか亡くなっているとは……」などと云ってその場を取り繕っている、というのが今回の日朝首脳会談で市井の日本人が置かれた平均的な状況なのではなからうか。そういう事実をテレビの街頭インタビューが図らずも画面上にさらけ出してしまったのだが、テレビを見てる人のほとんどはそのことに気付きもしない。これが現在の日本という国のきわめておめでたくて救いようのない全体状況なのである。

わがバスフィッシングの世界にも、これとよく似たことがあった。琵琶湖で釣ったバスをリリースすることが滋賀県の条例で禁止されることになるなんて、半年前まで誰が思っていたらうか。ゴミ問題も、めいわく駐車も、夜間の騒音も、生態系の問題も、自分達の目の前にあったにもかかわらず、2003年4月から琵琶湖で釣ったバスをリリースできなくなるという事実を突き付けられるまで真剣に考えようとしなかった。考えなかっただけでなく、考えるのに必要な知識を身に付けようとしなかった。それが現在のバスアングラーとそれを取り巻く業界のきわめておめでたくて救いようのない全体状況なのではないかと思う。

でなかったら、今になって次のような発言が出てくるわけがない。琵琶湖のバスアングラーのマナーの悪さは日本一だと前から思っていた……これって街頭インタビューの「まさか亡くなっているとは……」というのと同レベル。分別ある大人がしっかり考えれば、今さら恥ずかしくて口にはできない言葉ではないか。これを聞いて、さすがに偉い人はいいいこと言っ

なんて思った人が、もし一般のアングラードだけでなく業界や各種団体の多数を占めているのであれば、つまり（こう書くのは3回目になるが）全体状況がそれほどおめでたくて救いようがないのであれば、日本のバスマスフィッシングに未来はないと思って早々におさらばした方がよいのかもしれない。そうじゃない明るい希望を持てるような材料があることはあるのだが、その力は十分なのか。全体状況を好転させる具体的で有効な方法は？

などと、そんなことを日朝首脳会談のテレビニュースを見ながらふと思つて、まずはとにかく思つたことを文章にまとめてみた。まとめたら、それを載せるためのスペースをBassingかわら版に作るつて、このコラムを始めることになった次第である。もとより議論になるのは承知の上。十分な知識と正確な情報に裏打ちされた議論なら、それにふさわしい場で大いにやっていただきたい。そのための話題を提供できたのであれば本望である。匿名の不毛な議論はごめんこうむる。そういうのは時間と努力、ネット資源の無駄遣いであるから、なしにしていただくようにお願い申しあげる。言論の自由を保証した日本国憲法第21条（Bassingかわら版の活動もこの権利にもとづいて行われている）は、他人の人権をないがしろにすることを許すものではないことを念のため申し添えておきたい。

状況がまったく正しく把握できていない

Bassingかわら版Editorial(2002/09/19)

なにやら、さつそく第1回からずいぶん盛り上がりつつあったようで、まずはお礼申しあげる。第2回は昨日の日朝首脳会談の話の続きから。

昨日のテレビのニュースで、拉致された人達の家族が安否調査の結果を知らされて、それに対する感想を述べているシーンが何回も映っていた。その場面を見て感じたのだが、男性よりも女性の方がしつかりしていて、言うべきことをきちんと言っていたではないか。これってどういうことかと考えてみた。その結論は、つらいことや悲しいことに対する心の準備が、女性の方がちゃんとできていたのではないかとことだ。

ただし、これは著者がテレビニュースを見て勝手に感じたり考えたりしたことである。画面に映つてた人達がそうであると言つつもりはまったくくないから、くれぐれも誤解なきように。あくまでも、こういうことを考えたという範囲内の話であることをご理解の上で読み進めていただきたい。

同じようにつらいことや悲しいことに直面するといつても、その内容は様々に分かれる。男性なら働いてる店や会社の状態が思わしくないとか、取引先との商談がうまく進まないとか、人間関係がうまくいってないとか、そういう自分の責任と努力でなんとか解決できる可能性が少しでもあつて、それが思い通りにいかないからつらいとか、ダメになったから悲しいことになってしまったというケースが多いのではないが。

対する女性は、同じつらいことや悲しいことでも、自分の力ではどうにもならないことが多いのではなからうか。ありそうな例を一つあげるなら、夫の会社からの帰りが遅くて、そのため家庭が乱れているというケース。それを解決するのは奥さんよりも夫の責任で、奥さんが取れる手段はそう多くはないはずだ。テレビに映っていた人達の年齢なら、もつとつらいことや悲しいことがたくさんあつたとしてもおかしくはない。そういう経験を重ねてき

て、いざ拉致された家族が生きてた、死んでたとなったときに、女性の心の強さが際立ったのではないかと思ったのだ。

それとも一つ、これはメディアも含めての話なのだが、拉致された人達全員は無事帰還にとても強くこだわっていたのが気になった。もちろん、それがかなうに越したことはない。しかしながら現実には、他国で平和に暮らしている一般市民を拉致して連れ去るといふ暴虐非道なことをする人達（そのようなことを実行した人達あるいは組織。ここで国や国家という言葉を使うべきではないと思う）が相手である。拉致された人達の一部でも亡くなっていたときに備えるのは当然だと思っただが、そういう準備はしていなかったのだらうか。もっと不思議に思うのは、安否情報の公開を求めたら、よくない答えが返ってくる可能性も当然ある。その覚悟はしていなかったのかということだ。

これにはミスリードが働いているのではないかと思う。例えば家族の所へ取材に行った様々なメディアのスタッフが、「大丈夫。きっと無事ですすよ」「みたいなことを別れ際に安易に言っただけで帰る。」「希望を失ったらダメですよ」「みたいなことを言う人もいる。」「亡くなっている可能性がある」というようなことは言っただけから誰も言わない。しまいには決して口にははいけないタブーになってしまう。よい情報はすぐに伝わるが、よくない情報はなかなか伝わらない。その結果、きつと生きてるといふ信念が、絶対に生きてるといふ過信にかわる。もちろん信じることは必要だが、一方で状況を正しく把握していないと、予想してない事態に追い込まれてパニックになる。つまり、ミスリードが悲しみを増幅させる結果になるわけで、これによって状況を正しく把握できてない典型的なケースではないか。もちろん、こ

れも筆者がそう思ったというだけで、事実確認などはしていないから、その点、誤解のなきように。

上の内容の中で、バスアングラーの皆さんに注意しながら読んでいただきたいのは、「よい情報はすぐに伝わるが、よくない情報はなかなか伝わらない」というところだ。これを具体的に言いかえるなら、受け手が喜びそうな情報はすぐに伝わるが、受け手に喜ばれない情報はなかなか伝わらない。そういうことが長く続くと、最後には自分達が置かれた状況がまったく見えなくなってしまう。情報とは、そういう性質を持ったものである。これによって自分の身のまわりにもあるのではないだろうか。それを防ぐには、メディアリテラシーについて勉強するしかないのだが、日本ではこれがまったく普及していないのである。メディアリテラシーについては、いずれ機会があれば書きたいと思っている。

さて、前回の内容については多くのご指摘をいただいた。指摘の多くは以下の部分に集中していた。

前回からの引用

でなかったら、今になって次のような発言が出てくるわけがない。琵琶湖のバスアングラーのマンナーの悪さは日本一だと前から思っていた……これって街頭インタビューの『まさか亡くなってるとは……』というのと同レベル。分別ある大人がしっかりと考えれば、今さら恥ずかしくて口にできない言葉ではないか。

引用終わり

指摘の主な論旨は次のようなことである。

「琵琶湖のバスアングラのマナーの悪さは……」の部分について

- 1 話の内容が正しくない。間違ってる。
- 2 発言者の言おうとしていることが正しく伝わっていない。
- 3 発言の一部を引用して曲解して伝えている。
- 4 今はこんな論争をアングラ同士がしているときではない。

1〜3については、やっぱりきたかと思っただ。筆者の仕掛けに見事に引掛かったとしか言いようがない。こういうことを誰かがどこかに書いたとか、どこかで言ったということは前回の文章にはまったく書いてない。ただ、「次のような発言が出てくるわけがない」と書いただけである。それに対して1〜3のような指摘があった。誰かの話を引用しているのであれば1〜3のような指摘の対象になるかもしれないが、その場合は文章のプロなら、いつでもどこで、誰が、ということを書き書く。それをしないということは、単なる例として持ち出しただけであるから、1正しいも間違ってるもないし、2正しく伝える必要もないし、3曲解するもしないもない。4については、こういうときだからこそ次元の低い自己弁護的な発言は困るから、あえて例にあげさせていたのだと言っておこう。

どうやら一部の人達は、上に引用した文章を読んで、反射的にカーッと頭に血が上ってしまったようだ。だから、その後は支離滅裂で、議論にも何もなっていない。そういう人達の反応が強ければ強いほど、たくさんあればあるほど、この文章が効果的だったということを実証していただいているようなもので、まことに言ばしい限りである。相手を攻撃してるつもりが、実は相手を喜ばせてただけだということに、いいかげん気が付いた方がいいのではな

いかと老婆心ながら忠告しておきたい。それと、文章はくれぐれも正しく読んでいただくようお願い申しあげます。

つまり、これも自分が置かれている状況を正しく把握できてない典型的なケースだと言つてよいであろう。ここまでできて、やっと最初の日朝首脳会談の話と結び付いた。長い道のりを最後までお付き合いただいた皆さんには、つつしんでお礼申しあげたい。

本当の裏切り者は誰か

Bassingかわら版Editorial (2002/09/25)

Editorialの連載開始からちょうど1週間、第2回のアップから6日が経過した。その間、あちこちで拙文の内容をテーマとした議論が繰り広げられたようで、まずはお礼申しあげます。とりわけ第2回については、著者からの反論と勘違いした方々が、それ来なすつたと喜々としてキーボードに向かわれる姿が目に見えかねないような反応が一部にあったようです。

それに対して、さらに議論を重ねようとは思わない。その理由は、あえて反論しないといけないような事実あるいは論理展開が何一つ見られなかったからである。議論の前提として現状を正しく把握できるだけの知識や情報と、それを取捨選択して合理的に論を積み上げるだけの判断力がなくてはならない。そういう知識も判断力も持ち合わせないお子様の戯言に付き合ってる暇はないので、話を先に進めることにする。置いてきぼりにされたくないから、がんばって勉強しながらでも付いてきていただきたい。こういう風を書くくと、論争の旗色が悪くなったから逃げた、というようなことを言い出す方がよくいるが、そういう発言自

体が普通は負けを認めたくない側から出てくるケースが大部分であることを付け加えておく。

さて、本題である。ジャツカルの加藤誠司プロが実行委員長を務める琵琶湖バス釣り人協議会が9月10日に滋賀県に対し意見書を出した。(ページBCホット情報003/09/11に関連情報掲載)その内容については、かなり激しい賛否両論があったようである。中には加藤プロを「裏切り者」とする意見もあった。琵琶湖バス釣り人協議会の意見書は一つの提案として、規模の大きなトーナメントではバスをリリースしないかわりに、それ以外のトーナメントや一般のアングラが釣りをするときのリリースを禁止しないという中庸案を出している。その点を取り上げて、規模の大きなトーナメントでバスをリリースしないとするのは、バスアングラがバスをリリースする権利を売り渡すことであって、こういうことを提案するのはバスアングラに対する裏切り行為であると言っただ。

滋賀県知事と滋賀県に対しては日本釣振興会ほか数団体から、バスのリリースを禁止する条項の削除を求める意見書や要望書が出されている。もちろん、これが受け入れられるに越したことはない。しかしながら現実はどうかと言つと、いったん条例案に盛り込まれたバスのリリース禁止が全面撤回される確率はそれほど高くないと言わざるを得ない。そういうときに皆が皆、バスのリリース禁止を撤回せよでは、相手を話し合いのテーブルに着かせることすらできないのではないかということが出てきたのが琵琶湖バス釣り人協議会の提案だとするの、一番わかりやすい解釈ではないだろうか。

もつと理想を言えば、いろんな団体や個々のアングラががんばって、具体的に実現可能な様々な提案をすべきである。その提案の中には、リリース禁止の全面撤回に近いものから、ごく限られた条件を満たすときだけリリースを認めるものまで、様々な段階のものがあつてよいと思う。その中からお互いが歩み寄れるベストの選択肢を選んで一本化したものをアングラの側からの提案とするか、あるいはいくつかの提案を併出する。それが民主主義というものだろう。ところが80万人に達すると言われる日本のバスアングラは、そのようなことができる組織も機構も何一つ持ち合わせていない。その点に関しては、ほんの少し前までバスアングラを代表するかのような顔をしてた組織が何ら有効な活動も議論もできていないことからきわめて明白である。

そこでバスアングラにかわって日釣振などの組織が動いているのだが、実際は釣り関係の業者が集まった団体である日釣振が背に腹は代えられず仕方なく動いているというのが本当のところだ。日釣振はあくまで業者の団体であつて、組織としてのまとまりに欠け、実行力もなく、当事者能力があるかどうかも疑わしい。業者の団体だから、バスアングラからの観点に乏しいのは当然である。だからと言って、アングラの代表であるはずの全日本釣り団体協議会は日釣振以上に何もできない。ほかにかわる代表組織がないのだから仕方がないということ、現有組織を最大限活用して、やらなければならぬことをやるために加藤プロが出張ることになったのである。

加藤プロにすれば、一部のアングラから個人的な非難、中傷を浴びるのは最初から覚悟の上だったはずだ。そういうことを恐れて誰も出て行きたがらないところをあえて出て行ったのは、非難や中傷を恐れては何もできないということがわかり切っていたからだ。琵琶

琵琶湖のバスのリリクス問題に関してはバスアングラーの間にも様々な意見があり、それがまったく整理されていないどころか、反論を恐れて何も発言しない風潮がとて強い。その中で行動しようとするれば、それなりの覚悟は必要だということである。

わかりやすい例をいくつかあげよう。家が汚れていると文句を言われるのは、たいていは掃除をしてお母さんで、汚してる子供達やお父さんではない。空港のバツゲージコレクションで荷物が出てくるのを待っていて、ついに最後まで荷物が出てこなかったときに、その場の担当者や怒鳴り付けてる人がよくいるが、荷物をなくしたのは担当者ではない。いろんな会社の消費者窓口は苦情を受け付けるのもその仕事のひとつだが、苦情の原因を作ってるのは窓口の担当者ではない。さらには、またまた日朝首脳会談を引き合いに出すが、拉致された人達のうち8人がすでに死亡していたという事実が明らかになったとき、そのことを家族に伝えた福田官房長官の態度が人間的でなかったという非難が一部にあったが、官房長官はただの伝達役に過ぎない。つまり、ものごとの前面に立つのは常にリスクがつきまとう損な役割だということである。

琵琶湖バス釣り人協議会の意見書に盛り込まれた提案が万全でないという意見はあって当然だし、そのことを代表者として動いている加藤プロに訴えたい気持ちもわかる。だからといって、裏切り者呼ばわりは的外れもいいところである。裏切り者と呼ばれるべきは、琵琶湖のバスでおいしいめをしておきながら、「慎重な立場だから……」とか何とか言いながら、実際は何もしようとせずに逃げている、あるいは何かしたくてもする能力がない会社や組織、人達であって、少なくとも何かしようとはがなばつてる人に対して言っべき言葉ではない。

琵琶湖のバスでおいしいめをした人達というのは、琵琶湖のバスのおかげでがっばり稼いだとか、有名になったとか、他のアングラーよりも大きいのをたくさん釣って偉そうなの一つも言ってたとか、具体的にはそういうことである。そういうおかげをこうむっておきながら、いざとなったら何の恩返しもしようとしない例を現在の琵琶湖のバス達、バスアングラー達はあまりにもたくさん目にしてはいないだろうか。そういう会社や組織、人達に対しては、それに見合った評価を下すしかないのだが、そんな判断力や実行力がアングラーにはたしてあるのかどうか。そのことも同時に試されているとしたら、結論によってはアングラー自身が裏切り者であったということにもなりかねない。そういうリスクをみずからも負わされているということを理解しているアングラーはどれくらいいるだろうか。

「裏切り者」というような言葉を使うのは、最低限右に書いたぐらいのことを理解してからにしないとイケない。そういう理解力も知識も判断力もなく言うのであれば、どこまで議論しても子供のけんかでしかない。それでは内輪もめや近親憎悪を拡大させるだけである。その結果、本当の裏切り者は誰か、どこにいるかがわからなくなってしまう。そういう状態が一番危険なのだが、さて、ここまで書いたことをどれぐらいの割合の方にご理解いただけただろうか。もしご理解いただけないとすれば、著者はとんでもない裏切り者だと誤解されるかもしれない。そういうリスクもあるから油断できないのである。

裏切り者というのがバスアングラーの中から出てきた言葉だとしたら、それは説明の仕方と誤解の解きようもある。もっとやっかいなのは、まったく著にも棒にもかからない非現実的な自然保護主義者、無知を恥じようともしない新聞やテレビなどのメディアである。その

類の批判に対しては、反論すべきは反論し、それ以外は無視するしかない。毛沢東が言った言葉に「敵から悪く言われるのはよいことだ」というのがあるそうだが、加藤プロにはこの言葉を謹んでお贈りしたい。この言葉をさらに解釈すれば、敵に悪く言われれば言われるほど、たいへんけっこうなことだということになる。

要は状況がいかによく見えているかだ。視界を明瞭に研ぎ澄まし、正しい情報に基づいて一つ一つの判断を下していけば、進むべき方向を見失うことはない。そういう判断力を備えているという点で、加藤プロは著者の知る中で最適任者である。その何ものも恐れられない行動力は、ときとして無謀と評価されることもあるが、こういふときにはかけがえのないタレントであるということも明記しておきたい。

さて、加藤プロが裏切り者ではないということを書くのに精一杯で、本当の裏切り者は誰か、どこにいるかということを書くことができなかったが、これについてはいずれ稿をあらためて書きたいと思う。心当たりのある方は、楽しみにお待ちいただきたい。

釣りでおいしいめをする方法教えます

Bassingかわら版Editorial(2002/09/29)

まず最初に、前回の一部訂正を……。

「琵琶湖のバスでおいしいめをした人達というのは、琵琶湖のバスのおかげでがっばり稼いだとか、有名になったとか、他のアングラーよりも大きいのをたくさん釣って偉そうなおのことも言ってたとか、具体的にはそういうことである」という部分、「有名になったとか」を「有名になって何か得をしたとか」に訂正させていただきました。

「有名になった」だけでは、著者もその1人ということになってしまう。著者の場合は某テレビ番組のおかげで有名にはなったが、2000年秋からテレビに出なくなったり、雑誌などに出ることもなるべくお断りするようになっていたので、今ではすっかり忘れられかけている。すなわち、もはや有名人ではない。これは釣りの現場にいるとはっきりとわかることだし、テレビに出ているときは探み手にニコニコ顔で近付いてきてた人達が、テレビに出なくなるとたんだ姿を見せなくなったというようなこともある。そういう人達ときれいさっぱりおさらばできたことが、どれほど気持ちいいかということを実感できたのに加えて、テレビのよいところ悪いところ、裏表、損得勘定など、ずっと出続けてるだけではわからないことまで知ることができたのは、出るのをやめたからこそであったと思ってる。

琵琶湖のバスのおかげで経済的に得したか損したかと言えば、普通に仕事していたよりもちよっぴり得はあったかもしれないが、皆さんが思っておられるほどのことはないし、著者からそんなことを聞く立場にない面々が世間に吹聴して回った内容と事実はまったくかけ離れている。そんな面々の言うことを信じる方も信じる方だと思っただが、信じたくもなるようなバブルに湧いていた時代があったことが今ではなつかしい。

それよりも好きなバス釣りを自由に楽しめなくなった損害の方がはるかに大きいし、これから先の収入のダウンを考慮すれば、経済的に得したという結果にはおそろくならないだろう。つまり、著者は琵琶湖のバスのおかげで一時的に有名にはなったが、今はそれほど有名ではないし、得したか損したかは今でも微妙だし、将来的には損してる確率がかなり高いと

いうことで、「琵琶湖のバスでおいしいめをした人達」にはあたらぬ。その点、誤解している人が多いようなので、ここであらためてお断りしておく次第。著者は普段から申しあげて通り、かわいそうなフリーライターの一人に過ぎないのである。これホント。

釣りで本当においしいめをしようと思ったら、テレビや雑誌にうまくることだ。ディレクターや記者に乞われるままにメディアに都合のいいように演技したり、しゃべったり、書いてたりして、それが本当か嘘か、正しいか正しくないかなんてまったく気にしない。そういうことをした報酬として、釣りの実力よりも何よりもテレビや雑誌にたくさん出ることで有名になって、メーカーが製品を売るのに貢献する。それが一番簡単な方法である。

もつと極端なのは、ディレクターや記者が要請するのに先回りして、自分からメディアの都合のいいように立ち回る。「やらせ」は止めても、出演者が自分からする「やりん」はディレクターも誰も止めない。みんながそうだとはいわれないが、それに近いことをして有名になつてるアングラーが大勢いるし、24時間釣り専門チャンネルはできた、雑誌は増えたて出演枠がどつと増えた今がチャンスとはかり、なんとかメディアに取り入るつと必死の連中は、そうするのが当然と信じ切つて何はばかることなく大手を振つてテレビや雑誌に登場してもらえる。これすなわち、タレントアングラーの誕生である。

なぜそういうことになるかと言つと、現在の釣りを取り巻く経済システムの中にある限り、ほとんどそれしか方法はないからである。いくら有名なアングラーであっても、本当に釣りが好きで自分の信念にこだわる人物を相手にするのは、お金を儲けることが本分であるところのメーカーにとつては相容れないところが大きい。それよりも、お金や物さえ与えておけるアングラーはいくらでもいる。それが現実であり、それが嫌なら消え去るしかないのである。

ば何でも言つたことを聞く連中の方がはるかに付き合ひやすい。メディアとしては、「釣れないものは釣れない」などと言つてる筋金入りのアングラーを使うよりも、ディレクターや記者の言う通りに踊つてくれるタレントアングラーを使う方がはるかに簡単に番組や誌面が作られて映像効果、誌面効果も高いから、スポンサーや広告代理店も喜ぶというもの。そういう状況が固定化されてくると、釣りが好きで信念あるアングラーでも、程度の低いメディアに付き合おうと思えば、ある程度相手の都合に合わせざるを得ない。でなければ、かわりに出るアングラーはいくらでもいる。それが現実であり、それが嫌なら消え去るしかないのである。

釣りでおいしいめをするもう一つの方法として、消費機会は生み出すがお金は消費する有名アングラーの側ではなく、お金を生み出す生産システムとしてのメーカーやメディアの側に席を確保することも考えられるが、これは仕事が釣り関係だというだけで、釣りが仕事だというのとは違う。支配関係が逆なのである。それを勘違いして、仕事が釣り関係だから、一般のアングラーより一段高い所にいると思つている輩がいる。こういうのが一番たちが悪くて始末に負えない。特にメディア関係においては、百害あつて一理なしである。そういうのは一時の役には立つても、いずれ業績に貢献しないどころか足を引つ張るお荷物になるから、早めにリストラされることを経営陣にはお勧めしたいのだが、この経営陣がまたとんでもない勘違いをしているケースが多くて、こちらの方がいつそう始末に負えないという、まったくもつて笑い話にもならない現実があちこちに実在する。そんな玉石混淆を寄せ集めたのが日本釣振興会であるとしたら、琵琶湖のバス問題は……なんてことを考えるよりも、加藤

誠司プロはよくやっていると書いておこう。

さて、前回の内容に關してもう一点。

「ほんの少し前までバスアングラーを代表するかのような顔をしてた組織」に關しても、もっとはっきりと名指した方がいんじゃないかという意見があった。その一方で、これは人からの伝聞なのだが、事実無根で誹謗中傷にあたり心外だという人もいたようだ。

名指しするかしないかについては、あえてここで具体名を出す必要はないと思う。読んだ人が思い当たればそれで十分だし、そんな組織はないと思うのであればそれでもよい。そんな組織はないと思う人に、具体名をあげて、あなたの考えは間違っていると言わなければならない。拙文は最初からそういう人達の説得を目的にしているのではないので、賢明な読者の皆さんはその点をご承知いただいた上で、(いろいろな意味で)著者の力の及ばない部分は自分のデータベースをフル活用して補いながら読み進んでいただきたい。

事実無根で誹謗中傷にあたり心外だというのは、具体名をあげていないのに何を指して事実無根、誹謗中傷と言うのか。具体的な という組織の名前をあげて、それに対する誹謗中傷だと言うのであれば、これこそまさに自分が普段から という組織にそういうことを感じて気にしているという自白行為である。でなければ、誹謗中傷などということを出した側から、著者が書きもしない などという具体名が出てくるわけがないではないか。あるいは拙文が、一般のアングラーに がそうであると勘違いさせる原因になると言うのであれば、一般のアングラーから はそうだと思われることを自分は気にしているという、これもまた自白行為である。これと同じようなことを第2回の終わりの方で書いたよ

うな気がするが、著者の仕掛けにまたもや懲りもせず引つ掛かったと言わざるを得ない。人間、一番気にしていることをもろに指摘されると腹が立つものだが、こつこつ簡単に引つ

掛けに乗ってこられるとゲームとしての面白みも何もない。もつやめよつかとも思っただが、面白いからもつとやれと言う声もあって、そういう声があるのが面白いから続けようかなどと思ったりもするから、拙文の本当の黒幕はそういうことをけしかけると一部読者の方々なにかもしれない。

最後にお断りを……。本文中に、「とあるのは実在の人物、団体、組織等とは一切関係ないので、その点誤解、曲解なきように。こつこつ断り書きをいぢいぢ入れないといけないのは、その断り書きが対象とするところの人の人の程度が低くて面倒なことだと思っと思う。テレビ番組の最後に同様のテロップが出てくるのもしらせるだけだが、これって一部匿名BBSにおける議論と同様の何の役にも立たない文章ではないか。

琵琶湖のバスフィッシングにとどめを刺したのは誰か

Bassingかわら版Editorial (2002/09/30)

9月25日から滋賀県議会が始まり、県知事が「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」の条例案を提出した。同条例はこれから県議会での本格審議にかけられるわけだが、どうやらすでに結論は出ているようである。琵琶湖で釣ったバスのリリースは、来年4月から同条例により禁止されるだろう。2万余にものぼる反対意見が寄せられたにもかかわらず

らず、リリースを禁止する条項は事実上まったく何の修正もなく通る公算が極めて大きい。もし今からひっくり返るとしたら、それはブッシュとフセインが握手して武力衝突なく事態が収拾するのに匹敵するぐらいの奇跡だ。

ことここに至るまでにいろいろとあったが、詳しくは琵琶湖ホット情報をこらんにたくとして、最後の最後に事態を決定的にする動きがアングラーの側からあった。今回は、そのことについてお伝えしておきたい。

9月末の県議会の開会をにらんで、日本釣振興会の琵琶湖バス釣り人協議会は9月10日、滋賀県に対して意見書を提出した。その主な内容は、規模の大きなトーナメントではバスをリリースしないかわりに、それ以外のトーナメントや一般のアングラーが釣りをするときのリリースは禁止しないという改正案である。

ところが9月18日に滋賀県が発表した条例案は、要項案の内容から事実上何の修正もなく、「琵琶湖におけるレジャー活動として魚類を採捕する者は、外来魚（ブルーギル、オオクチバスその他の規則で定める魚類をいう。）を採捕したときは、これを琵琶湖に放流してはならない」とするものであった。

これに対して日釣振はまたもや9月20日に公開質問状を県知事に出した。その内容は、外来魚の再放流禁止の撤回、削除を求めるとともに、条例に盛り込まれたリリース禁止の根拠を質し、9月30日までの回答を求めている。

そして9月25日に滋賀県議会が始まり、知事が条例案を提出した。問題は、この条例案のうち的外来魚のリリース禁止が修正あるいは削除される可能性があるかどうかだが、きれいうちの外来魚のリリース禁止はまたもや9月20日に公開質問状を出した。その内容は、外さっぱり削除される可能性は、はっきり言って最初からなかった。なぜなら、そんなことしたら知事や議会だけでなく賛成派の面目まるつぶれで、それこそ県政の支持基盤が揺らぎかねないからである。

そこで修正に一縷の望みを託して出されたのが琵琶湖バス釣り人協議会による意見書だ。これはそのまま通らなくても何らかの修正が行われるためのたたき台になればよいという性質の提案だったのだが、実はこの意見書が、9月20日に日釣振が公開質問状を出したときに撤回されていた。一部の新聞にも載っていたので、すでにご存じの読者の方もおられるかもしれないが、これはしかし、よく考えてみれば、とんでもない行為かもしれないのである。

県側は条例で外来魚のリリースを禁止しようとする。アングラーの側は、それに反対してリリース禁止の撤回を求める。話し合いはいつまでたっても平行線で、歩み寄りの気配はない。そこで出された妥協案が、琵琶湖バス釣り人協議会による意見書だ。ところが、こともあろうに同協議会の上部組織である日釣振みずからが意見書をなかつたことにして、リリース禁止の撤回、削除を再度申し入れた。今の段階で一度出した妥協案を引つ込めて100%反対の立場に戻るといふのは、妥協の余地はない宣言しているに等しい。つまり、リリース禁止か白紙撤回かどちらかにしてくれと言っているようなものだから、筋書きはこれで決まり。条例案は修正なく通ってしまうであろう。

なぜ今になってこのような動きが出てきたのか、まったく理解しかねる。意見書を撤回した理由は「状況が変わったから」とのことらしいが、これでは何の説明にもなっていない。ということとはつまり、説明したくないが、説明できないような理由があると思われるも仕方

がない。深読みすれば、次のようなことも考えられる。日釣振の中には、琵琶湖のバスのおかげで成功してる人達が嫌いな一派もいるのではないか。そういう勢力にとっては、何が何でも条例案に反対したことにしておいて、実はリリース禁止がそのまま決まって琵琶湖のバスフィッシングが壊滅すれば、それはまさに狙い通りではないのか。このような動きをさせたくないのであれば、誰にでもわかる説明をするべきであると思うのだが、これって何かおかしいことを言ってるだろうか。

著者はまだこの先に大どんでん返しを用意されている可能性も捨て切れないでいる。アングラと業界の危機感が頂点に達したところで、どこかの政治家あたりが出てきて、適当な落としどころに丸くおさまって、双方面目を保って万々歳。政治家さんは恩を売ってよかったね。そのための露払いをした日釣振の偉いさんは、やはりさすがのことはあると株を上げる。加藤誠司プロはよくがんばったねご苦労さん。みたいな決着の仕方も0.01%ぐらいの可能性ならあるかもしれないと思っているのだが、これって政治の世界に足を突っ込んだ加藤プロからのよくない影響だろうか。

本当は誰がバスを放流したのか

Bassingかわら版Editorial (2002/10/07)

外来魚問題をめぐる議論には、過去も現在も多大な労力と時間が費やされている。ところが、その議論から説得力のある結論や提案が導き出されたことは、これまで一度もなかった。なぜそうなるかと言つと、議論の根拠がまったくあいまいであるか、あるいは嘘やデタラメ

とは言わないまでも、素人考えに近い推論に立脚しているからである。

バスの容認を否定する側からの意見として、バスが湖や池、川のとえ一カ所にもいれば、それが密放流による拡散の原因になることがあげられている。だから、すべての水域からバスを完全駆除しなければならないというわけだが、その前提となっているのは、密放流は防ぎようがないという仮説だ。極端な論者は、密放流を完全に防ぐことはできないから、その動機となるバスフィッシングそのものを禁止せよと言つ。ここまで極端なことを言う人物は、さすがにここへきてまともなメディアからは相手されなくなった。メディアも最低限の勉強はしてるよつで、この人物が言つてることの論拠のあいまいさ、支離滅裂さに気が付き始めたのは、せめてもの幸いである。

ところが、いまだにこれと同様の論理でものごとを押し進めようとする人達が少なくない。適切な範囲でバスフィッシングが可能なフィールドを残すという提案を受け入れず、一切の内水面からバスを完全駆除するという。そんなことすれば、かえって密放流が行われて、いつまでたっても状況をコントロールできようにはならないし、バスを完全駆除することなど現実的に不可能。いくらそう言つても、まったく耳を貸そうとしない。

なぜそういうことになるかという点、本当の事実を目を向けたくないか、あるいは事実を知られたら困るような事情があって、そこから逃げるために事実を隠した上で、自分達に都合のよい範囲の中だけで仮説に仮説を積み重ねて理屈だけで結論を出そうとしているからである。反対意見に耳を貸そうとしないのは、耳を貸したとたん自分達の論理が崩れ去つてしまつ、それぐらいあいまいな根拠に立っていることを自覚しているからにほかならない。

バス排除派の一部の人達に悪意はなく、そういう流れに乗っかっていれば自分達が目的とするところの環境保全とか生態系保護が実現できると思っただけかもしれない。しかしながら、その目的が達せられるとは思えない。なぜなら、乗っかっている論理の根拠とするところがきわめてあいまいで、もっと深読みすれば、生態系や自然保護なんか本当はどうでもよくて、目的は別のところにあるかもしれないからである。環境保全や生態系保護を目的とする人達は、そういう目的のために利用されているだけかもしれない。あるいは、利用されていることを知っていて、それも計算の上で活動されているということも考えられるが、いずれにしても反対意見に耳を貸そうとしないことにはわりはないから、同じ穴のムジナである。

間違いの始まりは、すべてバスアングラーが悪いと決め付けている点にある。バスの拡散はすべてバスアングラーの責任、ついでにブルーギルの拡散もバスアングラーの責任にした人達が世の中には大勢いるようだ。テレビや新聞などの論調もほぼ同じで、独自の論理展開がまったく見られない。借り物の論理を元に記事を組み立てているだけだから、問題解決に結び付くような方向性が出てくるわけがない。すべては砂上の楼閣の中の閉ざされた会議室での言いつばなし。楼閣の土台だけでなく、会議室の壁も砂でできているから、反響さえも返ってこない。そんな状態で議論が進められているのが現状だ。

ここでは数ある問題点の中から三点を選んで著者からの問題提起とさせていた。まず第一の問題点として、バスの拡散はなぜ防げなかったのかということ。第二の問題点として、バス拡散の責任はすべてバスアングラーが負うべきものなのかということ。第三は、本当は誰がバスを放流したのかということ。こつこつという本質的な問題を議論することなくして、外来魚問題を解決することなんかできっこないと思うので、触れられたくない、語りたくないという人も大勢いることを承知で、あえて書かせていただくことにした次第である。

赤星鉄馬氏に始まり、日本にはたびたびバスが移入されている。その事業には多くの場合、一部の釣り具メーカーやアングラーの団体などが関わっている。あるいは愛玩用に持ち込まれたバスが自然界に出ていったケースもあるかもしれない。これらの事実を揺るがしようがないのだが、それをもって釣り業界やバスアングラーを犯罪者呼ばわりするのは間違いである。もし仮に、バスの密放流が当時においても重大な犯罪行為であり、しかも全国的に大規模に行われたのであれば、なぜ誰も法的な責任を問われていないのか。その理由は、外来魚の移植をあやふやに禁止した条例や規則があっただけで、それを根拠に本気で移植をやめさせようとは誰もしなかったからだ。つまり、当時の一般的な認識として大した問題ではなかったのである。そういう認識の元に行われた行為を今になって犯罪と言えるだろうか。

バスが次第にあちこちの釣り場で釣れるようになっていったのは70年台後半から80年台のこと、80年台後半頃になると在来魚に対する影響を問題視する声が次第に強くなっていった。この問題に取り組んだ人達はバスアングラーの中にもいて、琵琶湖バス会議などのフォーラムが開催されたこともあったし、雑誌などでかなり真剣な議論が聞かれたこともあった。しかしながら、密放流を条例などで禁止しようとする本格的な動きが出てくるのは、すでに全国の大部分の水域にバスが広がってしまった90年代に入ってからである。

それ以前は、日本の内水面における外来魚の影響がこれほど大問題になるとは、ごく一部

の人達を除いて誰も思っていなかったというのが本当のところだろう。マナーの問題として、外来魚の放流はやめましようというようなことを言われてはいたが、誰も本気で止めようとはしなかったのである。その間にバスが日本の広範囲の水域に広がってしまったのだが、例えば各都道府県の水産課や内水面水産試験場、研究機関の賢明なスタッフ達が本当に気付いていなかったのだろうか。著者は一部研究者が10年以上前から外来魚問題について度々発言していたことを知っているが、これらの意見がなぜ当時取り上げられなかったのだろうか。その点は大きな疑問である。

ブルーギルが拡散したプロセスについては今さら説明するまでもないと思うが、日本中の内水面水試や研究機関が広範囲に関わっている。この事実が、バスに関する判断を誤らせたのではないかと著者は思っている。ブルーギルの影響は場所によってはバスよりも大きいのだが、そういうことは認めたくないか、あるいは本気でそんなことはないと思っている。そういう思い込みが前提にあつて、バスも大した問題にはならないという方向に流されてしまった。もし大問題になる可能性があることに気付いていたとしても、それが誰の責任かということになったときに、ブルーギルのことが出てきたら自分達、あるいは自分の近くにいる人達が責任を問われて困ることになるから、バスのことも放っておくしか仕方がない。つまり、ブルーギルのことがあるから、バスのことを問題にしなくなかったのではないか。その結果、今になってバスのことが大問題になっているのだとしたら、これって何のための研究機関や研究者、誰のための行政かということになる。責任の一端でも自分達のところへ持って来られるのはかなわないから、すべてバスアングラーの責任にしておけということでは、

お互いに反省も何もあつたものではない。

バスの密放流に関しては、2008年11月に富山県で摘発されたケースを除いて、これまでのところ誰も責任を問われていないし、漁業補償のようなことになつた例もない。琵琶湖の問題にしても、あくまでリリースを禁止する、漁師が獲つた外来魚を買い上げる、駆除作業に助成金を出すということであつて、在来魚が獲れなくなったのを補償するということではないのである。これがなぜかという点、補償というようになったら、誰の責任かということになる。バスを放流した者の責任、ブルーギルを放流した者の責任、それが原因で在来魚の漁獲量がどれだけ減つたか、これらの事実関係を確認した上で損害を賠償する、補償金を出すという手順をたどることになるわけだが、ブルーギルを放流した責任なんか誰も取りたくない。だから補償問題にはできない。

バスの方は、とりあえず全アングラー、全バス釣り業界に責任をかぶせておけば、具体的に誰の責任かということにはならず損害賠償なんてことにもならないから、ブルーギルの責任問題に火の粉が飛んでくることもない。外来魚問題のすべての責任がバスアングラーとバス釣り業界にあるという論理は、こういうところから出てくるのである。この相当無理のある論理を貫こうと思つたら、バスアングラーとバス釣り業界は本質的に悪者であるから、釣り場のうち一カ所でもバスが残つたら、そこからバスが持ち出されて密放流される、だから完全駆除だということに話を持って行くしかない。つまり、バスアングラー全責任論とバス完全駆除論は断ち切ることのできないセット関係なのである。

誰がバスを放流したか。これほどシンプルな疑問でありながら、なぜか本質的な議論が行

われていない問題点もほかにない。バス排除派がよく使う、バスアングラーみんなが悪いという言い方は、具体例をあげられないことからの逃げ以外の何ものでもない。あるいは、わざと論点をすりかえようとしているのかもかもしれない。

誰かがバスを密放流したと言うのであれば、いつ、どこで、誰がとほつきり言うべきであり、それが証明できるなら刑事訴訟でも何でも起こして法的手段に訴えるべきである。あるいは、条例や漁業調整規則で禁止される以前の行為であっても、その事実を明らかにして道義的責任を問うようなことをした方がいいかもしれない。そうすることで将来のバスの密放流を防ぐことができるなら、やるべきである。それができないのは、やはり具体例をあげることができないからである。あるいは、具体的な組織や個人を相手に議論する自信がないからかもしれない。もしそうでないと言うのであれば、上記のような行動を今すぐ始めるべきだと思っただけだろうか。

論点のすりかえをしようとするのは、具体的に誰がということになったときに、バスアングラーやバス釣り業界以外から困る者が出てくるからではないか。一例をあげると、川のはバスアングラーの密放流が増えたことになっているが、本当にそうなのか。琵琶湖から大量のコアユが運び出されて、アユ釣りのために各河川に放流されているのにまじってバスが広まった可能性はないのか。その危険性に対して、バスが各河川に拡散した時期にさかのぼった時点から、すでに十分な選別は行われていたのか。水産庁や滋賀県水産課から適切な時期に適切な指導は行われたのか。そういうことを問題にされたくないために、意図的にすべてバスアングラーとバス釣り業界の責任にしようとしているのではないのか。釣り場の一

力所にもバスが残ったなら、それが持ち出されて密放流されるから完全駆除しかないと言いつてるのであれば、琵琶湖のコアユを放流するとバスが川に拡散する可能性があるから即刻やめるべきだとなぜ言わないのか。

以上のようなことをしっかりと考えてみれば、バスの拡散がすべてバスアングラーとバス釣り業界の責任だというのは間違いであることがわかれると思う。そのことが理解できれば、300万人に達すると言われるバスアングラーの存在を無視してのバス完全駆除論がいかに非現実的かがわかるというもの。バスアングラーとバス釣り業界以外にも責任があることを認めるなら（あるいは責任を認めなくてもよいのだが）、外来魚問題の現実的な解決策として管理可能なバス釣り場は残すべきであり、そのための話し合いを今すぐ始めるべきである。その話し合いの前提として、認められた水域以外への密放流が行われないようにバスアングラーに協力を要請すると同時に、条例などが飾り物でなく実際に効力を発揮するように整備することが必要になる。

あくまでバスアングラーとバス釣り業界以外の責任は認めない、完全駆除するというのであれば、いつまでたっても議論は平行線をたどるであろう。その場合、バスアングラーは信用できないと言っているのと同じである。そんな信用できないバスアングラーが300万人もいたら、いくら駆除しても次から次へと密放流されてバスは減らないという最悪の事態にならないとも限らない。これって、バスアングラーとバス釣り業界は信用できないから完全駆除しないといけないと言っておきながら、実はバスアングラーの協力なしにはバスを完全駆除するどころか、拡散をコントロールすることすらできっこないという矛盾を抱え込んでしま

うことになると思うのだが、その点、完全駆除論者はどのように説明するのだろうか。あるいは、信用するに値しない30万人が、条例などで強制すれば黙って言うことを聞くと思っているのだろうか。

4.1に向けての行動案

Bassingかわら版Editorial (02/10/17)

「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」が滋賀県議会9月定例会で可決された翌日の10月17日にこの原稿を書いている。

これまでは同条例の問題点、反対する理由などについて、このEditorialではいささかの遠慮もなく辛辣に、Bassingかわら版の表看板であるホット情報ではマイルドなタッチでわかりやすく書いてきたわけだが、条例が可決成立してしまったということで、事態は新たなフェーズへ移ったと解釈すべきだと思つ。これからは、実際に2003年4月1日に条例が施行されて、パスをリリースすると条例違反になるという現実に向かって自分達は何をしていくかという具体的な行動を考えなければならぬ。

ということ、条例の施行前と施行後に分けて、今思い付いている行動案を以下に記す。これはあくまでも著者からの提案であり、これがきっかけになって各分野から様々な行動案が出てくることを期待したい。実際にそうなれば何よりも幸いである。

「ここには、とりあえず思い付いたものを列記しただけなので、その実現性や合法性、違法性など、あまり深く考察したものではないことをお断りしておく。また、もし皆さんが、この行動案を実行に移されるのであれば、あくまで各自の責任においてやっていただきたい。法的、民事的訴追を受けた場合の責任を著者は負いかねるので、その点についてはくれぐれもご承知置きを……」。

条例施行前の行動案

「4.1」というのをキーワードにする「こういうキーワードがあった方が、メディアが話題にするときに扱いやすいはず。目立つロゴを作って、雑誌やホームページなどで同じものを使うようにする。」

統一のカウントダウンバナーの掲示、「琵琶湖パスのリリース禁止まであと 日」というカウントダウンバナーを作って配布し、なるべく多くのホームページに同じデザインのものを入れるようにする。これにも4.1のロゴを入れる。

条例施行後の行動案

4.1のパフォーマンスとして、次のようなことをたくさんさんのメディアを集めておいて大まじめにやれば面白いのではないだろうか。

4.1のパフォーマンスその1＝パスのお葬式＝2003年4月1日を琵琶湖のパスの命日に定めて、琵琶湖のどこかでお葬式をする。参列者には記帳してもらって、滋賀県に提出する。お葬式の祭壇はしばらくの間残しておいて、琵琶湖へ釣りに来た人にお参りしてもらう。

4.1のパフォーマンスその2＝琵琶湖大橋に行列作って黙禱と献花＝琵琶湖大橋米プラザから大橋の一番高い所まで、できるだけ長い行列を作って、1人ずつ順番になるべくゆつくりと黙禱して菊の花を一輪ずつ琵琶湖に流す。

「このパフォーマンスその3＝外来魚のタナゴ釣り」琵琶湖でタイリクバラタナゴを釣って「これも放流してはいけないのか? えーっと、条例には『法律で指定する外来魚』とあるけど、これはどっち? とか言ってる間に死んでしまったじゃないですか。あーあ、かわいそうに」

「このパフォーマンスその4＝琵琶湖でトロリング」軽油バカ食いのでつかいクルーザーでトロリングしながら琵琶湖を一周して「これはディーゼルエンジンだから、いくら燃料使っても合法です。和歌山だったらトロリングは、半世紀前に決めてからほったらかしの漁業調整規則違反ですけどな」

それ以外にもできそうなことがいろいろある。

黒バツクのホームページ＝前もって申し合わせをしておいて、来年4月1日から各ホームページのバツクを黒くする。数多くのホームページのバツクがいつせいに黒くなれば、かなりの効果があるのではないか。バツクを黒くするのがデザイン的に難しいページは、「この口ゴをあしらった共通アイコンを入れるのがいいかも」。

バスをリリースして自首する＝バスをリリースして、それをビデオとか写真で撮影して証拠を残しておいて、滋賀県庁の環境課へ自首に行く。警察とかへ行っても、条例には罰則規定がなく面白いことになりそうもないので、「どこへ行ったらいいかわからないから来ました」とか何とか言って、あくまで県庁へ行く。

釣ったバスを環境課へ届けに行く＝一般のアングララーは、「イケスが見付からないから」との理由で、釣ったバスを県庁の環境課に届けに行つてはどうか。大勢のアングララーが来年4月1日についてこれをやれば、環境課の入り口から県庁の外までバスをぶら下げたアングララーの行列ができるだろう。県庁の前の道路は、駐車所に入り切らないバスアングララーの車で大渋滞発生。警察も出勤しての大騒ぎに……。

こんなのもありか?

琵琶湖のニユービジネス＝バスアングララーが釣った外来魚を1kg200円ぐらいで漁師に売つて、それを漁師が県に買い取らせるといふのは、現実的に可能なだろうか。それが可能なら、バスアングララーが釣った外来魚を買い集めて漁師に卸す仲買も成立するのでは?

バスを漁師にプレセント＝バスアングララーが釣ったバスは、県が設置したイケスに入れずに、漁師のおっちゃんにあげるようにする。そうすれば、漁師のおっちゃんも右から左でバスを動かすだけでお金になるから喜ばれるはず。きつと、滋賀県の外来魚買い上げ予算はあつと言つ間に底を突くことだろう。滋賀県は大急ぎで補正予算を組まなくては……。

とまあ、いろいろと並べてみた。皆さんも何か面白いことを思い付けば、どしどし発表していただきたい。2008年4月1日は、琵琶湖のそこら中に集まったバスアングララーが、それぞれ工夫を凝らしたいろんなパフォーマンスを繰り広げるようなことになれば、それはそれで有意義な「この迎え方なのではないかと著者は思っている。そして、それが終わった後は、琵琶湖のバス達の将来に思いを馳せながら、静に喪に服するのである。大勢のアングララーが4月と5月の2カ月間だけでも喪に服して琵琶湖でのバスフィッシングを自粛すれば、バス達からもたいへん感謝されると思つのだが、いかがだろうか。

やらなかったことを後悔しないために

Bassingかわら版Editorial (02/10/28)

ひさしぶりに琵琶湖で開催されているバストーナメントの様子を見に行ってみた。と言っても、「B」などのプロトーナメントではない。中主町の吉川漁港内にある石塚マリーナで10月27日に開催されていたLBBC (Lake Biwa Bassfishing Competition) 第3戦のウエイインを見学に出かけたのだ。

LBBCは2002年にスタートしたプライベートトーナメントで、16t、70馬力以上のボートに限定、トーナメントエリアは琵琶湖全域、4月にテストマッチが開催され、7月から11月までに4戦のシリーズが組まれている。そのルールがユニークで、まず全戦に共通の規定として、シンカーはタングステン素材のものに限定、試合中にロストしたルアーの数を帰着後に申告、湖上のゴミを1人3個以上回収することを義務付けている。

著者が見学に行った当日は強風による大荒れで、トーナメントエリアを琵琶湖南部に制限するほどだった。こうなるとゴミを探すだけでもたいへんではないかと思われたが、それでも各人3個かあるいはそれ以上のゴミを持ち帰っていた。

それに加えて、各試合ごとにユニークな規定も設けている。7月の第1戦は使用ルアーをハードプラグかワイヤーベイトに限定、9月の第2戦はバープレスフック限定で、プラグはさらにダブルフック限定とするなどだ。10月の第3戦はスタート前に生分解性素材のワームを配布。その使用を義務付けることまではしなかったが、使用レポートの提出をトーナメント参加者に呼びかけていた。

トーナメント団体としての環境問題に対する早め早めの取り組みは、これから日本国内のフィールドでバスフィッシングを続けていくために、他の諸団体も見習わなければならないと思った。これは規模が小さいから可能、大きいから不可能というような性質の問題ではないし、トーナメントに限ったことでもない。方法さえ考えれば、それぞれの組織や団体、個人の事情が許す範囲で何かできることがあるはずだ。

ここでこういうことを書くのは、それをちゃんと伝えるのが取材者として当然の義務だと思っただけである。つまり、取材して事実を見た人間としてやらなければならないことをやっているだけのことで、著者とBBCを取り巻く事情が許す範囲内で可能なことをやっているに過ぎない。ところがEditorialをお読みいただいた方から、「あんなこと、よく書けますね」などと言われる。これって、他のメディアがよほど手抜きして、やらなければならないことをやってないか、やらなければならないことをできないような事情があるからではないのか。その事情というのは、知識や能力の欠如、利権関係、営業上の問題、思想、信条、好みなどいろいろである。

トーナメントですごいウエイトが出たとか出ないとか、テクニックがどうとかこうとか、そんなことは別に伝えなければならぬことはたくさんある。それを伝えることはメディアとして世に存在するための責務である。そういう責任を果たさないから、世の中がおかしなことになる。今回のようなことを目にしたとき、それを伝える場が与えられないようなメディアで仕事をしている人達は気の毒な限りである。そんなのをジャーナリズムとはとても言えなから、メディアという何にでも使えるような言葉があらわれていることを当事者は自

覚すべきであろう。

もつとも、取材と称しながら、そんなことに気付きもしない記者、編集者が多いのもまた事実。重大な事実に気付く暇さえないほどの過酷な労働条件しか与えていないとしたら二重に気の毒な限りではあるが、会社としてはそのことも十分に計算の上で、クライアントや取材先が嫌がるような余計な仕事はしてほしくないから、わざと余裕がないようにしているのかも知れない。あるいは広告ガタ減り、部数ガタ落ちによるリストラで否応なしにそうなるってしまったているのか。いずれにしても自分で自分の首を絞めるだけでなく、大切な取材相手やクライアント、最後には購読者の首まで絞めてしまっているという、三つどもえ、四つどもえの首の絞め合いをしている状況にかわりはない。

話はBBCのトーナメントから離れるばかりだが、ひさしぶりのトーナメント取材で感じたこと、思ったことをきっちり書いておきたいのでお許しを……。トーナメントの様子などについては、琵琶湖ホット情報2002/10/27(ヘッジ)を「ごらんください」。

自分達が釣りをさせてもらっているフィールドのゴミを捨つのは、もはやあたりまえのことであって、一般のアングララーがいち早くやり始めたことを力のある組織や団体が遅ればせながらやっても、いまだに取り上げるに足る価値もない。組織力に頼んで動員数や集めたゴミの量を誇り、それをメディアが大々的に取り上げるに至っては笑止千万。できレースが世間の失笑を買っていることに気付きもしないのは、あいかわらずのおめでたい限りとしか言えない。

本場に必要なのは、力のある組織や団体がそれぞれに工夫を凝らし、一般のアングララーにもフィードバックできるような形で様々な問題に取り組んでいくことだ。例えばBBCがやったようなバプレスフックやダブルフック限定のトーナメントで十分な釣果を得ることができれば、それが注目度の高いトーナメントであればあるほど、一般のアングララーに広まっていくことは十分に考えられる。ルアーメーカーがトリプルフックのモデルとは別のオプションとして、ダブルフックのモデルも作るようになるかもしれない。それを多くのアングララーが使うようになって、ルアーのロストが少なくなれば、それが釣り場環境の保全につながる。一般のアングララーをよい方向へリードしていくには、現状の後追いでではなく、予想される事態に先回りした取り組みが必要なのである。

これは、ゴミ拾いをする必要がないと言っているのではない。ゴミ拾いなどは当然するべきこととしてスマートにこなしながら、さらに進んだ取り組みも積極的に行う。そうすれば、自然に一般のアングララーからの評価も高まるし、その取り組みを見習おうとする動きが出てくるはずだ。これはトーナメントに限ったことではなく、メーカーならメーカーで、メディアならメディアで、それぞれ工夫すればできることはいくらでもあるはずだと言いたいのである。

話はBBCのトーナメントに戻そう。参加選手の中に浅野大和君の姿があった。今、琵琶湖バスのリリース禁止問題でバスアングララーからもつとも注目を集めている人物である。新聞などで伝えられた、滋賀県と県知事を相手に訴訟を起こした大津市在住の28歳の男性というのが彼である。その後、某タレントも訴訟に加わり、そちらの方が大々的にメディアに登場しているが、新聞などに出たのは大津市在住の28歳の男性の方が先である。

訴訟ということで話を簡単にすますわけにはいかないのだが、注目すべき論点が一つあることをご紹介しておこう。リリースを前提としてバスを釣っている場合、アングラーには釣れたバスを所有するつもりは最初からない。そうすると、釣れたバスを手にはしてても、それはバスを所有しているということではなく、バスは無主物の状態（琵琶湖にいるバスは本来無主物であって、それを誰かが自分のものにする意図で釣り上げた時点で、その人の所有物になる。これは海の魚も特別の例外を除けば同じ）なわけで、リリースという行為は無主物を元の状態に戻しているだけということになるのだぞうだ。

つまり、キャッチする寸前にフックが外れてバレてしまったのも、自分でフックを外してリリースしたのも同じということになる。それを条例で禁止することはできない。たぶんそういう主張なのだと思うのだが、はっきり言ってこれで合っているかどうか、著者は法律の専門家ではないので自信がない。まあ、専門家の手にかかれバスリリースがこういう法解釈になるのだなと感心した次第である。

訴訟の相手が滋賀県とその代表者の県知事であるから、裁判になれば当然、反証しなければならぬことになる。これまで日本釣り振興会が回答を求めた点などについても、否応なしに言及しなければならぬわけで、訴訟の最重要ポイントはその点にあると思う。その成り行きに注目するとともに、世のメディアがどんな取り上げ方をするかも注視していく必要があるだろう。

「訴えるぞ!!」と口で言うのは簡単だが、実際に訴訟を起こすのはたやすいことではない。某タレントが所属する事務所や出演局には抗議が殺到していて、これはタレント生命にも関わる問題だから、それを上回る数の応援メッセージをみんなで送ろうというキャンペーンを始めたメディアもある。著者は某タレントのことをよく知らないし、その意図についても何とも言えないので、ここでは応援するもしないも触れないでおく。訴訟の詳細については、雑誌などのメディアが近いうちに取り上げるはずなので、それをこらんといたいた上で、支持するかしないかは皆さん自身が判断を下していただきたい。もし支持するべきだと判断されたら、その次は自分には何ができるかを考え、それを行動に移していただくようにお願いする次第である。

できたことが一つ、できていないことはたくさん Bassingかわら版Editorial (02/11/11)

11月11日からBassingかわら版に「琵琶湖バスのリリース禁止まであと 日」というカウントダウンバナーを設けた。Bassingかわら版Editorialで1カ月前に提案したことを他人まかせにしないで一つ実行したわけである。

カウントダウンバナーはJava Scriptで自動更新されるようになっていた。ただし、著者はそれがどういう仕組みになっているか理解していない。ネット上で見付けてきたのをそのまま利用させていたただいてるだけである。そのうち何か不都合が起ころうかもしれないのだが、とりあえずはちゃんと表示されているので、これで問題なければリリース禁止の前日まで掲載しておこうと思っている。

こっぴつバナーにどのような意味があるかは、見た人がどう思うか次第なので、各自でこ

判断いただきたい。いいんじゃないかと思った方は、「自分のページにも掲載していただくか、ページを持ってるか知り合いた」に「ういっのがあるよ」とご紹介いただければ幸いです。

ソースは下記の通り。これを各自で改良していただくのは自由である。そのかわり、改良されたものを自由に転載、流用するじやを認めていただくのも願います。

```
<BODY>
<CENTER><TABLE BORDER="0" CELSPACING="0" CELLPADDING="2">
<TR>
<TD WIDTH="100%" BGCOLOR="#000000">
<P><CENTER><B><FONT COLOR="#ff0000" SIZE="+1">
<script Language="JavaScript">
<!--yy = 2003;
mm = 04;
dd = 01;
today = new Date();
xday = new Date(yy,mm,1,dd);
countdown = (xday.getTime() - today.getTime())/(24*60*60*1000);
countdown = Math.ceil(countdown);
document.write("琵琶湖バスのリリース禁止まであと"+countdown+"日")
```

```
;/--></FONT></SCRIPT></B></CENTER></TD>
</TR>
</TABLE></CENTER>
</BODY>
```

ういっつマイテアが世に出たら、すぐに現れるのが「琵琶湖バス最後の日まで」と「あるいは「琵琶湖のバスツアーナメント最後の日まで」と「日」。「琵琶湖のバスツアー最後の日まで」と「日」というようなバクリである。きつとどこかに出てくると思うが、賢明な皆さんは、そんなのをわざわざ探してアクセスカウンターの数字を増やすような愚かな行為はしないように。それと、上記三つのコピーの無断転載は断りするので、もしバクってやろうというのであれば自分でコピーを考えていただきたい。

ルアーにもオリジナルとコピーがあるが、コピーが売れるのは偉大なるオリジナルが存在するからであり、コピーがオリジナル以上に成功することはめったにない。その数少ない例は、ルプレックス社のオークラのコピー製品(ダイワ・クルセターほか)、ヘドン社のソナーのコピー製品(コモラン・コモソナーほか)などである。オークラのコピーは、消耗の激しいスプーンがオリジナルと性能は同等で値段が安いということで成功した。ソナーのコピーは、値段の問題もあるが、それよりも大きかったのはオリジナルの輸入量が少なく手に入れにくかったことだろう。

それともう一つ、ポパイのクリンクルカツというワームがある。これはオリジナルのフレンチフライがほとんど無名だった日本の市場で、コピーの方が先に有名になってしまっ

成功した希有の例である。コピーに様々なアイデアが加えられた結果、オリジナル以上のものになれば成功するかもしれないが、それはもはやコピーではない。クリンクルカツはハードとしてはコピーであっても、ソフトの部分でオリジナルは日本のバスフィールドでどう使うかというアイデアが希薄だったのに対し、コピーの方はジグヘッドリグに使うという有効なアイデアをプラスし、有名バスアングラーによる強力なプロモーションを展開した。素材の硬さが違うなどということも言われはしたが、大枠ではそういうことである。その意味でクリンクルカツは、日本市場ではコピーであってコピーでなかったと考えるのが正解ではないだろう。

カントダウンバナーのコピーの話からルアーのコピーの話にワープしてしまったので、話題を元の線に戻そう。先に掲載したソースはネット上に公開されていたものを著者が見つけてきたものなので、これを皆さんが流用されるのは自由である。「琵琶湖バスのリリース禁止まで」と「日」というコピーの部分も著作権と著作者人格権に基づいて転載自由とさせていただく。自由であることから、悪意ある流用が行われるかもしれないが、そんなのはしよせん質の低いコピールアーと同じだと思う。ということでもルアーのコピーの話を出した次第。あとはネットの評価におまかせしたい。

次に、今月のお手軽スポーツ最終回(22ページ)のお約束を果たそう。サンケイスポーツ掲載時に著者が書いた原稿からカットされたのは、湖면利用税の内容に関する部分。ただし、著者はカットして掲載された原稿がどのようなものになっているか見ていない。なぜかはわからないが、サンスポの掲載紙は著者の手元へは送られてこないののである。これは、自分から買ってしまったことだと思っただけ、スポーツ新聞は発行されたその日にしか買うことができないうからいちいち面倒だし、著者としての意地もあって今まで一度も買っていない。というふうな事情で、著者は、サンスポの担当者から電話で「カットさせていただきます」と言ってきたから、そうなっていると判断しているに過ぎないということをお断りしておく。

カットの理由は、担当者が条例の名称などを確認するために滋賀県庁へ電話したところ、湖면利用税についてはまだ何も決まっていなかったからとのことであった。つまり、バスのリリース禁止条例のときのように内容が決まって反対者が何か言ってきたも無視できるだけの準備が整い、いざ発表という段階になってからでないといけない、そういう意味に著者は解釈したのだが、これでは記事にする意味なんかないではないか。そのことはリリース禁止条例の一件で明白である。しかしながら様々な理由から扱えないものは扱えないと電話を受けた著者がそのように理解したところで話は終わった。だから、ここに書いていることはあくまで著者の解釈であって、電話の相手がそういう意味で言ったかどうかは著者の知るところではない。

産経新聞社という大きな組織の中のサンケイスポーツという一部の釣り欄という事情や立場もあるので、ここでこれ以上書いても意味がないと思う。もとより産経新聞社やサンスポのことを揶揄するのが目的でもない。皆さんにお伝えしたいのは、リリース禁止条例のときは要綱案に対する意見募集をきっかけに始まった反対活動のあまりの強さに県側も狼狽したが、そのときの経験から学んだこともあったであろう、湖면利用税に関しては県のやり方が一段と巧妙になってきているのを今回の一件で強く感じたということである。記事として

扱える、扱えないはメディアの側だけの問題ではない。扱えないように、あるいは扱えないように県側が立ち回っていて、それが新聞なら最終的な記事の内容に皆さんが思っていないような影響を及ぼす。あらゆるメディアにそういう影響が及ぶということをご理解いただきたいのである。

そんな複雑な力関係の中で、自分が言いたい意見を少しでも有効な形で述べるのがプロのライターだと著者は思っている。言いたいことを言わせてくれないから、そのメディアとは付き合わないというのであれば、発言の場はほとんど失われ、世の中への影響力もなくなっていく。それでは本末転倒というものである。ところが残念なことに、現在の釣り関係のメディアにおいては、言いたい意見を少しでも有効な形で述べることさえできない不自由さが厳として存在する。だから、著者は釣り関係の既存メディアでほとんど仕事しなくなってしまう。唯一、最後に残っていたのがSNSポだったが、それも最終回となった。

そこでインターネットである。ここで書いたようなことは、ネット上でなければ絶対に発表できなかったはず。その一方、著者の印刷メディアでの仕事は皆無になった。それでもかまわないと思うのは、ひたすらネットがあるからだ。著者ができたことは少なく、できていないことの方がはるかに多いが、これから先のことを考えれば、電波や紙誌面などの既存メディアを通じてできることよりも、ネットを通じてできることの方がはるかに多いという確信を持っているということをおきたい。

実はSNSポ連載の最終回には、もう一つ別の原稿があった。その内容のままでとはとても掲載されないだろうということで、一部書きなおしたものを原稿として送った次第。その最初の原稿を掲載しておく。商業メディアで仕事をすることごとくということかということとを少しでもご理解いただく参考になると思うので、興味のある方は今月のお手軽スポーツ最終回と読みくらべていただきたい。

今月のお手軽スポーツ最終回 改訂前の原稿

琵琶湖で釣ったバスのリリースを禁止する「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」が滋賀県議会9月定例会の最終日となった10月16日に可決成立した。同条例が釣りに影響する部分は次の通り。

- 1 法律で指定されたバス、ブルーギルを含む外来魚の琵琶湖への再放流の禁止
- 2 2サイクルエンジンの2006年4月からの使用禁止（既所有の2サイクルエンジン付きプレジャーボートは2008年4月から使用禁止）

さらに加えて同議会2月定例会では「湖面利用税」についての審議が行われる予定。滋賀県から発表された湖面利用税の概要によると、琵琶湖での船舶利用者に届け出義務を課し、1隻あたり年間3000～30000円を徴収することになっている。

これらがすべて施行されると、バスアングラは次のような影響を受けることになる。

まず、琵琶湖で釣ったバスをリリースできなくなる。釣り上げたバスは持って帰って食べるか、県が設けた回収用の入れ物に入れるか、そうでなければ他の生ゴミと一緒に捨てるかしないといけない。

ボート釣りに、さらに二重の制限が加わる。2サイクルエンジンは2006年4月か

ら使えない。すでに所有しているものでも2008年4月からは使えなくなるので、現在の愛艇を琵琶湖に浮かべて釣りをしようと思えば、4サイクルエンジンに載せかえるしかない。

湖面利用税については現段階で細かいところがどうなるかまではわからないのだが、県発表の概要通りだと、これまたやっかいなことだ。前もって登録しておかないといけないということは、「来週の連休は天気がよさそうだから、ひさしぶりに琵琶湖へボートを持って行って釣りをしようか」なんてことはできなくなる。年に数回しか琵琶湖で釣りをしないボートアングラーでも1年分の利用税を支払わないといけないということになったら、彼らは事実上閉め出されてしまっただろう。

リリース禁止についてのアンケートに回答したバスアングラーの70%は、リリース禁止の琵琶湖へは釣りに行かないと答えている。さらに2サイクルエンジン使用禁止などの影響も加わって琵琶湖のバスアングラーがガタ減りした場合のことを考えると、ちよつと恐ろしくなる。リリース禁止条例が施行された直後の来年4、5月だけでもバスアングラーが激減したら、バスが激増する可能性があるのだ。

写真はバスの産卵期である今年4月に撮影したものが(原文のまま)、このプレッシャーがなくなるのはたいへんなことだと思う。琵琶湖の漁師が捕獲して滋賀県が買上げている外来魚は、大部分がブルーギルであって、バスはその一部ではない。そのバスにかかるプレッシャーが激減する一方、バスの卵や稚魚を食べるブルーギルはあいかかわらず漁師が獲り続ける。その結果、いったいどんなことが起こるか。条例

が意図するのは正反対の結果にならないとも限らない。

同様の疑問が日本釣り振興会や滋賀県フィッシングボート組合から滋賀県に出された公開質問状や意見書の中にもあったが、県から具体的な回答は出てこずじまいであった。琵琶湖の将来が気掛かりである。

「琵琶湖はどつなるか」といふ質問への回答

Bassingかわら版Editorial(02/11/26)

「琵琶湖はいつたいどつなるんでしょつか」という主旨の質問を11月に入ってから何回も受けている。おそらく100回は越えてないと思うのだが、この件についてお話しした人は10人や20人ではない。グループでお話しした相手を1人1人カウントすれば、おそらく50人を軽く越えていると思う。

滋賀県議会の9月定例会に提出された「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」が10月16日に可決成立して、2008年4月から琵琶湖で釣ったバスのリリースが禁止されるということがいよいよ本決まりになった。そのことをいろんなメディアを通じて知った人達が聞いてくるのだが、その聞き方に特定のパターンがあつて面白い。パターンは二通りある。著者の顔をまともに見て、大上段から刃を振り下ろすように聞いてくるか、あるいは著者の顔色をうかがいながら、話を切り出しにくそうに聞いてくるかのどちらかだ。

聞きにくいという気持ちもわからないではない。「こんなこと聞いたら気分を害するんじゃないか」あるいは「機嫌が悪くなるんじゃないか」と心配していただいているのだと思う

のだが、そのような心配はまったく不要。こつこつ質問を著者は大歓迎である。Bassingかわら版などの文章には当たり障りがあり過ぎて書けない本質的な問題点や細かいディテールの部分、あるいは質問の主が聞きたい内容に合わせ、できるだけ時間を取ってお話しするようにしている。この文章を読まれた方も、これから機会があればどしどし質問いただければ幸いである。

質問の主はバスアングラーやバス業界の関係者だけでない。ルアー以外の釣りの愛好者や釣具店のスタッフ、釣り船の船頭さん、ソルトウォーターが専門のルアーアングラーなど、本当にいろんな方から質問を受ける。そのたびに、そういう人達が琵琶湖のバスフィッシングはどうなるのかと本気で心配していただいているということがよくわかる。

釣りとはまったく関係のない一般の方から質問を受けることもある。そのときに著者の意見を言つと、釣りのことをある程度知ってる人とはまったく違う反応が返ってくる。「バスというのは琵琶湖の魚をみんな食べてしまう悪い魚でっしょや。やっぱり退治せんとあかんのんちゃいますか」だいたいはこんな感じで、バスアングラーとの認識の違いがはなはだしい。

それにくらべると、バス以外の釣りをしてる人の意見は中間的なところか。「バスは害魚には違いないけど、いきなりリリースを禁止するのは無茶や。琵琶湖のまわりの釣具屋さんや貸しボート屋さんはいかがいそう」だいたいのところ、こんな感じだ。著者に対しては、「これからたいへんですな」というような言われ方をすることが多い。

このような質問に対して、著者は三通りの答を用意している。まず、何が何でもバスは駆除しないといけないという立場の人に対しては、「そういう意見もありますね」ぐらいで、それ以上何も言わないし、議論などしようとも思わない。そういうことを簡単に信じ込むような人に対して、こちらがいろんなことを具体例をあげながら説明しても、それは相手としては自分の無知をなじられてるのと同じことで、意見を覆すような結果になることは絶対ない。そのことは過去に何度も経験済みである。

バスフィッシングのことを心配して聞いて来る人には二通りの答がある。ごく一般的な立場、例えば海釣りをやってる人に聞かれた場合は、何が問題で、何がその問題をややこしくしているか、リリースを禁止するような条例がなぜいきなり出てきて成立してしまったのか、などといったことを説明し、これからどうなるかは蓋を開けてみなければわからないと答えている。

実際のとこ条例は成立したが、それがどう運用されるかはまったくわからないし、具体的なことは何も決まっていなくても当然だ。決めるための準備は進んでいるのだから、反対を恐れて提案も公表もされない状態だから、それに対してバスアングラーがどう出るかもわからない。何がどう決まったとしても、この成り行きからして相当の反対があるのは必至であろう。だから、どうなるかと聞かれても予想のしようがない。

つまり、線路だけは引いたが信号機は立っていないし、走る電車もまだできあがっていない。信号機を立てて電車をちゃんと走らせるめどなんかぜんぜん立たないまま強引に通した条例だから、電車がちゃんと走るのが不思議なくらいである。そういう問題を抱えた条例であることをよく説明し、どうなるかについては何が起こるかわからないし、場合によっては

深刻な事態も招きかねないと半ば脅しに近いことも含めて、中間的な立場の人に対してはどのように申しあげるようにしている。

もっとも慎重に答えないといけないのは、実際に琵琶湖で釣りをしているバスアングララーに対してである。彼らは、自分達が置かれた立場が来年4月からどうなるのかと真剣に質問してくる。その質問に対しては、1人1人がどんな場所でもんな釣りをしているかによって具体的な話をするようにしている。例えば港の岸釣りがメインのアングララーなら、滋賀県が設置するとしている外来魚回収用のイクネスがどうなるか。それについてどう思うか。それならどうするのが一番いいか。そういう踏み込んだことまで、1人1人を相手に話さないと役に立つ筈にはならない。

バスボートで釣りをしているアングララーなら、自分達がボートを置いているマリーナに回収用のイクネスを設置するように滋賀県に要望書を出してはどうかなどと、納税者の権利としてそういう提案をさせていただくこともある。アングララーに協力の要請をするなら、漁港の近くにイクネスを設置するなどという漁師の顔色をつかがうようなことばかりしていいないで、そういうこともちゃんとしろと発言してはどうかと、これはそついつ提案である。

来年4月から琵琶湖のバスフィッシングがどうなるかは、本当に蓋を開けてみなければわからないと思う。バスアングララーとしては、何が起ころうとも大丈夫なように準備しながら、慎重に様子を見守っていくしかないだろう。それよりも、今やらないといけないのは、自分はどうするかを考えることだ。「琵琶湖はどうなりますか」というバスアングララーからの質問には、「自分はどうするかを決めるために、どうなるかということを知る範囲で少しで

も知っておきたい」という気持ちが込められているのだと思う。その意味で、どうなるかを予想することは無駄ではない。

琵琶湖で釣りをしているバスアングララーから「どうなりますか」と聞かれたとき、自分はどうすればいいのかという必死の思いがひしひしと伝わってくる。それに対する明確な回答はない。しいて答えるなら、どうなるかは1人1人のアングララーがそれぞれどうするかのと和だということである。それに対して行政がどうしてくるかを予想し、ものごとを少しでも自分達が思う方向へ進めるようにしないといけない。そのために、どうなるかを考えると同時に、自分はどうするかを考えることが今大切である。

琵琶湖ですでに起きていること

Bassingかわら版Editorial (02/12/09)

滋賀県内の小学校で先生をしているバスアングララーと話をした。彼は自分が務めている学校の生徒と一緒にバス釣りをして、釣った魚をリリースする行為を通じて本来に自然を大切にすることはどうということなのかを教えていた。それが来年4月からは滋賀県条例に違反する行為になる。今まで生徒に教えてきたことが条例違反になるのをどのように説明すればいいのか。生徒と一緒にバス釣りに行くのをやめた方がよいのか。これは彼と彼の生徒にとってはずでに起きている具体的な問題である。

子供と一緒に琵琶湖へバス釣りに来ていたお父さんのうち、ある人は琵琶湖へ行くのをやめて他の釣り場へ行くという。別のお父さんは、子供と一緒に行くときは、できるだけバス

釣りを避けて、トラウトなどを釣りに行くという。それでも問題は残る。琵琶湖へバス釣りに行きたいと子供からせがまれたときはどうするか。琵琶湖へ行かない理由をどう説明するか。これもお父さんにとってはすでに起こっている問題である。

11月23日に南浜漁港で開催された第8回クリーンアップ琵琶湖に参加したときに、主催者である中部釣り場とマナーを守る会のメンバーに来年からの開催をどうするか聞いてみた。（ページ琵琶湖ホット情報2022/11/26に関連内容を記載）バスのリリースが禁止になる来年4月以降、釣り場がどのような状態になるか、まったく予想がつかない。何が起るかわからないし、今まで通りゴミ拾いができる保証もない。条例を守らないアングラーが続出して地元の人達の感情が悪化し、ゴミ拾いに協力してもらえなくなる可能性だってある。そんな最悪の事態にならないと誰が言えるだろうか。もしそうなったら、これまでのゴミ拾いの努力は水の泡だから、できるだけ続ける努力はしつつも、何が起るかわからないから慎重に様子を見続ける以外に方法はないし、今は何も決められない。とりあえずは、そういう方針で用心深く進めるとのことであった。

琵琶湖にはバスポートを何10隻も保管しているマリーナがたくさんある。バス釣り専門のレンタルポート店も多数ある。そのお客さんがバス釣りに出て、釣れたバスを条例に従ってリリースせずに持ち帰った場合どうするか。まとめて保管しておいて生ゴミの日に出すのか、あるいはお客さんの責任で処分してもらおうように言うのか。リリース禁止条例を制定した滋賀県は、自分達の都合のよい所に回収ボックスやイケスを設置すると言っただけで、マリーナやレンタルポート店の存在は無視したままである。これまでさんざん意見を無視し続けてきたアングラーに対して、あなた達の便利のよい所に回収ボックスを設置するから協力してくれなんて今さら口が裂けても言えないし、回収ボックスにしてもイケスにしても、どのみち回収業者や漁協の利権がらみだから、アングラーが望むところに設置される可能性なんかあるわけない。それならどうするか。マリーナ、レンタルポート店の経営者やスタッフにとっては、すぐにも対策を考えておかないとリリース禁止はすぐにやってくる。これまた当事者にとっては困った問題である。

琵琶湖周辺の釣具店の売り上げが落ち込んでいる。マリーナからは次々とポートが抜けていく。レンタルポートの利用も少ない。フィッシングガイドのお客さんが激減して、ガイドだけでは食べていけなくなってしまうた若いアングラーが何人も出始めている。もちろんバスポートなんか売れっこない。中古艇の価格もガタ落ちしている。これらすべて2023年4月からのリリース禁止の影響ですでに起こっていることである。バス釣りブームが去ったことや、2サイクルエンジンの使用禁止などの問題もあるから、リリース禁止の影響だけとは言えないかもしれないが、やはり最大の影響はリリース禁止から来ていると、普通に考えてそう判断せざるを得ない。そうじゃないと言うのは、リリース禁止の影響を過小評価したい人達だけである。

すでにこういう問題が起こっているにもかかわらず、そんなことはないと言いつけるのは、これはもはや詐欺、ペテンのたぐいである。無知な人達にしか通じない低次元の詐欺やペテンのために、すでに起こり始めている問題をないことにされている人達はたまったものではない。それなら、どうするか。できる限りの手段を使って一つ一つの事実を明るみに出す努

力をしなければならぬ。

例えば下のような写真。琵琶湖の漁港に廃船が捨てっぱなしにしてある。漁師が獲った魚のうち、いらぬものは捨てている。こういうのを見たら、その場で写真を撮って新聞や雑誌に投稿する。新聞や雑誌が簡単に味方になってくれるなんて甘い期待は持たない方がいいが、100回も送れば1回くらいは何かで引掛かって掲載されたり取材の対象になることがあるかもしれない。もし、そうならなかったとしても、最低限の収穫として、そのメディアの正体はそういうものだとわかっていく。こういう細かいことから大きなことまで大勢がやれば、少しは風向きをかえることができるのではないだろうか。

さて、前回のテーマであった来年4月からどうするかという問題からんで、著者自身はどうしようと思っているのかという質問を何件かいただいた。その回答を書いておこう。

琵琶湖で釣ったバスのリリース禁止が決まった以上、1アングラーとしての著者は来年4月以降、よほどの事情がない限り琵琶湖でバス釣りをすることはないだろう。著者は仕事でバスを釣る



立場にはなく、条例でリリースが禁止された琵琶湖で無理してまでバスを釣らなくても仕事上の影響は何もない。そういう立場にある著者には、ほかに選択肢はないと考える。ただし、だからといって仕事でバスを釣っている人達にもやめてほしいと言うつもりはまったくない。1人1人のアングラーがどうするかは、あくまでそのアングラーが自分の置かれた環境をよく考えて結論を出すべき問題であるというのが著者の考えである。

バスを釣らないだけでなく、著者はすでに滋賀県内でお金を使うことをできるだけ避けるようにし始めた。滋賀県にいるときにものを食べたり、車にガソリンを入れるのは仕方ないが、物を買うのはなるべく他府県に出でからにする。昨日も車のタイヤを入れかえたかったのだが、滋賀県内のガソリンスタンドではエアを入れ増しするだけにして、後日他府県で入れかえることにした。毎月5日発売の雑誌ポートクラブも滋賀県内にいた12月5日に買うのがまんだ。滋賀県内の地方銀行に預けていたお金を他府県の銀行に移しかえて、引き下ろすときに何か言われたら「バスのリリース禁止を決めた滋賀県の銀行にはお金を置いておきたくない!!」とか何とか言いたかったが、これは残高が移しかえるほどでできなかつた。

琵琶湖へバス釣りに来た人が来年4月から来なくなったら釣具店やレンタルポート店などが困る。買い物をしなくなったらコンビニやお弁当屋さんも困る。ガソリンを入れなくなったらガソリンスタンドが困る。そんなことを言われるかもしれないが、今さら困ると言われても、こっちは困ってしまっただけである。困るというようなことを言うのは、来なくなつた人に対してではなく、来なくなる原因を作つた人達に向かつて大きな声ではっきりと言つ

べきだ。そういう努力を条例が成立する前に本気でしたかどうか、今になって困ると言っている人は胸に手を当ててよく考えていただきたい。

釣具店はどうすべきか。自分達の仕事が消えてなくなってもよいと滋賀県が判断したのだから、そんな県とはおさらばして、さっさと店を他府県へ移すべきだというのが正論であろう。こういうことを言うのと、「ひどいことを平気で言う」などとすぐに言われるのだが、あえて批判を恐れずに言つと、琵琶湖周辺に残ってほしいとアングラーが望む釣具店が何軒あるか。そういうアングラーに望まれるような釣具店は、特に困っていないのではないか。もし困つたとしても、そのときはアングラーが救いの手を差し伸べるのではないか。そういう釣具店だけが琵琶湖周辺に残れば、それでよいのではないか。

日本釣振興会滋賀県支部を支持したのはいったい誰か。その日釣振滋賀支部が大量に作つてはらまいてたゴミ袋には、バスはキャッチして食べようと書いてなかったか。「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」を制定するための委員会にアングラーの代表として出たのは日釣振滋賀支部の幹部だったはずだが、前記のようなことをやっける日釣振滋賀支部から代表者が出ていったい何をしたのか。

琵琶湖に立地しているレンタルポート店はどうか。滋賀県に住んでいるバスアングラーはどうするか。琵琶湖でバス釣りをしたいがために関東から京都へ進学した大学生を知っているが、彼はどうしたらいいのか。簡単に結論を出せない問題は、ほかにもたくさんある。あるいは最初から正解なんかないのかもしれないが、それでも少しでも正解に近づく努力はしなければならない。そのために本連載が少しでも役に立てば幸いである。

今こそインターネットの精神に立ち返って、ウェブ上で利用できるものは皆で大いに利用し合うべきだ。そう思うつから、何かの役に立ちそうだと著者が思う情報については、なるべくアクセス制限をかけないでBassingかわら版内に掲載するようにしている。サポートメンバーの皆さんからすれば、自分達はちゃんと会費を払ってメンバーになっているのに、ただ読みしてる人が大勢いるのは納得できないとお思になるかもしれないが、事情が事情だけに、どうかご理解いただきたい。

それと、著者がサポートメンバーの皆さんにかわつて言いたいのは、釣りを仕事にしてお金を稼いでいる人がBassingかわら版を見てるんだつたら、ちゃんとサポートメンバーになるのが自分達のお客さんに対する最低限のマナーだということである。そんなことは何も考えず、サポートメンバーでもないのにBassingかわら版の情報を仕事に利用したり、メディア関係には無断転載するようなとんでもない輩がいる。業者やメディアがそんなレベルの低いことはかりやつてるから、琵琶湖の問題がこんなにひどいことになったのではないか。そのあたりのことも含めて、釣り関係のメディアについては改めて書きたいと思っている。これって、けっこう覚悟しないといけない人が大勢おられるんじゃないだろうか。まあ、そのときをお楽しみに……。

メディアリテラシーについて

Bassingかわら版Editorial (2002/12/12)

メディアリテラシー (media literacy) とは、わかりやすく言えば一般市民がメディアの

本質をよく知って、情報を賢く利用しようということ。様々なメディアが流す大量の情報に振り回されるのではなく、情報の価値や真偽を見抜き、正しく理解する方法を身に付けることで、みずからのコミュニケーションを創り出す力を獲得することも含む。欧米の多くの国ではすでに高校や大学にメディアリテラシーを教える講座があり、中学校や小学校からメディアや情報との付き合い方を教え始めている。そのために一つの学問分野ができるほど扱っ分野は多岐に渡り奥深い。

一例をあげよう。著者の知り合いのうち、ランドクルーザーに乗っていて車両盗難にあうケースが多発している。被害はランクルの100(この数字が何を意味するか著者は知らない)に集中していて、知り合いの中で半分は盗難にあっているんじゃないかと思うほどの被害率である。全国のランドクルーザー100におしなべれば、おそらく数%とか数%とかのたいへんな被害率になるだろう。これって、とんでもない事件じゃないのか。

盗難が特定の車種に集中しているのだから、「ランクル100の盗難が多発している」というニュースを流して所有者の注意を促せば被害はかなり減らせるはずだが、これを新聞や民放のテレビ局が扱つと、「レジャー用高級車の盗難多発」というようなことになってしまつのはなぜか。「ランクル100の盗難多発」なんてニュースを流せばランクルが売れなくなるから、メーカーがいい顔するはずがない。新聞やテレビにとって自動車メーカーは外すことのできないう大スポンサーの一つだから、具体的に車種を出すことは逆立ちしてもできないのである。

もう一つの例を……。韓国製で元値は1足数100円の有名メーカーのスपोर्टシューズが数100円の値段で売られている。そのメーカーは有名ススポーツ選手と高額契約していて、選

手はコマーシャルなどに出るだけでなく、そのメーカーのシューズを履いて競技会に出場する。ここでメディアがどのような働きをしているかは、今さら説明するまでもないだろう。さらにもう一つ、最新の非常に具体的な例を……。某ホームページで著者が不買運動をしていると紹介された。前回の内容を取り上げることだが、そこで著者は次のように書いて

だけだ。

前回からの引用――

パスを釣らないだけでなく、著者はすでに滋賀県内でお金を使うことをできるだけ避けるように始めた。滋賀県にいるときにものを食べたり、車にガソリンを入れるのは仕方ないが、物を買うのはなるべく他府県に出でからにする。昨日も車のタイヤを入れかえたかったのだが、滋賀県内のガソリンスタンドではエアを入れ増しするだけに、後日他府県で入れかえることにした。毎月5日発売の雑誌ポートクラブも滋賀県内にいた12月5日に買うのがまんじだ。滋賀県内の地方銀行に預けていたお金を他府県の銀行に移しかえて、引き下ろすときに何か言われたら「パスのリリース禁止を決めた滋賀県の銀行にはお金を置いておきたくない!!」とか何とか言いたかったが、これは残高が移しかえるほどでできなかった。

引用終わり――

これは著者が個人的にやっていることであって、不買運動などではない。他の人にも呼びかけて協調して不買をしようとするのが、不買運動の「運動」という部分の意味ではないの

某ページの引用が不正確で、素人仕事としか思えない部分があるが、いちいち指摘しても仕方ないので細かいところは無視することにします。(ページ琵琶湖ホット情報2003/01/07に関連内容を記載)

現在のところBassingかわら版Editorialの各ページにはアクセス制限をかけずに誰でも見ることができるようにしてある。その理由については、すでに書かせていただいた通りである(67ページ)。だから今のうちはいよいよのもの、アクセス制限がかかってリンク先の内容を見ることができなくなったら、某ページを見た人は著者が本当に不買運動をしていると思ってしまうのではないだろうか。リンク先の内容を確認するようめんどうなことはせず、某ページを見ただけでそこに書いてあることを信じ込んでしまう人もいるかもしれない。そういう人こそが、このたぐいの誤報に引っかけやすくて、もっともメディアリテラシーを勉強しないといけない人だと思つた。

某ページは数あるバスフィッシング関係のホームページの中では琵琶湖バスのリリース禁止に関してよくがんばってる方だと著者は思つたのだが、こういうことがあると、その内容の信憑性に疑いを持たれても仕方がない。せっかくながらがんばってるのに、これではもったいなさ過ぎる。メディアの本質を見抜き情報との付き合い方を知ることが、メディアや情報をどう扱ったらどういふ結果になるかを知ることと同義である。某ページのようなことをやってみる人こそがメディアリテラシーについてしっかり勉強されることを老婆心ながらお勧めする次第である。

メディアリテラシーとは、まあそのようなこと。詳しく知りたければ、ネットに数あるブックストアで検索してみれば、たくさん本が引っかけかけてくる。その中には、わずか数100円で本当に役に立つ情報を得られる新書や文庫本もあるから、ぜひ一読をお勧めしたい。Yahooなどのネット検索でも参考になるページが見付かるはず。ここでこれ以上詳しく書く必要はないだろう。

Yahooと言えば、Yahoo内の地域トピックスから琵琶湖レジャー規制のコーナーが姿を消した。滋賀県議会での議決成立から2カ月近くたって、情報が少なくなったからか。某ページが著者のことを取り上げたり、ちょっと前には関西発の月刊釣り新聞の編集長だった社長だったかのことをやはりプロフィール付きで取り上げていたのも、あるいは情報が少なくなってるから、その穴埋めかと思つたりもする。それならもうちょっとなんとかと思つてしまふのは、例えば著者のプロフィールについて、どこからの引用だと思つたのだが、本人に確認もしないでプロフィールを載せるのは、メディアとしてのルール違反じゃないのか。そういうことを気にしないメディアというのは、メディアリテラシーの観点からとても引っかけるのである。

それと、もう一つ。Bassingかわら版が会員制のシェアウエアだといふことは、ホームページの上の方にはっきり書いてある。その内容を知らんになって引用しておられる(敬語を使うのは相手がサポートメンバーだと思ってるから)といふことは、もちろん某ページのエディタなりライターの方はサポートメンバーのはず。その点、間違いないでしょうな。そういうことに関してのお願いも、すでに書かせていただいている(67ページ)ので、ぜひ一読のほどを……。



最後に情報というものについて書いておこう。右の写真は琵琶湖岸で見付けたカモの死体だが、一番上の写真を見る限り、ただの死体だ。

では、二番目の写真はどうか。カモの死体の嘴に吸い込み仕掛けのハリが掛かっている。つまり、カモが何かの間違いで吸い込み仕掛けに食いついてハリが掛かって死んでしまった。こういう事故は冬の琵琶湖でよくある。カモは琵琶湖岸にやって来て水中の藻を食べている。そこへコイの吸い込み釣り仕掛けが投げ込まれていると、吸い込み釣りのエサを食おうとするのか、間違つて食つてしまつのかはわからないが、吸い込み釣りでカモが釣れるというこ

とになってしまうのだ。

実は最初の写真は二番目の写真から吸い込み仕掛けの部分をAdobe Photoshopで消してあった。消すのにかかった時間はほんの数分。著者が荒っぽくやったから、よく見れば吸い込み仕掛けを消した部分の砂の状態がおかしいことがわかると思う。しかし、ていねいにやればわからなくすることは可能だ。ということ、その逆も可能だということである。

三番目の写真は著者の撮り方があまりよくないのでわかり難いのだが、カモの死体の向こう側遠くに写っているのはコイ釣りのアングラー。こういう風に写真を構成すると、わざわざコピーで何か言わなくても、コイの吸い込み釣りのアングラーがカモを殺したという内容になってしまふ。もしこれを雑誌の見開きで掲載したら、けっこう衝撃的な写真だろう。

では、最後の写真を……。手前にカモの死体、向こう側にはバスフィッシングのボート。これでカモの嘴に引っ掛かっているのがルアーだったら……。これがメディアの怖さだ。

メディアリテラシーには情報の正しい捉え方ということが含まれる。情報を発信するメディアの側が何を意図し、どういう狙いを持っているか。それによって情報というのは、同じ素材を扱ったとしても、その意味するところが180度とは言わないまでも、60度くらいは簡単にかわつてしまふのだ。だからこそ情報の受け手は、そのことを知らないといけない



のである。そして、情報の受け手は素人、送り手はプロである。

バスに関する情報が様々なメディアでどう扱われているか。それはおかしいと言つのなら、何がどうおかしいかを正確に言わなければならぬ。そのためには、メディアと情報に関する勉強が不可欠。メディアリテラシーを学ぶということは、つまりそういうこと。今からでも遅くはない。1冊の本、一つのホームページから始められてはいいかがだろうか。

琵琶湖バスのリリース禁止まであと100日

Bassingかわら版Editorial (02/12/22)

琵琶湖バスのリリース禁止まで、今日で残すところあと100日。「滋賀県琵琶湖レジャー利用適正化審議会」の初会合が12月19日に開かれ、具体的に何がどう行われるのかということ、わすかずつではあるが提示されようとしている。

リリースを禁止される側としてはまったくもどかしさはあるが、これからジグソーパズルのチップが少しずつ並んでいくように、琵琶湖で何がどう行われるかということが次第に見えてくるだろう。現状は、そのジグソーパズルのチップがやっといくつか見付かって、それを使えるかどうか、ひょっとしたら別のジグソーパズルのチップを間違っって持ってきたんじゃないかと、皆が手を出すに出しかねている状態である。はまらないチップを間違いを承知で無理矢理はめ込んで、ほかのチップがはまらなくなるのはお構いなしなんて輩の中にはいるという、そんな台本も配役もテラメだらけの舞台の二幕目がようやく始まったところだ。

その一方で、バスアングラーや釣り業界が訴えてきたことがようやく世の中に伝わり始めたさざしも見えてきた。国会の委員会質問でブルーギルの拡散について突っ込んだ質問があったり、新聞などの扱い方もこれまでとは微妙に表現がかわってきているのが、その好例である。リリース禁止に関する様々な問題を約半年がかりで訴えてきた結果、ようやく議員や新聞記者に「ちょっとおかしいぞ」と気付かせ、それが委員会での質問や紙面のちょっとした文章に表れるようになった。

それと同じことで、おそらくリリース禁止条例を提案した滋賀県や、それを満場一致で可決した県議会の中にも、「これってかなりまずいんじゃないか」という意識が出てきているのではないか。著者がそう感じるのは、来年1月に外来魚の駆除を肯定するためのシンポジウム、3月に駆除釣り大会などという、今さら何が目的でと言いたくなるような茶番をわざわざやるということを知っていることだ。それも、フォーラムの主催は駆除派のPCOで県はあくまで後援、あいかわらずバスアングラーの姿はない。駆除釣り大会の予算執行については対して県議会で疑問が呈されるといって、もはや誰の目にも明かな泥縄ぶりである。

なぜこんなことをしなければならなかったかと言つと、先に書いたように世間が「ちょっとおかしいぞ」と思い始めた、それを押さえ込むためにほかならない。つまり反対意見は芽のうちに積んでおこうということ、駆除派のお歴々が声を大にして叫ぶ場が設けられたのが1月のシンポジウムである。バスが嫌いなお魚の先生などには、これは願ってもない場であろう。ついでに謝礼が出たら、これほどありがたいとはいえないというのは気の回し過ぎか。

駆除釣り大会は、なんでも○○○人規模で行われるらしい。つまり、駆除するための釣り大会にこれだけ人が集まったのだからリリースを禁止しても釣りに来なくなることはないとい

うことを世に示しつつ、その一方で駆除そのものをデモンストレーションしようという狙いのようだが、そんなにうまくいくかどうか。どっちにしても関係者の家族、親戚、友人、知人、組織力をフル活用してのヤラセでないところ人なんて集まるはずないから、どういう人達が集まったか聞いて回るだけでも面白いと思うし、誰かその結果をホームページでも何でもいから発表してくれないかと本気で期待してしまうほどだ。

それともう一つは、3月の琵琶湖というのは時期と場所が最悪。これは琵琶湖で釣りをしたことがあるバスアングラーなら誰でも知ってる通りで、3月の琵琶湖にド素人が200人集まるのが1万人集まるのが、バスを駆除なんかできっこない。釣れるもんなら釣ってみると言いたい。ここは一つ、日頃から駆除派アングラーを名乗ってる面々のお手並みをじっくりと拝見させていただくことにしようか。それにしても滋賀県は、こんな駆除はできず、湖岸を荒らしてゴミだけ残るような大会を何をもって開催するのか。滋賀県にとっては、こういう人達だけがアングラーであり、バスのことなんか本当に何もわかってない人達がものごとを動かそうとしているということが、この一件によく表れていると思う。そのことを世間が知るきっかけになるんだったら、まことにけっこつな企画と言つべきか……。

しばらく前になるが、滋賀県知事が大阪や京都の知事の所へリリース禁止条例に対する協力をお願いに行ったというニュースがテレビで流れていた。そのときに滋賀県知事の両脇を固めていたのは、一方が環境保護団体の代表、もう一方が県漁連の代表。つまり県知事にすれば、この両者を自分の味方に付ければ、もはや誰の反対もなく条例が成立し、琵琶湖にいいことをした自分は偉大な知事だと敬われこそすれ、誰にも悪口など言われることはない。

そういう絵を描いていたのではなかったか。両者を味方に付けるにあたっては、もちろんのこと選挙協力やそれに対する見返りなどの約束があったはず。それを守るために今やたいへんな苦勞をしないとイケないわ、一方からは思いがけない強烈な非難を浴びせられるわの、まったくもって苦勞さんであると同時に、おめでたい限りとしか言えない状況である。

リリース禁止条例に対してバスアングラーとバス業界がこれほど強く反対するのは知事も県も予想もしなかった。反対はあっても、バカな釣り師のことだから、もの数ではないだろうと踏んでいたはずだ。でなかったら、リリース禁止の当事者であるバスアングラーの意見をまともに聞かないまま条例の要綱案が出てくるなんてことはなかったはず。ところがいざ蓋を開けてみれば予想以上に強い反対にあい、しかも反対意見の中に核心を突いた事実がいくつも出てくる。これはまずいということ、なんとしても反対意見を押しさえ込もうとする。パブリックコメントに対して、ホームページでいちいち反対の反対意見を並べ立てたのもその一環である。

そういうするうちに、メディアもバカじゃないから、何かおかしいと疑いを持ち始める。言われたくないことを国会で言う議員も出てくる。万単位の反対意見を無視するという民主主義のルール違反をあえてしても条例を押し通した滋賀県知事の失政は、もはや誰の目にも明かである。無知蒙昧の数々をいくら覆い隠そうとしても、あちこちから綻びが見えてくる。駆除派はその失政をリカバリーしないとイケないから必死だ。もし失敗したら自分達の信用もなくすし、漁連は琵琶湖産アユの河川放流に影響が及びかねない。研究者は自分や近くの人達がブルーギルの拡散に自ら手を貸しまったことが世間にバレてしまう。一部の環境保護主

義者は自分達の無知ぶりを世にさげすむことになってしまふ。今はそういう状況だと解釈すれば、わかりやすいのではないだろうか。

バスアングラーにとっては、ここからが勝負所だ。知事や県がますますガードを固めて、アングラーの意見なんか聞くことなく頑なに反対意見を押しつづがそうとするのか。あるいは少しは意見を聞くようになるのか。相手が失政に気付き始めたところをどのように突いて有利な交渉に持ち込むのか。そのあたりのことをよく観察し、よく考えながら、慎重に行動しなければならぬ。琵琶湖バスのリリース禁止まであと100日となったこの日に、改めてそのことを訴えたいと思う。

池原ダムでコイ釣りをしながら思ったこと

Bassingかわら版Editorial (2003/01/01)

「あけましておめでとうございませす」などという決まりものごあいさつは抜きにして、Editorialはたとえ正月でもハードな話題をお届けする。

2003年1月1日に奈良県池原ダムのトボトスロープでコイ釣りをしながらこの原稿を書いている。トボトスロープでは元旦釣り大会が開催されていて、若いバスアングラー達は朝早くからボートで釣りに出て行った。大会のルールは、池原ダムで釣った魚なら何でもありの2尾長寸。ならば、ボートで走って寒いめをするよりも、スロープからコイの吸い込み仕掛けをブツ込んでおいて、まかり間違って2尾釣れば優勝はいただきという周到な作戦を立てた。日本有数のコイ釣り場である琵琶湖畔の釣具店でエサと仕掛けを買い込み、年末まで

下野正希プロと一緒にイシダイ釣りに行ってたときに使ってた竿とリールをそのまま持ってきたのだが、1日1寸の寒コイはそんなに甘くないようだ。釣り始めてから1時間になるが、いまだアタリはない。

著者は池原ダム下のバンガローで大晦日の夜を過ごし、2002年最後の瞬間はトボトスロープのカウントダウンイベントに参加した。だからNHKの紅白歌合戦は見えていないのだが、なんでも同局のヒット番組「プロジェクトX」で流されて見事リバイバルした「地上の星」で中島みゆきが出場歌手に選ばれ、同番組の舞台の一つとなった黒部ダムで歌うのを生中継したとか。小林幸子と美川憲一の歌の本質とは何の関係もない衣装合戦もあきらめてきた頃だし、次なる見せ物としていかにもありそうな企画は年末恒例番組にふさわしいものと言えるだろう。

この中継については、中島みゆきが紅白にありがちなタレント仕事をさせられるのを嫌がったために、NHKホール外での出演になったという嘘が本当かわからない話を耳にした。NHKの看板とも言える大番組が、ここまであからさまに他の人気番組の力を借りて視聴率(ラジオでもやっているから聴取率も)かせぎをしなければならなかったり、一歌手の意向を入れたなどという噂が流れたり、まあそういう時代なんだとテレビが一般に普及し始めた頃から紅白を見てる著者などは痛心させられた次第なのだが、正月にBassingかわら版をごらんの皆さんの中で、いったいどれぐらいの方が黒部ダムからの中継をごらんになったのだろうか。また、何を思われたらだろうか。

とういわけで、2003年最初のEditorialは年末年始の番組批評を……じゃなくて、そろそろ

本題に入ろう。

大晦日の前から気になってたのは、折に触れて黒部ダムがテレビの画面に登場してたことだ。なんで今さら黒部ダムが……、単なるプロジェクトXの便乗かと思っていたら、紅白歌合戦の当日、つまり12月31日の主要新聞に関西電力が黒部ダムの写真を使った1ページ広告を入れていた。関電の広告だから全国展開ではないと思うのだが、滋賀版の朝日と読売には入っていたから、かなり大規模な広告が撃たれたのではないかと思う。

NHKの黒部ダムからの中継は、関電の協力がなければ不可能。そして、その当日の関電の新聞広告。それ以前からのテレビでの露出。これって、用意周到に仕組まれたことではないのか。その標的は言うまでもなく、長良川河口堰から吉野川河口堰を経て長野県に至るダム反対運動であろう。年末から大晦日にかけてこのような大規模広告戦略を展開した電力会社と広告代理店、それに協力するテレビ局。これらが頭の中でつながったときに、「やるな!!」と思った。

「ダムは必要です」と正面切って言うんじゃないくて、プロジェクトX的な見せ方でダムというものが現に存在する事実とその必要性をすり込む。テレビ局が民放ではなくNHKというあたりも実に巧妙だ。このようなことをやる知恵と資金を持った会社や組織が情報を意図的に操作しようと思ったら、かなりの部分でそれは可能だということである。

今年4月1日からの琵琶湖バスのリリース禁止に関して滋賀県がやっていることは、これに比べれば子供が考えそうなレベルでしかない。しかしながら、それに対してバスアングラ―やバス業界ができることは、資金力も動員力も明らかにそれ以下である。となれば、あとは知恵を使うしかない。

「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」が10月半ばに滋賀県議会で可決成立してから1カ月半が経過し、バスアングラ―の側からの意見や言い分がそろそろ出そろってきたところで、これからはそれに肉付けしたり枝葉を繁らせていく作業を進めなければならぬ。具体的には、証拠固めや方策の絞り込み、メディア対策、交渉のパイプの確保などといったことを3月をめどに進めなければならぬ。そのときに、相手のやっていることがたとえ子供が考えそうなレベルでしかないとしても、なめてかかるとひどいしっぺ返しをくらう恐れがある。琵琶湖のバスフィッシングは瀕死の状態かもしれないが、相手もすでに手負いの状態であることを忘れてはいけない。手負いだからこそ必死で反撃してくるから、用心してかからないといけないのである。

こういうことを書くのは正月にふさわしくない気もするが、新しい年を迎えて気のゆるみを正す意味を込めて、あえて書いておきたい。これからは、片や瀕死の琵琶湖のバスアングラ―とバス業界、それに対する陣営も手負いの状態であるとすれば、お互いがとことん闘う気なら、その闘いは相手の弱点を狙ってパンチを打ち合うような、あるいは血みどろの傷口に塩や唐辛子をなすり付け合うような痛みを伴う真剣勝負になっていくだろう。

アングラ―の側が本気で闘う気なら、相手は黒部ダムのメディア露出を利用してダム反対運動に対抗しようとする勢力と同質の強さを備えているから、それなりの覚悟はしてかからないといけない。そのための警告の意味を込めて紅白歌合戦と黒部ダムの話を書かせていただいた次第である。

最後にご報告するが、池原ダムの寒ゴイはなかなか手強く、原稿を書きながらでは釣れなかつた。そのうち時期をあらためて再挑戦し、そのときはぜひ大物を釣り上げたいと思っている。

琵琶湖のバスアングラーはごつするべきか

Bassingかわら版Editorial (2003/01/07)

2003年4月以降、著者はよほどの事情がない限り琵琶湖でバス釣りをすることはないだろうということを一カ月ほど前に書かせていただいた(64ページ)。同時にその理由についても書かせていただいたのだが、その後、同様のご意見を多数メールでお送りいただき、また耳にする機会もあった。各個人によって、それぞれ立場や理由に違いはあるが、リリース禁止の琵琶湖でバス釣りはしないという行動面ではかわらない。その結果として生じること、つまり琵琶湖周辺の釣具店やレンタルポート店、マリーナなどが困るという事情を十分に知った上で、大人の判断として琵琶湖で釣りをするのをやめると言っているのである。

バスポートを多数保管している琵琶湖周辺の多くのマリーナからは、現在、会員が次々と抜け落ちて、その補充がままならない状態である。釣具店やレンタルポート店、フィッシングガイドなどは、オフシーズンの今はお客さんが少ないのがあたりまえなのだが、売り上げはすでに昨年から大幅ダウンしていて、中には「もう廃業しようか」という声も聞かれる。とりあえずは、リリース禁止以降の様子を見てから対策を考えるところが大勢か。

奈良県池原ダムの年越しイベントに参加し、大晦日の夜に下北山スポーツ公園のパンガロに10人ぐらゐのバスアングラーが集まって鍋を囲んだときもそうだったのだが、このところバスアングラーが集まると話題は決まって琵琶湖バスのリリース禁止のことになる。場所がどこであろうと、バスアングラーが集まれば琵琶湖バスのリリース禁止についてけっこう真剣な議論が繰り広げられるのである。その白熱の度合いは、リリース禁止が近付くにつれて増している。

琵琶湖周辺の釣具店やレンタルポート店、マリーナなどでも、お客さんと親しくしていらはいるほど、そういう話をする機会は少なくないようだ。なじみのお客さんにすれば、そのお店がどうなるのか気になるのはあたりまえだし、お店のスタッフや経営者はお客さんがリリース禁止になってからも来てくれるのかどうか心配している。そういうお互いの疑念や心配を少しでも解きほぐすための対話が今まさに必要であり、良心的なお店やアングラーはすでにまじめな情報交換を始めている。

琵琶湖のバスフィッシングを取り巻くそのような状況を知った上で、それでも来年4月以降は琵琶湖でバスフィッシングをしないとアングラーが多いようだ。メーカーや釣具店などが参加する日本釣用品工業会や大阪釣具共同組合、日本釣振興会は、2月のフィッシングショーの際にバスアングラーの動向を調査し、結果を早急に周知することが必須である。せめてそれぐらいの役には立ってほしいと思っただが、準備は進んでいるのだろうか。

それでもバスアングラーが琵琶湖へ行くのをやめるといふ理由は、多くの意見を無視した条例に対する抗議の方法がそれ以外にないからである。リリースが禁止されたとき、バスアングラーの選択肢は三つある。そのままバスフィッシングを続けて条例違反を承知でリリ

ースも続けるが、条例に従ってバスを殺すか、あるいは琵琶湖でバスを釣るのをやめるかである。

条例を無視してリリースを続けるのは、たとえそれが立ちシヨンや自転車の夜間無灯火と同じレベルであっても、条例の改定を視野に入れた場合、罰則制の導入につながる恐れが大きい。あえてやるというのなら、それがテロ行為であることを自覚し、その効果を計算した上でやるべきであろう。意図的に条例違反をした上で裁判に持ち込んで言いたいことを言う。あるいはテロリストとして主義主張を述べた犯行声明を出す。それぐらいのこともできずに、ただバスをリリースするだけなら、それはただのバカが条例違反してるだけのことだから相手の思うつぼである。(注) ここでこのようなことを書いたからと言って、著者はテロ行為をおおったり勧めたりするつもりはないから、くれぐれも誤解なきように。「服部氏テロを勧める」なんてバカな引用もお断りする。著者が言いたいのは、あえて条例違反してまでリリースするのなら、それぐらいの主義主張と行動に対する自覚があるべきだということである。いちいちこんな断り書きをしないといけないなんて、なんとという時間と労力とネット資源の無駄づかいが……。なんて言いながら、この部分、けっこう楽しんで書いてるんだけどね)

バスを殺すのは、相手の主張を認めたことになるから、バスアングラーとしてはしたくない。ならば琵琶湖でバスを釣るのをやめた上で抗議行動を続けるしかないのではないか。これと同じ主張をあちこちで見えるようになったのは、一般のバスアングラーにとっておそらくそれしか選択肢がないからであろう。

ここで、「一般の」と書いたのは、仕事でバスを釣っているアングラー、例えばフィッシングガイドはレジャーでバスを釣ってるわけではなく、その点を突破口にすればリリースが認められる可能性があるからである。ならばトーナメントはどうかと言つと、レジャーの一端だからリリースは禁止。このあたりは、アングラーそれぞれの立場とバスを釣ってる状況によつて判断が分かれるところだ。昨日はトーナメントでバスを釣つてたからリリースは禁止で、今日はガイドだから同じアングラーがバスを釣つてもリリースはオーケー。同じポートに乗って釣りをしてても、ガイドのゲストはリリース禁止。メーカーの宣伝のために取材でバスを釣るのはレジャーが仕事か。これらすべて、漁師や漁協、漁連の既得権益への影響を避けるために、リリース禁止の網をレジャーとしてのバスフィッシングだけにかぶせようとする条例の大きな矛盾点である。

これからの話の持つて行きようによっては、特例としてガイドのゲストにはリリースが認められるなんて可能性もなくはない。そういう特例をたくさん設けさせることで、琵琶湖のバスフィッシングを存続させる方法が何かないか。これからは、そういうことも考えていく必要がある。つまり、具体的にガイドならガイド、トーナメントならトーナメント、遊びなら遊び、場所によって、季節によって、岸釣りかボート釣りによつてなど一つ一つの事例をどうしていくかということを皆で考え、何かよい方法を思い付いたら、それを実現する努力をしていかなければならない。

そのためには、琵琶湖でバスを釣ることをやめたアングラーはどうするべきか。バス釣りをしないけど琵琶湖へは行くというのはどうだろうか。10回のバスフィッシングのうち5回

は琵琶湖、5回は他の釣り場だったアングラーなら、他の釣り場へ行くのを8回ぐらいにして、2回は琵琶湖へ行つて釣りはしない。琵琶湖近くの行き付けの釣具店で買ひ物はする。そうすれば釣具店は大助かりだろう。レンタルボートは？ これはちょっと難しいが何か考える。ボートを借りてモロコでも釣るとか……。マリーナからもバスボートで出ることとは出るが、ポイントに着いたらアンカーを打つて釣るのはコアユやモロコ。

例えば4月1日からしばらくの間、ばりばりバスフィッシングの格好で琵琶湖へ行つて釣りをせずに湖岸に立つてるだけ、お弁当食べてるだけ。そういう人垣を作つたら面白いかもしれない。とにかく口で言つてただけでなく、キーボードをたたいてるだけでもなく、琵琶湖で何が起こっているか、何が行われているかを見届けるために現場に居続け、しかしバスフィッシングはしない。そういう行動も必要ではないかと思う。一つの提案として、バスアングラーのためのモロコ釣り大会なんか開催してはみてはいかがだろうか。

それでも残るアングラーはいる。何が何でも琵琶湖のバスフィッシングでないと嫌だというアングラーだ。本当に天地神明にかけてそんなのであれば、これは琵琶湖のバスと運命をもにしない。浅野大和君のように本気で裁判に訴えるなら立派。滋賀県の職員になつて内部から切り崩すという長期戦も考えられる。わずかな可能性に賭けて知事や議員を目指す方法もある。あるいは本物のテロリストになるか。そういうことをできませず、それでいて「自分には琵琶湖のバスフィッシングしかない」なんて言つてるのは、これつて「モーンング嬢。命!!」なんてのと同じレベルじゃないのか。

1.17 9.11 その4.1

Bassingかわら版Editorial (2003/01/17)

1995年1月16日に琵琶湖で下野正希プロの取材をしていた著者は、その夜に帰宅。17日未明は大阪府東大阪市の自宅2階の寝室のベッドの中にいた。

午前5時40分過ぎ、最初はフワフワと弱い揺れを感じて目が覚めた。その直後、今度はガタガタと今までに感じたことのない激しい揺れがやってきた。ミシミシッ、ドカン、ボカン、グシャッという大きな音が聞こえた。かろうじてベッドから落ちなかったのは、幸運にも大きな揺れがくる前に目が覚めていたので、ベッドにしがみつくことができたからだ。すぐに部屋の蛍光灯を点ける。一度点つた明かりが一瞬消え、停電かなと思つたら、すぐにまた点いた。

大きな揺れは数秒でおさまつたが、小さな揺れが何度か続いて、しばらく起きあがれない。揺れがおさまるのを待つてベッドから身を起こし床の方を見ると、本棚の上に乗せてあつたタックルボックスやコールマンのストープなどたくさん荷物があり、並び方はそのままベッドと本棚の間のカーペットとコタツの上にドカドカッと落ちていた。大きな音が聞こえたのは、ミシミシッというのは家のきしみか。ドカン、グシャッというのは荷物が落ちたときの音のようだ。3本並んだ本棚は倒れはしなかったものの、ガタガタにずれて、真ん中の1本は今にも倒れそうなくらい傾いている。もしベッドから落ちていたら、この荷物と本棚の下敷きになつたか、あるいは荷物の上に落ちていたかもしれないと思つてソツとした。

すぐ階下へ降りて居間と台所の明かりを点け、居間のテレビのスイッチを入れて音量を大

きくした。1階の自室で寝ていた母親は顔面蒼白。各室の被害を確認している間に、テレビのニュース速報が流れ始めた。最初に出た速報は「東海、中部で地震があったもよう」とのこと。大阪でこの揺れなら震源地の近くはかなりひどいことになってるんじゃないかと思いつながら、2階へ上がって本棚の中からポケットラジオを探し出してスイッチを入れた。間もなく、地震は神戸で起こったというニュースが伝わり始める。新幹線の高架が落ちた。阪神高速が倒れている。ラジオのニュースアナウンサーはそう言っているのだが、どうもピンとこない。何をバカなこと言ってるんだという感じた。

夜がすっかり明けてあたりが明るくなって、まだ何が起こったのかはつきりわからない。それから徐々にニュースが神戸の街の様子を伝え始めた。これはたいへんだと早めに会社へ行こうとしたが、大阪市営地下鉄は駅まで行って動いてないことがわかった。近鉄も同じ。車で行くことしたら、途中まで行ったところで大渋滞で前へ進まなくなった。脇道を通っていったん家へ帰り、テレビとラジオで情報収集をして、午前10時過ぎにふたたび車で出発し、なんとか昼過ぎに大阪市内の会社に到着することができた。

著者は当時、週刊釣りサンデーという釣り専門の出版社に務めていた。6階建ての建物に大した被害はなかったが、内部の様子は上へ行くほどひどく、ロッカーケースが倒れたり机の上がぐちゃぐちゃになったりしていた。筆者の机からパソコンのディスプレイとスクリーンが床に落ちたのを同僚が拾い上げてくれていた。なんとか元に戻して起動してみると、ちゃんと動いた。思わず「よかった」と声に出してしまったが、とても喜んでいられる状況ではない。すぐに締め切りが迫っている雑誌がある。それをどうするか。取材予定はキャンセル

しないといけない。進める仕事と止める仕事の交通整理も必要だ。社内の片付けをししながら、製版会社や印刷会社、デザイナー、イラストレーターなどと連絡を取り、できるだけ早く仕事ができる体勢を立て直すことが最優先課題となった。

何よりも困ったのは、電話が通じないことだ。最初のうちは5回に1回ぐらいは通じていたのが、次第にかからなくなり、翌日には10回に1回も通じなくなった。こうなると、かかればラッキーという感じである。そこで活躍したのが著者の携帯電話だ。当時、著者はセルラーのアナログ携帯電話を使っていたのだが、会社でほかに誰も携帯電話を使っている人はいなかった。それがなんとか通じたので、どうしても連絡を取らないといけない最優先の連絡先に限って、この携帯にかけてもらうことにした。こちらからかけるのも同じ携帯から。社員が自宅と連絡を取るのも、これしか手段がないとなったら貸さないわけにいかない。あつと言っ間に使う人がどんどん増えていった。

著者は地震から3日後の1月20日に神戸へ取材に行っている。普段は防波堤へ釣り人を渡している渡船が、被災地への補給や工事資材、人員などの運搬をしていたので、それに便乗して神戸の釣り場がどうなったか見に行ったのだ。

神戸港沖の防波堤はスズキヤチヌ(クロダイ)、グレ(メジナ)、メバル、ガシラ(カサゴ)、カワハギ、タチウオなど何でも釣れる好ポイントの連続。港内の岸壁もスズキヤチウオの好釣り場ぞろいだ。それが地震でどうなったか。海面から高さ5m近くあった防波堤が、小型和船の舳先から簡単に飛び上がるぐらい低くなっている。波を防ぐために積み上げられた防波ブロックが水面下に沈んでしまっていて、知らずにその上をボートで走っていること

があった。きれいに一直線に並んでいたケーソンはことごとくガタガタにずれて、隙間が5cm以上も開いている所がある。港の岸壁は陥没していたり崩れていたりで、船を着ける所を慎重に探さないといけない。これがあの神戸港かと我が目を疑うほどの被害状況であった。その神戸港の沖の防波堤から携帯電話が通じたのである。さっそく会社に報告し、神戸港の被害の様子と渡船の活躍を伝える写真とレポートが最新の誌面に掲載された。

その後、日を追うにつれて経済、社会活動が徐々に回復していく一方、被害の大きさや現場の惨状が明らかになっていった。会社の仕事がほぼ元通りになった2月末に著者は辞表を出して3月末に辞職した。著者が会社を辞めたのと地震とは何の関係もないが、最後の印象的な取材として震災の神戸に行ったときのことは今でもよく覚えていて。

2001年9月11日夜、著者は和歌山県新宮市のワイルドキャット海の家にいた。下野プロが雑誌の取材に来ていて、その日の夕方は港の防波堤でイシダイ釣りをして何も釣れず。翌日はワイルドキャットで沖へ出てカジキ釣りをする予定だった。夕食をすませて、明日の釣りに備えて今夜は早く寝ようかというときに、下野プロの自宅から電話があり、アメリカでたいへんな事件が起きているという。すぐにテレビのスイッチを入ると、世界貿易センタービルから煙が上がっている中継画像が映し出された。それから午前5時前までテレビに釘付けになり、カジキ釣りは眠くて仕方なかった。6時からアフガニスタン爆撃に至るその後の展開は、皆さんもよくご存じの通りである。

東京オリンピック、ケネディ大統領の暗殺、アポロの月面着陸、大阪万国博覧会、オイルショックのパニック、キャンデーイズの解散、山口百恵の引退、長崎県男女群島で81.5cmのクチジロを釣ったことなど、著者が経験した出来事はほかにもいろいろあるが、中でも阪神淡路大震災と世界貿易センタービルへの自爆テロは、衝撃の大きさと人智の至らなさを点で双璧である。他の出来事に比して、ものごとに対する分別が付くだけの年齢に達してから経験したから印象深いということもあるかもしれないが、事実としての重さや意味深さはやはりこの二つの事件が飛び抜けていると思う。

2003年4月1日は、これら二つの出来事以上の衝撃として、著者の記憶に残る第3の日となるであろう。琵琶湖バスのリリース禁止は、バスアングラとバス業界に対する衝撃の大きさと大震災に匹敵する。こういふ言い方をすると亡くなった方に失礼だと言われるかもしれないが、それを承知で言わせていただくなら、リリース禁止によるアイデンティティーの喪失は、バスアングラにとって震災やテロによる死と同等である。バス業界に対する経済的な被害も同様。

さらに、民主主義のルールを犯してまでもリリース禁止を強行するという為政者による蛮行は、テロリストを生むに至った歴史をまさに目の前で見ているような気がする。自爆テロのような事件が琵琶湖で起こらないことを祈りたい。

事件の功罪

Bassingかわら版Editorial (2003/01/24)

地上波各局が全国二ニュースで流し、新聞も一面で報じるとなれば、これは大ニュースだ。ほかでもない、滋賀県漁連会長らによる恐喝未遂事件のことなのだ、第一報が出たのがテ

レビは1月22日午後、新聞は同日の夕刊だった。(ページB.C.ホット情報2003/01/22)に関連情報掲載)それに続いて翌23日になっても全国紙の滋賀版や地元京都新聞などは、このときばかりという感じで出てくるわ出てくるわ。県や漁連のいろんな人達のコメントも伝えられていて、そのいずれもが思わず突っ込みを入れたくなってしまふものばかりである。

Kyoto Shinbun News 1月22日「また、滋賀県の浅田博之農政水産部長は『漁業者を代表し、琵琶湖漁業をリードする立場の人だけに、事実なら残念だ。漁業補償は漁業者にとって、正当に要求されてしかるべきものだが、恐喝という事件に用いられて遺憾。多くの漁業者や県民の信頼を回復できるよう、県漁連とも十分に協議していきたい』とコメントした。」

「多くの漁業者や県民の信頼を回復」というのは、官僚のものの考え方がよく表れた、とても面白い表現だ。問題点は二つ。

漁業者と県民がなんでここで一緒にくたにされないといけないのか。読みよによつては「多くの漁業者や県民が、それ以外の人達からの信頼を失った。それを回復できるよう……」と理解されてしまつてはいないか。本当は、多くの漁業者や県民からの漁連に対する信頼を回復できるよう……」と言いたかつたのではないかと思つのだが、このコメントを何回読みなおしても、信頼を回復しないといけないのが漁連なのか、あるいは漁業者や県民なのかはつきりとはわからないという悪文の見本。漁連と協議するって言ってるんだから、やっぱり信頼を回復しないといけないのは漁連だろつて、なんでこんなフォロワーを著者がしないといけないんだ!?

この人が言いたかつたのは、「多くの漁業者や県民からの県漁連に対する信頼を回復できるよつ、県漁連とも十分に協議していきたい」ということだつたとしても、読んだ人がそのよつに理解してくれたかどうかはわからない。どつちに取るかは、読んだ人の先入観として漁業者を信頼していたかどうかにかかっているのである。さて、あなたは最初に読んだときに、どう理解されたらうか。

この人はつまり、多くの漁業者は漁連に対する信頼を失う側であつて、事件の影響をこうむる側であるということが言いたかつただけのこと。つまり、何よりもまず県の農政水産部長として一般の漁業者を庇護しようとしたわけで、その点は役人の鑑と言つべきか。それ以外に見るべき内容は何もなし空疎なコメントの中で、容疑者が会長を務めた県漁連の構成員である漁業者と県民をひとくりに並べてしまったのがそもそもその間違いである。ところが、「漁業者の信頼を回復……」とだけ言つたら、県民のことを考えてないなんてすぐに言い出す輩が大勢いる。そこで、「県民」を付け足したのだから、日頃考えてもいないことをやるうとするからボロが出てしまつたといふのが本当のところではないだろうか。

それともう一つ。信頼を回復するといふのは、元々信頼されてたつてことが前提のはずだが、いったい誰が信頼してたのか。県農政水産部長が本当に信頼してたのだとしたら、アホだ。つて言うか、官僚としては、こつ言つしかないといふこともよくわかる。しかし、それにしては、もうちょっと言い方があつたといふもの。人前でものを言うときは、日本語の勉強をしつかりしないとけない。ひよつとしたら、京都新聞が記事にするときにコメントを端折り過ぎたのかもしれない。だとしたら、日本語を勉強しないとけないのは京都新聞の方なのだが……。

asahi.com滋賀1月23日「浅田部長は『県民から疑惑の目を向けられたことに対して、今後、漁業組織全体が県民からの信頼を回復するよう指導していきたい』という。」

だから、信頼なんかされてないってば。それはともかく、22日のコメントとは微妙に表現がかわってきている。前日の発言に対して早くも誰かが問題点を指摘したのか。であれば、改善は素直に認めよう。あるいは、同じ発言の内容が掲載紙でかわってるだけか。だけれどねー。今後、指導していきたい、ってことは今まで実効ある指導はしてなかったということになるんだけど……。あーあ、また一つボロが出ちゃった。こうなったら、あくまでも私は信頼してたで押し通すしかない。今後の発言に注目!!

Kyoto Shinbun News 1月22日「県漁連の北村勇副会長は『寝耳に水。21日に、県内の各漁連の組合長が集まる会議があり、会長も出席していたが、事件に関する話は一切なかった』とし、『まず詳しい状況を把握したい』と話した。また『県漁連という組織として(会長らの逮捕事実のようなことを)やっていたことは断じてない』といい、今後は近々にも緊急の理事会を開き対応策を協議したい、とした。」

本場に「寝耳に水」なら、この人の役回りはオウム真理教の上祐か。組合長が集まる会議で恐喝事件の話なんか出るわけないだろうが。「県漁連という組織としてやっていたことは断じてない、って？、ふーん。

asahi.com滋賀1月23日「県漁連の北村勇副会長は『県漁連としては全く関与していない。これから各組合に対して説明する必要があるだろうが、会長は容疑を否認している。今後の予定は決まっていない。外来魚に関する問題への波及が一番心配だ。漁業者だけでなく県民、

行政が一体となって外来魚対策を進めているときに大問題だ』と戸惑う。」
22日の県水産課・課長補佐のコメント(ページに掲載)に続いて、外来魚問題への波及を心配する狼狽ぶりがよく出ている。ということは、心配しないとイケないようなことが、やっぱりあるわけですね。環境保護団体の皆様に置かれましては、さぞかし心配なこと……。心中、お察し申しあげます。ついでに國松県知事も。

asahi.com滋賀1月23日「県漁連青年会の戸田直弘会長も『外来魚の再放流を禁止した(条例施行に向けて、漁協全体がまとまっていないとだめな時期に、何を考えているのか。漁協や漁業者全体が疑いの目でみられる』と怒る。」
だから、前から疑われてたんだって。滋賀県警には4年も前から不当要求対策室が設置されていた。元々疑いの目で見られてたのが、ごく一部沙汰になっただけ。それを県漁連青年会の会長が、本当に知らなかったのか。知らなかったですむ問題でもないけど、もし知らなかったふりしてるんだとしたら、この人、相当の悪党だ。って、今さらこんなこと書いても、何も目新しいことなくて、こっちが笑われるだけか？

Kyoto Shinbun News 1月23日「調べに対し、川森芳一容疑者らは『金は要求していない。誠意を見せろと言っただけ』などと供述している、という。」

この言い回しは、まるで暴力団かその筋のボロ。ああ、そうか、県漁連の会長ということ、補償金交渉のボロの中のボロだったかと納得。その県漁連の上が全国内水面漁業協同組合総連合会で、その親玉が自民党の参議院議員で外来魚駆除の急先鋒で、というようなことをついつい考えてしまったりして……。恐喝未遂事件が滋賀県漁連会長らの個人犯罪であっ

て、組織的事件に波及しないことを心底祈りたい。

Kyoto Shinbun News 1月23日「県琵琶湖レジャー利用適正化条例の4月施行を控え、県は外来魚駆除を担う県漁連に本年度、前年度の4倍の2億1800万円を助成している。この公金支出に『漁獲量の水増しがある』と釣り関係者が指摘し、県に監査請求している。(改行)県水産課は「チェック態勢は万全」と強調してきた。しかし今回の事件で、県の公金支出の信頼性が揺らぎかねない。」

県の公金支出の信頼性が揺らいでいると思った県民がすでにいたから、監査請求なんてことが行われたのではなかったか。漁連や漁協に警察の自宅捜査が入ったことだし、ついでに帳簿とかもチェックしてみては？ 助成金の使われ方って、チェックしたことあるのかな。「チェック態勢は万全」と強調するのは、強調しないといけない理由があるからではないのか。

「今回の事件で、県の公金支出の信頼性が揺らぎかねない」って、何も知らない人が普通に考えれば、恐喝未遂事件と外来魚駆除に対する助成金とは何の関係もないはず。それが今回の事件報道では、どのメディアもそろったように外来魚問題や助成金の方へ話が向かってしまうのはなぜか。そのあたりがこれから出てくるのかどうか、とても楽しみである。

これ以上突っ込み続けたら、あまりにも品がなくなってしまういそなので、本題に移そう。今回の事件が外来魚問題にどう影響するのだが、先の監査請求と同じで、何らかの不正があったとしたら、正される方向に進むであろう。つまり、外来魚駆除の漁獲量の水増しが行われているという申し立てが通る通らないに関わらず、監査請求をしたこと自体がそのような不正を防ぐ効果はあったはずだし、助成金を受け取るだけで駆除作業がちゃんと行われていなかったとしたら、今回の事件報道により、それがちゃんと行われるようになることもあるだろう。それはそれでよいことなのだが、その分、外来魚の駆除はきっちり行われることになるから、琵琶湖のバス達にとってはうれしくない事態である。

外来魚駆除のための予算というのはわからないところがあって、漁師が獲った外来魚を買い上げるのに、なぜ1年間の予算を最初に決めることができるのか。最初から漁獲目標値があるのだとしたら、その分を獲ったら漁はおしまい、先に獲った者勝ちなのか。あるいは漁業組合や個人に対する漁獲割り当てがあるのか。そのあたりのももまったく不明というか、何も決めずに適当にやっけるようにしか見えないのだが、それで年間の予算分の外来魚をどうやってきっちり獲ることができるのか、まったく不思議としか言いようがない。あるいは、漁獲目標値を超えた分については補正予算措置が執られるのか。そういうことに関する情報公開はぜひ必要だと思つた。

そうやって獲られた外来魚の中に安い外来魚をませて水増しを図る不正が行われているというのが監査請求の大きな理由であった。その監査請求がきつかけとなり不正が行われなくなったら、水増し分がこれからはすべて外来魚に置きかえられ、予算分の外来魚はきっちり駆除されることになるわけだ。それが本来あるべき姿だと言われればその通りなのだが、さて、今年4月から多くのバスアングラーが琵琶湖でバスを釣らなくなる分と相殺して、どのような結果とあいなるか。國松県知事が「琵琶湖の漁業は生態系と共存している」とうそぶ

いた、その琵琶湖の漁業者がどれぐらい外来魚を獲りつくせるものか。もし外来魚を獲りつくせるんだつたら、モロコヤフナを獲りつくすのむけはないはずだから、在来種が減つた原因はやっぱり……と普通に考えてそういう結論になるのだが、そのあたり生態系と共存しているはずの琵琶湖の漁業者はどのようにコントロールしてるのか。いずれにしても外来魚が本当に減るのかどうか大いに気になるのである。

ところが残念なことに、琵琶湖で釣りをしない限りバスが増えるか減ってるかの主観的なチェックさえ不可能。その点がバスアングラーにとつて問題ではある。ならば外来魚が増えるか減ってるかを誰が調べるのか。駆除する側の県や漁業者に雇われた研究者が調べた結果がはたして信頼できるのか。減ってるにしろ増えるにしろ、現在値がわからないものをどうやって評価するのか。在来種への影響は？ 魚以外の生物への影響は？ 今まで、ほとんど何のデータもなかったものをこれからどうやって評価していくのか。そのために十分な研究者はいるのか。予算は組まれているのか。その予算が無駄になる心配はないのか。そういうことをきちんとせずに、とにかく外来魚の駆除だというのは、票のため、お金のため、利権のため、名声のため、自己満足のためと言われても仕方がない。そのことにメディアが気付き始めたから、恐喝未遂事件の報道が外来魚や助成金の問題につながっていくのではないだろうか。

それにしてもし解せないのは、なぜ今このときに恐喝未遂容疑で逮捕なのかということである。素直に考えれば、証拠が固まつたから逮捕に踏み切つたということなのだが、3月の世界水フォーラム、4月からのリリース禁止条例施行を控え、あまりにも影響が大き過ぎることとは誰にも目にも明らか。それでも、なぜ、今、このタイミングで逮捕しなければならなかったのか。次に、その理由を推測してみよう。

一番妥当な理由として考えられるのは、それだけ重大な事件だということだ。今回の恐喝未遂だけでなく、ほかにもたくさん余罪がありそうだから、逮捕できるときに逮捕して、それからじっくりと追求しよう。そのためには、影響があるのは致し方ない。司直がこのように判断したとすれば、よほどの重大事件だということになる。組織ぐるみ、あるいは行政や議会に追求が及ぶこともありうる。関係者のあわてふためきぶり、そのことをわかつているからか。

逮捕が今より遅かつたらどうなるか。県漁連会長は世界水フォーラムの委員でもあり、もし同フォーラムの直前や会期中に逮捕されるようなことがあつたら、環境先進県として世界に売り出そうとしている滋賀県としては恥さらしなところ。取り返しの付かない事態になる。だから影響の大きさだけなら今逮捕された方がましという考え方もできる。リリース禁止条例はすでに決まつたことだし、今まで通り反対意見は無視して力づくで押し切ればそれでなんとかなる。それよりも世界水フォーラムを乗り切るためには、今逮捕してもらつた方がよかつた。フォーラムの委員は県漁連の副会長か誰かに入れかえて、あとは何事もなかったような顔をしてやり過ごす所存か。

もっと奥深い理由も考えられる。例えば選挙とリリース禁止条例から知事と行政が漁連に借りを作つた。それに乘じて漁連からの要求はエスカレートする一方で歯止めが利かなくなる。例えば外来魚駆除の予算を来年度は10億円付けるだとか。その一方で、いわれの

ない補償金を脅し取るうとした一件だけでなく、駆除のために捕獲した魚の水増しなどが、助成金の不正流用だとか黒い噂が絶えない。このままでは足下をすくわれるとたまりかねたのが知事であったか、はたまた行政であったかは知る由もないが、言うことを聞かすにはどうすればよいかと考えた末、きつーい一撃をお見舞いすることにした。もとより知事や行政が止めることのできない逮捕であれば、令状の執行に異存はない。できるだけ派手にやれということになる。あと残る問題は、いつ逮捕するかという一点だ。

とまあ、フィクションを並べてみたところで見えてきたのは、次のようなことである。もちろん恐喝未遂なんてことがないに越したことはない。しかしながら、それが事実であって、いずれ逮捕されるのであれば、はたしてどのタイミングがよいか。外来魚のリリース禁止が決まって情勢がほぼ落ち着き、4月からの条例施行に向けての準備も始まった。しかも世界水フォーラムまではまだ1カ月余りある。まわりから見れば最悪のタイミングのようだが、もし逮捕を何カ月も先延ばしできないのであれば、今というタイミングはダメージを小さくするためにはベストに近いのではないだろうか。

最後は23日の京都新聞に掲載された滋賀県警捜査員のコメントを紹介しておこう。

Kyoto Shinbun News 1月23日「4年前に『不当要求対策室』を設置した捜査二課の捜査員は『対策室の目的は当初、漁業関係者からの不当な補償要求対策だった。事件になるのは水山の一角』と話す。」

事件の根がどれほど深く、またどれほど広範囲に及んでいるかはわからないが、その説明はすでに司直の手にゆだねられた。できることなら、その内容を解明して、琵琶湖にかかった黒い霧を吹き払ってほしいと思う。しかしながら、そう簡単な事件でないことも事実だ。また、バスアングラーが望むような結果にはおいそれとならないとも思う。この事件がきっかけになって、外来魚のリリース禁止が撤回されるなんてこともまずないだろう。ならば何を望むか。事実を知りたいということだ。事実を知った結果、こんな人達のために琵琶湖でバスを釣ることができなくなったのかと悔しさが一段と募ることになるかもしれない。著者はそれでもかまわないと思う。それでも事実を知りたい。誰のためでもなく、自分達の将来のために。

事件の功罪・その2

Bassingかわら版Editorial (03/01/27)

堅田漁港を出た漁船が琵琶湖大橋をくぐり抜けて北湖へ向かう。堅田漁港を出て北東へ変針すると、左手側から大きくエリが張り出している。その先端をかわしてから、大橋が一番高くなった航路の所をくぐろうとすると、進路が大きく蛇行することになる。それを嫌ったのであろう。たいていの漁船はエリの先端をかわしてから、そのまま真っ直ぐ走って大橋の橋脚の間隔が狭くなった所をスピードを落とす素振りもなく通り抜けて行く。

琵琶湖の漁船の多くは、船体が細長くて舳先が鋭く尖った独特の形状をしている。その細長い船体にどんな強力なエンジンを積んでるのか、けっこうなスピードが出る。それが琵琶湖大橋の狭くて見通しの悪い橋脚の間を走り抜けて行くから、近くで見ていると迫力満点。その走りっぷりから察するに、琵琶湖は自分達のもの、釣りをしているボートは漁船をよけ

るのが当然と思っているじゃないだろうか。あるいは、わざと釣りをしている近くを走っているんじゃないかと思ってしまうこともある。こちらがバスボートならそれでも大して恐い感じはないが、カートのパーや小さなローボートなんかだと怖さは何倍にもなる。

バスの駆除とバス釣りの全面禁止を提唱した本の著者が以前、琵琶湖の漁の風景を描写した中に、高速のバスボートが漁船の近くを走り抜けていくシーンがあったが、バス釣りのボートの近くを精悍な白い船体の漁船が高速で走り抜けていくというのは見たことがない。しかしながら、事実は両方のことが琵琶湖で起こっていて、片方はメディアに取り上げられて、片方は取り上げられないのである。

琵琶湖でバスフィッシングをしている最中に近くを走っていく漁船を見て、「すごいスピードやけど、いったいどんなエンジン積んでるねん」と話し合ったことが何度でもある。コアコの沖すくい網の漁船は、コアコの群れを見付けると猛然と黒煙の排気を撒き散らしながらダッシュして行って、船先に装備したブルドーザーのショベルのような網でガバツと群れごとすくってしまつ。そのダッシュはド迫力もので、ビルフィッシュトーナメントのスタート時に轟音とともにダッシュするクルーザーに負けないぐらいだ。

この漁船の大きさと搭載するエンジンの最大馬力を規制したのが、滋賀県の漁業調整規則第49条である。

滋賀県漁業調整規則第49条

次の各号に掲げる漁業には、上甲板下の船体主要部の容積が 10m^3 立方メートルを超える漁船（昭和57年7月18日以前に建造された漁船にあつては、旧簡易船舶積量測定規

程（昭和7年通信省令第12号）の規定に基づく総トン数が5トンを超える漁船）を使用してはならない。

- (1) 小型機船底びき網漁業
 - (2) あゆ沖すくい網漁業
 - (3) えびたつべ漁業
- 2 前項各号に掲げる漁業には、馬力数が 25kW キロワットを超える漁船を使用してはならない。

（平3規則31・全改、平14規則11・一部改正）

馬力数 25kW キロワットというのがちよつとややこしくて、旧漁船法の規定によると 35 馬力、通常の馬力数にすると何倍にもなって数字に幅が出てくるのだが、控えめにおよそ 150 馬力と置いていただければよい。 150 馬力というとバスボートではぜんぜんめずらしくないエンジンサイズだが、漁船の大きさから考えて、しかもディーゼルエンジンであることも考慮すると、それであるスピードをどうやったら出せるのか、すくい網のダッシュができるのか不思議だった。

その謎が一挙に解けたのであるから、頭の中のわだかまりが一つ取れた思いのバスアングラーは少なくともはず。1月24日にいっせいに報道されたところによると、琵琶湖で操業している約 600 隻の漁船のうち約 3 割が漁業調整規則違反の高馬力エンジンを搭載し、それをあつことかエンジンプレートなどを付けかえるなどしてこまかしていたという。先日の滋賀県漁業協同組合連合会長らによる恐喝未遂事件に続くスキヤンダルである。（ページB.B.C.

ホット情報2003/01/26に關連情報掲載)

こんな事件が続くと、監督する立場の県農政水産部や水産課はたいへんだ。その結果、わけのわからないコメントを連発することになる。そんなのに突っ込みを入れるのは品のないことだと思っただが、ついついやらずにはいられない。

asahi.com 滋賀1月25日朝刊「県では、高馬力のエンジンを搭載する背景について、漁獲量には関係ないものの、漁場に早く到着することや悪天時に安全に帰ることなどがあるとみている。」

高馬力エンジンを載せても漁獲量に関係がないんだったら、漁業調整規則による制限はいったい何なんだ。現状に合わない規則をかえるべき、あるいはそんな規則を守る必要はないと言いたいのか。「漁獲量には関係ない」っていうのは「琵琶湖の漁業は生態系と共存している」という県の立場から出てくる発言なんだろうけど、ことここに至っては嘘バレバレでお笑いでしかない。このコピーを考えた人には、ブラックユーモア大賞を贈呈したい。

今、面白い言いかえを思い付いた。「琵琶湖の漁連会長は土建業者と共存している」というのはどうだろう。オリジナルに習い、食う、食われるの關係をつまぐ皮肉っていいんじゃないかと、これは自画自賛。

Kyoto Shinbun News 1月24日「県水産課によると(中略)馬力を大きくするのは、漁獲を増やすのと荒天時に対応するためとみている。」

県は「漁獲量には関係ない」と言い、水産課は「漁獲を増やす」ためと言っ。あんたら、どっちやねん!! あるいは、同じコメントが掲載紙の違いで180度反対の意味になってしま

ったのか。ここは言った言わないの議論ではなく、なぜこういうコメントが出てくるのかをよく検証した方がよさそう。

普通に考えれば、大きなエンジンを積めば漁獲量も上がるはず。朝日新聞の記事が間違いないのなら、「漁獲量には関係ない」と言った人物は嘘つきだということになる。外来魚のリリース禁止に関しても幾多の虚言、妄言の類を目にしているが、なかなかこんなこと抜け抜けと言えるものではない。このコメントの主って、「琵琶湖の漁業は生態系と共存している」っていうコピーを考えたの同一人物じゃないのか。「漁獲量には関係ない」っていう発言と「琵琶湖の漁業は生態系と共存している」というコピーは、國松政権下の滋賀県行政においては見事に共存している。

asahi.com 滋賀1月25日朝刊「県水産課は『担当職員3人で不正を見抜くのは困難だが、検査に問題はあった』と言っ。29日からの立ち入り検査で違法が分かれば、漁船の登録を抹消し、1カ月間の操業停止処分にする。」

担当職員3人で漁業調整規則違反の不正を見抜くのは困難だけど、公金支出に対する「チェック体勢は万全」(8ページ)っていつのは、どう考えても矛盾してると思っただけど、舌の根も湯かないうちによく言っわ。あの県知事あって、この職員ありか。

そんな職員が29日から立ち入り検査するって!? 大丈夫か。これで公金支出の不正チェックなんかますますできなくなるのは間違いない。4月1日ももうすぐだぞ。漁船の立ち入り検査と公金の不正支出のチェック、4月1日からのリリース禁止条例の施行は、水産課職員の仕事としてはたして共存できるのか。

asahi.com 滋賀1月25日「県は『県漁連を通じた調査に対し、工学上の馬力と勘違いし、違法だと自ら申告した漁業者もかなりいるのではないか』とみている。」

例えばヤマハ発動機のエンジンカタログを見ると、漁船用のエンジンであるMDシリーズの馬力数には最大出力と連続定格出力、漁船法馬力数の三つの表示がある。著者がキャブテンをしているワイルドキャット(ヤマハUE33)のエンジンは直列6気筒インタークーラーターボのMD580KUH。最大出力は260馬力(3000回転)、連続定格出力は200馬力(2850回転)、漁船法馬力数は60馬力(旧法馬力)。つまり、何を言いたいのかというと、漁船のエンジンの馬力数ってとてもややこしいのだ。

それを勘違いして申告した。例えばヤマハMD202KUHの漁船法馬力数は25馬力だから、それを載せてる漁船なら問題ないのに、最大出力の89馬力っていうのが漁業調整規則に違反してると勘違いして、県漁連の調査に対して自ら申告した。そういう漁業者がかなりいるから、実際に漁業調整規則に違反する高馬力エンジンを積んでる船はそれほど多くはないから、上の記事はそういうことを伝えているのだが、本稿の解説を読まずに記事だけ見た人は、漁業者が何をどう勘違いしているのか、それで県が何をどう見ているのか、はつきり言っただけじゃわからないのではないかと思う。

著者は上記記事の県のコメントを読んだときに、最初のうちは次のように解釈していた。最大出力で言うところの馬力数と漁船法馬力を間違えて大きなエンジンを載せてしまってる漁業者が、そのことをアメリカ合衆国初代大統領のジョージ・ワシントンみたいに自ら正直に申告したのだから偉いでしょと県が言っただけ、そういう意味にだ。ところが、それでは勘

違いの仕方が逆であって、著者が解釈した通りだと最大出力35馬力以下、漁船法馬力数で20馬力そこそこのノンターボエンジンを載せてないといけないことになってしまう。記事が間違ってるのか、あるいは著者の理解の仕方がおかしいのか、さんざん考えながらエンジンのカタログデータなども調べているうちに、記事が訴えたいのは先のようなことかと気付いた次第。それにしても舌足らずで人騒がせな記事である。なんでこんなフオロを著者がしないといけないんだ!? って、また言っってしまった。あるいは、こういうことがもしない。「ローカルメディアは地方行政と共存している」そのお互いの手抜きの一例がこの記事か。

だけど、それにしてもである。一般に最大出力を言うときの馬力数と漁船法馬力にはノンターボエンジンで2〜3倍、ターボチャージャー付きだと4〜6倍もの開きがある。それぐらいの違いがあれば値段だって何倍も違っし、大きさをだって一回りや二回りの違いではない。普通、そんなもん勘違いするか!?

Kyoto Shimbun News 1月24日「県水産課によると、昨年3月、登録申請のあった近江八幡市の新造漁船の検査をした際に、35馬力の届け出にもかかわらず、大型の90馬力のエンジンを積んでいるのを見つけた。彦根市内の造船業者が取り付けたという。これをきっかけに県内の漁業協同組合を通じて漁船を調べた結果、多くの船で偽装の疑いが強まったという。」

漁船法馬力で90馬力って言ったなら、最大出力400馬力ほどにもなる。海で使われている漁船なら40フィートクラス以上に搭載される大きなエンジンだ。それを35馬力と偽って搭載しているのを新造船検査のときに見付けた。そこでほかも調べてみたら多くの船で偽装の疑いが強まったという記事だが、ということは検査を通っていた漁船が多数あったということに

なる。

例えば50馬力の船外機と100馬力、120馬力の船外機の違いって、誰が見たってわかるはず。漁船の船舶検査は5年に1回。そのときの担当者は何も見てなかったのか。2倍、3倍の出力のエンジンが載ってるのを一目見てわからなかったとしたらド素人だ。それがわからなかった人間や組織に、公金の不正支出のチェックなんかできるわけがない。もっと正確に言うと、チェックする気なんか最初からあるわけがない。なぜそう言えるかというところ、エンジンの出力を何倍もごまかしてる船の検査を通すなんてことは、まったくやる気がなくてまともな検査なんかしてないか、あるいは検査する側も最初からグルでないとできっこないからだ。その証明が次のコメント。

Kyoto Shinbun News 1月24日「同課は、これまでの検査で偽装を見抜けなかった理由について、『エンジンには馬力数を示す機関銘板（表示板）が取り付けられているが、これまでの検査は、届け出の馬力数と表示の照合を行うだけだった』と説明している。」

「届け出の馬力数と表示の照合」はしていた。つまり、検査時にエンジンは見ていた。にもかかわらず、一目見ればわかるはずのエンジンの大きさの違いに気付かず、数字の照合をしただけで検査に合格させていた。ということは、わざと見て見ないふりしてたとしか考えられない。あるいは、もしかしたら本当に見てもわからなかったのかもしれないが、それならなぜそんな人間に検査させたのか。いずれにしても行政の責任は重大である。水産課もそのことをよくわかっているから、漁業者に遠慮して押っ取り刀で1月29日から立ち入り検査を始めるなんて言っているのか。

これを公金の不正支出のチェックに置きかえると、支出した公金が振り込み口座からきれいさっぱりなくなっただけは確かめたが、それ以外のチェックは何もしていない、あるいは帳簿上の金額の足し算引き算が合ってるかどうかは確かめたが、何かあやしいところがあるかどうかは確認しようとしなかったということになる。「水産課は漁業者と共存している」か？

池原ダムは自動車専用道路なのか

Bassingかわら版Editorial (2003/02/01)

琵琶湖で1月29日から漁船の立ち入り検査が始まった。おりから猛烈な寒波がやって来て肌を刺すような強風が吹き荒れる中、まことにご苦労さんなことである。ほかに4月1日からの外来魚のリリース禁止条例施行や3月の駆除釣り大会の準備などで忙しい上に、漁業補償金の恐喝未遂事件もあるというのに……。おっと、失礼。恐喝未遂は県とは関係なかった。ついつい一緒にしたにしまつのは、根っ子のところは一緒にした事件ではないかと強く感じてるからで、それ以外に何か言いたいことがあるわけではない。

前々回、前回と2回続けて、琵琶湖で起きた事件報道の新聞記事を取り上げて深く突っ込んで解説してみた。ここしばらく、琵琶湖で起きた事件を伝える新聞やテレビニュースの報道はけっこうな量が流れたが、それをさらっと流して見ただけではわからない事件の複雑なありさまが少しでもご理解いただけたかと思う。

事件が起こると、いろんな所でいろんな発表が行われ、またいろんな人が意見を述べる。

その中には公式のものもあれば、非公式や個人的なものもある。その中に疑わしい点があれば裏付けを取り、どれが正しくて、どれが正しくないか、その意見はどういう意図で発せられたものかを慎重に吟味した上で、確認できた事実やなるべくたくさんの証拠と照らし合わせて事件の真相に迫っていく。このようにしてできあがっていくのが新聞記事やテレビニュースなのだが、それが事件のすべてを伝えているとは限らない。いや、むしろ、一面だけしか伝えてないことの方が多いのだ。

ということとは、欠落した部分が少なからずあって、それが事件の本質に大して関係なければ問題ないのだが、大いに関係あった場合はどうなるか。新聞社やテレビ局はたいいていの場合、自分達のミスを認めたがらないから、そういう重大な事実を見逃していたような場合でも、後になって「重大な事実発見!!」みたいな伝えられ方をすることが多い。

あるいは、次のようなこともある。事件に関わる多くの人達にはどうでもよいようなことであっても、一部の人達にとつて極めて重大な事実というのがあつた。それを見逃しているか、見逃しているわけではないけど、記事やニュースにするときに、そういう事実はなかなか取り上げられない。証拠や証言が十分でないために、ここまではニュースにできるけど、ここから先は伏せておこうというようなこともある。もちろん紙面スペースや放送時間の関係もあるなら、何から何まで出せるわけではない。

今回、琵琶湖で起きた事件に関しては、バスアングララーがもっと詳しく知りたいと思う情報が十分伝えられなかったのではないだろうか。中央からするとローカルにしか過ぎない琵琶湖で起きた事件であつたために、初期の取材体制が十分でなかったのが、記事やニュースすればどのようなことになるかをシミュレーションしてみた次第である。

ある出来事の真相に迫るには、その出来事に関わる何から何まですべて知っているのが理想であることは間違いない。しかしながら、世の中にはいろんな制約があつて、なかなかそうはいかない。すべてを調べつくそうと思つたら膨大な時間がかかるから、それで記事がものになったとしても、世に出たときにすでに事件が終わつてるかもしれない。小説やノンフィクションを書くならそれでもよいが、新聞記事やテレビニュースのための時間は限られているのである。もちろん予算の問題もある。あるいは間違いない事実であつても、商業誌や民放ではスポンサーの関係で出せないこともある。そういう制約の中で作られているのが記事やニュースなのだということを今回の一件で多少なりともご理解いただけたのではないかと思う。

さて、釣りの世界にもメディアはある。雑誌や新聞、テレビ番組、今ではインターネットで流れる情報も多い。それらが伝える情報にどれくらい信頼が置けるかと言つと、はっきり言つて釣りの世界ではメジャーなメディアでさえ先に書いたような制約が世間一般のメディアよりもはるかに多いのが現状だ。どれくらい制約が多いかという事例は、そのうちご紹介

できる機会があると思うので今回は置いておこう。それよりも問題なのは、そういう制約によって起こる不十分な取材や情報収集、その情報を処理する者の知識や経験の不足、さらにその足を引く張る様々な圧力などが重なった結果、アングラーにどんな不利益がもたらされるかということだ。

その一例をあげよう。奈良県の池原、七色ダムで岸釣りやフローターが禁止になるかもしれないという話がある。著者はその話をしばらく前から聞いていたので、どこかのメディアががんばって取材して、ちゃんと伝えてくれないかと思っていた。ところがその期待に反し、どこも取り上げないどころか、そういう規制をしようとする側に都合のよい方向にばかり話が伝えられてしまっているではないか。

岸釣りやフローターの禁止というのは、池原、七色ダムにおけるボート運用の安全管理を組織立ってきっちりやっていこうという動きの中から出てきた話だ。地元のレンタルボート店、昇降業者、ダムとダム湖の管理主体である電源開発株式会社、村、消防、警察、漁協、森林組合などが一体になってボート運用のルールを作ろうということで話し合いが始まったのだが、いつの間にかそのルールの中に岸釣りやフローターの禁止が盛り込まれる方向で話が進むようになった。事実上すでに決まっているのかもしれないが、まだそれが公表されたとは聞いていない。

なにしろ、こういう現場の当事者だけで行われる話し合いというのは、なかなか情報が出てこなくて、出てきたときには反対しようと思っても手遅れというケースが多い。琵琶湖八木のリリース禁止条例のときと同じだ。まあ、公式には情報が出てきてないわけだから、岸釣りとフローターの禁止はどちらか一方だけでもルールから外される可能性がなくなはないが、今のところそういう話も聞いてないので、やはり禁止されてしまう確率がきわめて高いと思う。

元々、岸釣り禁止というのは事故防止の観点から電源開発が望んでいたことだ。警察や消防は事故がなくなればそれに越したことはない。あえて岸釣りアングラーの立場から反対するとすれば、アングラーと接点のあるボート関係の業者なのだが、まわりに押し切られたのが最初から賛成だったのか、ごく一部を除いて強い反対はなかったようだ。

フローターの禁止は、岸釣りの禁止よりもっと降って湧いたように話が出てきた。電源開発は最初、フローターのことを知らなかった。それがいつの間にか禁止を口にするようになった。どこかの時点で誰かに教え込まれたかのようにだ。関係団体からの反対は特になく、ボート関係の業者も一部が抵抗したのを除いて大部分はフローターの禁止に賛成。その理由は、ボートとフローターの間で事故が起こったときは間違いなくボートの側が加害者になるから、それに巻き込まれるのを恐れていることだ。

ということだ。池原、七色ダムはこのままでは岸釣りもフローターも禁止の自動車専用道路になってしまふ恐れがある。そのことを決める話し合いに、ここでもまた他の多くの釣り場と同じでアングラーの姿はない。アングラーの代表のような顔をしている人物の姿があるだけである。その人物の影を見ると、長くて太い立派な尻尾が生えてるとか……。日本のバスフィッシングを代表するメディアが、そんな人物の調子こいた話を聞いただけで、アングラーにとつて重大な事実を見逃している記事を書いていいのかわか！

これって、きつと後になって、「重大な事実発見!!」っていう記事が続くんだろうね。気付いたときにはすでに事が終わった後で、手遅れの事後報道で体面だけは繕うなんてことにならなければよいと思うが……。その記事を載せる雑誌が、1カ月前には他のメディアの報道姿勢を問題にする記事を載せていた。この原稿を書くにあたって記事の内容確認をしていた著者が、1カ月前のその記事を見たときには背筋が凍り付くような感じがした。

なお、老婆心ながら付け加えるが、重大な事実というのは岸釣りやフローターの禁止のことだけを言っているのではない。ほかにいろいろあるもので、ぜひがんばって調べて、その結果をどんどん公表していただきたい。アングラーから集める協力金なんか、いったいどうなってるんだろうねえ。もっともらしい円グラフなんか作ったって、実際には集まったお金のうちごく一部をコイヤフナなどの放流に回してただけだから、そんなの絵に描いた餅に過ぎない。そういうことを続けてると、しまいにアングラーから疑いの目で見られるようになってしまう。それを大きな声で言われないと気付かないようでは情けない限りだが、実際のところ、すでにそれに近い状況になってしまっているのではないだろうか。

釣り関係のメディアの仕事って、ギャラは安いし、時間はないし、各方面との付き合いもあるし、琵琶湖の方でも忙しいし、いろいろと難しいんだよね。問題を徹底追求していったら、商業メディアが触れたくない事実がたくさん出てきて、そのまま表沙汰にしたら仕事にならないし、最後のところではなぜかいつもバスフィッシング関係のメディアにとっても強力な壁にぶち当たる。そこをどうかいくくって少しでもアングラーの役に立つ報道をするかが問題だ。そういう圧力に迎合するばかりで、本当にアングラーのためになる仕事を

しないから、読者の信頼を失なう結果になっている。それがバスフィッシング関係の多くのメディアが抱え込んでしまっている最大の問題点ではないのか。

2003年4月1日もう一つの大問題

Bassingかわら版Editorial (2003/02/09)

2003年4月1日から琵琶湖バスのリリース禁止と並んでも、もう一つの大問題が起こる。バスアングラーにはピンと来ないかもしれないが、釣り業界にとっては、本当はこちらの方がよほど大きな問題かもしれない。改正遊漁船業法が施行されるのである。

遊漁船業法というのは、88年に東京湾で起こった海上自衛隊の潜水艦なしおと大型遊漁船第五富士丸の衝突事故をきっかけに急きょ制定された法律で、「遊漁船業の適正化に関する法律」というのが正式の名称。遊漁船の安全運行のための様々な規則を具体的に明記している。その規則の代表的なものをあげると、遊漁船業者としての届け出と登録、損害賠償保険への加入、乗船名簿の整備、安全講習の受講などだ。

この遊漁船業法が大幅に改正されて今年4月1日から施行されるのだが、その中で特に問題となる点が三つある。まず第一の問題点は、遊漁船の届け出と登録を大幅に制度変更したこと。改正前は都道府県知事に届け出た上で、保険に加入するなど安全基準を満たした遊漁船は全国遊漁船業協会に登録してマル適マークを受けるシステムになっていた。それが改正後は、保険加入などの条件を満たした上で都道府県知事の登録を受けなければならなくなる。つまり、全国遊漁船業協会やマル適マークは、改正遊漁船業法の施行後は有名無実で何の意

味もない存在になってしまつたのである。

第二点として、知事に登録した遊漁船業者は新たに遊漁船業務主任者を選任し、案内する漁場での採捕規制を利用客に周知しなければならない。つまり、都道府県の漁業調整規則などで定められた違反漁法をしてはいけないと、遊漁船や磯釣りのお客さんに言わないといけなくなるということだ。

そして第三点として、違反者に対する罰則規定が強化された。無登録営業は3年以下の懲役もしくは300万円以下の罰金またはこれらの併科、事業停止命令違反は1年以下の懲役もしくは150万円以下の罰金またはこれらの併科など、かなりの厳罰になった。

なぜこのような改正が行われたかと言つと、一番問題だったのは、ちゃんと法律を守つて保険に入り、乗船名簿を整備し、安全講習を受けるなどの条件を満たし、全国遊漁船業協会に登録してた遊漁船が、都道府県によつて差はあるが、全体の10%台から20%台と著しく低い割合だったからだ。これでは、せっかく作った法律の実効がさっぱり上がらない。そこで厳罰主義の改正により、強制的に登録させよつたことになったわけだが、なぜそのようなことになってしまったのかを次に解説しよう。

改正前の法律通り全国遊漁船業協会に登録してマル適マークを受けるには、まず最低条件として保険に加入しなければならない。この保険に入らうと思つたら、漁業協同組合に入るか、釣船業共同組合に入らないといけない。マル適マークを受けるための全国遊漁船業協会への登録は、漁協が釣船業共同組合を通して申請することになっている。つまり、改正前の法律に従つて遊漁船登録をしてマル適マークを受けた場合、保険と申請を担当するのが漁協

と釣船業共同組合、登録とマル適マークの発行、安全講習を担当するのが全国遊漁船業協会という役割分担になってたわけだ。それ以外に、全国遊漁船業協会が認める団体に加入し、その団体を通して申請できるという規定にはあるが、こんな方法で登録してるケースはまずないので無視してよからう。

この登録には手間暇がかかるしお金もかかる。さらには、遊漁船を開業したいと思つても、誰でも登録できるものではない。様々な参入障壁を設けて敷居の高いものにしてている。そうすることで遊漁船登録に関する権益を全国遊漁船業協会と釣船業共同組合、漁協が独占してたわけだ。その結果、どういつことになったかと言つと、面倒でお金のかかる登録なんかしたくないという業者が続出し、登録率が異常に低いという事態を招いてしまった。そんな実効の上がない利権団体に過ぎない全国遊漁船業協会にはこの際退場してもらつて、都道府県知事の登録に切りかえたのが改正遊漁船業法の重要ポイントの一つである。この改正に伴つて、釣船業共同組合は各県単位で再編成されつつある。登録が都道府県レベルで行われるのだから、これは当然のことだ。

次に、もう一つの大きなポイントである遊漁船業務主任者の選任と採捕規制の周知について。これは、船長が1人で営業してる普通の遊漁船を例にあげると、遊漁船業務主任者は船長が兼ねるのが普通だ。ちゃんと安全講習を受ければ法律上はそれでよいのだが、問題は採捕規制の周知の部分である。ここで各都道府県の漁業調整規則が注目を集めることになる。海釣りの盛んな多くの府県では非漁民(遊漁者)のマキエサ釣りを漁業調整規則で禁止しているから、船長はお客さんにマキエサ釣りをしてはいけないと指導しなくてはならなくなる

のだ。近畿では和歌山、兵庫、京都がこの項目に該当するのだが、遊漁船業者にとつてこれは死活問題である。船釣りの大部分はマキエサを使う。磯釣りも、防波堤釣りも、イカダ釣りも多くはマキエサを使っている。漁業調整規則では禁止されていても、今までずっとマキエサを使って釣ってきたのだ。マキエサを使うから簡単に魚が釣れるのであり、大勢のお客さんが釣りに来てくれるのは、そういう誰でもよく釣れる簡単な釣りができるからだ。今さらそれを禁止だというのは、遊漁船や渡船を廃業しろと言ってるに等しい。従わなければ懲役か罰金だから、大問題になるのは当然である。

今回の改正遊漁船業法の施行にあたり、このマキエサ釣り禁止の規則を見なおすようにという通達が水産庁から出された。戦後間もなく決められたまま改正されず、誰も守らなかつた法律を今になって改正しようとするのは、いかにも泥縄と言っほかないが、これには事情があると思う。漁業調整規則というのは漁業調整委員会が審議し制定している。そのメンバーは漁業者の代表や学識経験者などが中心で、アングラーの代表も含まれているが圧倒的少数ではない。学識経験者はもとより漁業者などの利権の代弁者ではない。そのような委員会で遊漁者のマキエサ釣りを認めるといふような改正は、よほどの事情がない限り不可能。そこで、改正遊漁船業法が施行されて、このままでは遊漁船業者がたいへん困るといふ事情を逆手に取って見なおしをさせることにした。遊漁船業者には漁師も多く含まれているから、漁業者も一概に反対できない。そういう状況で、以前からの懸案であった遊漁者のマキエサ釣りを認めさせる方向に持つていこうとではいか。実はこれは水産庁が最初から用意してたシナリオ通りで、改正遊漁船業法が施行されたらマキエサ釣りができなくなつて

遊漁船業者が困るといふ騒ぎも、水産庁は最初から計画に織り込みずみだったのではないかと著者は思ったのが、はたして真相はどうなのであろうか。いずれにしても、そんな法律を今までほつたらかしにしてたといふ漁業調整規則の問題点があぶり出されたといふことは明記しておくなくてはならないだろう。

今までなら、遊漁船業法という法律はあつても、適当にごまかしてやってればよかつた。それが改正後は、無登録で営業しているのが見付かつたら3年以下の懲役もしくは300万円以下の罰金なんてことになる。嫌でも登録しないとけないとなると、例えば漁師のついでに年間に何回かお客さんに乗せて釣りに出た漁船などは、わざわざお金使つて登録したつて、それに見合うだけの収入はないから、これからは遊漁船はやめて漁に専念しようといふことになる。そういう船がけつこう多いので、休日には別船を手配してお客さんをさばっていた船宿などは、営業に支障が出るのが考えられる。

海釣りだけではない。琵琶湖や霞ヶ浦、北浦のバスフィッシングガイドも遊漁船業法が指定する遊漁船に該当する。水産庁の指導により各都道府県がホームページなどに掲載しているガイドラインによると、遊漁船とは海面と指定された湖沼で、船舶により利用客を漁場に案内し釣りなどの方法で利用客に水産動植物を採捕させる事業であり、いわゆる釣船、磯渡し、潮干狩り渡し、いかだ渡し、カセ釣りのほか、最近流行しているシーバス釣りチャーターボート、観光定置網、指定された湖沼でのバスフィッシングガイド等が該当するとなつている。指定された湖沼とはサロマ湖、風運湖、温根沼、厚岸湖、霞ヶ浦、北浦及び外浪逆浦、加茂湖、浜名湖、琵琶湖、中海の10水域。わざわざシーバス釣りのチャーターボートやバス

フィッシングガイドという文言を入れている点は、水産庁がこういう釣りを明らかに意識しているという意味で注目する必要があるだろう。

滋賀県の広報誌である滋賀ブラスワン1月号に、「遊漁船業の適正化に関する法律」改正説明会開催のご案内」というタイトルで次のような記事が載っていた。

「平成15年4月1日から、施行される『遊漁船業の適正化に関する法律』の説明会を下記の日程で開催します。開催日時 2月20日(木)午前9時30分～11時30分 場所 県庁大津合同庁舎7B会議室 お申込・お問合せは下記まで 水産課 TEL077-528-3872 FAX528-4885」

バスフィッシングのガイドを対象に遊漁船業法の説明会を2月20日に開催するというお知らせである。遊漁船業法に従う限り、4月1日以降、琵琶湖と霞ヶ浦、北浦、外浪逆浦では遊漁船登録をしないとガイドができない。もし登録しないでガイドしてるのが見付かったら、3年以下の懲役もしくは300万円以下の罰金である。おそらくこれで、アルバイトでやってる自称ガイドなどは一掃されるだろう。あるいは、遊漁船登録がいない池原、七色ダムなどへいつせいに移動するなんてことが起こるかもしれない。

著者が以前、「フィッシングガイドはレジャーでバスを釣ってるわけではなく、その点を突破口にすればリリースが認められる可能性がある」と書いたのは、この改正遊漁船業法の施行を踏まえてのことである。フィッシングガイドが遊漁船業法で指定された遊漁船業なのであれば、業としてバスを釣ってるガイドはレジャーではないから、「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」の「琵琶湖におけるレジャー活動として魚類を採捕する者

は、ブルーギル、オオクチバスその他の規則で定める魚類を採捕したときは、これを琵琶湖に放流してはならない。」という規定の対象にはならない。つまり、ちゃんと法律に従って遊漁船登録したフィッシングガイドは、バスをリリースしてもよいのである。

それならトーナメントは全員が遊漁船登録してトーナメントに参加してはどうか。琵琶湖で釣ったバスをリリースしたい人は、全員が遊漁船登録すればよい。どうしても岸から釣りたければボートを岸に着けて釣るか、あるいはボートでどこかの岸に渡って釣ればよい。磯釣りの渡船は遊漁船なのだから、渡船の船長がお客さんを案内して岸に上がって釣りをすれば、これはフィッシングガイドだという理屈が成り立つはずである。

それにしても気になるのは、滋賀県釣船業共同組合がどうなるのかということだ。釣船業共同組合というのは、元々漁協と手を取り合って遊漁船の保険を独占的に取り仕切る利権団体だったはず。それが滋賀県ではどうなるかというのは、ちょっとした見ものである。

それと、もう一点。遊漁船業法はカセ釣りも遊漁船業だと定めている。ということは、レンタルボートを引っ張って行ってモロコ釣りのポイントまで案内するのも当然、遊漁船業だということになる。あれは、どう考えてもカセ釣りの一種だと思っただが、それならバスフィッシングのレンタルボートを引っ張って行ってポイントまで案内するのも、やはり遊漁船業になるのか。そのあたり、フィッシングガイドの件と合わせて滋賀県水産課はどう判断するのだろうか。

恒例のフィッシングショーOSAKAが2月14、16日に開催された。

大阪でフィッシングショーが始まったのは1954年のこと。当時は大阪釣り用品見本市という名称で、難波にあった大阪府立体育館で開催されていた。小学生だった著者が釣りの好きの叔父に連れられて初めて見に行ったのが第2回で、それから今年までたった1回欠かしただけである。つまり、第1回と、途中でもう1回抜けただけで、残りの38回はすべて見に行っているから、相応のフィッシングショーおたくだと言われても否定はしない。正直な話、著者はフィッシングショーが大好きである。ただし、その見方は大いにかわったが、それについては後述しよう。

最初の頃のフィッシングショーは大人も子供も入場無料。カタログや試供品もただでもらえたから、袋一杯集めて重いめをして家へ持って帰って、後でゆっくり目を通すのが子供にとってはたいへんな楽しみだった。それが会場を港区朝潮橋の国際見本市会場に移して数回たった頃から入場料を取るようになり、カタログも大きなメーカーは足並みをそろえるように有料になった。さらに会場を南港のインテックス大阪に移し、名称をフィッシングショーOSAKAにかえて今日に至っている。

名称をかえた理由は、最初の頃は業者相手の見本市の色合いが濃かったのが、回を重ねるにつれて一般の入場者がどんどん増え、途中からはそちらの方がメインになってしまった。そんな実状に合わせて、しかも入場料まで取って一般消費者を相手に見せるショーをやった

のだからと、年に1回のフィッシングタックルショーにふさわしい今風の名前にかえたわけだ。

もう一つのフィッシングショーの大きな転機は、80年台末から90年台にかけてのバスフィッシングブームとともにやってきた。それ以前はメーカーのインストラクターやモニターとして普通に参加してた有名バスプロが、ファンの急造とともに大勢からサインや写真撮影を求められるようになり、セミナーに駆り出されて大群衆を前に話をするようになったのだ。

その頃、著者は下野正希プロに依頼して、1日に何人サインしたか数えてもらったことがある。その答は確か200人台だったと記憶しているが、それでもずいぶんな人数だと思っただ。ところが、その翌年に同じ依頼をしたときには、とても数えられなくなってしまっていた。これが、まだブームが爆発する前の話で、それから数年のうちに空前のバスフィッシングブームとともにフィッシングショーの入場者が爆発的に増え、有名バスプロは一躍時の人になった。

その後の経緯は皆さんもよくご存じの通りである。朝早くから会場前に長い行列ができ、駐車場へ入るのは大渋滞。開場とともに人気メーカーのブース目指してファンが駆けだし、カタログ売り場は人波が途切れず、ブース内は身動きが取れないほどになり、通路さえ入てあふれかえった。有名バスプロは契約各社のセミナーやサイン会などに追われまくった。この時点でフィッシングタックルショーは、本当の意味でのフィッシングショーにかわったのだ。

フィッシングショーOSAKAは今回が第40回。その記念として小中学生が入場無料になっ

た。ところが、それにもかかわらず今年の会場には子供の姿がとても少なかった。ちょっと前なら場内をグルーブで駆け回っていた中学生や高校生の姿がうんと少なくなっていたのである。これはバスフィッシングブームの退潮とともに新規に釣りを始める子供が激減しているからのようで、入場者の年齢がそのまま全体に押し上がっているように見えたのは皮肉なことだ。

それともう一つの変化は、サインや写真撮影を求めて回るようなファン層が減ったことだ。特定メーカーの帽子やジャケットを身に着けてる人も、つい1、2年前にくらべて激減している。こういう人達が来なくなったのが、あるいは会場へは来ていても同じことをしなくなっただけなのかはわからないが、あきらかにフィッシングショーに来ていてる人に変化が見て取れる。その意味では、若年層の減少とともに、フィッシングショーが新たな転機にさしかかっているのかもしれない。

そんなフィッシングショーを40年近くに渡って見続けてきた著者は、最初の頃は一般のファンとして見るだけの立場だった。それが釣り関係の出版社に入ってからは取材する立場になり、一時はメーカーにも関わり、数年間はサインや写真撮影を求められたりもした。今は取材半分、一般の見学者半分の立場に戻り、去年と今年はずと業者日を避けて一般公開の土日に行くようにした。その理由は、ショーに展示される物を見るよりも、ショーを見に来てる人や、そんな人達に見られてるブリスやメーカーの人達の様子を見てる方が、よほど面白いからである。

取材者にとって、フィッシングショーというのは、ネタの宝庫である。いろんな人に会えるし、いろんなことを見ることが出来る。そんなショーの業者日だけ見て帰って、一般のファンがやってくる土日に見えない取材者の気が知れない。これって、誰にでもわかる室の山が目の前にあるのに、気付かないで素通りしてるようなものだ。

例えば、アユ釣りの事情に詳しい人物に聞いた話。アユ釣りのために放流した琵琶湖産のコアユが冷水病で大量死する現象があちこちの川で起こっている。しかもそれが何年も続いたものだから、これは放置できない各河川漁協の死活問題だということだ。放流を人工産や海産などの小アユに切りかえるようになった。その結果、琵琶湖産のコアユが以前ほど売れなくなったというのだ。琵琶湖の漁業者が外来魚の駆除に力を入れるようになり、そのため補助金が年を追うごとに増額されてるのは、コアユが売れなくなったのをカバーするためではないのか。その話を聞いて、何人かのアユ釣り師に聞いたら、ほぼ全員が同じ意見だった。

著者は何年も前から、川にバスが増えた大きな原因は琵琶湖のコアユの放流にまじって広がったのではないかと思っていた。しかしながら、それを声を大にして言ったらアユ釣りに影響が出るのではないかと考えずにはいらなかった。ところが今回のフィッシングショーで意見を求めた多くのアユ釣り師は、「心配するほどの影響はない。ほとんどん言っべきだ」と明言した。中には、「琵琶湖のコアユを放流してくれない方が私達もうれしい」とまで言うアユ釣り師もいた。こういう意見をその場で聞いて回るのに、フィッシングショーというのは願ってもない場なのである。

例えばメーカー同士の力関係について、ファンの反応を見ようと思えば一般公開日に見る

しかない。朝一番からやって来る人達はどのメーカーのブースに集まるか。ゆっくりとお昼頃にやってくる人達はどうか。終わり近くまで帰らずに残ってる人はどのブースに多いか。その人達の服装は？ 年齢層は？ そういうことを見ようと思ったら、1日に何回も会場を回らないといけない。だから著者は、1日中、マグロのようにショー会場を周回し続けるのである。

そんな大勢のアングララーが集まるフィッシングショーであるにも関わらず、発表される新製品は雑誌などですでに紹介されているから、見るべきものは何も無いなどわかった風なことを言う。そういう声がメディア関係者に多いのは残念な限りである。そう言えば、今年のフィッシングショーOSAKAの一般公開日は、例年以上にメディア関係者の姿が少なかった。彼らの視野にあるのは有名アングララーや人気メーカーだけで、一般アングララーの立ち居振る舞いに目を向けるなんてことは、きつくないんだろっね。

琵琶湖の遊漁船登録の行方

Bassingかわら版Editorial(2003/02/27)

琵琶湖バスのリリース禁止まで残すところあと1ヵ月。2002年6月に滋賀県が「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」の要綱案を発表してからこれまで、リリース禁止をどう受け止めるかについて様々な提案や問題提起が行われてきた。Bassingかわら版でも様々な情報や提案をお伝えしてきたが、このまま考え続けていても何も解決しないことはあきらかである。これからは、実際にリリース禁止を迎えるにあたって何らかのアクションを起こさないといけない。そこで今回から数回に渡って、琵琶湖とその周辺ですでに始まっているバスアングララーの動きについてお伝えする。

滋賀県が琵琶湖のバスフィッシングガイドを対象に2月20日に開催した遊漁船登録に関する説明会には、約200人もバスアングララーが集まった。その中には、実際にガイドをやっているアングララーもいれば、そうではないアングララーもいた。最大の注目点は、遊漁船登録をした場合にリリース禁止がどうなるかということだ。

その結論は、遊漁船登録したアングララーは国から正式に認められた業としてバスを釣っているのであるから、レジャーとして釣り上げた外来魚のリリースを禁止する条例の適用対象にはならない。ガイド以外のときも、プライベートやトーナメント、取材などの目的に関わらず、この解釈は有効である。ガイドのための練習や下調べと、それ以外の釣りを線引きして区別することは不可能だから、遊漁船登録さえしてしまえば琵琶湖で釣ったバスをリリースするのは常時合法となる。ついでに言うと、2サイクルエンジンの規制対象にもならない。これはバスアングララーが遊漁船業法を勝手に解釈して言ってるのではない。滋賀県の遊漁船登録を担当する水産課の解釈であり、説明会のおきに出された質問に対して、このような説明があった。

説明会の内容に従い、すでに遊漁船登録に動きだしたアングララーが多数いる。登録の手順は、まず改正前の旧遊漁船業法に従った遊漁船業の届け出を滋賀県知事に対して行い、4月1日に改正遊漁船業法が施行されてから正式の登録を行うことになる。正式の登録には6ヵ月の猶予期間があって、3月末までに届け出をすませた遊漁船については、その間に正式登

録をすませればよい。登録に必要なのは、乗客1人あたり300万円以上の補償金額を満たす保険への加入や10日間毎日5時間の実務経験の証明、安全講習の受講証明などだが、これらを実際にどうすればよいか水産課に問い合わせても、今のところ明確な回答は得られない。おそらく現時点では水産課もどう対応したのか決めかねているのである。なぜなら、滋賀県の水産課にそんなことやった経験なんかあるわけないし、頼みの水産庁からの指示もまだ来てないからである。

そこで、とりあえず旧遊漁船業法の規定に従った届け出をさせておいて、実際の登録手続きについてはこれから準備を整えていこうとしているところではないのか。だから、正式登録について何をどうすればよいのかと突っ込んだ質問しても何も答が返ってこない。水産課にすれば、決まっていけないものは答えようがないというのが本当のところであろう。その決まっていけないことに先回りして、実務経験や安全講習のからみで、早くも利権を確保しようという動きが垣間見える。琵琶湖の船舶関係の利権に強い人物や業者の動きには、十分な注意をしないといけないようだ。

法解釈上は、遊漁船登録さえしていればガイド業は赤字でもかまわない。誰もお客さんが来てくれなくてもガイドはガイド。世の中に赤字の会社はいくらでもあるのと同じである。その点を出て、ガイド以外のいろんな目的で遊漁船登録をしようとするバスアングラーが大勢出てきそう。中には、いっそのことマリーナの会員全員が遊漁船登録してはどうか、そのためにまず小人数で遊漁船登録して様子を見てはどうかという意見もある。すでに数軒のマリーナや数人のガイドが正式の手続きを開始していて、それが進めば、どんな書類をそろえてどんな手続きが必要かということが明らかになってくるだろう。遊漁船登録に興味があるアングラーの間で、そのような情報交換が始まったところである。

ここで一つ大きな問題が浮上してくる。同じ琵琶湖でバスフィッシングをしているのに、遊漁船登録したアングラーがバスをリリースするのは合法、そうでないアングラーのリリースは違法行為になるという矛盾だ。これは言い換えれば、ガイドに使える大きなボートを所有していて、しかも遊漁船登録に必要な費用や手間暇をかけられるアングラーならリリースしてもよくて、2サイクルエンジンの使用もオーケー。その登録にあたって、本当にフィッシングガイドをしようかどうかは問題にならない。リリース禁止条例と改正遊漁船業法の二つが、4月1日から同時に施行される結果、同じバスアングラーの中で差別が生じてしまうのである。

なぜこのようなことになるかと言うと、琵琶湖でレジャー活動する者だけを対象に外来魚のリリースや2サイクルエンジンの使用などを禁止しようとする条例が、元々矛盾だらけだからだ。琵琶湖の水質保全のために2サイクルエンジンを規制しようというのなら、なぜ漁業者もその対象に含めないのか。漁業者は別の条例で猶予期間を10年ぐらいに長くしてもよい。本当に環境のためを考えるなら、そうするのがバランスというものである。滋賀県は、そんなごく簡単に疑問にさえ有効な回答を示せないでいる。バスのリリース禁止にしても同様だ。そういう矛盾だらけの条例の最大の問題点が、たまたま同じ日に改正遊漁船業法が施行されることによって明らかになってしまったのである。

そんな条例を制定した滋賀県知事が、遊漁船業法では登録を受け付ける立場にあるといっ

これほど皮肉なことめつたにない。まさか知事本人が遊漁船登録証の判子を押すようなこととはないと思うのだが、できることなら皆でその場へ出かけて行って、目の前で判子を押し、直々証書を手渡してもらいたいくらいである。

これは法解釈の問題だから、遊漁船登録したアングラーが4月1日以降に琵琶湖で釣ったバスをリリースするのはあくまで合法である。その点に関しては文句の付けようがない。例えば岸釣りアングラーが、それは不公平でおかしいと思うのなら、そんなことを決めた条例が間違っているのだから、国民の法の下での平等を定めた日本国憲法第14条に違反しているとして違憲訴訟を起こし条例の差し止めを請求するのがもつとも効果的かもしれない。遊漁船登録したアングラーがガイド以外のようにリリースするのは条例違反だと思えば、水産課の解釈が間違っていると訴えることもできるだろう。そのような訴訟で勝つか、あるいは世論に訴えて条例を改正させない限り不公平は解消しない。たとえどんな大きな矛盾を含んだ法律や条例であっても、日本という法治国家においては、それがいったん成立して施行されてしまえば、不公平が生じようとしてしまうと決まりは決まりである。これを近來まれに見る悪法と言わないで、何を悪法と言つたろうか。

一般のアングラーにも何か同様の有効な突破口はないかと思うのだが、大勢のアングラーと一緒に知恵を出し合っても、なかなか簡単には見付からない。当分の間か、あるいは永久にはわからないが、琵琶湖のバスアングラーの間で不公平な状態が続くのは間違いないなさそうである。ならば、この状況をどう捉えるかだが、たとえ不公平ではあっても、合法的にリリースを許された一部のバスアングラーが琵琶湖に残るのなら、それは琵琶湖のバス

フィッシングを残していくために有効だと著者は考える。琵琶湖のバスフィッシングがすべて駆除につながるか、あるいはリリースを望むアングラーが誰も釣りをしないよりは、たとえ法律の不備の結果であったとしても、リリースできるアングラーが少しでも残った方がよほどましではないだろうか。

その先どうなるかは、遊漁船登録してリリースが許されることになったアングラーの態度にかかっている。今までガイドしてきた実績のあるアングラーが法律に従い遊漁船登録して、お客さんに乗せて釣りをしているときに釣ったバスをリリースすることも納得できないアングラーはそれほど多くないだろう。それ以外の、自分が釣りをするのが目的で遊漁船登録するアングラーをどう評価するかだが、それが合法的であれば文句を言う筋合いのことではない。あくまで一般のアングラーがどう評価するかだ。

遊漁船登録のおかげで琵琶湖で釣ったバスを自分はリリースできるようになったから、それでよしとして、あとのことはどうでもよいというのは言語道断である。もし有名アングラーがそのような態度に出たら、これは一般のアングラーに対する裏切り行為に等しい。琵琶湖のバスアングラーの代表として遊漁船登録し、琵琶湖のバスをリリースしながら釣り続けることができているのは誰のおかげか。バスをリリースできなくなった大勢の一般アングラーのおかげにほかならない。そのことが理解できているのであれば、琵琶湖でバスフィッシングを続けると同時に、一般のアングラーのリリースもいつかは認められるように、一般のアングラー以上の努力をし続けることが必須である。それをしないのであれば、これはアングラーが少なくなつた琵琶湖の美しいところだけ持っていて、ほかのアングラーのこと

は何も考えてないということの証明だから、それなりの対処をするしかない」と著者は思っただが、はたして琵琶湖のバスアングラーにそんな評価能力や実行能力があるのだろうか。

琵琶湖のバスターナメントはどうなるか

Bassingかわら版Editorial(2003/02/28)

とあるマリーナのスタッフが、4月1日以降もバスフィッシングを続けるにあたって、マリーナの棧橋に隣接してイケスを設置し、お客さんが釣ってきたバスやブルーギルを一時キープすることを考えた。その処理についてリリース禁止条例の運用を担当する滋賀県環境政策課に問い合わせたところ、現時点では回収などの個別の要望には応じられないと言っ。それなら、集まった外来魚の処分はどうすればよいかとの重ねての質問に対し、「おまかせします」との返事だった。これは実際にそういう問い合わせをした人物から聞いた話だ。

「おまかせします」とは、いかにもお役人的な回答である。県としては、そういう要望に對する準備はまだできてないし、対応するつもりもないとも決まっていけない。だから、こうしてくださいと具体的に答えることができない。どうなるか何の見通しもないものを「対応が決まるまでしばらくお待ちください」とは、担当者としても言えない。しばらく待たされたあげく、結局は何もしてくれなかったということになる可能性も大いにあるからだ。

ならば問い合わせを受けた担当者としては、「おまかせします」と言っしかかない。イケスからすくい取った魚を琵琶湖の各所に設置された回収ボックスの所までわざわざ持っ行って入れるか、どこかに穴を掘っ埋めるか、闇にまぎれて捨てるか、あるいは誰にも見られ

ないようにイケスから逃がすか、ここまですると条例違反だが、とにかく処置は「おまかせします」なのである。バスアングラーが釣った外来魚を県に引き取っほしいと言ってるのに、今なおこの対応では、県は外来魚の駆除をどこまで本気でやる気があるのかと思っつまう。漁業者に何億円もの駆除予算を与える口実作りのために、琵琶湖の環境保全という錦の御旗を振りかざし、その一環としてリリース禁止を決めたと言われても仕方がない。

そういうバスアングラーの側からの要望や提案は体よく無視する一方で、メディアや一般市民向けのパフォーマンス的な事業計画は着々と進んでいるようである。県は4月から外来魚の回収と処理を障害者共同作業所に委託することを決め、それと同時に、外来魚を県の外郭団体が発行する商品券と引き換える実験事業も始める計画だそう。

外来魚を処理するのは、社会福祉法人が琵琶湖東岸に新設する共同作業所で、障害者を5人ほど雇用し、県が設置する回収ボックスやイケスから回収した外来魚を堆肥化し、当面は作業所周辺の農地で肥料として活用する。外来魚と商品券の交換は、レンタルポト店や漁協など数力所に引き換え所を設置し、県の外郭団体に業務委託して発行された引換券と交換する。外来魚1kgを200円相当の引換券1枚と交換し、県内約20力所の協力店などで利用できるようにする。引き換え所に持ち込まれた外来魚の回収は、共同作業所に依頼する予定だ。

こうなってくると、琵琶湖の外来魚駆除がますます公共事業の様相を帯びてきた。「社会福祉法人が新設する共同作業所」「県の外郭団体に業務委託」などなど、いよいよ正体が見えてきたという感じだ。これっ、天下り法人を新設したり、予算を増やすという話ではないのか。こういう話はトントン拍子で進むのに、マリーナがイケスを作って外来魚を集める

から、それを引き取りに来てほしいと要望しても、木で鼻をくくったような返事しか帰ってこない。それが滋賀県がやってくるこの実態である。

共同作業所に雇用された5人が外来魚を堆肥化し、作業所周辺の農地で肥料として活用したところで、年間何100トンと漁獲される外来魚のうちどれぐらいが処理できるのか。手間暇かけて発行した引換券を外來魚と交換するなんて無駄なこととするよりも、規模の大きなトーナメントではバスを駆除するかわりに一般のアングラーのリリースは認めるといって琵琶湖バス釣り人協議会の提案を受け入れた方がよほどよかったのではないかと。今さらこんな茶番が出てくるとは、滋賀県もよほど知恵がなく困っておられるらしい。とりあえず反対意見をかわすためにメディア向け、一般市民向けに何かしらないといけないうい図がまる見えで、笑い話にもならないとはこのことである。

マリーナがイクスを作って外来魚をキープしようというのは、それでなんとかバスフィッシングを続けられないか、そのマリーナで開催しているプライベートトーナメントを続けられないかと思案してのことである。魚の処分をどうするかはさておき、なんとかしてバスフィッシングを続けよう、トーナメントを続けようと考えたときに、今まで通り釣れるだけ釣るといやり方は改めるにしても、最低限釣ってしまったバスやブルーギルは条例に従う限りリリースできない。それなら持ち帰ってイクスにキープし、それをなんとかできる方法はないかということで滋賀県に問い合わせた。その結果は、今のところ県では何の対応もできないという返事で、県に処理してもらおうという選択肢はなくなった。いつかは対応してくれるようになるかもしれないし、そのための準備はすでに始まっているかもしれないのだが、

今は県に何かを期待するのは無理なようである。

それならどうするか。キープした魚をどこか別の場所へ運んで放流するという方法が考えられる。それには、外来魚の県外への持ち出し許可が必要。その許可を出すのは滋賀県知事。もちろん、受け入れ側が外来魚を放流しても問題ない水域であることが必須条件である。例えばバスの漁業権が認められた山梨県の河口湖や山中湖、神奈川県芦ノ湖への放流を前提に琵琶湖で釣ったバスを運び出すことは、滋賀県知事の持ち出し許可を得れば可能だ。受け入れ先がブルーギルも引き取ってくれるかどうかはわからない。バスは移して、ブルーギルは処分することになるかもしれない。

この方法の最大の問題点として、外来魚駆除派の権化である県知事が持ち出し許可なんか絶対に出さないだろうと、ほんの少し前まで言われていた。そんな情勢が、リリース禁止に對するバスアングラーからの猛烈な反対や、各種団体による訴えかけによってかわりつつあるのではないかという見方がある。ある事情通は、リリース禁止で大きな影響を受ける業者が多数存在することは知事や行政もよくわかっているから、条件さえ整えば許可は出るのでないかと言つ。それなら、バスの運び出しを前提とすれば、トーナメントの開催が可能になる。プライベートの釣りも、マリーナやレンタルポイント店のイクスに魚をキープしておいて、まとまった時点で運び出す方法を取ることができる。やってみる価値はあるし、十分現実的な方法かもしれないのである。

ただし、これは琵琶湖という水域だけを考えれば、バスを駆除するのも、ほかへ運び出すのも、バスが減るといふ結果だけを見れば同じことである。いずれ琵琶湖でバスの放流が認

められたときに、持ち出した先から帰してもらおうというような約束事があれば、アングラーの気持ちの問題として殺したか殺さなかったかというだけで、琵琶湖のバスが減ることにわりはない。その点をどうクリアするかが問題だ。

リリース禁止の琵琶湖でバスフィッシングを残すためにやっていると言うのであれば、例えばトーナメントなら、今までと同じ頻度、同じ人数で大々的に開催して、釣れるだけ釣つてくるというのはいかがなものだろうか。リリースを禁止された一般アングラーの心情として、とても認められることではないと思う。これでは単にお金儲けや利権のためであって、バスの運び出しは体面を繕うためのまやかしと言われても仕方がない。

ならば、どんな方法を取るのが適切か。例えば、釣つたバスをリリースしても2割は死ぬというような確かなデータがあるのなら、その範囲内で今までの2割だけしか釣らないようにトーナメントの規模や回数、ルールなどを調整し、そのことをちゃんと説明してデータも公表する。または、釣ってくるバスの量が8割に相当するトーナメントをやめて、残り2割に相当するトップアングラーのトーナメントだけを残す。そんなやり方なら、一般のアングラーからも、ある程度は認められるのではなからうか。

そういう工夫を何もしないで、ただ今まで通りトーナメントを開催する。そのときに釣れたバスは、持ち出すか駆除するというのでは、あまりにも知恵がなさ過ぎる。リリース禁止後のトーナメント開催に関して様々な情報が流れ始めているが、リリース禁止の実状に合わせたトーナメントルールなど最小限のことが発表されているに過ぎない。開催者はとりあえずリリース禁止以降しばらくの間は様子を見て、実際に開催するときにどんな方法を取るの

がよいか見極めようとしているところだろう。持ち出し許可のことなど、まだ蓋を開けてみないとわからない要素が多いのだから、あわてて決める必要はない。注意深く様子を見続けながら、できるだけ多くの知恵を結集することが必要である。

参加者全員がフィッシングガイドとして遊漁船登録すれば、リリースも合法だから、何の問題もなくトーナメントを開催することができる。これも一つの方法だろう。しかしながら、リリースを禁止された一般アングラーが置き去りにされるといふ問題はあいかわらず残る。その点のケアを絶対に欠かしてはいけない。

知事の持ち出し許可を得てどこかへバスを運び出すトーナメントを開催するときは、同時に岸釣りアングラーを集めたトーナメントも行い、その人達が釣ってきたバスも責任を持って運び出す。それで釣りをするチャンスができれば、一般のアングラーも喜ぶかもしれない、それぐらいのことはしないと主催者の見識が問われるというもの。

著者はすでにリリース禁止の琵琶湖ではバスフィッシングをしないことを表明しているが、同様の考えのアングラーでも、こういうチャンスがあれば、たまには琵琶湖で釣りをしてもよいのではないだろうか。今までの10回が1回になるかもしれないし、それぐらいのバスをほかへ運び出しても大勢に影響はなからう。これぐらいのことは許されるべきだし、そういう釣りを続けながらリリース禁止に反対する何らかの働きかけを続けていく方が、現実的に長続きもして効果上がるのではないだろうか。

そのための受け皿をトーナメントの場に設けるぐらいのことは、決して実現不可能でも難しいことでもないはず。有力なトーナメント団体がリリースを禁止の琵琶湖でトーナメント

を開催するのなら、一般アングラーのためにそれぐらいの努力はしてほしい。組織力や実行力のあるトーナメント団体が率先してそういうことをすれば、小規模トーナメントやプライベートトーナメントの開催をどうしようかというときの参考になるし、主催者を力付けることもできるはずである。

そのようにしてプラス方向の連鎖が広がっていけばよいのだが、実際のところは小さなトーナメントの主催者がまじめに考えているのに、大きなトーナメントの方は成り行きまかせだったりする。現実の物事は、なかなか理想通りには進まない。団体がでかくなればなるほど、上からの指示がないと何も動かないし、反応も鈍い。いったん決まったことが、ある日突然何かの都合でかわったりもする。そんな環境が長い間続くと、自然のうちに保身が蔓延するのは釣りの世界も大企業やお役所も同じである。バスアングラーの中にも往々にして「おまかせします」という態度が見られるのは、そういう長い物には巻かれる主義が連綿と続いてきた影響が色濃いのではないかと著者は思っている。

全釣り協をお忘れじゃありませんか

Bassingかわら版Editorial (2003/03/04)

全日本釣り団体協議会(全釣り協 <http://www.zentuf-joflor.jp/>)という社団法人がある。バスアングラーの皆さんの記憶に新しいところでは、バスの完全駆除に反対し日本国内にバス釣りができるフィールドを残してほしいという100万人署名運動を日本釣振興会と協力して展開し、農林水産省に提出した。それ以外は、どこで何をしているのかさっぱりわからな

いというのが、一般のアングラーの皆さんのごく普通の認識ではなからうか。

全釣り協のホームページには次のような記述がある。

(社)全日本釣り団体協議会とは

農林水産省を主務官庁として昭和46年に発足。釣り人と行政をつなぐ唯一の窓口。釣りの健全な発展と漁場利用問題の解決、漁業関係法規の周知、自然環境の保全、水産資源の保護などを目的とする。行政と釣り人を結ぶ唯一の公式団体として全国的に釣り場清掃活動、稚魚放流活動、漁場利用知識普及講習会、青少年釣り大会などの活動を実施。あわせて、釣り人の地位向上、環境を守りながら釣りを楽しむための釣りの未来への方向付けなど、さまざまなムーブメントを展開している。

つまり、全国に「100万人いると言われる釣り人にかわって行政にご意見申しあげる唯一の代表組織として、農林水産省を主務官庁として発足したのが全釣り協だ。その名称の「釣り団体協議会」という部分が意味するところは、いろんな釣り団体の代表者が集まって協議し、そこでまとまったものを全釣り人の意見とするということである。

なぜこういう組織が設けられたかという点、ちょうどその発足当時、全国のあちこちの海域で漁業者と遊漁者のトラブルが起こっていた。具体例をあげると、漁師の船が集まって釣りをしてる所へ釣り人のマイボートが割り込んでいってトラブルを起こす、磯釣りをしている目の前で漁船が違法の網入れをするなどの事例が各地で頻発した。そこで水産庁が漁業調整規則を現状に合わせて整備する一方、話し合いの場を設けて漁業者と釣り人の調整を図るうとしたのだが、釣り人を代表して意見を述べる組織というのが全国どこを探してもなか

った。磯釣り、投げ釣り、船釣り、防波堤釣りなどのジャンル別に、それぞれの釣りクラブが組織化されて全国レベルの連盟ができていたが、その連盟が例えば磯釣りなら全日本磯釣り連盟と全関西磯釣り連盟、九州磯釣り連盟は別組織でつながりが無い。他の釣りジャンルにも、それぞれいくつかの連盟があり、その連盟同士の間係が複雑で、仲がよかったり悪かったりする。どこどことは言わないが、犬猿の仲の連盟もあつたりなんかして、それが大同団結して協議機関を作り代表者を送り出すというのは並大抵の技ではなかった。

一方の水産庁にも背に腹はかえられない事情があつた。各都道府県に漁業調整委員会を設けて漁業調整規則を審議するのに、釣り人の代表者を入れないといけない。その代表者をどこから連れてくるのかというときに、すべての釣り人が形の上だけでも一つにまとまって代表者を送り出してくれる組織が必要だつたのである。でないと、どこの連盟から代表者を引っ張ってきて、他の連盟に所属する釣りクラブの会員からすれば、そんな人は自分達の代表じゃないということになってしまう。そこで水産庁が、各釣り組織の代表者などと慎重な協議を重ねた末、各都道府県の釣り団体協議会を組織し、それを束ねて全釣り協とした。ホームページの説明に「釣り人と行政をつなぐ唯一の窓口」とあるのは、そんな組織がいくつもあつたらややこしいからで、まさにその唯一の釣り人の代表組織として存在するのが全釣り協なのである。

そのような設立の主旨から、全釣り協は漁業調整委員会に釣り人代表を出すための組織という役割が大きな部分を占める。それともう一つ、1988年から水産庁の助成金を得て始まつた釣りインストラクター制度というのがあつて、その養成と資格試験の実施、登録、各地で

行われるイベントへの派遣という事業を運営している。この釣りインストラクター制度が始まつたことで、釣り人の代表組織としての全釣り協の性格が大きくかわつたという問題があるが、その点は後述しよう。ほかに釣り場環境の保全や魚類資源保護、釣りに関する様々な啓蒙活動なども行っているが、これらは他の団体でもやっていることであり、全釣り協の活動としては補助的、派生的なものと考えられる。

つまり、全釣り協の大きな役割の一つが各都道府県の漁業調整委員会に釣り人代表を出すことで、滋賀県なら滋賀県釣り団体協議会が代表者を出しているはずなのだが、ここに大きな問題がある。滋賀釣り協はあるにはあるが、実際には活動停止状態で、漁業調整委員会に釣り人代表を出すという釣り協としてもっとも中心的な役割を果たせていないのである。

例えば、琵琶湖の漁船の多くが漁業調整規則に違反する高馬力エンジンを搭載していた事件に関して、現在の漁業調整規則は琵琶湖の漁の現状に合っていないという発言が一部にあつた。それなら漁業調整規則を改定して今より大きなエンジンを載せられるようにしようということになつたときに、漁業調整委員会に釣り人代表が出ていないと、その意見はまったく反映されないことになってしまう。ただでさえ漁業調整委員会というのは漁業者やその利権の代弁者でしかない学識経験者などが多数を占めていて、釣り人の代表というのは圧倒的少数でしかない。たとえそうだとしても、有効な役割を果たすことができる釣り人代表が出席し、一般の釣り人の意見を踏まえた上での議論が行われるのでなければ、そんな委員会なんかあつてもなくても同じこと。何でもかんでも漁業者の思い通りに決められることになつてしまふ。

そんな現状を受けて、滋賀釣り協を再整備しようという動きが出てきた。ところがである。滋賀県で圧倒的多数を占めるのはバスアングラーであるはずなのだが、その代表者は誰かとなつたときに、バスアングラーの組織というのが本当に何もなくて代表者を選びようがないのである。

釣り協というのは、海なし県の滋賀であっても、磯釣りや投げ釣り、防波堤釣りなどのクラブや連盟があれば、その代表者が出てきてかまわない。もちろん、ヘラブナ釣りやコイ釣り、溪流、アユ釣りなども同様だ。全国規模のバスターナメント団体なら、まず滋賀支部が琵琶湖支部を設けて、その代表者を出席させることになる。岸釣りアングラーの組織の代表者も参加できる。マリーナの会員がクラブを作つて、そのクラブがいくつか集まって連盟を組織し、代表者を送り込んでよい。ゴミ拾いのグループがいくつか集まって、その代表者が参加するのも歓迎されるだろう。そのような様々な釣り団体の代表者が集まり、釣り場で起こるいろんな問題について協議する場が釣り協なのである。

滋賀県が「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」の要綱案を作成したときの審議委員会に出していたのは、日本釣振興会滋賀県支部の役員であった。日釣振は釣り関係の業者の団体であり、その代表者は釣り人の代表ではない。本来なら滋賀釣り協が代表者を送り込むべきなのだが、先に説明した通り滋賀釣り協にはその能力がなかった。さらに問題なのは、もし滋賀釣り協の代表者が審議会に出席していたとしても、バスアングラーの代表が参加していない滋賀釣り協の代表では、リリース禁止の撤回につながるような何らかの有効な議論ができたとはとても思えないことだ。つまり、リリース禁止条例の要綱案が審議さ

れ、公表されてから県議会でも決成立に至るプロセスの中で、琵琶湖のバスアングラーや滋賀県の釣り人の代表が意見を述べる機会は無実上なかった。なぜなら、それにふさわしい機構や組織が存在しなかったからである。その結果、バスアングラーの意見を県側に伝えるには、加藤誠司プロが実行委員長を務める琵琶湖バス釣り人協議会が日釣振の下部組織であるという威を借りて意見書を提出するというような曲がりくねった方法を取る以外になかったのである。

アングラーの政治意識が盛り上がっている今というタイミングは、滋賀釣り協の再整備には悪くないかもしれない。リリース禁止条例が成立し、間もなく施行されようとしている今となつては、すでに手遅れの感はないが、こういうときでなければできなかったのも事実であろう。ただし、こういう組織をまとめ上げるには時間がかかる。バスアングラーの皆さんも、今からでも遅くはない。友人や知り合いとバスフィッシングチームや釣りクラブを作り、仲のよいチームやクラブが集まって連盟を結成して、代表者を釣り協に送り込んでほしい。そうしないと、皆さんの意見はいつまでたっても政治や行政に反映されないうままだ。数だけ集めて何の効果もなかった署名なんかよりも、こつちの方がよほど有効な手段であることを申し添えておこう。

その全釣り協が、滋賀釣り協の例に見られるように、このところ元気がない。だから日釣振に頼らないといけないようなことになるのだが、これには釣りインストラクター制度の導入が強く影響していると著者は思っている。釣りインストラクター制度というのは、詳しくは全釣り協のホームページなどをしらべたいのだが、まあ平たく言えば、農林水産

省から助成金をもらい、個人や釣り組織からは受講料、受験料、登録料などを集めて釣りインストラクターを養成、登録し、各イベントに派遣する事業だ。事業と言うからには、お金の動きと仕事が発生することになる。

全釣り協というのは、元々は各釣り連盟や釣りクラブの偉いさんが、好きな釣りと会員のためにボランティアで会議に出席したり、いろんなイベントに出かけて行って啓蒙活動を行ったりしていた。費用の多くは持ち出しで、損はあっても得はないという仕事である。そこへ釣りインストラクター制度が導入されたことで、一部で仕事や報酬が発生してくる。それを目当てに参加してくる人もいれば、利権や縄張り争いも起こる。それでも好きな釣りのために、しんどいばかりの持ち出し仕事でもがんばってる人達が今でもいるが、若いアングラーのクラブ離れやトーナメント指向などもあって、釣りクラブそのものが弱体化している現状の中では、釣り協の力が弱くなるのは当然のことである。

その結果、滋賀釣り協のようなことになるのだが、ひるがえってバスフィッシングの世界のことを考えると、最初からそんな組織もなければ、好きなバスフィッシングのために我が身を粉にして活動してるアングラーもほとんどいないではないか。そこにあるのはコマースヤリズムや名誉欲、利権など、好きなバスフィッシングのためやバスアングラーのために活動するのは~~80~~度正反対の人間の欲望そのものである。そんな欲望からめとられたバスフィッシングの世界から民主的手続きの元に代表者を出すことができるかどうか。滋賀釣り協の再構築というのは、日本のバスフィッシングの将来を占う上でとても意味のある一つの壮大な実験である。もし成功すれば、バスフィッシングの将来に少しは希望が持てるという

ものではないだろうか。

皇居のお濠と琵琶湖の関係

Bassingかわら版Editorial (2003/03/07)

どれだけ急進的な自然保護主義者でも、皇居のお濠には手を出せないだろうと言われている。天陛下のお膝元である皇居のお濠の水を抜いて大々的に外来魚を駆除することが何を意味するか。皇太子時代にアメリカからブルーギルをお持ち帰りになられた現天皇が、そのことにお気付きになったら、どうお思いになるか。あえて、それを承知の上でやるのであれば、よほどの覚悟であらう。

江戸時代からの環境を伝える皇居のお濠には、その象徴的な意味もあって、人の手により様々な魚が移植されてきた。その中には元々濠になかった魚も多く、公式に移植された数種類の外来魚も含まれている。濠という存在自体が江戸城を守るために造成された人工的な水域であり、そこに様々な人為的影響が加わった結果として現在の環境や生物相ができあがっているのである。

そんな水域のことを書くのに、著者は自然環境というような言葉は使いたくないから、「江戸時代からの環境を伝える皇居のお濠」とした。2月17日のasahi.comの記事に出ていた「江戸時代の自然が残るお濠」という類の表現には抵抗を覚えてしまうのである。江戸時代に人間が造ったお濠の自然って、いったいどういう自然なのか。拙稿の途中で出てくる先生が「琵琶湖を40年前の環境に戻す」と言うのと同類のうさん臭さをそこに感じるのは、一人

著者だけではなからう。つまり、すでに人間がいる場所で、人間が評価する自然については、様々なあり方の可能性が問われるべきで、唯一不変の理想的な自然環境なんてあり得ないということである。

牛ヶ淵という皇居のお濠で2月17日から3月7日まで、水を抜いてのゴミ掃除と外来魚駆除が行われている。まず濠の水門を開け放って水を落とし、落とし切れない水は水中ポンプを使って汲み出して、3月3日までに半分以上が干上がった。外来魚の捕獲がピークを迎えた3日だけでバスの56cmオーバー1尾、40cm級9尾、ブルーギルの10cm級10数尾など外来魚計59尾の成果があった。モツゴ、ワカサギ、アマチチブなど来種は2231尾。60cm以上のコイやソウギョ、ハクレンなども91尾いたそうだ。ここで言う在来種とは、外来魚に対する在来種であって、牛ヶ淵に昔からいる在来種という意味ではない。皇居のお濠にワカサギがたくさんいるのがバランスの取れた自然かどうかは、意見の分かれるところではないかと思う。それと、コイにソウギョ、ハクレンなどを加えた91尾が外来魚の549尾と重なり合っているのか別集計なのか、なぜそういう区分にしたかも不明だ。

2002年度に牛ヶ淵で行われた調査により1歳以上のブルーギルの成魚が2531尾、バスが105尾いると推定され、同年度に11回行われた捕獲作業で約1200尾のブルーギルと75尾のバスを投網などを使って取った。今回はそれをさらに押し進めて徹底駆除する考えで、管理事務所の東海林克彦次長は「どこまでやれるか未知数だが最大限の努力をしたい」と話している。

この外来魚駆除作業中の牛ヶ淵を琵琶湖博物館の中井克樹主任学芸員が視察に訪れた。そこで言った言葉が「ブルーギルやブラックバスを根絶した例もある。この水域の事情はよくわからないが、環境省の事業だけに、根絶をめざした強い姿勢が望まれる」だつて。「事情はよくわからないが」と前置きした上で、それでも「環境省の事業だけに根絶をめざした強い姿勢が望まれる」と強引に持って行くのは、お得意の力エルの三段飛び的論理展開である。つまり、水域の事情なんかよくわからなくてもいいから、環境省などのお役所からのお墨付きとバックアップ体制を得て、根絶をめざした強い姿勢でやらなくてはならない。でないと、バスアングラーからの反対意見に対抗できないと、この人の言葉を力エル跳びを外してわかりやすく翻訳するとそういうことになる。これって、琵琶湖でやっていることそのままだと思うのだが、こんなことを日本の大新聞が批判も何もなしに載せていいのかが。

「事情がよくわからない」って言うのは、ブルーギルがどのようなプロセスで日本中に広がっていったかなんてことには類被りしたいから、こういう言い方をするんだろうね。つまり、必死で皇居のお濠の外来魚を駆除してる先生方も、そこへ視察にやってきて、「この水域の事情はよくわからないが……」なんて言うてる先生も、つまるところは日本の国からブルーギルを完全駆除して、そんな外来魚がいたという痕跡をきれいさっぱり消し去りたいのではないのか。バスの駆除や釣り禁止を口やかましく言うのは、一つのアライワークではないのか。

池原ダムや琵琶湖でバスが釣れ始める以前、関西では野池のバスフィッシングがブームだった。今から20年以上も前のことだ。兵庫県東播地方の東条や社、滝野、小野、加西などの野池へ著者もよく釣りに行ったものだが、その野池が数年に一度、水抜きで魚が釣れなくな

つてしまうことがあった。よく釣れてる野池の水が抜かれることがあり、「ここは当分ダメかな」と思いながらも、あきらめ切れずに半年から1年くらいたつてから釣りに行くと、意外なことに水抜き前とぜんぜんかわらないか、前よりもよく釣れるようになっていた。そんな経験が何回もある。

東播の野池は、ほとんどが水田に水を引くための貯水池で、網の目のような用水路で複雑につながっている。その水路を通過してバスが他の池から移ってくるのか、あるいは誰かが連れてくるのか。それにしても、たった1年ほどしかたたない間に、水抜き前とかわからないままに釣れ方が回復するのは恐れ入った。そんな池が何年か後には爆釣のグッドコンディションになったりするから、「たまには水抜きもしてもらわないと……」なんて話し合ったものだ。

こういう経験をし尽くした身としては、「ブルーギルやブラックバスを根絶した例もある」なんて言葉を聞くと、「どこで?」「どうやって?」「それで何年もつたの?」と思ってしまふのである。しかも、今言われている完全駆除は、限られた釣り場も残さない完全駆除であつて、そのあかつきにはバスフィッシングというものは日本の国から消えてなくなるわけだ。それを納得しないバスアングラーが大勢いるのを無視して、完全駆除なんてことができるわけないのはEditorialで何度も書いてきた通りである。

皇居のお濠でこれだけのことをやりながらも、管理事務所の次長は「どこまでやれるか未知数だが最大限の努力をしたい」と言っている。この発言には注目する必要があるだろう。「お濠の水抜きまでして大騒ぎで外来魚を駆除してくけど、本当に根絶なんかできるの?」

と思つてるんだとしたら、この人が一番冷静かもしれない。さすが環境省皇居外苑管理事務所の次長だけのことはある。名前にこれだけ漢字が続く事務所の次長だから、さぞ偉い人なんじゃないかと思つてしまふのだが、「未知数」とか「最大限の努力」とか、わざわざこんな言い方するのは、自分達が管理してるお濠でやりたい放題やってる先生方への、せめてもの抵抗か。だとしたら、この次長、そこらの三流学者よりも一枚も一枚も役者が上だ。

あるいは、琵琶湖の先生が「この水域の事情はよくわからないが……」と言つたのも、皇居のお濠を大々的に水抜きしてまで外来魚の駆除に取り組んでる先生方に対して何か言いたいことがある、その思いの表れかもしれない。つまり、外来魚駆除派にもいろいろあるということ。それぞれの事情や主義主張があつても、完全駆除で一致するのは、やっぱりブルーギルのことが頭にあるからか。

漁業調整規則違反がバレて在来魚に一度きりの春 Bassingかわら版Editorial(2003/03/08)

毎年3月から4月にかけて、琵琶湖大橋北側一帯の湖面は握りこぶし大の発泡スチロール製のウキで覆い尽くされる。このウキは、漁師が入れた刺し網に取り付けられたものだ。刺し網は下側にオモリが付けられていて、上は数mの間隔で水面まで糸を伸ばしてあり、その先にウキが取り付けられている。このウキとオモリの力で湖底から立ち上がるようになってくるわけだ。網の両端のウキは、最近では空のPETボトルが使われることが多くなった。

この刺し網の入れ方が半端じゃない。4〜5m間隔で、まるでウキが湖面を正方形の升目

に仕切るかのように縦横にきれいに並んでいる。ボートで通り抜けるのに、どこをどう通ろうか、プロペラからんでウキを切ってしまうんじゃないかと心配してしまっただ。

この時期の刺し網が狙うのは、主に漁獲量の激減が問題となっているニゴロブナやホンモロコである。春になって産卵のために浅場へ向かおうとするニゴロブナやホンモロコが、沖引き網やエリをかくぐって、やっと琵琶湖大橋の近くまでたどり着いた所で、この刺し網の大群が待ち受けている。それをすり抜けて、さらに浅い所へやってくる、アシ原の前にも刺し網があるという仕掛けで、これでどうやって産卵場所に無事たどり着けるのか、バスが食べるフナの子やモロコなど、漁師が獲り尽くした後のわずかな残りカスの中のさらにごく一部なんじゃないかと、毎年春に琵琶湖の湖面を覆い尽くす発泡スチロールのウキを見るたびに思うのである。

その刺し網が、この春は激減している。刺し網だけではない。沖引き網も沖すくい網も、何もかも激減している。ほかでもない。漁業調整規則に違反する高馬力エンジンを積んでいるのがバレて、軒並み立ち入り検査に引っかけられて漁船登録の抹消と漁業認可の取り消しをくらった結果だ。

なにしろ春の琵琶湖の刺し網漁というのは、浅い所へ産卵に来る魚を待ち伏せて獲ってるわけだから、その漁がこれからせめて1、2カ月でもなくなれば、ニゴロブナやホンモロコの資源回復にまたないチャンスだ。これが何年か続けばよいのと思うのだが、残念ながら理由が理由だけに今年限りの春となる。

それでもニゴロブナやホンモロコの資源量が回復すれば、それはいかに漁獲圧力が高いかの証になるはずだが、これまたタイミングが微妙である。なにしろリリース禁止の導入と同時であり、もし資源量が回復するというデータが得られたとしても、外来魚駆除とリリース禁止の成果にされかねない。

あるいは、こういっつがった見方もある。ニゴロブナやホンモロコの漁獲量は減る一方で、毎年何億円も投入してる外来魚駆除の成果がさっぱり見られない。このまま続けても無駄な投資ということになってしまっ。そこで一策を講じた。漁業調整規則違反の摘発をわざとニゴロブナやホンモロコの産卵期の直前にして、産卵期に漁をできなくしたのでないかというのだ。これにより、一時的にも資源量が回復すれば、一般の人は漁ができてないことなんか知らないから、外来魚駆除の成果がやっとなって来たということにできる。おまけにリリース禁止の導入とピツタリのタイミングで、そっいつデータが出てくれば万々歳に違いない。もし何の変化もなかったとしても、違反は違反だから漁業者から抗議されることは何も無いという、これは著者のアイデアではなくて、人から聞いた話だ。

大事な時期に漁ができないのは気の毒な限りだが、それも身から出た錆だとすれば致し方ない。産卵期前の摘発が県の謀略だとしたら、いよいよ漁連や漁業者に対する締め付けが本格化してきたということか。これまで通り好きにはさせないぞと、わざわざわかりやすく宣言してるような気がしないでもない。漁連や漁業者とつるんで自然保護と環境保全の錦の御旗を振りかざしリリース禁止条例を成立させた県が、バスアングラーの必死の反撃で出てきた都合の悪い事実や漁連、漁業者の不祥事から自分達の身を守るために、悪いのは漁連と漁業者で自分達の知らぬ存せぬことに無理矢理でもしてクリーンなイメージを保とうとする。

その一連の作業の結果、たくさんのごゴゴブナやホンモロコたちが無事産卵できたのだとしたら、まことに喜ばしい限りである。

これは未確認情報だが、とある漁業者から伝え聞いた話では、つい前日まで駆除派の先頭に立って活躍しておられた漁業者代表の方も、漁業調整規則違反で操業停止になってるとか。漁業調整規則違反が確定すれば犯罪歴にもなるので、ここは慎重にもう一度未確認だと言っておくが、本当かどうかはこれから先のメディアのこの人に対する扱いを見ればわかるはず。それにしても、これがもし本当だったら、そんな人物の言うことを大々的に取り上げてメディアはどう弁明するのか。あるいは弁明せず居直るのか。さぞお困りであろう。これも身から出た錆に違いないとは言え、その心中察するに余りある。心よりお悔やみ申しあげます。あくまで、もし本当だったらの話だけど……。とある漁業者から伝え聞いた話だから、間違いないとは思っただけどね。

琵琶湖の外來魚駆除は何のためか

Bassingかわら版Editorial(2003/03/18)

琵琶湖の漁船の多くが漁業調整規則に違反する高馬力エンジンを載せていた事件の摘発により、漁船登録の取り消しや漁業認可取り消しの影響でゴゴゴブナやホンモロコの産卵時期が最盛期の刺し網漁が激減していることを前回ご報告させていただきました。これでゴゴゴブナやホンモロコが無事産卵できるんだったら、とてもいいことなんじゃないかと書いたのだが、なかなか物事はそう簡単にはいかない。そう思いなおさないといけないような新事実が出て

きたのである。

琵琶湖のあちこちに大小様々の新規のエリが設置されている。これまでも新しいエリが設置されることはあったし、古いエリの位置を少しずつ新しく設置しなおすこともあったが、今年ほど一度にまとめて新しいエリがあちこちに設置されるのは記憶にない。本当にあそこにもここにもという感じで、こんなに一度に増えたのは今までなかったことだと、琵琶湖で10年以上バスフィッシングをしてきたアングラーが口をそろえてそう言うのだ。

定置網の一種であるエリを新しく設置するには、県知事の許可が必要である。小規模のものはその限りでないかもしれないが、そこその規模のものももちろん新規の許可を取って設置するのであろう。その目的は何か。今年の今の時期に急に新しくあちこちに設置されるとなれば、その主な目的は来年度から外来魚の買い上げ予算が大幅に増えることに狙いを定めて、バスやブルーギルを獲ることであろう。しかしながら、エリは魚が仕掛け網に入ったのを取り上げる待ちの漁法だから、特定の魚だけを狙って獲ることはできない。ゴゴゴブナやホンモロコなども混獲される。それが刺し網などが減った分を相殺してしまわないかどうか。物事はそう簡単にはいかないし最初に書いたのは、それを心配してのことである。

なぜ漁業者がこれほどまで熱心に外来魚を獲るのか。その理由は皆さんも推察される通り、滋賀県の予算付けにより外来魚を駆除することで安定した収入が得られるからだ。もはや琵琶湖の漁業は、その水揚げ高の数分の1を外来魚が占めているのがその実態である。食用になる魚の水揚げと、もっぱら駆除のために県が買い上げる外来魚の漁獲を一緒くたにするのもどうかと思うが、漁業者が獲った魚介類の売り上げとして考えた場合には事実上そういう

ことになる。

在来魚の漁獲は、これは県や漁業者が問題にしているのが本当であれば、ニゴロブナやホンモロコは激減したあげくの下げ止まり状態。琵琶湖の漁業の最大の柱であり生産高の約半分を占めるコアユは、冷水病などの影響で評価が下がり、引く手あまたの売り手市場だった往年の面影もない。アユ釣りのための河川放流用に売れなければ佃煮など食用の消費に回すしかなく、同じコアユでも値段は大幅安となる。イサザやシジミなどは、漁獲量としては年間数10トンあるのだが、これが市場に回ると、どこで誰が食べてるのかと思ってしまうほどかすかな存在になってしまう。琵琶湖周辺で生活してる人以外が目にする機会はめったにない。リリース禁止に屈力された滋賀県知事や県会議員とその取り巻きの人達なら、京都祇園あたりの高級料亭で接待を受けたときに食されることがあるかもしれない。あるいは京都や大阪のデパートなどの地下食品売り場に入ってる高級川魚店で探せばかるじつて見付かるか。まあ、それぐらいのものだ。

もう一つの大きな柱であるスジエビは主な消費が釣りエサ用であり、生きたまま出荷し釣具店やエサ店に流通できるルートが限られているから、誰がやっても成立する漁ではない。さらには漁獲が非常に不安定で、これほどあてにならない漁もない。ここ数年は量的になんとか横這いを維持しているが、原因不明のまま漁獲が激減したことが過去に何度もあった。釣りエサ用だから需要がシーズンに大きく左右されるにもかかわらず、スジエビは死にやすく長期間生かしておくことができない。売れないときにどれだけたくさん獲れても、生かしておくことができないから、売れ残りは佃煮にでもするしかない。反対に、獲れば獲った

だけ高値で売れるときに、思うように獲れないこともある。そういう漁である。そのような漁による琵琶湖の漁業者の総漁獲高が、2000年の滋賀県の統計によると約15億円。これがどれぐらいの規模かというと、例えば和歌山県の単独漁協の漁獲高が年間に多い所だと10億円前後になる。カツオ釣りでも有名なさみ漁協の漁獲高は、このところ漁獲が低

迷して年間10億円を割っているが、多いときは10億円を超えていた。それとほぼ同等待、琵琶湖の方が多くしても2倍ぐらいのもので、何倍も何10倍も多いということはない。琵琶湖全体の漁獲高というのは、それぐらいの規模なのである。

これをバスフィッシングによる消費とくらべると、琵琶湖へ釣りに来るバスアングラーが年間に延べ70万人で、滋賀県内で1人が200円遣ったとしたら全体で年間14億円になり、琵琶湖全体の年間の水揚げ高とほぼ同規模になる。ということは、1人3000円遣ったとして、リリース禁止になったら70%のアングラーが琵琶湖へ釣りに来ないというのが本当だったら、それで琵琶湖の漁業者が総がかりで獲ってる年間の漁獲高に匹敵する消費が消し飛んでしまうことになる。

さらに、もう一つの比較を……。中堅どころのルアーメーカーの年間売上高が数億円。大きなメーカーだと10億円を超える。そういうメーカーが滋賀県内にもある。そんなメーカーに社員が何人いるか。現在のルアーメーカーは外部生産化が進んでいて、少ない所だと10人以内でそれだけの売り上げをこなして収益を上げ、法人税を払えと言われれば喜んでかどうかはわからないが払っている会社もある。それと大してかわらない漁獲高を上げるのに、琵琶湖全体で何人の漁業者がいるか。こついつときの集計に、ろくに漁に出ないんじゃない

かと思つてしまふような色白の漁業者まで含めるのは納得できない気もするのだが、滋賀県の統計を参考にすると1000人台から10000人弱の範囲内で漸減傾向にある。

そんな漁業生産に対して、滋賀県が注ぎ込んでる税金は総漁獲高に匹敵するかそれ以上になる。こういう税金の流れには、出所がいろいろあり、いろんな名目があつて、集計がとてつちやこしいのだが、一説には総額約20億円とも言われている。さらに、県水産課の職員が20人以上。つまり、生産者数1000人台、生産高10億円台の産業に10数億円から20億円もの税金を注ぎ込み、その面倒を見るのに20人以上の県職員を配置している。それが琵琶湖の漁業の実態なのだ。

これがルアーメーカーなら、水産課職員の人数だけいけば漁業者の総漁獲高とかわらない売り上げをこなし、収益を上げて税金を払ってくれる可能性もある。ルアーメーカーだけではない、釣具店もレンタルポイント店もマリナーも、この不況の中、必死でがんばつて一般市民に良質の娯楽を与え、消費機会を生み出している。滋賀県はリリース禁止でそんな産業の足を思い切り引つ張る一方、漁連と漁業者には湯水のごとく税金を注ぎ込み続けている。その中には国からの税金も含まれている。同じ滋賀県内で働いているのに、その扱いには天と地の違いがあるから、某ルアーメーカーの社長が「やつてられないよ」と言つても無理ないのである。

滋賀県がなぜそこまでして琵琶湖の漁業を支え続けるかという点、そうでもしないと漁業という産業を維持できないからだ。つまり、魚介類を獲つて売るだけでは琵琶湖の漁業は全体としてやつていけず、放つておいたら早晩のうちに破綻してしまふから、そうさせないためにいろんな名目のお金を注ぎ込み続けているのである。これはニワトリが先かタマゴが先かという話になるが、琵琶湖総合開発に代表される大小さまざまな開発に伴い、琵琶湖の漁連や漁協、漁業者に補償金が支払われてきた。さらには、漁業振興などの名目で多くの助成金が支出されている。先細りが続く漁獲をそれでなんとか補いつつうちに、そういうお金がないともはややつていけなくなつてしまつたのが現在の琵琶湖の漁業の実態なのである。これは漁獲高を漁業者の人数で割り算していただければ、それではたしてやつていけるものかどうか、およそ推測していただけたらと思う。

琵琶湖だけではない。海の沿岸漁業の多くも同様のジレンマに陥っている点でかわりがない。後継者不足という大問題とともに、漁業という産業全体が大きな悩みを抱え込んでしまつている。その結果、皆さんがスーパーから1尾800円で買つてきて晩御飯のおかずにしてるアジの塩焼きが、それに投入されてる税金まで計算したら実は500円にも1000円にもついてもたなどというところでもないことになつてしまつてるのである。

琵琶湖では1980年代に湖岸の開発がほぼ完了し、それまでは次から次へと繰り出されてきた漁業補償金の規模が大幅に縮小した。漁獲の先細り傾向はあいかわらずのところへ、それに追い討ちをかけるように河川放流用のコアユが以前のように思い通りに売れなくなつた。ならば、何を持ってそれを補うか。そこで目を付けられたのが外来魚である。県が外来魚駆除名目の予算を組んでバスやブルーギルを買ひ上げることになれば、それまでは網に入つても捨てるしかなかった邪魔者が立派な漁獲対象になつてお金にかわる。こういうことを考えた人物は、なかなかのアイデアマンだと思つ。

ただし、在来魚保護のための駆除と言うからには、それなりの成果を上げなければならぬ。つまり、駆除によって外来魚が減り、その結果、在来魚が増えて二ゴロブナやホンモロコの漁獲量が増えた、あるいは資源量調査で在来魚が増えているというようなデータが出てこないと整合性が取れないのだが、いっこうにそういう数字は見えてこない。それでもなお、外来魚駆除の予算は投入し続けたいといけない。その理由は先に書いた通りである。

それならどうするか。いつまでたっても外来魚駆除の成果が上がらないのはバスアングラーがリリースしてるからに違いないということにして、とにかくリリースを禁止する。その結果が出てくるまでには何年もかかるから、とりあえずそれまでは時間かせぎができるし、その騒ぎにまぎれて外来魚駆除の成果が上がってるかどうか、在来魚が減った本当の理由は何なのかなんてことから市民の目をそらすことができる。

そんな謀略が本当にあったかどうかは知らないが、とりあえずバスアングラーを悪者にしておけということ、外来魚よりも先に良心的なバスアングラーが琵琶湖から駆除されることになってしまった。つまり、成果の伴わない外来魚駆除予算を行使し続けるのと、バスアングラーにリリース禁止を押し付けるのは、滋賀県にとって自分達の主張を通すためにはどちらでも外すことのできない抱き合わせ関係なのである。

リリース禁止に反対する日本釣振興会を初めとする諸団体が、滋賀県に対してリリース禁止の根拠となるデータの開示を要求し説明を求めた。それに対して何の回答もなかったのは当然である。そんなデータなんかあるわけないし、データがないものを合理的に説明することなんかできるわけがないから、要求は聞いてないふりするしかなかったのだ。琵琶湖の在

来魚が減ったのは外来魚が原因であるということを証明する確かなデータなんかあるわけない。もしそんなのがあるんだったら、こんな大騒ぎになる前に、とっくの昔に開示されていたであろう。

同様に、漁業者による外来魚駆除も何らかの将来的な見通しや計画があつて行われているのではない。とにかく何億円の予算を付ける、キ口なんぼで買えということで行われているのであつて、これを何年、何10年続けたら駆除できるかなんて見込みは何もない。それどころか、本当に駆除してしまつたら、そのための予算が降りてこなくなつて、たちまち困る人が出てくる。なぜなら、今や外来魚駆除は年間漁獲高の数分の1を稼ぎ出すなくてはならない大切な仕事だからである。

バスアングラーの多くはリリース禁止には反対だが、外来魚を一切駆除するなど言ってるわけではない。リリースしながらでも外来魚を減らすことは可能だし、バスとブルーギルをどんな割合で、どれくらいまで減らせば在来魚の資源量を回復させることができるか、そのときにバスフィッシングを楽しむことは可能かどうかということを説明してほしいと思つてゐるはずだ。ある程度のところまで外来魚の量を押さえ込んで、そのときになかなか釣れなくてもバスフィッシングを楽しむことが可能なら、それで納得するバスアングラーは少なくないと思う。外来魚をゼ口に近いくなるまで減らさないと在来魚の資源量を保てない、そのときはバスフィッシングは成立しないと合理的に説明されれば、それは仕方のないことだから、そうなるまでの間だけでも今まで通りリリースすることを認めながらバスフィッシングを続けさせてほしいということになるかもしれない。

あるいは、最低限バスフィッシングが成立するだけの量のバスは残し、その分の在来魚の口又は稚魚放流などを増やすことで補つという方法も考えられる。そのための費用の一部を何らかの方法でバスアングラーから徴収するようになれば、その方が在来魚の資源量を回復させるのに役に立つし、よほど現実的な方法かもしれない。そういう方策は何もなく、おまけに納得できる説明もできないのでは、次から次へと環境と資源を食いつぶしていつて環境政策と漁業政策のスケープゴートとしてバスアングラーを悪者するためのリリース禁止だと言われても仕方ないのではないだろうか。

それでも滋賀県がリリース禁止を押し通すのは何のためか。あくまでバスアングラーを悪者にするためのリリース禁止であるなら、その裏側にあるのは何が何でも外来魚駆除予算を支出するという滋賀県政と漁連、漁協、漁業者に共通の目標にほかならない。つまり、在来魚の保護などは後から付いてくる二次的な目的であって、本来の目的は漁連や漁協、漁業者に外来魚駆除予算を与えることではない。滋賀県は民主主義のルールを犯してまでもバスのリリース禁止を強行した。その事実と照らし合わせることで見えてくる琵琶湖の外来魚駆除の本当の目的は、在来魚の保護などでは決してないのである。

琵琶湖のバスアングラーそれぞれの言い分

Bassingかわら版Editorial (2003/03/24)

前々回の最後のところでお伝えした未確認情報について、正確なことを確認できたのでこの報告させていただく。滋賀県漁連青年会長が所有漁船の立ち入り検査で引つ掛かったという

情報は事実であった。登録書類に記載されたエンジン出力と実際のエンジン出力に違いがあったことで漁船登録が取り消され、漁業調整規則で定められた出力制限を越えていたことから、アユ沖すくい網漁の漁業認可も取り消されている。これは噂や伝聞ではなく、滋賀県水産課がその事実を認めているから、間違いのない事実だ。

「ご注意いただきたい点が二つある。一つは、現在操業できない状態になっているからと言って、操業停止になつてゐるわけではないことだ。漁業認可の取り消しなどにより事実上操業ができただけで、水産課が操業停止処分にしたというような事実はない。それともう一点、漁業調整規則違反についても、例えばそれで検挙されたとかそういうことではない。漁業調整規則に違反した高馬力エンジンを載せた船で操業してるところを現行犯逮捕するか、漁から帰ってきたところを港で押さえるようなことをしない限り、高馬力エンジンを積んでるだけでは漁業調整規則違反にならない。そういう取り締まりを水産課や県警がしていないのだから、何の罰もという漁船が漁業調整規則に違反する高馬力エンジンを載せていたとしても、それだけのことで違反にならない。だから懲役や罰金をくらって前歴者になる漁業者は1人も出ないという、誰が考えたかはわからないが、そういうよくできた仕掛けになっているのである。なぜ取り締まりをしないか、その理由は今さら説明するまでもないだろう。このような事実をなぜ新聞やテレビは伝えようとししないのか。その理由も説明する必要はないと思う。外来魚駆除派の代表のような顔をして新聞やテレビに出まくり、おまけに公立派な著書まである人物が法律を無視して魚を獲つてたとなつたら、これは信用失墜もはなさない。これから出さないのは当然として、こんなことやってましたと正直に言っただけでも、

そんな人物を信用して相手にしてた自分達のバカさかげんを白日の下にさらすことになってしまう。それではたまらないから、なかつたことにしておこう。それでバスアングラーに不利益があっても知つたことじゃないというのが大多数のメディアの態度である。

日本でもっとも人気のある「ニュー」ス番組のホームページに「琵琶湖で獲れる魚の8割を外来魚が占めている」という意味の記述があった。ということは、年間の全漁獲量が2000トンちょっとだから、外来魚は少なめに見積もっても1万トンは獲れることになる。これに対する外来魚駆除予算が年間3億円として、1kg200円で買い上げても最大2000トン。漁業者が獲つた外来魚の買い上げに予算のすべてが遣われるわけではないし、実際はもっと高く買い上げてることも考え合わせれば、この試算はものすごく控えめなものであることがご理解いただけるはず。それでも6000トンの外来魚が行方不明になってしまふのだが、それを漁業者は捨ててるのか、逃がしてるのか、どこかへ埋めてるのか。そういう小学生でもできる簡単な検算さえも某「ニュー」ス番組の製作スタッフはしなかつたのだらうか。これを手抜きといわないで、何を手抜きというのか。あるいは、こんな簡単な詐術にも気が付かないほど、メディアにとって琵琶湖の漁業者や滋賀県政は神聖にして犯すべからざるものなのだろうか。

琵琶湖バスのリリース禁止に関して、有名バスアングラーにもっと発言してほしい、もっと積極的に行動してほしいという声があるが、前記のようなメディア状況を考えれば考えるほど、発言や行動に慎重になるのは理解できることだ。どこで何を言つたとしても、メディアの側に都合のよい部分だけをつまみ食いされて、自分達が本当に言いたいことをありのままに伝えてくれない。あるいは、まったく論理的でない揚げ足取り的な反論と抱き合わせでなければ取り上げてもらえない。そんなメディアを相手にするのは、審判が最初から敵の味方なのを承知で試合するようなものである。そんなところへ有名バスアングラーがわざわざ出て行つて、相手に利用されることはない。

3月22日に大津市で開催された琵琶湖の外来魚問題を考えるシンポジウムには、例によって漁業者と研究者の代表らが参加していた。研究者が毎度おなじみの顔ぶれだったのとは対照的に、漁業者の顔ぶれはすっかり入れかわつていた。その理由は、今まで出てた人達が逮捕されたり摘発されたりして出てこれなくなつたからである。その意味では、少しはまともな顔ぶれに近付いたと言つべきか。それと、前例にもれずアングラー代表の姿はなかつた。アングラー代表の出席については、主催者の滋賀県があちこちに打診したが、すべて断られたのである。世界水フォーラムに合わせたイベントらしく自然保護派の外国人タレントと小学生数人が出席し、琵琶湖のことをよくわかつてるとは思えない外国から来た人が、外国から来た魚についての小学生からのありきたりな質問に答えるようなことをしていたが、リリース禁止の重要な当事者であるアングラーの代表がいらないフォーラムで何をやったとしても、これは無知な人達やメディア向けの茶番でしかない。

これまでも同様のフォーラムは開催されてきたが、すべてアングラー抜きであった。なぜなら、アングラーが出てきて本当のことを言つたら、漁業者や研究者、行政にとって都合の悪い事実が次々に出てきてフォーラムが成立しなくなつてしまふからである。22日のフォーラムにアングラー代表が出てなかつたのも、主催者の県は最初から断られるつもりで、いち

おう声だけはかけましたというたてまえ作りをしたのである。しかしながら、フォーラムという美名のもとに力づくで一方的なプロパガンダを行う県側のやり方の異様さが際立っていたという点で、県のやったことは成功とは言い難い。有名外国人タレントを呼んだことでメディアが注目したからなおさらである。その意味では結果オーライかもしれないが、県に声かけられて自分も大物になったものだと言子こいて出ていく有名バスアングラーが誰もいなくてよかった。

リリース禁止に反対するバスアングラーが問題にしているにもかかわらず、メディアや行政がまったく取り上げようとしない論点は多々ある。そのような問題点を踏まえて議論するなら琵琶湖の環境は回復に向かうだろうが、自分達に都合の悪い事実を蓋をしたままでは、何をどうやっても魚が喜ぶ自然環境なんか回復できっこない。何が問題かは、Editorialで何回も書いてきた通りである。さらに付け加えれば、ブルーギルのことに類被りしている研究者が、琵琶湖の環境を5年前に戻すなんて言っているのは、今やっている外来魚駆除が一段落したところで、次に漁連や漁協、漁業者に税金を注ぎ込むための露払いをしているんじゃないか。今ある護岸の前で環境回復をお題目にした大規模工事を始めて、その工事費と補償金を支出するための下準備を今からしているんじゃないか。それぐらい疑ってかからないといけないようなことを県や漁業者、研究者は過去から現在に至るまでグルになってやってきた。そのことをバスアングラーやバス釣り業界は知ってるから、論理的な説明もなく一方的に押し付けられるだけのリリース禁止には断固反対なのである。

主な問題点は次の通り。

1▽外来魚の拡散ついて、そのプロセスが明らかにされないまま、すべてバスアングラーとバス釣り業界の責任であるかのように喧伝されている。これは、まったくの事実誤認であって、そのような間違った前提に立つた上でバスの完全駆除やリリース禁止を押し進め、反対する者の意見をまったく聞こうともしないのは民主主義のルールからの逸脱であると言っはかない。

2▽在来魚と外来魚の正確な資源量の把握、外来魚による在来魚への影響調査などの基礎データがないまま人為的に資源量をコントロールすることは絶対に不可能。何の計画も見込みもないまま多額の外来魚駆除予算を支出し続けても、効果が上がるかどうかわからないだけでなく、漁法によっては混獲による在来希少魚への悪影響すら考えられる。そのような外来魚駆除の成果が上がらないからといって、バスアングラーのリリースを禁止する合理的な理由にはならない。

3▽琵琶湖の外来魚に占めるバスの割合は小さく、本当はブルーギルの方が大きな問題である。外来魚駆除で捕獲されているのは、ほとんどがブルーギルなのに、県はバスとブルーギルを区別するデータさえ収集していない。バスとブルーギルの資源量、その割合などのデータもすべて推量でしかない。アングラーは圧倒的多数がバスを狙っており、リリースを禁止しても外来魚駆除としての適正な効果があるとはとても思えない。それどころか、アングラーが減ってバスもブルーギルも増えるか、あるいはリリース禁止によりバスが減ることでブルーギルがさらに増える結果となり、在来魚に悪影響が出る可能性さえある。

4▽リリースを禁止する条例の要綱案の審議から県議会での可決成立、施行に至るまで間、

一度もバスアングラーの意見が取り入れられる機会がなかった。その経過はきわめて不透明であり、内容はまったく公平性に欠ける。滋賀県は日本釣振興会など諸団体から出された質問に答えず、バスアングラーから寄せられたパブリックコメントには一方的に反論するだけで、最後までリリース禁止の効果について合理的に説明することはできなかった。それでもリリース禁止を押し進めようとするのは、バスアングラーに対する弾圧以外の何もでもない。

5 条例施行後の施策についてバスアングラーの希望や意見がまったく取り入れられていない。県は外来魚回収ボックスやイケスなどを設置すると言っているが、バスアングラーの利便はまったく考えられていない。リリースは禁止するが釣りにはほとんど来てほしいと表明しているのが本当なら、アングラーの利便を第一に考えるべきで、現状では釣りに来るなど言っているに等しい。そのような状態を放置したままの条例施行には問題があり過ぎる。

6 滋賀県の環境政策と漁政には問題点が数多くある。にもかかわらず外来魚の駆除を突出して押し進めようとするのは、他の問題点からメディアと一般市民の目をそらしたいからであり、リリース禁止はそのような政策上の狙いから出てきたものに過ぎない。合理的な裏付けのないままバスアングラーの自由を奪い、県内の釣り関係業者だけでなく多くのサービスマスの減収を招くリリース禁止は即刻撤回すべきである。

もちろん、ここに書いたことがすべてではない。ほかにも事実確認のできない黒い噂や封印された事実が数え切れないほどある。そういうことも含めて、琵琶湖とその周辺で起こっていることを本気で調べ始めたら出てくるわ出てくるわ。そんな情報のごく一部がやっと世の

中へ出始め、メディアもそのことに気付き始めたから、以前よりは外来魚問題の扱い方が慎重になり、表現の仕方もかわってきた。中には隠された問題があることを匂わせる記事も見られるようになったが、なかなか問題の核心に踏み込んでくれない。今はそういうところだ。

有名バスアングラーの中にも積極的に情報収集している人達が少なからずいる。問題は、それをどこでどう生かすかだが、メディアからの誘いに安易に乗るのは危険きわまりない。うかつに出ていったら、メディアに都合のよいところだけつまみ食いされて、「有名アングラーの　さんも外来魚を保護しないとイケないと言っている。琵琶湖のバスアングラーのマナーは悪過ぎると嘆いた」などと、その発言を曲げて伝えられる。そういうことが度々行われてきたから、事情をよくわかった有名アングラーほど発言や行動に関しては慎重になる。その結果、有名な　さんは何も言ってくれない、何もしてくれないと一般のバスアングラーから批判される結果になってしまっているのである。

それならどうするか。加藤誠司プロがやったように、具体的な活動目標を持って、そのための行動グループを作り、日釣振のような組織を後ろ盾にして動くというののも一つの方法である。特に一般アングラーの問題意識を高めたり、署名を集めたり、そのきつかけとなるイベントの人集めをするには、有名アングラーの名前を使うのが一番手っ取り早くて効果が高い。そういう場には大いに出て、一般アングラーの意識を高めるための発言をするのが活動の初期段階にはもっとも効果的だろう。それが一般アングラーの行動につながり、メディアや一般市民の外来魚問題に対する認識をかえる力となる。そんな環境ができあがったところ

で、有名アングラーが一般メディアに出ていって世間に対して発言する。このような手順が必要だ。

言いたいことが言える環境を整えるためには、様々な努力が必要である。著者がここでのようなことを書いているのもその一環。釣り関係の他のメディアではなかなか出せないことを書いて、バスアングラーの皆さんに本当のことを知っていただくことから始めないと、問題は何も片付かない。そのためには情報テロのようなことも必要だから、著者は釣り関係の仕事すべて断ち切る覚悟で、表に出せることはすべて出すことにした。テロリストになるといふことは、表の世界からは姿を消すか、あるいは裏の世界では別人格で活動すると言ふことである。しかしながら、それでは潔くないので、今まで通りの立場と場所での活動を続けている。それでもし何らかの攻撃を受けることがあれば、それも計算の上で誰にも迷惑がからないようにしたいから、あくまで単独行動を旨としている。スポンサーに圧力がかかる心配があるからスポンサーは受けなと言いたいところだが、経済的な問題もあるので、そこところは絶対に信頼できるスポンサーとだけうまくやっていきたいと思っている。

現在はそのような手順の途中の所で、有名アングラーが一般メディアに出て行くには、まだ危険が大き過ぎる。おそらく出て行ったとしても、言いたいことは言わせてもらえないだろう。当たりさわりのない予定調和的なことを少しだけ言わせてもらって、それでバスアングラーの代表にも出てもらいました、ご意見はうかがいましたということにされるのが關の山だ。それだったら出ない方がまし、今はまだ出ないと判断した結果、3月28日の滋賀県のフォーラムのように梶側の一方的なやり方が際立つ結果になったのであれば、それはそれで成功だと評価してもよいではないだろうか。つまり、積極的に発言したり行動したりするだけが戦略ではないということである。

バスアングラーの皆さんの気持ちとして、有名アングラーにも積極的に発言してほしい、行動してほしいと期待するのはよくわかる。しかしながら、そのときに問題なのは、どんな発言ができるか、どんな行動ができるか、その内容である。言いたいことも言えないのなら最初から何も言わない方がまし、自分から動いて落とし穴にはまるのなら動かない方がまだましというものだ。影響力の大きい有名アングラーほど、そのようなデリケートな判断が必要なケースがこれからも頻繁に出てくるはず。そのときに軽率な行動は慎まないといいな。判断ミスが致命的の結果につながるかもしれないから注意が必要である。

そのさらに先を読んでいるアングラーは、バスフィッシングや琵琶湖とは別の所で今できる努力をしている。下野正希プロがバスフィッシング以外の釣りに真剣に取り組み、各分野での影響力や発言力を強めてるのがその好例である。結果はどう出るかわからないが、今はこういう努力が必要なときかもしれない。もし近い将来、バスフィッシングに追い風が吹いてきたとき、現在の努力は決して無駄にならず、大勢の強い味方を得ることができたらいい。

こういう一般のバスアングラーからは見えにくい所での努力もあるから、一概に有名アングラーは何もしていないとは言えない。ただし、リリース禁止に反対する積極的発言や行動がごく少ないことも事実である。そこに何か事情があるに違いないと感じるのは著者だけではないだろう。その事情とは、有名アングラーが寄って立つ最大の基盤が信頼するに足るものかどうかということではないかと著者は思っている。つまり、例えば自分が参加している

トーナメント団体やスポンサーが自分の発言や行動を支持し続けてくれるかどうか、へたなことしたら君は明日から来なくていいなんてことになりはしないかという心配が、有名アングラの発言や行動を鈍らせているのではないかといいことだ。

もしこの仮説が当たっているとしたら、そのような状況を創り出している人達の責任はきわめて重大である。こういう人達こそ裏切り者と言われるべきで、表にいて目立っている人達に大した責任はない。やりたいことをやらせてもらえない有名アングラの責任を問うよりも、一般のアングラが今すぐやらなれないといけないのは、有名アングラの背後からその行動にしばりをかけ、結果的に一般アングラに不利益をもたらしている人達の責任を問うことではないのか。



サクラが満開になるといことは、いよいよバス釣りのシーズンが本番ということですね。4月5日現在、南湖の水温が広い範囲で15度を越えていて、シャローエリアでは18度前後になってきている所もあります。スポーニングを意識したバスの姿が浅い所で見え始めてもおかしくない時期です。

上の右の写真はリプレフィッシングガイドの川畑文哉プロが3月28日にキャッチした80cmのコイ、左はジャックルの加藤誠司プロが3月31日にキャッチした77cmのヘラブナです。どちらも見事な大物なんですけど、特に50cm近いヘラブナというのはヘラブナの大物を専門に狙っていてもなかなか釣れない一生ものと言ってもいいサイズです。バスフィッシングのルアーにこういう外道がヒットしてくるのも春の琵琶湖の特徴なんですよ。

4月5日は南湖で「Bマスターズ琵琶湖戦」が開催されて、多くのビッグバスがキャッチされています。30cm以上5尾のリミットをそろえたのは参加約400人中7人、ノーフィッシュが約半分という難しいトーナメント初日だったんですけど、大きなバスに限ると45〜55cmクラスはぜんぜんめずらしくない状況です。その中には1尾で3800g台というスコアを記録した選手が2人もいます。

このサイズの大物は、琵琶湖ガイド情報の杉戸繁伸プロがすでに

HOT NEWS

琵琶湖ホット情報

杉戸繁伸プロが60cm、4160gの超ビッグバスをキャッチ
琵琶湖ホット情報(2002/04/01)

リプレフィッシングガイドの杉戸繁伸プロが3月30日に滋賀県琵琶湖で昼からの半日ガイド中に60cm、4160gのビッグバスをキャッチしました。

ゲストとともにキャッチした3尾のバスのうち、杉戸プロが60cm、550g(2480g)、ゲストが45cm(1500g)で合計8kgオーバーというすごい成績です。ヒットルアーは60cm、1.8gのジグヘッド、50cmはスピナーベイトのBカスタムでした。

これ、エープリルフルで言ってるんじゃないですかね。本当ですよ。



琵琶湖南湖は春まつ盛り。超ビッグバスのチャンス!?

琵琶湖ホット情報(2002/04/05)

琵琶湖大橋米ブラザのサクラ、満開です。真野川のサクラ並木も満開です。3月末からの冷え込みで、ちょっと足踏みしたんですけど、琵琶湖南部周辺のサクラは例年より約1週間早く満開になりました。

3月30日に60cm、410gをキャッチして喜んで、こんなビッグバスがトーナメントで何尾もキャッチされるといのはすごいことです。

それと、上位陣にサイトフィッシングが得意な選手が多いのも特徴的です。これって、浅い所へスポーニングに来てる超ビッグバスを狙うなら今がチャンスだということかも知れませんが、と言っても、田のトッププロだから釣れるということもあるんでしょうけど。まさにそういうバススタイミングで今週、来週の2週連続で開催される田プロトーナメントだけに、現在の琵琶湖のバスフィッシングがどれぐらいのポテンシャルを持っているかを観察するにはよい機会なんじゃないでしょうか。

春の琵琶湖の定番ポイント名鉄沖から3日連続写真中継

Vol. 1 JB戦のプラクティス艇は思ったほど多くないぞ!! 琵琶湖ホット情報(2002/04/11)

左ページの写真は琵琶湖南湖の超有名ポイント、名鉄沖です。4月11日午前10時頃に撮影したもので、ちょうど田トップマスターズ戦のプラクティスの真つ最中です。名鉄のシャローは春の定番ポイントだけに、さすがにたくさんさんのボートが集まっています。

このとき、天神川尻から造船所までの範囲の沖に8隻ぐらいのボートがいました。さらに遠くに見える浮御堂沖にもたくさんさんのボートがいるんですけど、田トーナメントの参加艇は何100隻の単位ですから、これでもごく一部です。釣りをしているのを見てても、スペース的

にまだ余裕がある感じがします。まあ、今日はプラクティスですから、名鉄沖ではかり釣つてるわけにはいかないということがあるのかもかもしれません。

それと、ほかのボートはもつと南寄りの西サイドのシャローエリアにたくさん集まっているんじゃないでしょうか。1週間前の田琵琶湖マスターズ戦のウイニングパターンは、翌週にもトーナメントがあるため表彰式では詳しく報告されなかつたんですけど、全般的な傾向ではそういうことでした。今週はずつといい天気が続いているだけに、東岸のシャローエリアも気になるんですけど、ビッグウエイトを出す爆発力ではやはり西岸に分があります。そのあたりのウエイトの見極めが、今回のトーナメントでは勝負どころになるかもしれませんね。

この写真を撮影したポイントは、ちょっとした公園になつてて駐車場もあります。ここから今日、明日、明後日の3日間、だいたい同じ時刻に写真を撮って皆さんにこちらに送りたいと思います。トーナメント本番は、ボートが増えるでしょうか、減つてでしょうか。土曜日はプレイヤーのボートがどれぐらい割り込んでくるでしょうか。ご自分の目で確かめたい方は、天神川尻へ行ってみてください。もしアシ原にバスが入っていれば岸からでも狙えますから、釣りながらトーナメント観戦もできますよ。



場所は、国道161号の天神川南側の信号から川沿いの道に入り、途中の橋を渡って左岸沿いの道を琵琶湖に突き当たるまで進んだ所です。午前10時頃においてになれば、BBC服部もいるかもしれませんよ。

Vol.2 名鉄のシャローエリアにJB戦のボートがびっく

琵琶湖ホット情報 (2002/04/12)

滋賀県琵琶湖周辺は4月11日の夕方ごろから雨になりました。夜の間はけっこうしつかり降ってたんですけど、朝には止んで、翌12日は風もなく穏やかないい天気になりました。そこそこまとまった雨だったようで、ここ3日ほど下がり続けてた水位が、12日の朝には前日より2cm上昇してました。

名鉄のシャローはボートでいっぱいです。12日午前10時に見に行ったときには、天神川尻の公園裏のアシ原から造船所にかけての岸沿いに約30隻のボートがいました。それも、岸沿いに二重、三重に並んでる感じです。前日のプラクティスのときは沖側にもボートがいたんですけど、トーナメント本番になって、ほとんど全部が岸側へ寄ってきてます。これっ



て、プラクティスのときは沖側も一応チェックしてたけど、トーナメント本番は沖側を見切って、みんなが岸側へ入ってきてるってことなんですよ。つまり、これがプラクティスとトーナメント本番の違いっていうやつです。

さて、明日の名鉄沖はどんなことになってるでしょうか、このボート密度ですから、とても簡単に釣れるとは思えないんですけど、もしこの中の誰かでも釣ったら、明日はもっとボートが多くなるかもしれません。反対に、バスが釣れてなかったら急に誰もいなくなるということも考えられます。それと、明日は土曜日ですから、フライベーターのボートもどっと出てくるはずですよ。名鉄沖の大混雑がさらにひどいことになるのか……。これって、端で見てるからこんなこと言ってるけれど、釣りをしてる人達はいへんではないでしょうか。

Vol.3 フライベーターも加わって益々大にぎわい

琵琶湖ホット情報 (2002/04/13)

4月12日のJBトーナメント初日はめちゃくちゃ釣れてますねえ。トップがバス5尾で11495g、17位までが8kgを超えるウエイトだったんですから、これってとんでもない釣れ方です。Bassingかわら版でおなじみのメンバーでは、杉戸繁伸プロが8275gで14位、三村和弘プロが6010gで33位、加藤誠司プロが5660gで40位、河畑文哉プロが5195gで58位入ってます。ただ、がんばって釣ってきた割に順位は予想外だったようです。

「5kg釣って40位じゃ、やっつけられないよ。今日はもう、帰って寝るわ」と言っていて、さっさとジャッカル琵琶湖研究所から引き上げた加藤プロの言葉がすべてを物語ってます。杉戸



プロなんか8kg以上釣って、もしかしたらトップ、悪くても5位以内は間違いないと思いつつ帰ってきたんじゃないでしょうか。どうなるかは2日目の成績次第なんですけど、レポートが楽しみですな。

それと、1週間前の「E」戦初日にバスを釣った選手が約半分弱だったのにくらべて、この日は約80%が釣ってます。これは簡単に言えば、どこでも釣れてることです。3日ほど下がり続けてた水位が、11日の夕方からの雨で2cm上昇したのがよかつたんでしょうか。それにしても、ものすごい釣れ方ですから、2日目も続くのかどうかがとても気になるところです。

12日午前10時の名鉄沖は、天神川尻から造船所までのエリアの沖に約40隻のボートがいました。その内、約3分の2が「B」戦のボートで、約3分の1がフライベーターです。ボートの位置は前日にくらべると明らかに沖に散っていて、岸近くにベッターくっ付いているボートは少なくなっています。それと、川尻近くで釣りをしているボートが増えてるんですけど、これは川尻の沖にあるエリの根元がトーナメントの規制エリアにかかるため、ほとんどトーナメンターばかりだ

つた前日は誰も釣りをしてなかったからです。

名鉄沖の様子を見てから、南湖の西岸沿いに国道161号を走ったんですけど、春の定番ポイントはいたいどこもボートがたくさん浮かんでました。中でも多かったのは、雄琴沖、オバケワンド、井筒マリーナ沖、自衛隊沖、浜大津沖などです。ただし、広い範囲にボートが散っているので、多いと言っても密集状態と言っただけではありません。

井筒マリーナ沖はけっこうたくさんさんのボートが岸近くからかなり沖までの広い範囲に散らばって浮いていました。岸際のアシ原まわりでのサイトフィッシングだけでなく、沖のウインドエリアでバイブレーションプラグやクラシクベイト、スピナーベイトなどを使ったアングラーもいいサイズのバスを釣ってるんですね。それと、南湖西岸だけでなく、東岸の赤野井、木浜などのシャローエリアや沖のウインドエリアでも大きなバスが釣れてるようです。

岸とボートから挟み撃ちのシャロー合戦が続く南湖

琵琶湖ホット情報(2002/04/19)

下の写真は4月19日午前11時過ぎの名鉄裏です。名鉄沖ではなくて、ボートが全部岸にくっ付いて釣りをしていますから



名鉄裏です。先週末のトーナメントのときは、もつとたくさんのボートがひしめき合ってたんですけど、平日はこんなもんです。トーナメントのときみたいに、やや沖寄りでの釣りをするボートがいなくなってるのは、ボートが少ない分、沖へ逃げる必要がないからかもしれません。それとも、17日に強い雨が降って水位が^{com}近くも一気に上昇したために、再びバスがシャローに上がってきてるからなのでしょう。

この日は岸釣りアングラーも目立ちました。天神川尻の公園裏だけで、5、6人が釣りをしていました。中には、ウエイダーを履いてアシ原に立ち込んで、真剣にスポーニングベッドを探してるアングラーもいました。これって、トーナメントのときに名鉄でよく釣れたっていう情報が流れたからなんでしょうかね。結果を聞いたら、釣れたっていう答は返ってきてませんでしたが……。

琵琶湖大橋料金所裏でも、7、8隻のボートがアシ原にしがみついて釣りをしています。ここもトーナメントのときは沖寄りのボートが多かったですけど、今は1隻しかいません。沖のウイードエリアでは釣れないんでしょうかねえ。もつ、サイトだけって感じですよ。

杉戸繁伸プロがトーナメントのときに大きなバスを立て続けに釣った木浜沖も、平日なのでボートが少なく余裕で釣りができます。まあ、釣れたって言っても、そんなに簡単ではありませんから、様子を見には来ても、ずつとがんばって釣りをし続けるボートは少ないのかも知れません。見る間に1隻いなくなるとは、またかわりの1隻が来て、という感じでした。

木浜5号水路の水門からアシ原にかけても、比較的空いていて余裕で釣りができます。アシ原にくっ付いているボートは1隻もいませんでした。水門の前で釣りをしていたアングラーに聞いたら、「昨日はよく釣れたけど、今日はあきませんわ」という返事でした。

このほかに、昨日はよく釣れたという情報がいくつもあります。17日の雨で水位が急上昇したのと、いい天気になり切らずに曇り空だったのがよかったです。それと、風向きによって釣れたり釣れなかったりということもあるようです。19日は天気がよくなり過ぎたのがよくなかったのかもしれない。それと、朝晩の急な冷え込みも気になります。

南湖のスポーニングが一段落しつつあるこれからは、天候や水位、水質の微妙な変化を気にしながら、場所を慎重に選んで釣りをしないと、よい釣りをするのは難しいかもしれません。そろそろ、田植えに向けての準備が始まっていますから、局所的に泥濁りが回ることも考えられます。ゴールデンウィーク頃の南湖は、なんか難しくなりそうな気配ですね。

やっと天気がよくなったゴールデンウィーク直前

琵琶湖ホット情報(2002/04/26)

4月25日の滋賀県琵琶湖は北西の風が強くて、北湖は1日中大荒れでした。

このところの琵琶湖は、強い雨が降るか、天気がよければ強い風が吹くかの荒れ気味の天候が続いています。これって、いかにもアフタースポーニングっぽい空模様です。普通だったらゴールデンウィーク頃にまとまった雨が降って、その後、荒れ気味の天候が続くか、いったん天候が回復した後、5月10日を過ぎた頃から荒れ気味なるんですけどね。今年はバスのスポーニングが早いだけじゃなくて、天候の変化も同じくらい早いようです。

翌26日の午前中は、穏やかないい天気になりました。気温はちょっと低めなんですけど、日射しが強いから寒い感じはしません。高気圧が北から張り出しているので、午後は風が強くなるかもしれませんね。

さすがに連休前ですから、バスアングラーは岸釣りもポート釣りもバラバラです。赤野井のハス畑や漁港の北側の水門横、木浜のアシ原、5号水路の水門など所要所をチェックしてみただけです。岸釣りポイントの混み具合はどこも普段の平日並みでした。

釣れ具合は、「まあまあのが1尾だけ釣れた」とか「小さいのだけ」とか「ぜんぜん」とかいろいろです。雨が降って24日の方が、まだそこそこ釣れたみたいですね。晴天になると難しいのは、アフタースポーニングシーズンの特徴のうれしくない部分だけが極端に出てしまってるのかもしれません。

ポートは赤野井沖にまとまって浮かんでるので、琵琶湖大橋料金所前にも常時何隻かいます。あとはアシ原にくっ付いてたり、木浜の岸寄りでも釣りをしていたりなんですけど、いまいち確信なく釣りをしているポートが多いみたいです。だいたいは移動が早くて、ていねいに釣りをしているポートはごく一部です。

本当は、もつとていねいに釣った方がいいと思うんですけどね。特に晴天で日射しの強いときのバスはウイードの束の陰に付いてたりしますから、それを釣ろうと思ったら、ポートコントロールをきつちりとして、スポットを正確に狙わないといけません。これはスポーニング直前のプリのバスでもアフターのバスでも理屈は同じなんですけど、釣るのはアフターのバスの方がはるかに難しくなりますから、ていねいに狙わないといけない度合いも強くな

ります。似たようなエリアで釣りをしている、プリのバスを狙ってるのが、アフターのバスを狙ってるのをしっかり意識して釣りを切りかえないといけません。

それと、これだけ日射しが強くなってくると、ウイードの伸び方がそれまでより格段に勢いを増してきて、1週間前とはポイントの様子がすっかりかわってしまってるということもあたりまえに起こります。日射しが強くて水温が上昇してくるこれからのシーズンは、そのことも頭に置いておかないといけません。つまり、1週間、10日前と同じ釣りが通用しない確率がとても高いわけです。

天気予報では、ゴールデンウィーク前半の4月27日から29日にかけてはいい天気が続くと言っています。おそらく大勢のアングラーが琵琶湖へ繰り出すんですけど、はたしてバスのごきげんはどうなんでしょうか。もし釣り難いようなら、絞り込んだスポットに確信を持って思い切りていねいに狙うこと。それでもダメなら、フィールドの状況変化の先回りをするぐらいのつもりで大胆に狙いをかえた方がいいかもしれませんよ。

ゴールデンウィークに突入した琵琶湖でバス釣られています。琵琶湖ホット情報(2002/04/28)

ゴールデンウィーク初日の4月27日に琵琶湖で62.5cm、4100gのビッグバスが上がりました。このバスをキャッチしたのは、大津市今堅田のマリーナクラブリブレのメンバーさんです。河畑文哉プロのガイドでも南湖でプリスポーニングの大きいのが出てるし、北湖はこれから期待十分だし、連休中もこんなのがまだまだ釣れそうです。

と言つようなことで、ゴールデンウィークが始まりました。連休直前の26日からの天気が続いて、28日も風もそんなに強くなって暖かい釣り日和になったもんですから、大勢のバスアングラが琵琶湖へ来てます。岸釣りもボート釣りも、狙い目のポイントは大入り満員です。

まあ、ボートの方は4月始めのトーナメントのときにくらべたらまだましですし、岸釣りも6、7年前にバスフィッシングブームがブレイクした当時にくらべたら余裕はあるんですけどね。それでも普段の週末とかよりは段違いにアングラが多いし、それ以外の行楽の人とかも多いから、道路の渋滞とかはひどいことになってます。国道161号の琵琶湖大橋の交差点は4方向とも朝から渋滞してます。大橋を東から西へ渡ってくる車が多いようで、国道161号から琵琶湖大橋にかけては数100mの渋滞になってます。

名鉄沖、琵琶湖大橋料金所前、赤野井沖は船団が復活しました。名鉄は天神川の河口付近から造船所の沖にかけて、料金所前は大橋下のアシ原からヤンマー沖、佐川急便沖にかけて、赤野井沖もテトラ一文字の沖から木浜沖の北側のエリアまで、いずれも広い範囲にボートが散らばっています。それと、木浜の岸に近いブレイク沿いにも延々とボートが浮いています。

アシ原にしがみ付いて釣りをしてるボートもたくさんいます。ここというアシ原は、けっこうな密度です。中には一カ所でジッと動かずに、いかにもネスト見付けたぞって感じでルアーをキャストし続けているボートも何隻かいました。

岸釣りはそれこそ、そこら中にアングラがいます。アシ原も、護岸も、水路も、内湖も、どこでも釣りをしてるって感じです。その割に密度はパラパラって感じで、アングラが多い所でも5ミぐらいの間隔を置いて釣りができてます。冬の近江舞子の石積み突堤なんかとはぜんぜん違いますね。釣りをしてる中の1人が、「昨日は彦根の方で何尾か釣れたけど、今日は南湖へ来たらぜんぜんですわ」と言っていました。スポーニングがらみの時期によく釣れる南湖の港とかは、南湖のアシ原や護岸ほど空いてないかもしれないんですけど、そろそろよくなってきてるといふ話を聞きますから、この連休中は狙い目かもしれませんね。

連休で琵琶湖へ繰り出したボート釣りのアングラと岸釣りのアングラががち合つたらどうなるかというのが上の写真です。アシ原の岸側と沖側からバスを挟み撃ちしてます。それでもバスは釣れて、このポイントで40cmぐらいのを岸からキャッチしてるのを目撃しましたから、南湖のアシ原もまだまだ捨てたものではないみたいです。

ゴールデンウィーク後半に突入。琵琶湖のバスも連休か!? 琵琶湖ホット情報(2002/05/03)

5月3日、ゴールデンウィーク後半の4連休が始まりました。琵琶湖は再び大勢のバスアングラでにぎわっています。周辺の道路も朝からあちこちで激しい渋滞になっています。

岸釣りは、今の時期の主要ポイントだけでなく、駐車場がある所ならどこでもアングラがいっぱいいます。ビーチパラソルや折り畳み式のテーブル、テントなどを広げてる人がそこからにいます。琵琶湖へ遊びに来たついでに釣りをしてるのか、釣りに来たついでにほかの遊びもしてるのか、何がメインなのかわからない感じの人が多くて、いかにもゴールデンウ

イークという雰囲気があふれています。

そういうアングラーは駐車場のすぐ裏の護岸とかに並んで釣りをしています。いつも琵琶湖へ釣りに来てる熱心なアングラーは、アシ原や水門まわりに集まっています。場所でアングラーのタイプがはっきりと分かれてる感じですね。

昨日、岸からいいサイズのバスが釣れてた木浜のアシ原は、ボートが何隻も突っ込んでしまつて岸から釣るのはちょっとつらい感じになってました。岸釣りアングラーもそこは心得たもので、アシ原が奥深くなつてボートが入り込めない所に集まつて釣りをしています。

赤野井沖は昨日はボートが少なかつたんですけど、今日は再びたくさんのボートが集まっています。ボートが浮かんでるエリアがゴルデンウィーク前までよりも沖へずれていて、船団の沖側は南湖のど真ん中あたりまで広がっています。アフタースポーニングのバスの一部はすでにそれくらい沖まで出て行つてるんですね。赤野井沖を中心に木浜から下物にかけての沖は、エリアの境界がわからないくらい延々とボートが浮かんで釣りをしています。と言うことは、絞り込める強いポイントがないということですから、このエリアでバスをキヤッチするのは、かなりのスキルを持ったアングラーでないと難しいんじゃないでしょうか。

琵琶湖大橋料金所前もボートが多くなりました。ゴルデンウィーク前半にそこそこ釣れたという情報が伝わってるんですね。南湖の北寄りのエリアでは、ボートの密集度はここが一番なんじゃないでしょうか。前日5月2日の写真とボートの多さをくらべてみてください。ボートは料金所前からヤンマー沖、佐川急便沖の広い範囲に浮いてるんですけど、佐川急便沖で釣りをするボートは少なくなつて、その分、料金所前からヤンマー沖に密集して

る感じですよ。つまり、そのあたりが釣れるということなのかもしれませんね。名鉄沖はさすがに4月前半にくらべるとボートが少なくなっています。この日は午前中、東寄りの風が強かつたので、その影響もあるかもしれないんですけど、赤野井沖にたくさんのボートが浮かんでるぐらいですから、もしバスが釣れてるんだつたら少々の風なんか関係ないはずですよ。ということは、バスの釣れ方が下火になつてるといふことなんじゃないでしょうか。それと、ここでもはっきりと沖のエリアにボートが多くなつていて、一時少なくなつてた浮御堂沖にもボートが戻っています。

ゴルデンウィーク後半初日の様子はこんなところで、南湖のボートの動きなんかを見ると完全にアフタースポーニングという風に見えるんですけど、それでもまだブリの魚も釣れてるそうです。それに加えて、北湖のバスのスポーニングの遅れが難しい状況をさらに難しくしています。南湖の釣りの合間に北湖の様子を見に行ったアングラーに話を聞いても、いい答は返ってきません。3日の南湖はお昼前から南の風が強くなつてきてます。こうなると逃げ場がないんですよ。

午前中、南湖で釣りをして、波しぶきをかぶつてびしょ濡れになりながらお昼ご飯に帰つてきたりブレのメンバーの1人は、「午後は北へ行きたいけど、釣れてないみたいだし……」。行くだけ行つて、様子だけでも見てこようかな。どうしようかな」と悩んでました。

普通だったら、南湖が今くらいアフターになったら、北湖のどこかでいいのが釣れ始めるんですけどね。このゴルデンウィークは、それがぜんぜんです。北湖のスポーニングはいつたいどうなつてるのが、誰がこの難問を解いてくれないもんでしょうかねえ。

釣れる釣れないは腕次第のゴールデンウィーク後半

琵琶湖ホット情報(2002/05/06)

5月5日まで大勢のバスアングラーで混雑してた琵琶湖なんですけど、6日はあれっと思っぐらいガラ空きになりました。前半3日、後半4日の連休の最終日ですから、さすがに最後の最後まで居残って釣りをしてるアングラーは多くありません。行楽客も少なくなっって道路も普段の休日より空いてるぐらいです。

琵琶湖大橋料金所前のポイントも、ボートがバラバラ浮いてるだけです。最終日の午後ですから、大部分のアングラーは家へ帰っちゃったみたいですね。ボート釣りよりも岸釣りのアングラーの方が根性があると言っか、しつこいと言っか、まあ絶対数が多いということもあるんでしようけど、各ポイントで目立ちました。ボート釣りのポイントは最終日の午後になっってガラガラになっただけ、岸釣りのポイントはまだまだがんばってるアングラーがけっこう残ってるって感じです。

ゴールデンウィーク後半の釣れ具合は、雨が降った4日が一番よかったみたいです。リフレッシングガイドの河畑文哉プロが55.5cm、三村和弘プロも52cmをキャッチしました。それ以外にも40cmオーバーはけっこう釣れてたようです。詳しくは河畑プロの公式サイトをごらんください。ダウンショットリグやジグヘッドリグなどのライトリグでネチネチと攻めるのがよかったです。

翌5日は杉戸繁伸プロがガイドに出て40cm台後半のグッドサイズを何尾もキャッチしています。こちらは常吉リグだそつです。この日は風が強くて釣りにくかったのをなんとかのいで釣ってきたとことです。ゴールデンウィーク後半は4日の雨が降ってたときを除けば、あとはほとんど強風が吹いて釣りにくい状況でした。釣れる釣れないの結果がアングラーによって極端に分かれたのは、アフタースポーニングでいねいにスローに釣らないといけないの、風が強くてボートポジションをキープしにくくて、それができるかできないかの差が大きく出たということなのかもしれません。

期待の北湖は終わってみればさっぱりでした。その分、バスが難しいながらも釣れてる南湖のポイントにボートが集中して、よけいに難しくなっただけということもあつたはず。その北湖ですが、まだ釣れる状態にはなっってないんですけど、連休の間に大きなバスが浅い所に姿を見せ始めたという情報があります。ということは、もう何日かの間に、あつちでもこつちでも釣れ始める確率が高いんじゃないでしょうか。これからは南湖でアフター回復組を追いかけるよりも、北湖でスポーニングがらみのビッグバス狙いが面白いかもしれません。

琵琶湖北湖、南湖もビッグバス釣れてます

琵琶湖ホット情報(2002/05/14)

琵琶湖南湖はまだ大きなバスが釣れてますねえ。5月12日に開催されたバッドネットトーナメント第3戦に参加した杉戸繁伸プロのチームは、バス5尾をすべて南湖でそろえた500gの成績で2位に入賞しました。杉戸プロのパートナーがキャッチした56.5cmのビッグバスは、

さすがにプリスポーニングシーズンにくらべると同全長でウエイトは落ちてますが、それでも350gもあって上位入賞に貢献したそうです。

同トーナメントの優勝は北湖で880gのウエイトをマークした小東、西川ベアー。真野から高島のアシ原を中心に攻めたとのこと。そろそろ北湖でもビッグバスが釣れだしたかなって感じですね。

まるで梅雨のような琵琶湖 北か南か迷う季節

琵琶湖ホット情報 (2002/05/16)

天気悪いですね。沖縄はとっとと梅雨入りしたそうなんですけど、滋賀県琵琶湖もここ数日、まるで梅雨のような天候が続いています。天気図も南海上に停滞前線が張り付いて梅雨みたいだし、梅雨入りしてるんだったら、へたにタイミング測ってないで、正直にそう言うた方がいいと思うんですけどね……お天気おじさん。

おまけに5月15日はお昼過ぎ頃まで東寄りの強風で大荒れでした。アフタースポーニングから回復しかけた今の時期の琵琶湖は、こういう天候のときに限って大きなバスが立て続けに釣れたりするんですけど、今日はちょっとひど過ぎます。

そんな悪天候を突いて釣りに出たのは、リプレフィッシングガイドの河畑文哉プロです。河畑プロはこのところ琵琶湖でも奈良県池原ダムでも、釣りに出れば50cm前後のバスをキャッチしていて、50cmオーバーを釣らない日よりむしろ釣る日の方が確率で言うと倍くらい多いという絶好調ぶりです。

琵琶湖でも14日から3日連続のガイドで連日50cm前後のバスをキャッチしています。14日は50cmにわずかに届かなかったんですけど、15日は50cmオーバーを2尾、16日は1尾。しかも16日には80cmはあるかというビッグフィッシュをバラしたんだそうです。それで意地になったんでしょうね。雨が降ってるのもおかまいなしで、ガイド時間を延長してがんばりました。

そんな河畑プロに「琵琶湖と池原とどっちが面白いかって聞いたら、「池原は池原で面白いし、琵琶湖へ帰ってきたら琵琶湖も面白いし、どっちもいいのが釣れるから答えるのは難しいですね」と憎い返事が返ってきました。池原はサイトではなく普通の釣りがよくて、琵琶湖はスローにがまんして釣る、それを信じてやり切れるかどうかか釣れる釣れないの結果に直結するんだそうです。詳しくは河畑プロの公式サイトをこちらください。

このところの琵琶湖は水位がプラス20cm前後で落ち着いたままです。これは自然に落ち着いているのではなく、ここ数年のデータを見ると、水位の上昇傾向が続いて雨が降ってる状況でも、プラス20cm前後になると上昇はいつも決まったように止まりますから、それ以上は水位が上がらないように意図的にコントロールされると考えた方がいいんじゃないでしょうか。

つまり、大量に流れ込む水量に見合った分の放水が行われているわけで、湖流や濁りの影響を考えると、そのことを計算に入れないといけないくなります。南湖のアフタースポーニングのバスがいち早く沖へ動いて、コンディションの回復が早いのは、その影響で沖の水の状態がいいとか、ベイトフィッシュが多いとかの影響があるんじゃないかと思っんですけ

ど、誰かそのあたりのことを解明してくれませんかねえ。

北湖は遅れていた水温の上昇がいよいよ本格的になって、先週末ごろから5〜15度の所が多くなりました。一部のシャローエリアは6度前後あります。それにともなってアシ原などでスポーニングバスが多く見られるようになり、大きなバスも釣れています。これからしばらくの間は、南湖が北湖か迷ってしまいそうですな。

南浜漁港のゴミが減った理由は？

琵琶湖ホット情報(2002/05/26)

5月25日に琵琶湖東岸びわ町の南浜漁港で開催されたクリーンアップ琵琶湖に参加しました。

中部釣り場とマナーを守る会(CFM)が主催するクリーンアップ琵琶湖は、8年から毎年春と秋に開催されていて今回が7回目になります。これまでずっと天気運がよくて、予報では雨で中止かなと思っけても、朝になったらぎりぎり雨が上がり開催できるということが何回かありました。ここ数回は快晴微風でゴミ拾いをするのもつたいないような好天に恵まれています。その例にもれず、今回もめちゃいい天気になりました。

その割に南浜漁港はバスアングラーが少なく、意外な感じでした。沖側の防波堤の内側にはスポーニングベッドがいくつも見えて、その中には5cmちょっとはありそうなバスが付いているベッドもあるのですよ。10人ぐらいのヘラブナ釣り師が防波堤にズラリと並んで釣りをしているだけで、バスアングラーは港全体で10人もいません。浜の方もバスアングラーが

少なくて、そのかわりというわけではないんですけど、パンツ1枚になって水遊びをしている子供達が何人もいます。なにしろ泳ぎたくなるぐらいいい天気でしたからね。

今回のクリーンアップ琵琶湖には、地元南浜区の区長さんらも参加されました。CFMに加わった地元の方もいて、そういう人達の話聞きながらゴミ拾いをしました。

南浜漁港のゴミは去年あたりまでとくらべて確実に少なくなっています。防波堤の外側の荒れ地になった所に、以前なら弁当殻や¹ポトル、空き缶などを入れたビニール袋がポイポイと捨てられていたのが、今は所々にポツポツと落ちていただけです。これは地元の人もやそれ以外のいるんなボランティア団体が定期的にゴミ拾いをしてる効果が出ているようです。

クリーンアップ琵琶湖がいくらがんばっても、回収できるゴミの量には限度があるし、そうしょっちゅう開催するというわけにはいきません。それよりも、たとえ少人数のグループであっても、たくさんの方が回数多くゴミ拾いをする方が効果的なんですね。そういう活動の立ち上げに、クリーンアップ琵琶湖のようなアングラー自身の手によるゴミ拾い活動が影響を及ぼしたのだとしたら、これは自分達が拾ったゴミの量をはるかに越える成果が得られてるわけですから、とてもいいことなんじゃないかと思いました。

それともう一つ、アングラーが少なくなることの影響もあるんじゃないかという意見が聞かれました。確かにクリーンアップ当日のアングラーの少なさを見ると、この意見って問題の核心を突いているんじゃないかと思っけてしまいます。その結果、ポイ捨てゴミが減って釣り場がきれいになってるのだとしたら、これっていいことなのか悪いことなのか、ちょ

つと寂しい気がしました。

とは言っても、やっぱりある所にはゴミはたくさんあって、今回もいつもと同じようにゴミ袋にして約2杯分、軽トラックの荷台に山積みでゴミが集まりました。10人ちょっとが1時間半ほどゴミ拾いをしただけでこれだけ集まるんですから、ゴミが減ったと言って喜んでばかりはられません。減ってはいるけど、まだまだたくさんあるのが現状です。

琵琶湖へ遊びに来る人達から利用税を徴収しようというような話も出てるんですけど、そうだったらボイ捨てゴミは誰かが片付けてくれるんじゃないかな。立派なゴミ箱だけ設置して、そこに集まったゴミだけ回収して、それで終わり、なんてことはないんだろうな。そんなことを考えながらもゴミ袋に2杯や3杯のゴミは拾えましたから、琵琶湖の環境のことを話し合う会議なんかは、ゴミ拾いをしながらやればいいんじゃないでしょうか。10人や20人だったら、声が届く範囲内に集まって話をしながらでも十分ゴミ拾いができるくらい高密度でゴミが落ちてる場所が琵琶湖にはいくらでもあります。そんなことも知らないで会議なんかしても仕方ないと思うんですけどね。ゴミ拾いしながらだったら会議場の部屋代とかもかからないし、いいアイデアだと思いますけど、いかがなものでしょうか。

真夏のような北湖で下野正希プロがSOLPキャッチ

琵琶湖ホット情報(2002/05/28)

5月25日に今年3回目のアメリカ遠征から帰国した下野正希プロ、ひさしぶりの琵琶湖のフィッシングガイドで、朝からいきなり釣ってきました。ゲストとおそろいで50cmオーバー並大抵じゃないと言われているアフタースポーニングシーズンの琵琶湖のしかも北湖で、約3週間ぶりに釣りをして、いきなり50cmオーバーを釣ってくるんですから、さすがとしか言いようがありませんね。

琵琶湖はこししばらく、真夏のような快晴の日が続いています。ただし、お昼過ぎから夕方にかけては急に曇ってきて夕立になることが多く、激しい雷雨になることもしばしばです。26日の夕方から夜にかけては全国的に激しい雷雨に見舞われたんですけど、琵琶湖周辺でも強い雨と雷が翌27日の午前3時頃まで続きました。激しい雷がこんなに長時間続くのはめずらしいことです。

現在の琵琶湖は水位が毎日約1cmのペースで下がり続けて、プラスマイナス0cmが目前のところまできました。水温は北湖の沖合で17〜18度、岸寄りの高い所で20度近くまで上昇しています。南湖はほぼ全域で20度を超えていて、シャローウォーターの一部は22〜24度になっっています。

シャローの水温が上がって、小バスやブルーギルの姿がたくさん見えるようになってきました。リブレのスロープにはオйкаワの子の群れもいました。それを狙ってなのかどうか知りませんが、40cmオーバーのバスがフラッと回ってきてくる姿も見かけました。やや沖ではバスがベイトフィッシュを追ってジャンプしてる姿も見えます。こいつのが見えるようになってから夏が近いということですね。

下野プロだけでなく、同じリブレフィッシングガイドの河畑文哉プロも釣っています。5月

22日は56.5cmと50.5cmの2尾。うち56.5cmはゲストの方がキャッチしました。そして激しい雷雨が明けた27日にも50.5cm。詳しくは河畑プロの公式サイトをのぞいていただきたいんですけど、現在のリブレのフィッシングガイドはものすごい50UPキャッチ率です。

南湖はアフタースポーニングから回復したバスが狙いなんですけど、これが渋いんですね。河畑プロのように、大きなバスを釣ってくるアングラーはいるんですけど、簡単ではありません。バイトがとても少ないので、根気よくいいねいに釣る必要があります。

南湖はそろそろブリよりもアフターのバスが多くなってくる頃でしょうか。下野プロが釣ったのは「水深5〜6mじゃないか」とのこと、バスがいた位置は明らかにアフタースポーニングバスのポジションだったそうです。下野プロのポートには魚探がセットされてませんでした。魚探なしでそこまでわかるっていうのは、いくら沖島マスターの下野プロでもすごいですよ。魚探にバイトフィッシュが映るとか映らないとか、そんなこともぜんぜん気にしてません。それでもバスが釣れるんですから、はつきり言って簡単に真似するのは不可能だと思いますよ。

昨日、今日の快晴の中で河畑プロと下野プロが連続して50cmオーバーを釣ってきたのは、ちよっとパターンがかわってきたということなのかもしれません。快晴続きでバスが強い日射しを避けられるディーブウォーターやカバリーの陰に動いて、それで釣れるようになったということも考えられます。ただし、まだ5月末ですから、これが今の琵琶湖のパターンだと判断するにはちよっと早過ぎます。部分的にはそういうことも起こる可能性がある、ぐらいに思っていたのがより正解に近いんじゃないでしょうか。

長期予報によると、今年の梅雨入りは例年より早く、近畿地方は6月初め頃だそうです。この予報が正しければ、今は梅雨入り前の好天ということになるんですけど、これからまだまだいい天気が続くのか、一転して梅雨入りするのか、天候の変化に注意する必要がありますね。

追加情報 下野プロは8日の午後も50cmオーバーをキャッチして帰ってきました。これで、この日はゲストが釣ったのも合わせて50cmオーバー3尾です。午後の場所は沖島ではなくて湖西だったそうです。

四十肩テニス肘釣法の加藤誠司プロがJB戦3位入賞 琵琶湖ホット情報 (2002/06/03)

5月31日から6月1日にかけて滋賀県琵琶湖で開催された「琵琶湖マスターズプロトーナメント」でジャックルの加藤誠司プロが3位に入賞しました。今シーズンの加藤プロは「Bワールドプロトーナメント」でハイスコアを出してたんですけど、1日とか2日だけで3日間はずかす、上位入賞はしても表彰台に上がることはできませんでした。そのためワンデー加藤と呼ばれてたんですけど、とうとうやってくれました。

加藤プロがメインに使ったのは、パワーホグのテキサスリグだそうです。それでウィードを1本1本ていねいに狙っていった結果、初日は3尾で6005g、2日目は4尾で7405gという型ぞろいのバスをキャッチしました。これって1尾平均1900g以上ですから、アフタースポーニングシーズンであることを考えれば、平均約50cmというすごい釣りです。

なぜ加藤プロがテキサスリグを使ったかと言うと、そういうパターンひらめいたということもあるんですけど、それは別の大きな理由があります。このところのトーナメントで徹底してクランクベイトとかをキャストしまくったために、肘痛が出ちゃったんだそうです。お医者さんの診断はテニスエルボーだそうで、そのためにハードルアーを使えなくなってしまったのでソフトベイトに走ったというのが今回のトーナメントの本当の勝因です。下野正希プロは「それって四十肩ちゃうのん」とうれしそうに言っていました。それを聞いた加藤プロは「肩じゃなくて肘です」と、まるでオヤジグループに入れられたくないとばかりに、まわりのみんなに言いまくってます。

加藤プロが使ったのはテキサスリグだけじゃなくて、ジャツカルから今月発売になるバニードモイサイズをキャッチしたそうです。これって、アフタースポーニング回復バスがウインドエリアで浅くサスペンドしてるのをシャロークランクベイトやミノーで釣るのと同じパターンですよ。池原タムのようなリザーバーの立ち木にサスペンドしてるバスにも効くんじゃないかという気にさせてくれますから、加藤プロ、タイミングよく、いい仕事してます。

6月上旬の琵琶湖は天気よ過ぎてバス釣れてません

琵琶湖ホット情報(2002/06/05)

ここんとこ天気がよ過ぎて、滋賀県琵琶湖はバス釣れてません。一部のアングラーは釣ってるんですけど、とても渋いのをあの手この手でなんとが取ってきてるって感じです。

いい天気が続いて水温の上昇がハイペースです。南湖は広い範囲で25度を超えていて、シャローエリアの一部には27~28度になっている所もあります。バスはアフタースポーニングから回復してきてるんですけど、それよりも天気がいいのと水温が上昇が急なことのプレッシャーの方が上回ってるためにスローなパターンになってるようです。

リプレフィッシングガイドの河畑文哉プロのように、少しでも条件のよいエリアを絞り込み、同時にスローなバスを食わせることができる一部のアングラーだけがいいサイズのバスを釣ってるのは、そういう条件から生じる結果じゃないでしょうか。

元気が回復してきてエサを食いたいバスはいるんですけどね。それを強い日射しと水温の急上昇が押さえ付けてしまってる感じがです。それでもなんとか釣ってるアングラーは、ほかのアングラーが釣れない魚を釣ってるわけですから、これって難しいけどけっこう手堅いパターンになります。釣果がとても偏ってるのはそういうことです。

北湖の水温も25度を超えてる所が多くなりました。スポーニングのビッグバスはあちこちでバラバラと釣れただけで北湖のスポーニングシーズンはいつの間にか過ぎてしまい、気が付いたらアフタースポーニングのバスが釣れだしてるのが今の状況なんですけど、一時よりいい状態になってるのは間違いないようです。下野正希プロは5月28日のフィッシングガイドで6cmオーバーを3尾キャッチしてきたんですけど、それと同じような釣りをしたという話をときどき聞くようになりました。

岸釣りは北湖の川尻周辺が面白くなってきてるようです。日中は6cmまでの数釣りなんですけど、朝夕と夜間は大きなバスが上がっています。中には6cm近いビッグバスも出てるよ

うです。

それにしても、2週間ほどの前の長期予報では、今年は梅雨入りが早くて6月始めごろには近畿地方も梅雨になるって言ってませんでした。梅雨、どこ行っちゃったんでしょねえ。琵琶湖周辺は天気がいいだけじゃなくて、本当に暑くて真夏のような天候が続いています。釣りに出られるときは、日焼けと暑さ対策をお忘れなく。日射しが本当に強いのは、真夏じゃなくて梅雨前の天気がいいときですから、油断したらひどいめに合いますよ。

琵琶湖利用適正化条例の要綱案を滋賀県が発表

琵琶湖ホット情報(2002/06/19)

6月18日、滋賀県は「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」の要綱案を発表しました。この条例には、バスアングラーにとって気になるバスのリリースと2サイクルエンジンの使用禁止に関する項目が含まれています。

要綱案によると、外来魚を釣った後の再放流を禁止、住宅密集地などの騒音防止が必要な場所にレジャー用動力船の航行規制水域を設ける、2サイクルエンジンは2006年4月からの使用を全面禁止、すでに所有されている2サイクルエンジン搭載船は2011年3月末までの使用を認めることになっています。

滋賀県は要綱案を公表し、滋賀県民の意見を募った上で条例案を作成、9月議会に提案、来年4月の施行を目指すとのことです。これに対し、県内の釣具店やレンタルボート店などの関係団体では、要綱案通りの内容で条例が施行された場合、バスフィッシングへの影響があまりにも大き過ぎるとして対応策を検討中で、100人規模のデモを行うことや県知事に要望書を提出するなどの案が出ています。

要綱案については滋賀県のホームページにすでに掲載されていますので、興味がある方はぜひごらんください。6月18日から7月18日までの間、メールによる意見や情報の募集が行われています。バスアングラーの皆さんも、これを機会に積極的に意見表明されてはいかがでしょうか。ただし、このような意見募集の結果がどれくらい条例案に反映されるかは大きい疑問ではありますが……。

BCC服部の意見としては、この条例は本来、水上バイクを含むプレジャーボートによる騒音や水質汚染、事故などを防ぐために琵琶湖利用の適正化を図るためのものだったんじゃないかと思うんですね。新聞報道などでも、常にその点が強調されていました。ところが要綱案が公開されてみると、外来魚の問題が一緒にたにされてたわけです。

これって、いかににも、この際だから一緒に片付けちゃって感じで外来魚対策が要綱案に盛り込まれたんじゃないかという気がします。その結果、釣ったバスをリリースしたときの罰則規定を設けることもできなかつたんじゃないでしょうか。それと、滋賀県がアングラーや業界の意見をちゃんと聞いたっていう話も聞いたことがあります。こっぴどいやり方って、いかににも官僚が考えそうなことですよ。

県条例で何かを決めるとなれば、これは滋賀県民がどう考えるかという問題ですから、大阪府民であるBCC服部が何を考え、何を言おうと、あくまで外部意見ということになってしまします。滋賀県民の皆さんには県に対して直接働きかけていただくとして、県民以外の

者は何ができるかを考える必要が大いにありそうです。

琵琶湖にひさしぶりの雨。梅雨の好機到来か!?

琵琶湖ホット情報 (2002/06/21)

6月20日の滋賀県琵琶湖はひさしぶりの雨になりました。夜のうちから降りだした雨は午前中けっこう強く降って、午後から夜になっても傘をささないといけないくらい強い強さです。ずっと止むことなく降り続いていきます。19日までの真夏のような天候から、いきなり梅雨が舞い戻ってきたって感じですよ。

天気予報で雨が降るって言うってたんですけどね。このところ、降る、降るって言うってはいせいで曇り空か、いい天気になったりしてたもんですから、どうせ降っても大したことないだろうと油断してました。そんなところへ、しつかり雨が降ったもんですから、やっぱり梅雨だったのね、とあらためて納得しちやいました。

6月に入ってからの琵琶湖の水位は、雨が降るたびにピクッと上がりはするんですけど、全体的には下がりが続いていて、この一週間ほどは毎日きっちり1cmのとても順調なペースで下がっています。水温の上昇は、一時曇り空が続いてスローダウンしかけたときもあつたんですけど、この一週間ほどの晴天続きで、また勢いよく上がり始めました。特に、遅れていた北湖の水温上昇がこのところ顕著です。

そんな状態のところ、雨が降ったわけですから、これはバス達にはいい刺激になるんじゃないかと思ったら、リフレフィッシングガイドの河畑文哉プロが釣ってきました。20日は雨の中のガイドでComオーバーを2尾です。

しかも、ルアーはペンシルベイトのボニータです。いきなりトップウオーターですから、かいて感じなんですけど、今シーズンの琵琶湖は本当に何が起こるかわかりませぬえ。詳しくは河畑プロのサイトをのぞいてください。それと、琵琶湖大橋から北のウィードエリアがよくなってきてるそうです。これから本格的な梅雨空が続くようなら期待できるかもしれませぬ。

リリース禁止反対イベントを急ぎよ開催。署名運動も 琵琶湖ホット情報 (2002/07/04)

滋賀県が発表した琵琶湖利用適正化条例の要綱案にバスのリリースを禁止する項目が盛り込まれたことを受けて、7月6日に滋賀県琵琶湖の彦根港でジャッカルに加藤誠司プロ、小野俊郎プロらが参加するイベントが急ぎよ開催されることになりました。詳しい内容はジャッカルホームページをのぞいてください。また、ジャッカルでは同条例案に対する反対署名を集めています。署名用紙はホームページからダウンロードできますので、ご賛同いただける方はぜひご協力ください。

真夏のような七夕の琵琶湖。水泳よりもバスフィッシング 琵琶湖ホット情報 (2002/07/07)

夏ですねえ。この週末は天候が崩れるって天気予報は言うってんですけど、滋賀県琵琶湖

は7月6日の土曜日に夕立みたいな雨が一時、ザツと降っただけで、7日の日曜日にはカンカン照りのいい天気になりました。七夕の星空は望み薄だなんて言っただけのは、どこのチャンネルのお天気おじさんですかねえ。

水泳場もオープンして、絶好の水泳日和なんですけど、まださすがに泳ぎに来る人は少なく、近所の人だけがわざわざ来てただけです。7日の真野浜水泳場を午前と午後、2回のぞいてみたんですけど、バラバラッと人がいるだけでした。全体で3数人でしょうか。いい天気とは言っても、まだ梅雨は明けてないし、夏休みにも入っていないから無理はないんですけど、どこの水泳場もガラガラです。

その真野浜水泳場の沖でバスボートが釣りをしています。琵琶湖のバスフィッシングはすっかり夏らしく、水泳場の沖でバスが釣れるようになってるんですね。

それと、真野川尻に立ち込んでるアングラーが5人以上いました。その場所がやっぱり夏らしくて、川尻よりもかなり北寄りの水泳場に近い側なんです。こちら側は比較的フラットボトムになっていて、水泳場の沖から続いている広いウィードエリアがまばらになるあたりが夏場のポイントになります。冬から春先にかけてのビッグバス狙いのときは、もっと南寄りの川尻近くから琵琶湖大橋に向き合うぐらいの所がポイントなんですけどね。ですから、水泳場寄りに立ち込んで釣りをするアングラーが多くなって、投げるルアーがキャロライナリグやバイブレーションプラグ、朝のうちはペンシルベイトなどになってきたら、そろそろ夏が近いということです。

真野川の河口近くに架かる橋の上からバスの姿を見ることができました。30cmちょっとのが、あちらの倒木の陰に1尾、こちらのブッシュの陰に1尾と見える範囲に3尾、20cmぐらいのは5尾ぐらいの群れになって2カ所に分かれて泳ぎ回ってます。おそらく川の中の方が水温が低くて居心地がいいんじゃないでしょうか。つまり、真野川河口周辺あたりでも日中の水温はかなり高くなるといことなんじゃないかと思えますよ。

琵琶湖の水位は6月末からの雨で上昇してるんですけど、この調子だとまた下がり始めるかもしれません。台風5号は日本海で温帯性低気圧になってしまいました。そして太平洋のはるか沖合では、次の台風6号が沖縄から九州、四国地方をうかがいながら進んでいます。今の位置と進行方向からすると、6号の方が5号よりも近畿地方に影響が大きいかもしれません。もし台風6号がまともに来たら、そのままの勢いで梅雨が明けてしまう可能性もあるので、この夏のバスフィッシングを占う意味も込めて、ここしばらくの天候変化には注意が必要です。

加藤誠司プロとその一味。なんだかんだで大忙し

琵琶湖ホット情報(2002/07/09)

6月18日に滋賀県が発表した琵琶湖利用適正化条例の要綱案にバスのリリースを禁止する条項が含まれたことは皆さんもご存じだと思っただけですけど、それに対して、いろんな人がいち早く、自分にできることをやるよというこで行動を開始しました。

その中の1人、加藤プロはただでさえ忙しい毎日が益々忙しくなっていました。日中、会社にいられる時間がなかなかありません。もちろん、ルアーデザインの仕事もしないとい

けませんし、来週には地元の琵琶湖で「ワールドプロトナメント」が開催されますから、その練習もしないといけません。それでも、忙しい時間をなんとかやりくりしてでも走り回っているのは、自分やジャッカルのことを応援してくれているバスアングラの皆さんのために、今できることをしないではいられないからです。偉そうなことだけ言って、実は何もしてない人達とは、考えてることが全然違うんですね。

加藤プロの行動を見ると、バスフィッシングが本当に好きだというのは、こういうことなんじゃないかと思ってしまう。何かを好きだっていうことの中には、自分がその何かをどれだけ好きで楽しんでいるかだけじゃなくて、好きな何かのために自分がどれだけのことができるか、何ができるかということも、加藤プロぐらいのレベルになってくると当然含まれてくるわけで、彼女や奥さん、彼氏や旦那さんを好きだということのも、釣りが好きだということのも、その点では同じことです。

そんな加藤プロをバツクアツプする会社のスタッフは、もろにあおりをくらってしまっていたいへんなんですけど、それができてしまつてからジャッカルという会社も大したものです。偉そうなことだけ言って、実は何もしてない会社（メーカーだけではありません）の人達とは、ものごとに対する問題意識の持ち方や取り組み方が本質的に違うんですね。その根底には、やはりスタッフ全員、バスフィッシングが大好きだということがあると思います。その「好き」の度合いが、何もしようとしてない会社の人達とは違うということです。

こういうことを言うと、釣りの世界では「そんなことはない」という異論がすぐに出てくるんですけど、そうおっしゃる方には、それなら自分は何ができるかということから問いただしていただきたいと思いますが、つまり、実際に行動を起こしている人達に対して何かを言うのは、言う側も実績を残してから、あるいは少なくとも行動を起こしてからにしたいです。やりたいということも、「意見も言えないのか」と反論される方には、選挙にも行かないで意見だけ言っても仕方ないという言葉をお贈りします。そういうのは意見じゃなくて、感想って言うんですよ。

インターネットのホームページや掲示板に意見を上げてくれるだけの人が、「自分達の意見も聞かないで」とかいうケースがよくあるんですけど、その意見にどれだけ説得力があるかと、重みがあるかと、ただひたすら楽で手取り早い方法で垂れ流してただけでは、誰も読みも聞きもしてくれません。その意見をどういう方法で訴えるかということが大事で、それが行動に直結します。例えば、ある雑誌の編集部に見解のメールを送ったけど無視されたとしても、そのときに、ひたすらメールを送り続けるという方法もあるかもしれませんが、編集部へ直接乗り込む方がはるかに効果的です。そうすれば、意見を取り上げられる確率は、はるかに高くなるんじゃないかということです。

これが相手が県や議会、政治家、官僚といったことになってきたときに、何をどうすればいいのかということも、さしあたっての問題なわけです。自由主義経済と多数決による民主主義を基盤としている日本という国で、県条例をどうこうしようというときには、どこへ行って誰を相手に何をすればいいのか。実際の問題はそれほど単純ではありませんが、まあそういうことです。加藤プロが取り組んでいるのは、まだそのほんの取っ掛かりのところなんですけど、最終的にはそういう仕事になってくるのかもしれません。日本釣りなんかか会っていい

のは、一般の釣り人にかわってそういう仕事をするためにあつたんじゃないかと思ってたんですけど、今さら加藤プロが出張らないとできなかつたんですかねえ。

琵琶湖の水位が急上昇。釣行にはくれぐれもご注意を!! 琵琶湖ホット情報(2002/07/10)

台風6号が接近してる影響で滋賀県琵琶湖の水位が急上昇しています。7月9日朝にマイナス28cmだった水位は、10日朝にはマイナス20cmまで上昇しました。琵琶湖の水位が1日と10cm近く上昇するのはたいへんなことです。台風の影響で9日夜から降り始めた雨は、滋賀県東部と南部で特に強く降っています。台風は3日お昼過ぎから夕方にかけて紀伊半島の沖合を通り抜けて東海、関東方面に向かうことが予想されているため、これからさらに雨が降る可能性があります。琵琶湖の水位の上昇はこの後もしばらく続き、河川から流木や大型のゴミが流れ込むことが予想されます。川からの濁りはすでに広い範囲に広がっていて、琵琶湖全域がひどい濁りになってしまつてもかもしれません。台風が行った後も、しばらくは影響が残りそうですので、今週後半の釣行はくれぐれもご注意ください。

立て続けの台風でひどい濁りになった琵琶湖

琵琶湖ホット情報(2002/07/16)

台風6号と7号が立て続けに来て、滋賀県東南部に大雨が降りました。その影響で、琵琶湖はひどい濁りになってしまいました。北湖も南湖もほぼ全域に薄茶色の濁りが広がっています。一部は泥濁りになっています。

琵琶湖周辺に大雨が降ったのは、岐阜県大垣市に大雨を降らせて洪水が発生したのと同じ梅雨前線の端っこが滋賀県の一部に引つ掛かっていたからなんです。琵琶湖の水位は7月9日のマイナス28cmを境に急上昇し始めて11日にはマイナス6cmを記録。その後は15日のマイナス15cmまでいったん下降し、16日にはマイナス13cmとふたたび上昇しています。しかしながら、台風7号の雨は台風6号のときほどではなく、水位の上昇もそれほど極端ではありません。

問題は濁りです。湖東の野洲川は台風6号の大雨で濁流になったままのところへ、また台風7号の雨が降ったために、まだ当分は濁りが取れそうにありません。他の流入河川も濁りがひどく、それが琵琶湖へ流れ込む状態が1週間近く続いているために、琵琶湖の濁りはぜんぜんましになりそうにありません。

大津市今堅田のBBC事務所の窓から見える真野川もひどい濁りになっています。琵琶湖に流れ込んだ濁り水が、はっきりとした境目を作ったまま琵琶湖大橋をくぐり抜けて南湖へと流れています。その濁りの外側の真野浜側に立ち込んで釣りをしてるアングラーがいるんですけど、釣れてるんでしょうか。もしかしたら、大爆釣になってたりして……。そんなことも考えてしまつぐらい濁りの影響は強そうです。

新しいジャッカル琵琶湖研究所から見える小野のアシ原も、岸近くは泥濁りになってしまつています。その沖は薄茶色の濁りになっていて、複雑に蛇行した境目ができています。岸近くの濁りは、研究所のすぐ横にある小川から濁った水が流れ込んだのが原因なんです。

ね。こういったひどい濁りが部分的に入ってしまったる所が琵琶湖のあちこちにあります。

この濁りがどう影響するかは、今週末に琵琶湖全域をエリアに開催される「ワールドプロトーナメント」の結果を見ればよくわかると思います。まだブラクティスも始まってないんですけど、下野正希プロは「この台風の濁りで、今までプリブラしてた」データが「破算になるはずや。ぜんぜん釣れんようになってたら、面白いトーナメントになるんやけどね」と言っています。

それともう一つは、大量の雨水が流れ込んだことが、夏のバターンに影響するかもしれません。表層の水温はそんなにかわってないんですけど、梅雨明け以降が涼しかったりすると、今年の琵琶湖はサマーパターンが成立しなかったというよくある現象がもっと強く出てくる可能性があります。そのあたりも要注意がもしれせんね。

アングラーのポートが増え始めた夏休み直前の琵琶湖 琵琶湖ホット情報(2002/07/19)

夏休み直前の琵琶湖は、7月8日頃からバスアングラーがジリジリと多くなってきました。15日から21日まで開催されてる「ワールドプロトーナメント」の観戦をかねてというアングラーも多いみたいで、ポートの数が目立って増えています。

18日のブラクティスで下野正希プロが釣りをしていたら、「来た、来たっ」って感じで、すぐにまわりを5隻以上のポートに取り囲まれたそうです。20日、21日の連休は天気がよくなりそうですし、けっこうにぎやかなことになるんじゃないでしょうか。

台風2連発の濁りはかなり取れかけてます。北湖の沖合の水質はクリアになりつつあって、岸寄りでもササ濁りのちよどい状態の水質になってる所が多いようです。まだ一部には濁りのひどい所が残ってますが、この週末あたりはバスフィッシングにちよどいタイミングになるんじゃないでしょうか。朝夕や、日中でも曇り空のときなどは、思い切ってトッポウオーターで狙ってみても面白いと思いますよ。

台風一過、二過、三過。いよいよ夏本番の琵琶湖 琵琶湖ホット情報(2002/07/28)

7月28日は大阪と京都で気温が37度を越えたんですね。枚方はなんと38度を越えたそうです。去年の夏は暑過ぎて海水浴に行く人も減ったというほどの猛暑で、釣りに行くのをやめる人も少なくなかったんですけど、今年も台風の連続攻撃が終わったと思ったら、いきなりこの暑さです。お天気が極端過ぎますよね。「中間はないんか」と言いたくなります。

27日土曜日の真野浜水泳場は、近所の人しか来てないんじゃないかって感じで、遊びに来てる人数の割に駐車場の車が少ないんですね。真野浜だけじゃなくて、ほかの水泳場も人出はいまいちのようです。台風や何やかやで天候が安定しないために、行楽客がどっと繰り出す弾みが見つからないんでしょうか。台風が行った後はいい天気が続いていますから、夏本番になって人が動くようになるのはこれからかもしれませんね。

台風9号が九州の南から東シナ海へと進んだ影響で、琵琶湖は17日頃から東の風が強くなつて、それが28日まで続きました。バスポートでも北湖を走るのちよどと厳しいぐらいの

大荒れです。26日の午後は、走り屋の杉戸繁伸プロが週末のガイドのブラクティスのために釣りに出ようとしたところで中止してたぐらいてすから、荒れ方は半端ではありません。

翌日は風が止んで、夏らしい天気になりました。と言うより、風が止んだら暑過ぎます。琵琶湖大橋下にはシールドバターのアングララーが集まってきました。

朝からガイドに出てた杉戸プロは、30分前後は釣れたけど、午前中は大きいのはなしでした。前日、ブラクティスを中止しながらも、「大きいのは南湖ですよ」と自信たっぷりに言ったのと結果が違うやんかって感じですよ。さすがに、いかにも夏本番らしいお天気になって、バターンがかわつちやつたんでしょか。そのあたりの詳しいことは、今後のガイドの結果と合わせて、杉戸プロ自身のレポートをお読みいただきたいと思います。

暑いと言え、琵琶湖大橋東詰の料金所下は沖の方までウィードが水面を埋め尽くして見るからに暑苦しくなつちやつてます。「この夏は、こういう場所があるかと思うと、あれっ」と思つほどウィードが少なくなってる場所もあるんですよ。バスが沖へ沖へと移動しながらシールドを求めるこれからのシーズン、このウィードの状態の見極めがサマーバターの攻略のカギになるかもしれませんよ。

夏休みの琵琶湖にアングララーが少ない理由

琵琶湖ホット情報(2002/08/07)

夏休みだというのに、滋賀県琵琶湖はバスアングララーがそんなに多くありません。なんせ暑いですからねえ。水泳場だって人出はバラバラです。

その水泳場の近くで見かけるのが、いかにも外してるポイントで、昨日買ってきましたって感じのタックルを使って釣りをしてるアングララーです。夏休みって、こういうにわかアングララーが多いのがいつものことなんです。けど、この夏に限っては、そんなアングララーの数も少なくて感じます。

夏休みらしい盛り上がり欠けるのは、滋賀県が琵琶湖利用適正化条例でバスのリリースを禁止しようとしている影響が早くも出てるのかもかもしれません。「琵琶湖へ泳ぎに行つたついでにバス釣りできないんだつたら、海へ行つて泳ぐついでにイカ釣りしようよ」というようなことが早くも起こってるんじゃないでしょうか。その影響は、琵琶湖へバス釣りに来る人数から考えれば決して小さくないかもしれません。水泳場だけじゃなくて、これからきつというんな所へそういう影響が波及していきんでしょうね。

確かにバスも釣れてないんですけどね。トーナメントで釣れたって言ったって、レベルの高いアングララーの中だけの話です。一般のアングララーは、「だからどうなの」って感じで簡単には動こうとしません。自分達が行つても簡単に釣れるわけがないということを見んなよく知つちやつてますからね。

バスが釣りにくいのは、南湖のウィードが多過ぎるということが原因の一つとして考えられます。シャローのウィードエリアは水面をウィードが覆い尽くしてしまつてるところが多くなつてますし、その沖側もウィードが多過ぎて、例えばバスがいたとしても、どうやって釣つたらいいのか、簡単には手を下せない状態になつちやつてます。水位の低下がそれに追い討ちをかけてるから、ますます釣り難いんですよ。

琵琶湖の水位は、8月7日現在すでにマイナス40cmまで下がっています。この調子で下がり続けられたら、8月後半にはマイナス50～60cmを下回って、取水制限とかなんとか、また世間が騒ぎだすかもしれません。それだったら、今からなるべく水を減らさないようにすればいいと思うんですけど、そういうわけにもいかないですよ。なにしろ、琵琶湖の整備や維持管理には、下流の京都や大阪、兵庫（神戸市の水道水にはかなりの割合で淀川の水が使われています）などからのお金も使われていますから。下流へ流す水の量を大幅に減らすとなったら、琵琶湖だけの事情ではできません。

つまり、琵琶湖は滋賀県だけのものではないし、滋賀県だけではとても面倒見切れないという事です。BRCの本部は東大阪市民なんですけど、東大阪の水道水って、大阪市が淀川から取水した水を分けてもらってたはずですよ。それだったら、BRCの本部が払ってる水道代の一部は琵琶湖をどうにかする予算に使われてるはずなんですよ。現在の悶々とした状況から思うに、水道代しばらく払わんといたるかな……これって、八つ当たりというものでしょうか。

南湖がよくないんだったら北湖へ行けばいいんじゃないかとなるんですけど、北湖の釣りって南湖にくらべると難しいんですよ。夏に狙うのは、水深10m以上のデーブエリアとか、5m前後のウイードエリア、河口周辺、岩場、沈みエリなどですから、それをどうやって釣つたらいいのかわからないことを知らない手も足も出ません。

現在の状況は、北湖の広い範囲で水温が例年同時期よりも高めになっています。この水温の高い層がどのくらい深いレンジまで広がっていくかによって、バスの釣れる深さがかわってきます。特に大きなバスほど、高水温を嫌って深い所へ動く傾向が強いので、そのあたりのチェックと判断が重要になってきます。水深10mとか、あるいはそれ以上、思い切った深く狙った方がいいかもしれません。これから先、8月半ばから後半にかけては、そういう傾向が強くなるか、逆に早くから秋っぽいパターンになっていくかが、その夏の天候によって大きく分かれるので、状況変化に注意しながら釣っていく必要があります。

それにしても、とにかく暑過ぎます。昨日も、いつも岸釣りに来てるアングラーが、「朝のうちにがんばってみたけど、ぜんぜん釣れなかった。暑くなってきたから、今日はもう帰る。」と言っていました。日中に釣りをする場合は、あまり無理をせず、水分を多めに取って、熱中症などにならないように注意してくださいね。

お盆休みに突入した琵琶湖で杉戸繁伸プロが爆釣!!

琵琶湖ホット情報(2002/08/10)

お盆休みに突入した8月10日、琵琶湖ガイド情報の杉戸繁伸プロが友人と一緒に琵琶湖北湖へ釣りに出て、45mクラスを含む約30尾のバスをキャッチしました。エリアは今津までの範囲で、水深5m前後のウイードエリアを中心にクランクベイトやスピナーベイトなどの巻き物系ルアーで攻略したそうです。

表面水温が30℃程度もあったにもかかわらず、風当たりのシャローエリアのバスは思った以上に活発で、ハイスピードな釣りに気持ちよく反応してきました。ジャッカルから発売されたばかりのサーフェスプラグ、バーナーを水面ぎりぎり泳がせていると、波しぶきを上げ

ながら元氣よく飛び付いてくるシーンが何回もあつたそうです。北湖は水温がとても高くなつてもかかわらず、バスは意外と浅い所にいるのかもしれない。

早くも秋の気配が漂い始めたお盆休み終盤

琵琶湖ホット情報(2002/08/18)

今年のお盆休み期間中に琵琶湖へやって来たバスアングラーは、日によって極端に多かつたり少なかつたりという事はなかつたようです。アングラーが多かつたピークは15日頃で、その後、17、18日の週末になつても、まだけっこう大勢のアングラーが来ています。予定されていた「トーナメント」は台風33号の影響で中止になつたんですけど、琵琶湖へ来ていた選手達は大勢がそのまま帰らずに釣りに出ていました。その分が上乘せされて、お盆休み終盤のアングラーが多くなつたのかもしれない。トーナメントエリアの南湖の沖合に浮かんるボートがこの週末に目立つたのも、そのせいじゃないかと思えます。

下がり続けてた琵琶湖の水位は、16日にマイナス50cmになりました。水温は南湖で30度前後、北湖もあちこちで28、29度まで上昇していて、例年にくらべてかなり高めなんですけど、バスの釣れ方が真夏のパターンにはまってるかという点、意外とそうでもありません。

そのあたりの見切りが難しいのがこの夏の特徴です。おまけにトーナメントが開催されない普段の週末よりアングラーは大幅に多いので、がんばってる釣ろうと思つと苦労することになります。お盆休みに限つては、そういう釣れる釣れないの結果にこだわらないで、カッブルやファミリーで楽しくやつてるアングラーが多いんですけど、それでもそこそこ釣れ

たというアングラーがけっこういましたから、状況としては決して悪くはなかつたんじゃないでしょうか。ただし、日によるムラはけっこうきつかつたようです。

10日に北湖で爆釣した杉戸繁伸プロは、17日もガイドで釣りに出て、同じように釣れるエリアを探し回つたんですけど、マメは釣れても30cmオーバーがなかなか釣れませんでした。ところが翌18日はコロツと状況が変わつて、40cmオーバーを含めてふたたび爆釣でした。場所は10日のときとはかわつてたんですけど、釣れ方は同じような感じだったそうです。杉戸プロから簡単なレポートが届きましたのでご紹介しておきます。

「17日は3人で3ヶ所、メインはツネでした。先週の場合はほとんどダメで、いろいろ回つてなんとか釣ってきた感じでした。水深は4〜6mで、特に南湖は水が今一つで難しい状況でした。18日は、午前中なら風も大丈夫と思ひ、北湖のみで釣りをしてきました。やはり先週のリターンはまったく気配がない状態でした。そこで、自分が普段の8月には行かないエリアを回つたところ、水深6mのワイドに魚があり、普通のツネでボトムを釣つていましたが、ポツポツ釣れる程度。それをツネ、ジグヘッドのフール、スイミングでやってみると入れ食いとなり、2人で2尾以上釣ることができました。ただサイズは小さいです。キロサイズは2本出ました。ちなみにこのエリアは9〜10月になつてからチエックする所でした。もう9月かも」

杉戸プロがこう言うからには、琵琶湖はもう秋なのかもしれないですね。

下野正希プロも「バスは秋の場所にあるね」と言ってます。下野プロはお盆休みの間、毎日ガイドに出ている、結果は30cmオーバーが釣れたり釣れなかつたりでした。数釣ろうと思

えば釣れるけどサイズが小さい。大きいのは秋の場所にいるけど、パターンがたまりきつてないのか、まだちょっと不安定。その結果が、釣れたり釣れなかったりということのようです。

琵琶湖の天候は「日」が北寄りの風で晴れ。「日」は北西の風がやや強くなって、午後には曇り空からバラバラと雨が落ちてきています。北寄りの風が吹いているのは台風の影響らしいんですけど、この「日」号台風、太平洋のはるか沖合を北東へ向かっています。これで一気に秋になってしまふというほどの影響はないかもしれません。これからどれぐらいの雨風になるかによって、季節の別れ目になりそうな微妙な情勢です。

台風13号の影響で琵琶湖は一気に秋にかわるか!?

琵琶湖ホット情報(2002/08/19)

8月16日の滋賀県琵琶湖は、太平洋の沖合を通過中の台風13号の影響で北寄りの風が強くなっています。本当の大荒れというほどではないんですけど、北湖へボートを出して釣りをするのは無理なぐらいの荒れ方です。風が強かったのは「日」日夜から「日」朝の間でした。その間は上の写真よりも波は高かったんじゃないかと思えます。

雨は「日」日にバラツと降っただけで、その後はほとんど降ってません。台風13号はすでに関東の沖合へ向かっていますから、この後、風は次第に弱まり、雨も結局は大して降らないまま終わるんじゃないでしょうか。

バスフィッシングへの影響なんですけど、波が高かった北湖で水温が下がってれば、一気にかわるんじゃないでしょうか。北湖はかなり面白そうです。南湖は広い範囲でひどい濁りになっちゃっています。この濁りがどう影響するかですな。

バスも釣ってる下野正希プロ。J田戦9位入賞

琵琶湖ホット情報(2002/09/01)

イシダイ釣りが趣味の下野正希プロは、仕事のバス釣りも手抜きはありません。その証拠が上の写真です。8月30日、31日に滋賀県琵琶湖で開催された「Bトップマスターズトーナメント」で9位に入賞しました。下野プロはうれしそうに桶を見せながら「バスもちゃんと釣ってるから、そう書いといてや」と言っていました。

下野プロがトーナメントでバスを釣ったのは、すべて北山田のウィードエリアで、水深2メートルもないシャローエリアだそうです。初日が5尾、3676gで24位。そのうち1尾が大きくて、それ以外はただのキーパーです。2日目は2尾で3935g。つまり、50cm級を2尾釣って初日の5尾よりもウエイトを伸ばし、順位を大幅にアップしました。初日はノンキーがたくさん釣れたけど、2日目は同じ場所で大きいだけの一発勝負みたいな感じになりました。これって、トーナメントのプレッシャーでしょうか。

下野プロが使ったのはテキサスリグで、ワームはズームのデッドリンガーだそうです。こう書けば、どんなポイントでどんな釣り方をしたかはだいたい想像できますよね。比較的密度の高いウィードの中を引いてきて、ウィードにからめたり、落としたり、ウィードのボケ

ツトの中でアクシジョンさせたり、そんな感じですよ。同じ場所で常吉リグで釣ってる選手も多かったんですけど、大きなバスを釣ってるのは見なかったと下野プロは言っていました。これって、軽いリグよりも重めのリグの方がウィードの中へ入れたりしやすいからいいということなのかもしれません。

トーナメントが終わった後は、〇釣リビジョンのスタッフの人が下野プロの家へ打ち合わせに来てました。翌9月1日は木浜で開催されるイベントで、下野プロは何をさせられるかよくわからないけど司会役なんだそうです。このイベントの準備やら前乗り込みで、いろんな所のいるんな人が大勢琵琶湖へ来てて、そのついでに打ち合わせやら何やらかやらで動き回ってるんですね。その相手もしないといけないバスプロはたいへんです。

イベントが終わった翌日の9月2日から、下野プロは千葉の雄蛇ヶ池へ雑誌の取材に行きます。「イシダイ釣りは当分だけへんね」と言いながら下野プロは、「トップだけ持って行って、それでもこれだけ釣れるっていうのをやったらうかな」と雄蛇ヶ池へ行くのをけっこう楽しみにしてる様子でした。

真夏の暑さがぶり返した琵琶湖。それでもパターンは秋 琵琶湖ホット情報(2002/09/02)

8月30、31日に滋賀県琵琶湖で開催されたEトトップマスターズトーナメントで下野正希プロが9位に入賞したことは9月1日のBBC HOT情報でお伝えしました。そのときのパターンは赤野井沖のシャローウオーターで、けっこう秋っぽい釣れ方をしています。

下野プロはそれ以前から、琵琶湖のバスフィッシングのパターンはすでに秋にかわりつつあると言っていました。ところがトーナメントのプラクティスが始まる頃から、台風15号の影響で南からの暖かい湿った風が吹き込んだため、また真夏が帰ってきたような暑さがぶり返しました。それでも水中の季節感はかわってないってことなんですよ。トーナメントで釣れなかった方のパターンは、8月22日のレポートでプリプラクティスはばっちりだと豪語してた杉戸繁伸プロが解説してくれるはずですので、そちらも合わせてお読みただければ、けっこう面白くて参考になるんじゃないかと思えますよ。

夏休みの終わりに週末が重なった8月31日、9月1日は、けっこう大勢のバスアングラーが琵琶湖へ釣りに来ていました。それ以外の水遊びや観光の人も多くて、琵琶湖周辺の道路はひどい渋滞になった所もありました。上の写真は琵琶湖大橋から木浜にかけての釣り風景なんですけど、夏休みらしくレンタルのローボートやゴムボートが強い南風の中でがんばって釣りをしています。拡大写真をこらんだだければ、対岸の木浜の湖岸道路が渋滞してるのがわかると思います。撮影したのが1日の午前5時過ぎでしたから、ちょうど佐川急便体育館でイベントが始まった頃です。おそらくその渋滞なんですよ。

琵琶湖の水位は2日早朝にマイナス6cmまじり、マイナス7cmを割るのは時間の問題です。台風15号の影響による雨で、30、31日頃には減水が足踏みしてんですけど、その後、雨が降らなくなると、また勢いよく下がり始めました。おかげでシャローウオーターが干上がったしまってる所があちこちにできてしまってます。その先はウィードが水面を覆ってしまっていて、そこへ強い日射しが差し込んでるのを見ると、暑苦しくてとても釣れそ

な感じがしません。

これからの時期に狙い目になるのは、そのさらに沖のウィードの密度が変化する所です。それが水深2メートルなのか3メートルなのかは、ウィードの生え方と水温、気象条件によってかわってきます。水温はお盆休みの終わり頃に台風15号の影響による強い北風が吹いて一気に下がりました。その後、南湖の水温はやや上昇しました。北湖の水温はあまりかわってないが、場所によっては下がる傾向の所もあります。

バスは釣れてくはないんですけど、釣れる場所とパターンが頻繁にかわって、その分難しくなっているようです。夏だと思って釣っていると秋だし、秋だと決め付けるにはまだ秋になりきってないし、ということでもバスもアングラーもどっち付かずになっているのかもかもしれません。300人以上の選手が南湖で釣りをしているトーナメントの2日目には5cmクラスを2尾も釣ってきた下野プロのアプローチは、それを思い切り決め付けて成功したという意味で参考になるんじゃないでしょうか。

琵琶湖バス釣り人協議会が滋賀県に意見書を提出

琵琶湖ホット情報(2002/09/11)

散らかったデスクで捜し物をしてるのはジャックルの加藤誠司プロです。大切な書類がどっか行っちゃったんですね。ジャックルは5月に新しいオフィスに引っ越したばかりなんですけど、もうすでに散らかるところは十分に散らかりまくってます。加藤プロのデスクなんか、あつと言つ間でした。

現在、アメリカではWON BASS US OPENが開催中なんですけど、加藤プロは今年US OPENに行かずに日本にいます。アメリカへ行つてられない大事な仕事があるからなんです。バスのリリースを禁止する琵琶湖利用適正化条例の審議が、今月から始まる滋賀県議会で行われます。加藤プロはこれまでもバスアングラーの先頭に立って署名運動や意見表明のためのイベント、県庁や議会に対するロビー活動などを進めてきたんですけど、それがいよいよ正念場にさしかかりました。

9月10日には日本釣り振興会の琵琶湖バス釣り人協議会(会長〓奥村豊尚、実行委員長〓加藤誠司)から滋賀県に意見書が提出されました。この意見書は、現在の琵琶湖のバスアングラーが置かれた立場を踏まえた上で、これまでの議論から一歩踏み込んだ問題解決のための具体的な提案をする内容となっています。

加藤プロがなくしたのが、滋賀県に提出するための書類じゃなくてよかったですね。

琵琶湖レジャー利用適正化条例案を滋賀県が発表

琵琶湖ホット情報(2002/09/20)

「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」の条例案が9月18日に滋賀県から発表され、19日から滋賀県のホームページで公開されました。この条例案は、6月18日に発表された同条例の要綱案に修正を加えたものです。要綱案に対して寄せられた様々な意見や要望に配慮したとのことですが、琵琶湖で釣ったバスのリリースを禁止する条項については実質的に何もかわっていません。

バスを含む外来魚のリリリースに関して、要綱案では次の通りでした。

「琵琶湖におけるレジャー活動として魚類を採捕する者は、ブルーギル、オオクチバスその他の規則で定める魚類を採捕したときは、これを琵琶湖に放流してはならない。」

それが条例案では次のようになっていました。

「琵琶湖におけるレジャー活動として魚類を採捕する者は、外来魚（ブルーギル、オオクチバスその他の規則で定める魚類をいう。）を採捕したときは、これを琵琶湖に放流してはならない。」

つまり、まったく何もかわっていないということですね。要綱案が発表されたときに募集したパブリックコメントって、いったい何だったんでしょうか。その点に関して滋賀県の自然保護課は「釣り人の理解が得られるように務めたい」とのことで、処分する魚を入れるためのイケスや回収箱の設置を検討してるんだそうです。

また、条例案には「水鳥の生息地への配慮」として次の内容が加えられました。「レジャー利用者は、琵琶湖においてレジャー利用を行うに当たっては、水鳥の営巣地その他の水鳥の生息地への保全に配慮するように務めなくてはならない。」

この中にある「水鳥の営巣地その他の水鳥の生息地」というのは、実施規則とかで指定するんでしょうけど、場合によってはバス釣りに影響が出てくるかもしれません。冬に岸釣りをしているアングラーが水鳥の群れに向かってルアーを遠投したら条例違反、ボートで走っていて水鳥が1羽でも逃げたら条例違反、そういうことになるかもしれません。

滋賀県のホームページには同条例に対する県の考え方、パブリックコメントの分析や評価なども掲載されています。また、2サイクルエンジンの使用禁止についても要綱案から変更された部分がありますので、興味がある方はぜひ確認してみてください。滋賀県のホームページの中の同条例に関するページにアクセスが異常に集中して、そのログを誰かが見るようなことがあれば、それもまた一つのプレッシャーになるかもしれません。条例に賛成であれば、それを訴えるには直接的な手段以外にも、いろんな方法があるということです。小さなことでも、できることはしておいた方がいいと思いますよ。

同じ8日に滋賀県は「湖面利用税」の概要を発表しました。湖面利用税は琵琶湖での船舶利用者に新しく納税義務を課するもので、利用者に届け出義務を課し、1隻あたり年間30000〜300000円を徴収することになっています。届け出ずみの利用者にはワッペンを交付し、それを船体に貼ることも義務付けられ、違反者には罰則が設けられます。集まった税金は湖岸の環境保全や利用者のための施設整備などにあてるとされています。

湖面利用税の対象からは漁船や行政所有の船舶が除外されるようです。琵琶湖のレジャー利用適正化条例と湖面利用税の両方が実際にスタートすれば、バスアングラーはわざわざ4サイクルエンジンに載せかえたボートを税金を払って琵琶湖に浮かべてリリースできないバスを釣ることになります。その一方で漁業者は、税金を払う必要なく漁船を琵琶湖に浮かべて、食用にならない大量のブルーギルとその数分の1あるいは数分の1のバスを獲って、それを税金で買い上げてもらうことになります。遊びで釣りをしているアングラーだけでなく、ガイドで琵琶湖へ釣りに出て滋賀県に税金を払ってるバスプロでも同じなんだそうです。

投票率わずか8%の知事選で信任されただけでしかない現滋賀政権だけに、支持をつなぎ

止めるのになりふり構ってられないんでしょうけど、やるのがこれだけあからさまだと、もう開いた口がふさがりません。バスアングラーの中にアルカイダのようなテロ組織が誕生して、その標的にされるんじゃないかと心配してしまいます。日本のような平和国家のことですから、そこまではいかないまでも、今やそれと同質の恨みを買いつつあるということを経験したことを、条例の制定を強引に押し進めようとする人達は認識してるんでしょうかね。

リリース禁止に対する公開質問状を日釣振が知事に提出 琵琶湖ホット情報(2003/09/21)

秋本番の3連休第二弾のレポート。まずは琵琶湖のレジャー利用適正化条例に関する情報から。

「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」の条例案を滋賀県が9月18日に発表しました。それに対して日本釣り振興会は18日、公開質問状を県知事に出しました。

公開質問状は条例案に盛り込まれた外来魚の再放流禁止の撤回、削除を求めるとともに、以下の項目について18日までの回答を求めています。

外来魚増加と在来魚減少の因果関係と過去10年間の科学的データの提出。

再放流禁止による在来魚保全の効果の予測。

条例施行後のバスの回収と管理方法。

条例施行前と後のバスの生息と捕獲状況の変化予測。

また、納得できる回答がない場合は再質問なども検討するとのこと、今後の成り行きが

注目されます。

秋本番の3連休第一弾初日は絶好の釣り日和

琵琶湖ホット情報(2002/09/21)

9月の3連休第二弾初日となった12日の琵琶湖は快晴微風の好天に恵まれ、大勢のバスアングラーが釣りに来ています。多いとは言っても、岸釣りもポイント釣りも入る所がないというほどではなくて、岸釣りは普段の週末よりはやや多いかなという程度、ポイント釣りはトーナメントがらみのエリアを除けば普段の週末並みです。3連休第一弾は中日の15日が一番多かったそうですから、今日よりも明日の方が多いのかもしれないですね。

バスの釣れ具合は、天気がよ過ぎるせいで、かなり難しくなってるみたいです。2人で8尾も釣った杉戸繁伸プロのようなわけにはいかないかもしれないんですけど、どこかにいいパターンはありそうです。琵琶湖大橋近くでポイント釣りをしているアングラーが、うんと沖の方で釣ってるのなんかはそれかもしれません。

現在の琵琶湖はマイナス80cmを割る大減水になってます。こういうときは少しでも水の動く場所がいいですね。おまけにシャローからのウィードが沖の方までびっしり広がってますから、ウィードの密度が適当な沖寄りのエリアで水の動きがいい場所というのがホットスポットになる可能性があります。琵琶湖大橋のすぐ北側の沖のエリアなんかは、そういう条件が揃ってるんじゃないでしょうか。

小野沖はシャローの広い範囲が干上がったままです。ポイントは沖のウィードエリ

アのさらに沖に浮かんでいて、真野寄りに集中することなく広い範囲に散らばっています。例年なら、そろそろ真野川尻寄りにボートが集まる頃なんですけどね。真野寄りはウィードが多過ぎるっていうアングラーが多くて、そのせいで釣れる場所がかわっているのかもしれない。

岸釣りは和邇川尻でいいサイズのバスをキャッチしてるアングラーを見かけました。立ち込み釣りで二人近くが並んでる中ですから、そう簡単に釣れるわけではないかもしれないんですけど、バスはいるみたいですね。

近江舞子は石積み突堤より舟だまりの出口の水路にアングラーが集まってしまいました。バスの釣れ具合は大したことないみたいです。だいたいのアングラーは、あっちで釣ったり、こっちで釣ったり、ウロウロしてました。浜の方もあまりかわりはないみたいです。

琵琶湖の水位はマイナス8cmを割った後モ下がり続けてます。1日に雨が降って、その直後だけ1cm増水したんですけど、すぐまた減水し始めました。だいたい毎日1cmのペースで減水してるので、今の調子で雨が降らないままだと10月頃にはマイナス1mを割るようになるかもしれません。現在でもボートの揚降などがかなりやりにくくなり始めてるんですけど、そうなったらいろんな所で支障が出てきそうです。

バスもバスアングラーも、この連休が終わったあたりで一雨ほしいところですね。一雨では足りないかもしれませんが、二雨でも三雨でもドカンと降ってほしいところです。誰も代弁してくれないけど、琵琶湖の在来魚達も同じことを思ってるんじゃないでしょうかねえ。

天気予報は明日の午後から下り坂になって、明後日は天気がよくないようなことを言って

ます。当たるかどうかはわからないし、このところの雨は琵琶湖をわざと避けて降ってるみたいなんですけど、琵琶湖で釣りをするんだったら3連休最終日の28日がいいかもしれませんね。

杉戸繁伸プロがゲストと2人でバス120尾の大爆釣!! 琵琶湖ホット情報(2002/09/28)

杉戸繁伸プロが9月16日に続いて、またまたやってくれました。今度は28日のガイドで、ゲストと2人で120尾です。

27日夜から雨になった琵琶湖は、コアユの接岸で絶好調。杉戸プロは湖西のウィードエリアで、午前8時30分から正午までの間にゲストと2人で約80尾程度、午後はしばらくの間ビッグサイズ狙いに走ったんですけど、バイトがなかったのでふたたび釣りエリアへ行って約10尾をキャッチしました。最大は33cm。ルアーはミノー、スピナーベイト、バイブレーションがメインだったそうです。詳しくは杉戸プロのレポートをらんくください。

しばらくぶりの雨によるコアユの接岸で、北湖は数釣りに絶好のタイミングになってます。28日の日曜日にも曇り空が続くようですから、爆釣が期待できるかもしれません。長期予報はなかなか当たらないんですけど、参考のためにお伝えしておく、来週前半まではつきりしないお天気が続くとのこと。これって大チャンスかもしれませんよ。

雨が降っても水位は上昇せず。それでもバスは入れ食い 琵琶湖ホット情報(2002/09/30)

雨は降ったんですけど、琵琶湖の水位は上昇してません。雨が降る前の27日の朝がマイナス93cmで、雨後の30日の朝がマイナス94cmですから、減水が一時的にストップしただけです。

おかげでリブレのボートヤードのスロープは上の写真のような状態になってしまいました。トレーラーを浸ける部分は水深があるから、なんとかボートを載せることはできるんですけど、それ以外は浅いのでエンジンをチルトアップして慎重に入ってこないといけません。休日とその後でボートの揚降が集中するときなんかは仕事がたいへんです。リブレから沖へ出ていく水路も浅くなってしまってるので、エンジンを使わずにエレクトリックモーターで、それも揚げ降ろし用のコードを引っ張って浅く持ち上げながら出ていくボートが多いくらいですからね。さあ釣りに行くぞ、という勇ましい感じとはぜんぜん違います。

バスの数釣りはまだ続いています。28日にゲストと2人で1.5kg尾の爆釣をした杉戸繁伸プロだけでなく、リブレのフィッシングガイドでは三村和弘プロ、河畑文哉プロもよく釣ってます。サイズは20cmくらいまでなんですけど、釣るうと思えばいくらでも釣れるくらい、1日中入れ食いが続くそうです。ひさしぶりに雨が降ってコアユが接岸してるからよく釣れるんですね。北湖のあちこちに入れ食いエリアができてます。

下野正希プロは28日のガイドで朝のうちに南湖で2kgクラスをキャッチし、1.5kgクラスをバラしています。キャッチしたのはヘビィキャロライナリグ、バラしたのはバスバイトだそうです。午後も大きいのを狙いにつたけど、マメしか釣れなかったそうです。JB琵琶湖マ

スターズトーナメント初日の27日に3kgオーバーのビッグフィッシュをキャッチした下野プロは、2日目の28日はノーフィッシュでした。その翌日の29日にまたまたグッドサイズをキャッチして、いい感じはいい感じなんですけど、下野プロは「昨日釣れとけよ」と言っていました。南湖は大きいのが釣れるけど、誰にでも釣れるというわけではなさそうです。

現在の琵琶湖北湖はひさしぶりに数釣りのパラダイスになっています。台風12号が北上したりして、まだしばらくはあやしい天候が続きそうなので、入れ食いも続きそうです。これって、気持ちよく琵琶湖バスの数釣りを楽しめる最後のチャンスかもしれません。今のうちに釣りに行つといた方がいいかもしれませんよ。

リリース禁止条例の審議が滋賀県議会でスタート

琵琶湖ホット情報(2002/10/01)

琵琶湖で釣ったバスのリリースを禁止する「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」の実質審議が9月28日からスタートしました。滋賀県議会の9月定例会の初日である25日に県知事から出された条例案に含まれるバスのリリース禁止条項は、6月28日に発表された要綱案と本質的に何もかわっていません。「琵琶湖におけるレジャー活動として魚類を採捕する者は、外来魚(ブルーギル、オオクチバスその他の規則で定める魚類をいう。)を採捕したときは、これを琵琶湖に放流してはならない」となっていて、罰則規定を設けずにバスのリリースを禁止しています。

30日には本会議の代表質問が行われ、同条例案に質問が集中したそうです。質問を受けた

県知事はリリース禁止について、「琵琶湖は外来魚に占められて危機的な状況であり、阻害要因を取り除く必要がある。努力規定では効果が見込めず、禁止に踏み込んだ」と強調し、罰則規定を設けなかったことについては、「再放流の習慣は釣り人の多くに浸透しており、社会通念上、刑罰の適用や証拠の確保が難しいためだ」と回答したそうである。

これってつまり、努力規定では効果が見込めないから条例でバスのリリースを禁止しておきなから、再放流の習慣は多くの釣り人に浸透しているなどの理由から罰則規定を設けなかったということなんですけど、話がぜんぜん違うじゃないでしょうか。努力規定で効果が上がらなかつたのは、今までバスアングラーの習慣や考え方を無視し続けてきたからです。その点を省みることもなく、2000余りにも及ぶアングラーからの反対意見を無視して、つまりバスアングラーの習慣や考え方を無視したまま、条例でバスのリリースを禁止しようとしているわけなんですけど、リリースが禁止されたらというアンケートに約30%のバスアングラーは琵琶湖ではバスフィッシングをしないと回答しています。これでは二重の意味で条例の効果なんか上がるわけがありません。

まず一つの問題点として、努力規定と罰則のない条例と何が違うんでしょうか。もし条例が施行されたら、リリース禁止を守るバスアングラーは琵琶湖に来なくなりそうです。その一方で、罰則のない条例なんか平気で無視するようなバスアングラーはいかかわらず琵琶湖へ釣りに来て、釣れたバスは平気でリリースします。きっと、マナーのかけらも見られない荒れ果てた釣り場ができてしまうでしょう。この点は、すでに多くのバスアングラーから指摘されている通りです。

それと、もう一つの問題点として、来年4月から条例が施行されて、その直後の4月と5月だけでもバスアングラーが激減し、トナメントも開催されなかったとしたら、結果がどうなるかは陽を見るより明らかです。そのために増えたバスを漁師の漁獲努力だけで獲り切れるでしょうか。あるいは、有り余るほどの予算を組んで、漁師が獲ったバスをどんどん買上げたら、それで本当に琵琶湖の外来魚は減るんでしょうか。

条例を作っても外来魚が減らなかったら、バスアングラーが条例を守らないからだという理由で、またまたその理由が本当かどうかの議論もなく、新たに罰則規定を設けようということになるかもしれません。その結果、さらにバスアングラーが減って、それで増えたバスを漁師ががんばって獲って、それを税金で買い上げるといったことになりそうです。これで誰が一番おいしいめをするかは、今さら説明するまでもないでしょう。

加藤誠司プロが実行委員長を務める琵琶湖バス釣り人協議会から提出された意見書の主旨は、条例が施行されても外来魚が減る保証はどこにもないどころか、増える可能性さえあるという点を特に問題視した上で、より現実的な妥協案を探ろうというものだったんですけど、残念ながら同協議会の努力は無に帰してしまいました。

「再放流の習慣は釣り人の多くに浸透しており、社会通念上、刑罰の適用や証拠の確保が難しい」から罰則規定を設けないというのは、バスアングラーをバカにするのもいいかげんにしろと言っておきましょう。こんなことで琵琶湖の環境を守れると本気で思ってるんだつたら、バカもバカ、大バカ者です。って言うか、本当は琵琶湖の環境を守るうなんて、これっぽっちも思っていないんでしょうか。そんなことはどうでもよくて、琵琶湖の環境を守る

ための条例を作った、立派な仕事をした、そういう実績作りだけが狙いなんだということが、議会でやり取りからもよくわかります。

県の環境課の担当者は、外来魚のいない琵琶湖にすることが最終目標だとまで言ってるんですけど、そんなことは不可能です。その目標に近づくだけでも想像を絶する努力が必要なのは間違ありません。そのままの結果、それで在来種が増えたらいいんですけど、在来種が減った原因が本当は外来魚以外のところにあつたら、最後にはいったい何が残るんでしょうか。

公聴会で発言してる研究者の中には、琵琶湖でルアー釣りをしてほしくないと思ってる人物もいるようです。つまり、バスアングラーは琵琶湖に来るなということなんですけど、これってとんでもない考え違いだと思います。琵琶湖へ遊びにやってくる人の多くを占め、釣り人の多数派でもあるバスアングラーを追いかけて守った琵琶湖の環境って、いったい何なんでしょうか。何か本当に守られるものがあるのだとしても、バスアングラーを追いかけて守って守ることが、いったい何の役に立つんでしょうか。

そういう勘違いから本当の自然破壊が起こるんじゃないかと思えます。そんなバランス感覚のかけらもない研究者を重用すると、バスアングラーの意見を無視した条例案が出てくると、根は同じところにあるんじゃないでしょうか。滋賀県に税金を収めてるバスアングラーは、そんな研究者は即刻辞めさせるとはっきり言う必要があると思えますよ。

滋賀県議会の9月定例会の本会議は、この後、10月3日、4日、7日に一般質問、16日に採決が行われ閉会になる予定です。つまり、審議が予定通り進めば、あと2週間ほどで琵琶湖のバスのリリースが本当に禁止されるかどうかの答が出ます。どんな結果が出るかに注目するだけでなく、決まったことに対してバスアングラーとしてどんな態度を取るかを考えるためにも、審議の経過をしつかりと見守る必要があるんじゃないでしょうか。

台風21号で水位が上昇しパターン急変

琵琶湖ホット情報 (2002/10/03)

台風21号が秋雨前線を刺激して降らせた雨で、滋賀県琵琶湖は水位がちょっとびり回復しました。10月1日の朝がマイナス94cmだったのが、同日の夕方にはマイナス90cmまで上昇しました。その後、2日の朝はマイナス92cm、3日の朝はマイナス91cmと微妙な変動を見せています。

台風21号の影響は雨だけでなく、1日の午後は東寄りの強い風が吹きました。下野正希浦口はこの日のフィッシングガイドを午後3時に切り上げています。2日には天候が回復したんですけど、今度は南寄りの風が強くなって、南湖は大荒れでした。

琵琶湖周辺で降った雨は20mm以上だったそうです。これで水位が上昇したんですけど、2日からは天候がすっかりよくなりました。このまあいよいよ天気が続くと、また水位が下がり始めそうです。普通なら、これから秋が深まるにつれて雨は次第に少なくなっていくんです。水温と気温が下がるから湖面からの蒸発量は少なくなるので、琵琶湖の水が自然に減る勢いは真夏ほどではなくなるんですけど、ベースが落ちるといっただけで、雨が降らなければ減水し続けことにかわりはありません。

今でもボートの運航に支障が出てるマリナーやレンタルボート店がたくさんあるんですけど、9年9月のマイナス24cmの記録に迫るぐらいの覚悟はしとかなないといけないかもかもしれませんね。異常気象でも何でもいいから、とにかくあと2回ぐらいはまとまった雨が降って、秋の後半以降のカラカラ天気がやって来る前に水位が戻ってくれないことには、このまま冬に突入したらいへんなことになってしまいます。

台風2号以降のバスフィッシングの状況は、コアユの接岸による入れ食いも落ちてきたようです。北湖の岸寄りではコアユの群れやバスのポイルがまだあちこちに見えてるんですけど、9月28日から29日頃のような数釣りはできてません。なれたアングラーなら20尾や25尾は釣るうと思えば釣れるから、決して悪い状態ではないんですけど、台風前のように1日中入れ食いというわけにはいなくなってきました。台風の影響でバスが動いたということも考えられるので、しばらくたてばまたよく釣れるようになる可能性は十分あるんですけど、まったく同じパターンが戻ってくるかどうかは、この後の様子を見てみたいとわかりません。

台風の影響は南湖の方が強くて、パターンがはっきりとかわりつつあるようです。水温の下がり方が急なんですよ。これからしばらく、南湖のバスフィッシングは秋らしいめまぐるしいパターン変化が続くことになりそうです。

秋の好天に恵まれた3連休中日。岸もボートも大入り満員 琵琶湖ホット情報(2002/10/13)

さすがにすごい人出ですね。3連休中日の10月13日の琵琶湖は快晴無風の好天に恵まれ、岸釣りもボート釣りも大勢のバスアングラーでにぎわいました。上の写真は近江舞子なんですけど、舟だまりの中も、水路も、石積み突堤も、浜も、どこもかしこもアングラーだらけです。

バスは舟だまりにつながる水路にちっちゃいのがたくさん見えてました。ウィードの上をブルーギルと一緒に遊んでススイと泳いでるんですけど、ルアーではなかなか釣れません。半分ぐらいのアングラーは生きたエビを使ってエサ釣りをしています。内湖からのドンドン落ちのすぐ横で釣ってた子供に聞いたら、朝から10尾ぐらい釣れたって言ってました。エサ釣りですけどね。ルアーでは多くて10尾ぐらいまでで、普通は何尾か釣れたらいい方です。石積み突堤の沖で午前中にバスがポイルしてたそうですから、もうちょとしたら本格的に釣れ始めるかもしれませんね。

ボート釣りは3トナーナメントが開催されていた南湖が大入り満員のぐちゃぐちゃ状態。北湖も調子のいいポイントもボートが何隻も集まっています。さすがにこれだけ混雑すると難しいみたいで、3トナーナメントは5尾で3kg前後釣れば10位以内に入賞できるというロースコアの大会になってました。これって30cmちょっとのナイスキーパーを5尾揃えれば上位に入れるわけですから、40cm前後はなかなか釣れないということですよ。南湖はしばらく前までにくらべると、よく釣れるサイズが小さくなって、20~25cmまで落ちてるようです。それと、45cmオーバーの大きいのも急激に釣りにくくなり始めてます。

北湖は12日に杉戸繁伸プロがフィッシングガイドに出ていました。その報告によると、9

月後半に数釣れたのと同じようなエリアで釣りをしているも、サイズにすぐムラが出始めるとのことです。北湖でも数釣れるサイズは小さくなって、25cmくらいまでがメインだそうです。そのかわり、数釣りしてたときにはなかなか釣れなかった50cm前後が釣れたり、ビッグサイズにラインを切られたりするようになっています。

これって、北湖も南湖もいよいよ秋の真つただ中だということですね。13日はお休みしていた杉戸プロは、明日14日は海へ行かずにはガイドに出るとのことです。はたしてどんな結果が出るか、詳しくは杉戸プロのレポートをごらんください。

3 連休最終日はバスもアングラもスローダウン

琵琶湖ホット情報(2002/10/14)

さすがに3連休の最終日となるとバスアングラは減ります。10月14日の滋賀県琵琶湖に出ているバスフィッシングのポートは、3連休中日で「B」トーナメントが開催されていた13日の半分ぐらいです。それでも普段の週末よりやや多めですけどね。

上の写真は南湖の堅田沖です。13日も14日もたくさんのポートが釣りをしてるんですけど、拡大写真をごらんになれば、13日の方が浮御堂沖のポートの密度が明らかに高いことがわかると思います。トーナメント中はこういうことになるんですね。

岸釣りアングラは13日にくらべるとうんと少なくなって、普段の週末よりも少ないぐらいです。3連休の間、ずっと天気がよかったので、来る人は昨日までに来てしまった感じですよ。それと、14日はお昼前ごろから北寄りの風が強くなったので、早めに引き上げたアング

ラーが多かったのかもしれない。バスは13日よりもさらに釣れなくなりました。連休が3日も続くと、最終日はバスもアングラもスローダウンするみたいです。

今回の3連休は好天に恵まれ、大勢のアングラが琵琶湖へやって来ました。季候がいいシーズンの連休は、子供や女性、ファミリーやカップルがたくさん釣りに来て、釣り場はにぎやかな雰囲気になります。これがだんだんと寒くなってくると、同じ連休でも本格的なアングラーしか釣りに来なくなります。二月上旬の文化の日がらみの連休あたりがその境目で、二月下旬の勤労感謝のがらみの連休になると釣り場の雰囲気はがらりとかわって、その後はエキスパートやマニアだけの世界になります。

琵琶湖の外來魚リリース禁止条例は、まず間違いなく今週には滋賀県議会で可決されるでしょう。来年4月以降、バスのリリースが禁止されたら、この3日間のような楽しい光景は二度と帰ってこないかもしれません。皆さんも今のうちに、せいっぱい楽しんでおいてください。二月の連休も天気がよかつたらいいですね。

新たなフェーズに突入したリリース禁止問題

琵琶湖ホット情報(2002/10/17)

「琵琶湖で釣ったバスのリリースを禁止する」滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」が滋賀県議会9月定例会の最終日となった10月15日に可決成立しました。同条例は来年4月から施行され、バスのリリースができなくなります。緊急速報では条例の内容をごく簡単にしかお伝えできませんでしたが、ここであらためてバスフィッシングに強く関

わる部分がどういう内容になっているかご紹介しておきます。

まずバスのリリース禁止についてですが、条例では「琵琶湖におけるレジャー活動として魚類を採捕する者は、外来魚(ブルーギル、オオクチバスその他の規則で定める魚類をいう。)を採捕したときは、これを琵琶湖に放流してはならない。」となっています。罰則規定がないので、ただちに処罰されるというわけではありませんが、これにより来年4月からは琵琶湖で釣ったバスやブルーギルをリリースすると条例違反になります。

次に2サイクルエンジンの使用禁止ですが、条例では「プレジャーボートの操船者は、2サイクルの原動機(規定で定める方式の2サイクルの原動機を除く。)を推進機関(補助的な推進機関を除く。)として備えるプレジャーボートを琵琶湖において航行させてはならない。」となっています。条例のこの部分は2008年4月1日から施行されることになっており、その時点ですでに所有されている2サイクルエンジン付きプレジャーボートには2008年3月末まで条例は適用されません。

この部分はちょっとややこしいので補足説明をしておきましょう。2006年4月以降は、新規の2サイクルエンジン付きプレジャーボートを琵琶湖に降ろして航行すると条例違反になります。2006年3月末の時点ですでに所有されている2サイクルエンジン付きのプレジャーボートは、2008年3月末までは使い続けてもかまいません。「すでに所有されている」という部分の意味は、ほかの湖や海で使っていて、琵琶湖には浮かべたことのないプレジャーボートでも、2006年3月末の時点ですでに所有されているボートであれば2008年3月末までは琵琶湖で使っても条例違反にはならないということです。「すでに所有されている」というこ

とですから、中古ボートを買って登録したのが2006年4月以降だとアウトということになるんじゃないかと思うんですけど、そのあたりの詳しいことはボート屋さんか滋賀県環境課に問い合わせて確認した方がいいかもしれませんね。

条例にはさらに、プレジャーボートのマフラーの改造禁止や騒音禁止、航行規制などについても様々な規定が盛り込まれています。マフラーの改造や騒音の部分はバスフィッシングにはあまり関係ありませんが、航行規制にもいろいろと細かい指定があって、条例の文面を読んでもよくわかりませんが、規制区域や航行方法などについては、いずれ条例が施行されるまでに詳しい説明があると思います。条例が施行されるまでに、事前にそういうパンフレットなどを手に入れて熟読しておいた方がいいと思いますよ。

同条例については、Bassingがわら版でもこれまでいろいろとお伝えしてきましたが、数万人に及ぶバスアングラーや関係各位の多大の努力のいかなく、とうとう県議会で可決されてしまいました。来年4月から琵琶湖でバスのリリース禁止が現実のものとなります。これからは、来年4月1日の条例施行に備えての、新たな行動のフェーズに移らないといけません。行動計画の中には、実力行使に近いものも含まれることになるでしょう。これまでよりも具体的で、1人1人の皆さんが参加しやすい行動を提案していかないとイケません。ジャッカルに加藤誠司プロもいろいろと考えているみたいなんですけど、Bassingがわら版でもBBCホット情報やEditorialを通じていろいろと提案していきたいと思っております。

10月17日付けのasahi.com滋賀版が伝えるところによると、「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」が滋賀県議会で可決されたことを受けて、大津市内の20歳の男性が県を相手に再放流禁止義務の不存在確認訴訟を大津地裁へ起こす方針を表明したそうです。男性の話では「条例は個人の自由を束縛する。訴訟を機に釣り人の意見を広めていきたい」とのこと。ほかにも同条例をめくつては、いくつかの提訴の動きがあり成り行きが注目されます。

リリース禁止に関して県知事が意向を表明

琵琶湖ホット情報(2002/10/24)

10月23日付けのasahi.com滋賀版が伝えるところによると、バスアングラから多くの反対意見が寄せられながら10月16日に成立した「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」に関して、滋賀県の国松知事は10月22日の定例会見で、日本釣振興会や近隣府県の知事に条例の主旨を説明し理解と協力を求めていく意向を明らかにしたそうです。

国松知事は、外来魚のリリース禁止に反対意見が多く寄せられた経緯などを踏まえ、「皆さんに新しいルールを守ってもらう形にしていきたい」とし、日本釣振興会の麻生太郎会長らと会談したい考えを示したとのこと。日釣振の麻生会長とは、自民党国会議員で現政調会長の麻生氏のことなんですけど、この名前、来年4月から琵琶湖でバスのリリースが禁止されるに至った一連の経過の中で、今回初めて出てきたんじゃないでしょうか。

日釣振の会長って、いったい何なんでしょうつかねえ。今頃になって初めて名前が出てくるような人物に滋賀県知事が会って、何をしようって言っただけでしょう。それでバスアングラに対する説明が行われたとするなら、とんでもない間違いです。もしそのような手続きに日釣振が利用されて、自民党議員と滋賀県知事が会談したことで今回の条例の問題がシヤンシヤンになるとしたら、つまり日釣振が政治的な手続きのために利用されるだけとしたら、これってまったくアングラのためになんてないどころか、害になっただけです。

それだったら、いつそのこと日釣振なんか解体して、全アングラを代表する組織なんかどこにもないという大昔のアーキーな状態に戻してしまった方がいいんじゃないでしょうか。そうすれば、県知事が何かしようとするときに、誰を相手にしたらいいのかわからないから、へたに利用されることもなくていいと思います。日釣振がなかったら、琵琶湖で起こった今回の問題に対して、バスアングラを代表する組織を作って対処しようというような動きが出てきたかもしれません。そういうことをしようというアングラがなかなか現れないとか、そういうことをし始めたらすぐに横槍が入ってつぶされるとか、利権争いが始まるとか、アングラの側にも問題があるのは事実ですが……。

日釣振というのは今から8年ほど前に日本釣り団体協議会と相前後して、きわめて政治的な要求から誕生した団体ですから、こういう結果になるのも無理はありません。とりあえずは、釣り人の団体ではなくて業者の団体であるという事実だけでもはっきりさせておいた方がいいと思うんですけど、いかがなものでしょうか。

国松知事は、琵琶湖のレジャー利用者の多くが県外から来ていることから、「利用者の多い

大阪や京都、愛知の知事に条例を説明し、理解、協力を求めたい。できれば今月中にも実行したい」とも述べているそうです。これって、例えば大阪府民の著者に対しては、太田房江大阪府知事に会って、バスのリリース禁止の告知に協力を求めるといっただけのことですね。

もう一つ、これはasahi.comではありませんが、「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」は釣りを禁止するのではなく奨励する条例であると知事が語り、キャッチアンドイトの新ルールに協力を求めていくと滋賀県が主張しているとの報道があります。つまり、アングラーによるキャッチアンドリリースという文化はいまだに県側に理解されておらず、バスアングラーの主張も無視されたままです。アンケートに回答したバスアングラーの2%が、バスをリリースできないなら琵琶湖へは釣りに行かないと答えた事実に対して、今でもこんなことを言い続けるのは、いくら政治的な都合があるとしても、バスアングラーをバカにしてるとしか言いようがありません。

秋の後半に突入した琵琶湖 近江舞子の岸釣りが好調 琵琶湖ホット情報(2002/10/26)

10月26日の滋賀県琵琶湖は朝から曇り空で、午後には雨が降りだしました。しぐれもよりのパラパラと降る冷たい雨です。バスアングラーはそんなに多くありません。さすがに寒くなってきましたからね。岸釣りは普段の週末並みかやや少なめ、南湖に浮かんでるボートは「トーナメントが開催されてたときの半分以下です。

琵琶湖大橋から南を見ると、10月中旬までは堅田沖から木浜沖にかけての一面にバスフィ

ッシングのボートが浮かんでたのが、26日は堅田寄りと木浜寄りに分かれてました。釣れ方がかわってきたんでしょつが。

近江舞子の岸釣りは、秋の後半の好シーズンに突入したようです。26日のお昼ごろに石積み突堤の先端で釣りをしていたアングラーに釣れてるかどうかが聞いたら、「まあまあです」って言いながら、目の前で20cmぐらいのを釣ってました。これぐらいのが朝からポロポロと釣れ続けているんだそうです。

舟だまりのドンドン落ちで釣っていたアングラーは、「それなりに釣れてます」と言っていました。足元にはたくさん的小バスが見えてて、その下には30cmぐらいのも見えています。「小さいのは釣れるけど、大きいのはなかなか釣れない」とのことでした。水路で釣ってた2人組は「ぜんぜん」という返事でしたから、調子いいと言っても、それなりにちゃんとした釣り方をしないと釣れないのかもしれないですね。

近江舞子は1週間から2日ぐらい前から調子がグンと上向いたんだそうです。確かに石積み突堤の足元も水路も舟だまりの中も小バスがたくさん見えていますし、30cmぐらいのもあちこちで見ることができました。これで北風が吹いて一段と冷え込んだら、ますます調子よくなるかもしれません。天気予報は26日夜から北の風が強くなって冷え込むって言ってます。27日は厳しい釣りになるかもしれないんですけど、これでもっとたくさんバスが集まってくれたら、いよいよ本格的な岸釣りシーズンですね。

琵琶湖はネコも冬のパターンになりかけてます。下野正希プロの家の喫茶店TouTouXへ行ったら、ベットのあそばんがお客さんの女の人の膝に乗ってなごんでました。暖かい膝

の上からネコが離れようとしなくなったら冬のパターンです。

秋の後半を飛び越して冬の初めみたいな琵琶湖

琵琶湖ホット情報(2002/10/27)

10月27日の滋賀県琵琶湖はグッと冷え込んで寒くなりました。まるで秋の後半を飛び越して、一気に冬の初めになったみたいです。こうなるとさすがにアングラーが減ります。上の写真は野洲川河口のすぐ近くにある吉川漁港なんですけど、北西の風がまともに吹き付けて、いかにも寒そうです。それでも「まあまあ釣れる。大きいのは45cmぐらいのが釣れた」と言っていましたから、ここも岸釣りのシーズンになってるみたいですわね。

吉川漁港内の石塚マリナーではLBBC(Lake Biwa Bassfishing Competition)のトーナメントが開催されていました。LBBCは16t 70馬力以上のボートに限定のフライベイトトーナメントです。普段は琵琶湖全域がトーナメントエリアなんですけど、今回は荒天に配慮して南湖限定になりました。南湖とは言ってもLBBCの場合は、野洲川北流河口の岬と和邇川河口の岬を結んだ線から南がエリアになります。

琵琶湖大橋から南のエリアは午前中、南風が強くとて大荒れで、とても釣りにくかったそうです。トーナメントの上位入賞者のコメントには和邇浜、鮎屋、ラフォーレ、堅田などの地名が出てました。釣り方はソフトベイトのライトリグというのが多かったんですけど、中にはクランクベイトの男引きで30cm台後半のバスを選んで釣ってきたというアングラーもいました。

南湖に浮かんでるボートは昨日にくらべると半分以下の減り方です。大荒れだから無理もないんですけど、それでも釣りをしてるがんばり屋さんのボートは、琵琶湖大橋から見える範囲では名鉄沖に集中してました。そろそろエリア的に絞られてくる季節なのかもしれませんね。

近江舞子の岸釣りアングラーも半分ぐらいになってました。上の石積み突堤の写真を見る限りは、前日とくらべてそんなに減ってないように感じるかもしれませんが、水路から舟だまりにかけてはアングラーがうんと少なくなっています。

石積み突堤の先端では、昨日と同じアングラーが釣りをしてました。京都から2日連続で釣りに来たんだそうです。どうですかって聞いたら、「まあまあ釣れるけど、昨日よりは渋いですね」という返事でした。足元にはたくさんバスの見えてるんですけど、やっぱり風が強くて寒いから釣りにくくなってるのかもしれないですね。石積み突堤に並んだアングラーの服装も、黒っぽいフリースとか防寒ウェアが多くなっています。いよいよ寒さに備えないといけないシーズンですね。

琵琶湖は寒くなってもまだシャローのミノーが好調

琵琶湖ホット情報(2002/11/02)

滋賀県琵琶湖は3月末から急に寒くなって、冬の始めごろみたいな天候が続いています。水温も下がって南湖は5度以下、北湖でも1度前後になってるんですけど、またシャローのウイードエリアにはバスがたくさんいてミノーでガンガン釣れてます。

このところ好調の杉戸繁伸プロのフィッシングガイドのブラクティスに同行して、二月2日にひさしぶりにバスボートで琵琶湖へ出ました。杉戸プロは「D」ミノーとスクワレル、それにジャッカルから間もなく発売されるマスクの量産試作品を使って次々とバスをキャッチしていきます。

場所は北湖の南寄り、水深2m前後のシャローのウィードエリア数カ所です。シークレットのような場所は1カ所もなく、すべてバスアングラーによく知られた有名な場所です。そんなポイントでも25~25cmぐらいのバスがたくさんいるみたいで、釣るうと思えば入れ食いに近いペースで釣れてきます。その中に、ときおり25~30cmちよつとぐらいのがまじってくる感じです。もつちよつと大きいのも粘れば釣れるとのことなんですけど、そうなる時間帯がかかりそうです。

この日は3連休の初日だったんですけど、寒くて風が強いという予報が出ていたので、バスアングラーはそんなに多くありませんでした。北湖のポイントを何カ所か回った中でボートが多かったのは、小野沖ぐらいのものです。岸釣りは、和邇川尻に立ち込んで釣ってるアングラーが数人いました。

杉戸プロは小野沖でも次々とバスを釣ったんですけど、まわりのボートはほとんど釣ってませんでしたが、釣り方が違うんですね。ミノーでよく釣れるのに、まわりのボートはほとんどがソフトベイトのライトリグでスローに釣ってます。一部スピナーベイトなどを使ってるアングラーもいるんですけど、ミノーをキャストしてるアングラーはいませんでした。

マスクのテスト結果は上々です。これってコンセプト的なことを考えれば、必ずしも琵琶湖のシャローのウィードエリアをテンポよく釣っていくのが得意なタイプのルアーではないと思うんですけど、杉戸プロのお気に入りである「D」ミノーとくらべても負けてません。ということ、ていねいに食わせていけないといけないような局面になったら、つまり、このルアーがもっとも得意とする状況で使ったら、けっこうすごいんじゃないでしょうか。

テストした杉戸プロの感想は、「はまったら恐そうなるルアーですね」とのことでした。それと、杉戸プロが釣ってるのを見ていて気が付いたんですけど、マスクはボディが柔らかな素材でできてるせいか、掛かったバスがバレ難いような気がしました。

杉戸プロによると、去年の秋にスクワレルを使って数釣ってたのと同じエリアで、この秋はミノーが効いてるんだそうです。その原因は、ウィードが多くなってるかららしいんですけど、「この分なら12月頃まで数釣れるんじゃないか」と杉戸プロは言ってます。琵琶湖周辺の山は、この2日ぐらいの間に急に紅葉が目立つようになっていますけど、二月中旬に一度ぐらいは暖かい日が帰ってくることもありそうです。琵琶湖はまだ当分の間、バスの数釣りが楽しめるんじゃないでしょうか。

微妙に風向きがかわって来た琵琶湖バスのリリース禁止 琵琶湖ホット情報(2002/11/07)

琵琶湖の外来魚リリース条例に関して二、三の進展がありましたのでお知らせします。

滋賀県議会の9月定例会で成立し来年4月から施行される「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」に関して、滋賀県知事が釣り人の理解を求めめるための会談を日本釣

り振興会の麻生太郎会長に求めていたことは10月21日のBBCのホット情報でお伝えした通りですが、日釣振は同県に対して知事との会談を断ると11月1日に電話で回答し、その理由などを5日に書面で伝えたとのことでした。知事との会談を断った理由については、「日釣振が県に対し求めた」琵琶湖の魚類生態合同調査などの要望に納得できる回答がなかった」「具体的資料を添付して要望を提出したが、県が真剣に検討したとは認められない」などから現時点での会談には意味がないとしています。

これに対し滋賀県知事は5日の定例会見で「麻生会長でなくても、会のしかるべき人に会って説明したい」と語ったそうなんですけど、知事が日釣振のしかるべき人物に会って、今さら何を説明するって言うんでしょうか。説明したところで、意見を無視されたアングラーが納得すると思ってるんでしょうか。知事が言うところの「しかるべき人」って、いったい誰なんでしょうか。きつといつものことで、アングラーが誰も知らないような人なんじゃないでしょうかねえ。

まあ、知事が釣り人に対する説明義務を果たしたという既成事実を作るために日釣振が利用されるといふ最悪のシナリオはこれで回避されたということでしょうか。だけど、麻生会長にかわる別の人物が誰か出てくるのか、あるいは何か別の方法を考えることになるのか、もしかしたら釣り人に対する説明なんかしないままでリリース禁止に突入することになるのか、これからの進展に注目する必要があるそうです。それにしても、根本的に間違ってる点は訂正されないままなんですけど、そこところはどうするんでしょうか。日釣振は釣り人の代表組織でなく業者の代表組織です。知事が日釣振の誰と会っても釣り人に説明したこと

にはならないと思うんですけど、そんなことも理解できない人物が知事なんかやっていいんでしょうか。

次に、滋賀県は来年4月からのリリース禁止の実施にあたって、湖岸沿いに外来魚回収用のイケスを設置する方針を決めたそうです。イケスは滋賀県漁連が県の助成を受けて外来魚を回収している回収力の漁港近くに設置する予定で、陸上に設置する回収ボックスと合わせて約300カ所になるとのこと。また、県は条例施行後にアングラーが多い場所でビニール袋を配るなどして、釣り上げた外来魚を持って帰って食べることを勧め、処分にも困る人のためにイケスと回収ボックスを設置するんだそうです。

これにも問題があります。現在、琵琶湖の漁港の多くには釣り禁止や立入禁止の看板が立てられてるんですけど、そんな漁港にもイケスや回収ボックスが設置されるんでしょうか。って言うのが、釣り公認の漁港が回収力の所もないと思うんですけど、釣り禁止の漁港の「近く」にイケスを設置して、港内で釣ったバスは港の近くのイケスがある所まで持って行って入れると、本気でそういうことをしようと思ってるんでしょうか。

本当にそんなことするんだったら、漁港でバスを釣ったアングラーは港内を見渡して、イケスが見付からなかったら滋賀県庁の環境課へそのバスを届けに行つた方がいいと思いますよ。そして、漁港の近くにイケスがあると聞かれたら、なぜ港内にならないのか説明を求めましょう。釣り禁止あるいは立入禁止だから港内にならないって説明されたら、誰がどんな権限で釣り禁止、立入禁止にしているのか説明を求めればいいと思います。港内にスペースが取れないなどという説明だったら、アングラーが外来魚の回収に協力しようって言うてるのに、

なぜ港内にイケスを設置する努力をしないのかってガーンと言っちゃればいいと思います。

そういうお役所的な回答をいっぱい見ることが出来るホームページが滋賀県のサイト内に新しく設置されました。「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」の要綱案に対して大勢のバスアングラーから寄せられた反対意見に対して、「ごいねいにも一つ一つ反対の反対意見を述べていう、おそろくこのことが目的で設けられたページなんだと思うんですけど、官僚作文の典型みたいな文章を読むことができ、こういう説明ができないんだなど、ある意味でとても楽しめるページです。

これって、けっこうたいへんな努力とお金がかかっていると思っただけね。アングラーの意見を無視したって言われないようにしようと思ったら、税金使ってこんなことまでしないといけないからたいへんです。だけど、こんな傷口にタバスコを擦り込むようなページを見たバスアングラーは気分を害するだけなんじゃないでしょうか。まあ、アングラーのこともなんか最初からどうでもよくって、主な目的はアングラーの意見を無視してるんじゃないって一般の人に訴えることで、ここまで説明してもアングラーは言うことを聞かなかったとかなんとか、条例が施行されてから何かあったときに言えるように今から準備しておこうという魂胆があります。

こういうことをしながら一方では日釣振のことも無視できなくて、その日釣振にも知恵が付いてきてうまく立ち回るようになってきてるんだとしたら、滋賀県や知事はこれからちょっとたいへんです。なにしろ背後には10万、100万単位のバスアングラーがいますからね。問題は、日釣振がこの切り札をいかにうまく使うかです。条例はすでに成立しちゃってるん

ですけど、ちよつとは関係各位の努力のかいあって、バスアングラーの方にも風回ってきてるのかもしれない。本当の勝負はこれからなのかもしれないね。

11月上旬の雪景色でパターン激変の琵琶湖

琵琶湖ホット情報(2002/11/10)

滋賀県琵琶湖は周囲の山に雪が積もって、もう見るからにさぶーって感じですよ。湖東の伊吹山は10月末に雪が積もったんですね。これって、例年より1カ月以上早いんだそうです。二月に入って湖北の賤ヶ岳や湖西の比良山にも雪が積もりました。景色は完全に真冬みたくです。それでもバスアングラーは釣りに来ます。連休やトーナメントが開催されるときみたいに多くはないんですけど、10日の日曜日は寒くて風が強かったにもかかわらず岸釣りもそこそこ来てたし、ボートもけっこう出てました。本当にバスフィッシングが好きなアングラーが来てるんでしょうね。

バスフィッシングのパターンは完全にかわりました。二月2日頃までは北湖のシャローエリアで30cmくらいまでのミニヤクランクベイトなどで数釣れたのが、猛烈寒波の強風と冷え込みの影響で一気にスローになってしまいました。今はやや深い場所ソフトベイトのライトリグがメインです。

ボートが集まっているのは南湖西岸の堅田から名鉄にかけてのエリアで、水深3〜4メートルが中心です。水温が一気に下がったためにバスが深い側へ動いたのが、そのあたりで止まって密度高く集まっているようです。魚は多いんですけど釣り方が難しく、ウィードエリア

の釣りなんですけどピンスポットを釣るつもりでいいねに狙わないと、アバウトな釣りではまったくバスの反応がありません。それぐらい難しい釣りなんですけど、魚はいるから釣るアングラーと釣れないアングラーの差がとてつきつくなっています。

近江舞子は有料駐車場の営業が終わったみたいですが、浜側の駐車場の入り口も開放されています。その意味ではオフなんですけど、バスの岸釣りはこれからはシーズンで、アングラーは大勢来てます。バスが岸近くに集まりだしたっていう情報が、やっと伝わったのかも知れませんが、10日は1週間前の連休中よりも多いぐらいのアングラーでにぎわっていました。

バスの釣れ方は、ちょっとスローなようです。石積み突堤の先端付近の足元には30~25cmぐらいのバスがいっぱい見えてるんですけど、釣れ方はボロボロです。舟だまりの中でエサ釣りをしていたアングラーに聞いたら、「今日はエビのエサでも釣れません」とのことでした。水温が急に下がった影響でしょうか。バスの数は多くなってるみたいですから、これからの天候次第でよくなっていくのかも知れません。と言うか、例年ならまだまだこれからよくなっていく時期ですから、一時的な天候の変化にだまされないように気を付けた方がいいのかもしれないですね。

平日でもアングラーが絶えない近江舞子石積み突堤

琵琶湖ホット情報(2002/11/15)

滋賀県琵琶湖の岸釣りアングラーは平日でも釣りに来てます。「あんたら仕事は、学校は」という気もするんですけどね。ボート釣りの方は休みの日やトーナメントがあるとき

に比較的集中するのに対して、岸釣りの方が平日でもコンスタントです。特にこれからのシーズンには、寒がるつと雪が降ろうと来る人は来てるって感じで、人気ポイントは週末とかわらないぐらいの混み具合になることもめずらしくありません。

11月15日夕方の近江舞子石積み突堤とその周辺には5人のアングラーがいました。突堤の先端でがんばってるアングラーに「釣れますか?」って聞いたら、「ハイッ!!!」ときっぱり応えてくれました。もう1人のアングラーは、「釣れてるのは釣れてるけど30cmまでですね」と言っていました。このところの冷え込みでバスはたくさん集まっているみたいなんですけど、大きいのは少ないんじゃないでしょうか。

石積み突堤の足元には、たくさんバスが見えています。サイズは20cm弱から大きいので30cmぐらいでしょうが、突堤の先端のすぐ沖には、小さなバスがオイカワの子がビチビチと群れて泳いでるのが何カ所も見えます。コンディションがいい日にはバスのボイルも見られそうです。

それと、石積み突堤の南側すぐ横(写真では右側)にもアングラーが1人いるんですけど、ここも釣れてるんですね。バスはブレイクの斜面に付いてて、浜から普通にキャストすればそこまで届きます。もつと寒くなってバスのポジションが深くなったら、浜からは遠投しないと釣れなくなるんですけど、今は石積み突堤の近くの浜からでしたら、そんなに遠投しなくても釣れる範囲にバスはいます。

岸釣りアングラーはバスが釣れてるか釣れてないかという情報をとてよく知っています。ですから、平日の夕方にこれぐらい釣りに来るといことは、よく釣れると判断してい

いのかもかもしれませんね。あとはサイズがどれぐらいまで出るか、いつ頃になったらそこそこ大きいのが釣れるようになるかが問題なんじゃないでしょうか。

琵琶湖の岸釣り好シーズンの連休。南浜は小バスが好調 琵琶湖ホット情報(2002/11/23)

11月23日に開催された中部釣り場とマナーを守る会の第8回クリーンアップ琵琶湖に参加して南浜漁港へ行ってきました。

今年は12月に天皇誕生日がらみの連休がもう1回あるんですけど、一般のアングララーが滋賀県琵琶湖へ気軽に来て釣りができる連休としては、この週末の勤労感謝の日がらみの連休が実質最後になります。その先は寒いですもんね。今月初めの文化の日がらみの連休は後半が猛烈な寒波に襲われて散々だったんですけど、今回は快晴微風のいい天気になりました。そのおかげで大勢のバスアングララーが琵琶湖へ来ています。来年4月から琵琶湖で釣ったバスをリリースすることが条例で禁止されるので、連休のにぎわいとしてはこれが最後になるかもしれません。

南浜の放水路前はアングララーが数日間隔で並んで釣りをしています。釣れるバスのサイズは20cmちょっとまでなんですけど、見る間にポツポツと釣れてました。サイズにこだわらないで数釣るつもりなら、ちっちゃなワームを使えば3尾や4尾は釣れそうです。B.C.C.服部が見てないだけで、粘ればいいサイズも釣れるのかもしれないんですけど、聞いて回った範囲では「よく釣れるけど小さい」とのことでした。

ここはワイドがけっこう多いようで、キャロライナリグでもツネキチリグでも使い方をひと工夫する必要があります。飛距離を落とさないと範囲内でも軽く軽いシンカーを使うか、重いシンカーを使う場合はキャロライナリグならリーダーを長くするとか、ツネキチリグもフックから先のラインを長くするとか、何かしないとイケません。中には投げ釣り用のジェット天秤を使って、リーダーを1.5mぐらいにして、それで次々とバスを釣ってるアングララーもいました。もしかしたら、そうやって遠投すれば、ましなサイズが釣れるのかもしれない。水位が低いので、そういうポイントにルアーが届く可能性も考えに入れたい方がよさそうです。

南浜漁港内にも大勢のアングララーがいたんですけど、冬場の最盛期ほどではありません。港内で釣ってるアングララーに聞いたら、「小さいのなら何尾でも釣れる」という返事が帰ってきました。シンカーを小さくしたツネキチリグに2.5gぐらいのワームをセットして、棧橋まわりや岸壁の際を狙えば、20cmぐらいまでのバスが次々と釣れます。見る間に20cmちょっとのバスを釣って、「これは大きい方です」と言っていました。港内には小さいけどバスがたくさんいるみたいですね。

沖側の防波堤から港内へ向かってバイブレーションプラグをキャストしてたアングララーは、30cm弱のバスをキャッチしてました。これぐらいのサイズを狙うとなると、スポットを吟味するか、あるいは手返しの早いルアーで広く探って勝負する必要があるのかもしれない。

上の右の写真でバスをキャッチしたアングララーの後ろに写ってるのはクリーンアップ琵琶

湖のメンバーです。その他大勢のアングラーが、バスが釣れたのをうらやましそつに見てるわけではありませんで、その点諷解のないように……。クリーンアップ琵琶湖については改めてご報告したいと思いますので、そちらをこらんください。

昨日は空いてた近江舞子も、きっと今日は大勢のアングラーでにぎわったことでしょう。せつかく岸釣りでバスがよく釣れるときにうまく連休になってくれたんですから、明日も天気がいいことを祈りたいと思います。楽しく釣りができる間に、皆さんもがんばって琵琶湖のバスフィッシングをエンジョイしておいてくださいな。

クリーンアップ琵琶湖に参加、ゴミはあいかわらず多いぞ 琵琶湖ホット情報(2002/11/26)

11月23日に開催された中部釣り場とマナーを守る会(CFM)主催の第8回クリーンアップ琵琶湖(南浜漁港)に参加しました。当日の琵琶湖は快晴微風の絶好の釣り日和で、大勢のアングラーが詰めかけ、ゴミ拾いをしながら見てる間に何尾もバスをキャッチしてました。

琵琶湖のバスアングラーは昨年から今年にかけて目立って減ってるんですけど、それでも釣りの場はゴミはなかなか減りません。特に今回のクリーンアップは琵琶湖の水位がマイナス90cm近い減水状態の中で開催されたこともあって、水位が高いときに拾うことができなかった水際のゴミをたくさん回収することができました。拾ったゴミの量は、1時間半ほどのゴミ拾いで、前回までよりもたくさん集まったほどです。

空き缶やPETボトルが多かったのは、夏の間捨てられたのが残ってたからでしょうが、

それと、沖からの漂着ゴミもあいかわらずたくさんあります。ゴミ袋にきつちりとまとめた生活ゴミも捨てられてました。これなんかは、わざわざ持ってきて捨てたとか考えられませんが、拾うのは袋ごと持って行けば終わりですから手間はかからないんですけど、こういうのを見るとちよつと腹が立ちます。釣りの場はゴミがいつまでたってもなくならない理由の一つがわかったような気がしました。

実際のロープや漁網、木の枝などにラインがからんで、それが大きなかたまりになってます。前回までのクリーンアップのときは水の中で拾うことができなかったのが、減水の今回はそういうラインのかたまりが何力所も見付かりました。こんなの拾い始めるときりがあります。かたまりを一つ回収し終わったと思っても、そこから何本かのラインが伸びて、あちこちにつながっています。それをたどっていくと、また次の小さなラインのかたまりが見付かります。最後までたどっていくと思っても、次々とつながってるからきりがありません。一つのかたまりを回収したら、ある程度とこできりを付けて次の大きなかたまりに移らないと、いつまでたっても1カ所から動けないっていう感じです。

根掛かりで切れるラインは、ボイ捨てゴミと違って、釣りをしてる限りどついても避けられない面があると思うんですけど、これだけひどいと何とかする必要があるんじゃないかと思いました。ソフトベイトに関しては生分解性素材の開発がかなりいいところまで進んでいるんですけど、ラインはそれ以前から問題になりながら、いまだに状況は何もかわっていません。メーカーは本当にやる気があるのかと思ってしまうです。

クリーンアップ琵琶湖は今回が8回目になります。CFMと地元の人達や自治体の担当者、

漁協などの間にはいい関係ができてるんですけど、問題は来年4月以降のクリーンアップをどうするかです。はつきり言って、リリース禁止がどうなるかは、蓋を開けてみないとわかりません。最悪のことを考えたら、誰も条例なんか守らずにバスはリリースするわ、ゴミもあいかわらず捨てるわ、場合によってはそういうマナーのよくないアングララーだけが釣りに来るようになって、地元の人達の感情が一気に悪化するような事態にならないとも限りませぬ。そうなったら、今までクリーンアップをやってきた努力は水の泡です。

そういうこともあるので、主催のCFMとしては、次回以降の開催については慎重に、リリース禁止問題も含めて状況がどのように推移するか見ながら考えていきたいとのことでした。南浜漁港は立入禁止や釣り禁止になってない数少ない港の一つです。そういう釣り場がこれからどうなっていくか、バスを回収するためのイクスが設置されるというのが実際はどんなことになるのか、琵琶湖へ行ったら釣りをするだけでなく、そういうことにもしっかり目を向ける必要があります。これからは目を向けないといけない対象がどんどん多くなってきそうです。

岸釣り好調の近江舞子。最後の数釣りのチャンスか

琵琶湖ホット情報(2002/12/04)

12月4日の琵琶湖は朝から弱い雨がシヨボシヨボと降ったり止んだりしています。気温はそんなに低くなくて、風もほとんどありません。雨さえ止んだら、バス釣りにはやさそうな天候です。

天気がよくなって、バスアングララーは釣りに来てます。杉戸繁伸プロのレポートによると、天気がよかった1日の日曜日は、12月にしてはびっくりするぐらい大勢のバスアングララーが釣りに来て、バスもけっこうよく釣れてたそうなんですけど、4日朝の近江舞子石積み突堤とそのまわりも20人以上のアングララーがいました。

バスは石積み突堤先端の足元に20cmまでのちっちゃいのがたくさん見えています。突堤の南横の浜の水際から10mくらい沖にも、たくさん的小バスの群れが泳ぎ回っているのが見えまます。見る間に次々と釣れるのは、10cmくらいの子のちっちゃいから20cmまでの小バスばかりでした。それ以上大きいのは、突堤の先端からキャストしてたアングララーが朝のうち何尾か釣ったそうです。状況としては悪くないみたいなんですけど、まだ大きいのは少ないみたいですね。

23くらいまでの小さなワームを使うと、小バスが水面まで上がってきて飛び付いたり、浜の水際まで追いかけてきて食い付くのがよく見えます。活性がすごくぶる高いのは、雨模様で気温が高いからでしょうか。こういう感じでもこそこのサイズが釣れたらいいんですけど、サイズとしては10cmくらいか20cm弱までなので、ちょっと小さ過ぎます。そのかわり、釣ろうと思えば何尾でも釣れる感じでした。

上の右の写真のアングララーはバスをぶら下げるだけじゃなくて、手元にもう1尾バスを持ってます。どういうリグを使ってるかは、ちょっと細か過ぎてわからなかったんですけど、このアングララーは2尾ずつバスを釣ってました。それぐらいバスがたくさんいて、よく釣れるという事です。

琵琶湖の水位は2月中旬にいったん上昇しかけたのが、その後また下がり始めて、今はマインナス88cm〜89cmのところではほぼ安定しています。水温は下がり方が一時よりもスローペースになりました。その意味では、ここしばらく水位、水温ともに、いい感じのところでは落ち着いた状態になってます。杉戸プロが分析する通り、数釣りのチャンスがふたたびやってきているのかも知れませんね。

近江舞子舟だまりが好調。石積み突堤のバスはどこへ？ 琵琶湖ホット情報（2002/12/15）

琵琶湖北部に雪が降ったのは12月10日のことです。山間部は10cm前後、彦根や長浜の市街地にも数cmの雪が積もり、琵琶湖の周囲の山は頂上から中腹まで積雪で白く覆われました。寒さはその後も続き、15日になってやっと峠を越しました。

快晴微風の好天になった15日の日曜日、近江舞子には大勢のバスアングラマーが来ていました。岸釣りアングラマーはバスがどこで釣れるかよく知っていて、舟だまりの中は満員、石積み突堤は空いています。舟だまりの内湖からの放水口の前で釣ってた2人連れのアングラマーは、見る間に20cm前後のバスをそれぞれキャッチ。その隣のアングラマーも釣っています。ほんの二分ほどの間に3人で4尾です。2人連れのアングラマーによると、朝からこんな感じで釣れていて、大きいのは35cmくらいだそうです。

石積み突堤では数人のアングラマーががんばってたんですけど、あまり釣れてる様子ではありませんでした。ちょっと前までメタルジグやラバージグでけっこう釣れてたそうなんですけどね。なぜか終わっちゃったみたいで、遠投も足元もいい感じの反応はありません。10日ほど前まで突堤の先端付近の足元にたくさん見えてた小バスは、ぜんぜん見えなくなっちゃいました。

12月に入って琵琶湖の水温はハイペースで下がっています。特にこの5日ほどは下がり方が急で、南湖は7〜8度になり、北湖のボディウオーターも1〜2度になっています。この水温低下の影響が近江舞子のバスの釣れ方に表れているのかもしれないですね。単純に言うと、石積み突堤先端付近の足元にたくさん見えてた小バスがいなくなっちゃって、舟だまりの中でよく釣れるようになったということなんですけど、バスの群れが移動したのとは違うような気がします。バスのサイズが違ってますよね。

石積み突堤の足元にいた小バスの群れとは別に、20〜25cmサイズのバスが集まってきたのが一時的にメタルジグでよく釣れて、その一部が舟だまりの中へ入ったのが今よく釣れてる。そう考えられなくもないんですけど、そんなに単純なものかどうか、何とも言えません。それがもし本当なら、石積み突堤の回りに20〜25cmのバスが残っていてもおかしくないんですけど、そんなのぜんぜん釣れません。それと、石積み突堤からキャストしてブレイクの先の水深10m以上の所でそこそこのサイズのバスが釣れるのが、ちょっと前に一瞬釣れただけで、その後はぜんぜんです。

近江舞子の岸釣りは、強い北風が吹くようになって、水温が下がってからはがいよいよ本番なんですけど、この冬はわかり方が極端なんですよね。おそらく、今のままの状態安定するとは思えませんし、現状が現状ですから、いつになったらどうかわるかの予測もきわめて

困難です。舟だまりの中でよく釣れてるのも、いつまで続くか、なんともあてにならない状況です。

滋賀県知事が適当と認めた!? 審議委員・加藤誠司プロ 琵琶湖ホット情報(2002/12/18)

滋賀県琵琶湖レジャー利用適正化審議会の初会合が2月16日に行われます。審議会は「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」第23条に基づいて設置された滋賀県知事の附属機関で、県民からの公募と学識経験者、知事が適当と認めた委員により構成され、同条例を実際に運用するにあたっての「基本計画の策定」「レジャーボートの航行を規制する水域の指定」「琵琶湖におけるレジャー活動に伴う環境への負荷の低減に関する事項」などの調査や審議にかかわることになっています。(注 ここで「調査や審議を行う」と書かずに「……にかかわる」と書いたのは、委員が実質的な審議を本当にさせてもらえるかどうかについて、BBC服部は執筆責任を持ってないからです。官僚が作った要綱案に形だけ意見を言わせてもらってそれで終わりにすることも大いにあり得ますからね。ここまでの内容は主に滋賀県の文書を参考に、一部は引用させていただきます)

この審議会の委員にジャッカルに加藤誠司プロが選ばれました。加藤プロは公募委員ではなく、学識経験者でもありませんから、「知事が適当と認めた」委員に該当することになります。バス業界の爆弾男を知事が適当と認めたわけですから、これが面白くなくて何が面白いて言っただけでしょうか。

さっそく加藤プロに会って話を聞いたら、「思い切りやるよ!」って言っていました。来年4月1日からのバスのリリース禁止に向かって、何がどのように決まって、どう運用されていくかということ考えたとき、加藤プロの活動はこれまでがブラクティスのようなもので、これからがトーナメント本番なのかもしれません。バスアングラーにとっても本場の山場はこれからです。そういうときに加藤プロが審議委員に選任されたのは、条例案を作ったときの委員として日本釣り振興会滋賀支部の役員が出たのとくらべれば、大きな進歩だと言えるんじゃないでしょうか。

琵琶湖周辺に積雪。年末年始の釣りに影響必至か!?! 琵琶湖ホット情報(2002/12/27)

12月25日からの寒波で滋賀県琵琶湖周辺は雪になりました。25日夜から26日にかけては、そんなにひどい雪ではなかったんですけど、26日未明からお昼頃までは大粒の雪が止み間なく降り続いて、湖北から湖南までどこもかしこも真っ白です。

急な雪で道路が各所で凍結し、あちこちでひどい渋滞が発生しました。琵琶湖大橋が凍結し午前10時頃までノロノロ運転が続いたため、国道161号と477号は琵琶湖大橋の交差点から何百メートルも渋滞してしまいました。米ブラザから大橋へ向かう車で渋滞で入れず、米ブラザをぐるっと回って大橋をくぐる所まで数珠繋ぎになってたほどです。

BBC服部はバスの岸釣りの様子を見に午前8時頃から国道161号を北へ向かったんですけど、ノロノロ運転は北小松付近まで続いてました。トラックが坂でスリップして動けなくな

つてたり、乗用車が道路脇の溝に落ち込んだり、あちこちでトラブルが発生します。知内漁港に着くまでに7台が事故を起こしました。うちわけは追突が2件で4台、溝に落ちたのが2台、電柱にぶつかっただけか何かの自滅が1台です。

さすがに年末休みの直前にこんなひどい天気になると、アングラーは少ないですね。知内漁港と浜分漁港に2、3人ずつ。大溝の水上警察周辺は0人。近江舞子の石積み突堤は2人だけ釣りをしていたのが見てる前で引き上げてしまって、一瞬0人になってました。舟だまりもヘラブナ釣り師は何人かいたんですけど、バスアングラーはいません。

バスは知内と浜分で小さいのが釣れてました。知内は下野正希プロらがテレビの取材をして、後で聞いた話では、そこそこのサイズも釣れたそうです。浜分は見てる前で15cmあるかないかの小さいのが釣れました。大きいのが釣れる確率は高くないけど、小さいのはたくさんいるようです。知内で釣ってたアングラーは、雪の中を滑りながら走ってきて、午前4時に着いたんだそうです。「今日は空いてるぞと思いが、がんばって走って来たら、その通りやった」と言っていました。

大溝と近江舞子はアングラーがいないので様子が変わらないんですけど、近江舞子で数日前に釣りをしたアングラーからの情報によると、あいかわらず舟だまりの中で25cmぐらいまでの小型が数釣れたとのこと。それと、近江舞子で会ったアングラーの話では、湖東の彦根などでも25cmクラスまでなら数釣れるそうです。そのアングラーは、「近江舞子なら大きいのが釣れるかと思って来てみた」と言っていました。

年末年始のお休みを前にした琵琶湖の岸釣りは、けっこういい感じで釣れるようになったところなんですけど、そこへまとまった雪が降ったわけですから、これがどう影響するかが問題です。琵琶湖の水位は、かなりのハイペースで上昇が続いています。つまり、川から流れ込んだり湖岸近くに湧き出してる水が多いということです。そこへ1日や2日降った雪が解けて流れ込んでも、意外と大した影響はないかもしれないし、やっぱり影響はあるかもしれません。そのあたりをどう見極めるかが、年末年始の琵琶湖の岸釣りの勝負所になるかもしれませんね。

下野正希プロ近江舞子で2002年ラストバスニング

琵琶湖ホット情報(2002/12/30)

2002年のインシダイ釣りの決着を着けに三重県尾鷲の梶賀へ通って下野正希プロ、年末の釣りはインシダイをあきらめて琵琶湖の近江舞子へバスの岸釣りに出かけました。12月30日午前の過ぎに近江舞子舟だまりに着いて、1投目にいきなり30cmです。まわりにいたアングラーも、これにはびっくり。熱心に釣り始めたんですけど、なかなか後が続きません。足元には10cmちょっとレベルのものがいっぱい見えてるのにまじって20cm前後のまじなサイズもいるんですけど、そのちょっと大きいのを選んで釣るのが簡単ではないですね。

この日は晴天微風で、日が射してるときは防寒着を脱ぎたくなくなるぐらいの暖かさでした。バスアングラーは年末の間では日曜日だった29日と翌日の30日が一番多かったみたいです。30日のお昼前で、近江舞子の舟だまりと石積み突堤周辺を合わせて30人以上来てました。その大部分は、ほとんどバスを釣ってません。釣ってるのはごく一部のアングラーだけです。

舟だまりの中にはバスがたくさんいるんですけど、よほど釣り方をうまく合わせないと釣れないようです。

舟だまりの一番奥で釣ってたアングラーは、ちっちゃいのを入れ食いでキャッチしてました。投げたときにアタリがあって、それが掛かるか掛からないかという感じですよ。バスのサイズは10cmちょっとか15cmくらいのが多くて、それに20cm前後がときおりまじるくらいです。25cm前後となるとなかなか釣れません。リグは極小シンカーのツネキチリグかショートスプリットのマスバリリグ、あるいはフックにシンカーをセットするかで、ワームは2匹前後の細身のものを使います。ウイードのちよつと上の中層で細かくシエイクしながらワームを泳がせるのがいいようです。

岸壁の足元のちっちゃいのを狙うんでしたら、極小ワームをセットしたノーシンカーリグを落とし込んでやれば、食うのがまる見えで釣ることができます。釣れるサイズは20cmまでです。お正月に釣りに来て子供を遊ばせるにはいいんじゃないでしょうか。ただし、天気の良い日じゃないと寒いだけかもしれないけどね。

下野プロが釣った30cmは、まさに青天の霹靂みたいな感じで、ほかのアングラーは誰もそんなのを釣ってませんでした。石積み突堤にいたアングラーに聞いても、「ぜんぜんダメ」という返事でした。この分なら、お正月休みの近江舞子は舟だまりでのんびり釣るのがよさそうです。あとは天気がよくなってくれればいいんですけどね。

正月の琵琶湖は荒天続き。近江舞子のバスは行方不明 琵琶湖ホット情報(2003/01/04)

お正月休みの琵琶湖は寒くて風が強くて、晴れているかと思ったら雪が舞ったり雨が降ったりする荒れ気味の天候が続いています。周囲の山は真っ白です。こうなるとさすがにボートで釣りに出てるアングラーは少ないですね。12月28日の日曜日はトーナメントのプラクティスに出てるボートがかなりあったんですけど、それ以降は激減しています。1月1日からはさらに風が強くなってるため、ボートではちよつと釣りにならない状況です。

そんな中、1日午後南湖の御呂戸川沖でバスフィッシングをしていたボートから2人が転落して、うち1人が死亡するという事故が発生しました。この冬は、いったん天候が荒れると、とんでもない強い風が吹いて大荒れになるので、ボート釣りは特に注意しないといけません。いきなり元日に事故が発生したのは残念なことですよ。

岸釣りは大勢のアングラーが来てるんですけど、風が強いのと雪解け水が流れ込んで水温が下がってるためバスを釣るのは難しいようです。近江舞子は年末まで舟だまり内で小バスがよく釣れたのが、新年が明けてからというものの、ぜんぜん釣れなくなってしまいました。4日に様子を見に行ったら、舟だまり内は水がちよつと濁ってて、岸壁の足元にたくさん見えてた小バスがぜんぜん見えなくなってます。

水が濁ったからなのか、水温が下がったからか、原因はよくわかりません。年末に漁師が網を入れてバスを獲っちゃったという説もあるんですけど、28日のお昼前にたくさん見えてた小バスが正月にいなくなっただけということ、28日の午後か大晦日に網を入れたということになります。いくらバスがいいお金になるといつても、そんなことするんでしょうかねえ。

舟だまりだけでなく石積み突堤や浜にも大勢のアングララーがいて、全体で8人くらいが釣りをしていたでしょうが。8分ほど様子を見てたんですけど、誰もバスを釣ってませんでした。エサ釣りでも釣れないくらいですから、ちょっとたいへんです。舟だまりの奥の方で釣りをしていたアングララーに聞いたら、「今日はなかなか釣れませんかねえ」と言っていました。ぜんぜん釣れないということはいいようなんですけど、8日に様子を見に行ったらときにくらへるとたいへん釣り難くなってるのは間違いありません。

確かに元日以降の琵琶湖は寒くて荒れ気味の天候が続いてるんですけど、湖西の川尻のウインドエリアでトップで釣れてるなんていう情報もあるくらいですから、舟だまりの中にバスがいるんだつたら釣れてもよさそうなものです。琵琶湖の漁師がバスを獲るために網を入れてるのを見たら、そういう情報こそ携帯電話やインターネットでみんなに知らせないといけません。サーフィンの波情報みたいに、バス漁師の網入れ情報のホームページを誰か作ってくれませんかねえ。

正月休み最終日も大荒れの琵琶湖南湖

琵琶湖ホット情報(2003/01/05)

お正月休み最終日の1月5日の琵琶湖南湖は、朝から南からの強風が吹いて大荒れになっています。沖合は波が高く、御呂戸川沖で死亡事故があった1日よりもひどいくらいですから、ボート釣りはとても無理です。トーナメントは、やったんですかねえ。岸釣りも湖岸から琵琶湖に向かって吹き込む風が強く、建物などの風裏に入らないと立ってるだけでもた

いへんぐらいいです。風が弱くなるまで釣りは無理ですな。北湖の風は南湖よりはましなんですけど、局地的に強い風が吹いてる所があります。この風は突風みたいに吹くことがあるので、釣りの邪魔になるだけでなく、タックルや帽子を飛ばされないように注意しないとけません。立ってるだけでも風にあおられてふらつくことがあるくらいですから、お子さん連れなどは特に注意してあげてくださいね。

この風の中、北海道の苫小牧から福井県の敦賀へ向かった新日本海フェリーがエンジン故障で立ち往生してるそうです。実は御手洗雄一元プロがお正月休みに北海道へ行っていて、3日のジギングはみたらーが来なかったから船が出たしよく釣れたとメンバー全員喜んでたんですけど、なぜか新日本海フェリーで帰ってくるのことでした。心配して電話で聞いてみたら、1日早く4日の夜に帰ってきたんだそうです。みたらーは初めてジギングに行つてハマチを入れ食いしたら、日本中が大雪になって大迷惑したという実績の持ち主です。「新日本海フェリーまで止めた」と言われなくてよかったね、みたらー。

NHKの受信料支払い拒否の理由

琵琶湖ホット情報(2003/01/07)

たった今、NHKの集金人がBRの服部の自宅へ来ました。その集金人いわく、受信料を長い間払わずに貯まってるから払ってくださいとのこと。昨年4月に母親が他界した前後から、ずっと払ってなかったのを集金に来たようです。「NHKを見て受信料を払ってた人は母親で、去年の4月に死んでしまいました」と言つた。「その間の分はいいから、この2カ月分だけ

でも払ってほしい。電波法で払ってもらわないといけないことになってる」と言われました。数分のやり取りの後、結局払わずに帰ってもらったんですけど、その不払いの決め手になったのは次のようなことです。「NHKはバスが害魚だという一方的な報道をしている。そのことが原因の一つになって、今年の4月から琵琶湖で釣ったバスをリリースできなくなってしまい、仕事に大きな影響を受けている。そういう報道をするNHKに受信料を払って、放送を支援することなどできない。バスが害魚だという報道をやめるのなら受信料を払ってもよいが、それが無理ならこの家から受信料を徴収することはあきらめてほしい。もしこの主張に反論があるなら、会長でも役員でもプロデューサーでもディレクターでも記者でもいいから来てもらおうように伝えてほしい。もうしていただけたら、当方はメディア関係の仕事であるから、ネタとして大いに利用させていただく、こう言ったら、集金人はこれといった反論もなく引き上げていきました。

受信料を集めることだけが仕事の集金人にこういうことを言って、それがNHKに伝わることは期待しない方がいいんですけど、何も言わないよりはましかもしれません。大勢が同じことをやれば、ちょっとは影響力を行使できるかもしれませんね。NHKのファンで、受信料はぜひ払いたいという方にはお勧めしませんが、払ってないんだったら、集金に来たときにこういう風に言えば、話が早くすむかもしれませんよ。バスのリリース禁止が3カ月後に迫って悶々とする気持ちが悪くもありません。バスのリリース禁止が3カ月後に迫ることも覚悟の上で引き受けてるはずですよ。まあ、なるべく集金人の個人攻撃にならないように、あくまでNHKに文句を言いたいというスタンスを崩さずに言うのがいいんじゃないでしょうか。

これって、NHKの不買ですよ。不買ってというのは、こういう風には買わない対象となる商品や会社を絞って、はっきりした狙いと主張を持ってやらないと効果がありません。それを集団で大がかりにやったら、不買運動ということになります。Editorial Vol.11でBBC服部は滋賀県でなるべくお金を使わないようにしていると書きましたが、これは滋賀県の経済に寄与したくないから個人的にそうしているだけで、こういうのは不買とは言いません。こんなのを不買と言ったら、本気で不買運動してる人に対して失礼なんじゃないでしょうか。

NHKのようなメディアに対して不買運動を仕掛けたら、それは言論の自由の侵害になるんじゃないかという意見もあるんですけど、受信料の強制徴収でNHKを見ることを強要されているのだとしたら、それこそ思想、信条の自由の侵害というものです。また、受信料の支払い拒否という方法にどれぐらいの効果があるかも疑問です。バスアングラの一部分が支払いを拒否したところで、膨大な支払い拒否者の中にまぎれてしまっただけかもしれませんからね。

ましてやコマーシャル入りで放送されている民放の場合、視聴者にできるのは電話やファックス、emailで意見を言うくらいがせいぜいです。そこで行われている、例えば滋賀の琵琶湖放送の県政とのなれ合いぶりは、兵庫県と神戸市が株主であるサンテレビよりもはるかにあからさまで、見ているこっちが恥ずかしくなってしまうほどです。その放送のスポンサーが滋賀県なら、もちらんのこと税金が使われてるわけなんですけど、それに対して視聴者はいったい何ができるでしょうか。

そのような強い力を持ったメディアとそれを支配する勢力に自分達の意見をぶつけるには、あらゆる手段を使って圧力をかけるしかありません。NHK受信料の支払い拒否は、その手段の一つですから、特に理由もなく払わないというんじやなくて、ここぞというときに自分の意見をはっきりと述べた上で支払いを拒否するのでなくては効果が上がりません。新聞に対しては、購読をやめるんじやなくて、「長い間購読してる者ですが」と言った上で意見を述べた方が聞いてもらえるようです。琵琶湖放送に対しても何か考えた方がいいんじやないでしょうか。そういうメディアとの賢い付き合い方を皆さんもぜひ一度、真剣に考えてみてください。

正月明けの3連休初日はのんびり穏やか

琵琶湖ホット情報(2003/01/11)

成人の日がらみの3連休はまずまずの釣り日和が続きますね。だけど、さすがにお正月休みが明けて1週間後ですから、各地ともアングラーはそんなに多くないようです。今が旬の若狭湾や丹後半島のルアー船も、穏やかで釣りに出られるチャンスなのに空気があります。今なら、ちょっと探せば連休中に乗れる船が見付かりますよ。

滋賀県琵琶湖のバスフィッシングも3連休初日の1月11日はお正月休みの多かつたときよりアングラーは少なめです。それでも岸釣りはそこそこ来ていますが、ボート釣りは本当にバラバラです。南湖の有望ポイントでも数隻ずつボートが浮かんでるだけで、気温が上昇してるし風も強くありませんから、のびのびと釣りができるんじやないでしょうか。ただし、

バスを釣るのは本当に手強いみたいですよ。

近江舞子の岸釣りは、またバスが釣れるようになりました。年末までよく釣れて、それがお正月になったとたん、なぜかバスの姿が見えなくなって釣れなくなってたんですけど、今は舟だまりの中で小さいのなら釣れます。サイズは年末までよりも小さくなっています。みたいで、35cmがなかなか釣れず、数釣れるのは10cm前後になってしまっています。11日午後2時半頃に10分ほど様子を見てる間に、同じアングラーが10cmほどの20cmほどのバスを釣りました。ルアーは1匹くらいにちぎったワームのノーシンカーリグです。石積み突堤の方は、あいかわらず釣れてません。

この日、たまたま釣り場の様子を見ていた村上晴彦君と会いました。皆さんに「明けましておめでとうございます」とのことです。村上君に聞いても、石積み突堤は釣れてないとのことでした。舟だまりの方は、そこそこのサイズのバスは、内湖からのドンドン落ちから水路にかけて、道路の反対側の岸壁の近くに多いそうです。お正月からこっちは、25cm前後のバスはいないことはないけど、すごくナーバスになって、釣れるタイミングを絞って狙わないと、食わないときはぜんぜん食わないそうです。

村上君は昨日まで和歌山県の野池へ取材に行っていて、明日から関東の方へワカサギ釣りに行く合間の1日に琵琶湖の釣り場の様子を見に来たんだそうです。あいかわらずがんばりますね。下野正希プロや杉戸繁伸プロにも負けない釣り好きの1人ですから、近江舞子で会うのも偶然ではないと思いますよ。

琵琶湖の水位はマイナスイス60cm台まで上昇して、8日に取水制限が解除されました。例年な

ら水位が上昇し始めるのは1月になってからなんですけど、この冬はそれよりも約1カ月早く、12月中旬からはつきりとした上昇傾向になってます。水温は南湖で年間の最低レベルになりました。北湖の方はボデイウオーターで8度以上あります。北湖の水温がさらに下がるのは、まだこれから先のことで、琵琶湖周辺の積雪が大きく影響します。この冬のバスの釣れ方は例年とかなり違つので、そのあたりのことをよく観察しながら、どこでどんな釣り方をするかを考える必要があります。

3 連休最終日も穏やか。近江舞子はマメバス天国

琵琶湖ホット情報(2003/01/13)

成人の日がらみの3連休最終日の1月13日の琵琶湖は、ときおり日が射す薄曇りで風も大したことなく、まずまずの釣り日和でした。3連休を通じていい天気が続いたのはよかったですね。魚が釣れても釣れなくても……。

近江舞子舟だまりはヘラブナ釣りとハイジャコ釣り、バスアングラーが入りまじって釣りをしています。バス釣りはルアーとエサ釣りが2対1ぐらいの割合で、カップルや子供連れのファミリーが目立ちます。成人の日でも、さすがに晴れ着や羽織袴、スーツ姿の人はいますね。

釣れてるバスはめっちゃちっちゃいですね。数上がってるのは10~15cmもないぐらいのマメサイズです。ちっちゃいワームの尻尾をちぎって1日ぐらいにしたのを極小シンカーのマスバリリグにセットしたり、マスバリにシンカーをセットしたりリグを使ってるアングラーが見える。バスがいつせいに姿を消したお正月休み頃にくらべると、また戻ってきたのか、どこかに隠れてたのが出てきたのか、姿が見えるようになりました。ただし、サイズは一回り小さくなっちゃってます。10cm前後を数釣ってる間に20cmクラスがまじってたのが、今はなかなかまじりません。エサ釣りなら25cmぐらいまでは釣れてるんですけどね。このサイズをルアーで狙うのは、真冬のボート釣りで30cmオーバーを狙うぐらい難しいようです。エサ釣りで釣れてるといことは、舟だまりの中にいないことはわけですから、村上晴彦君の言うように時間帯や釣り方をよく考えて狙う必要があるのかもしれないね。

石積み突堤はあいかわらず釣れてません。岸からのキャストで届く範囲にもバスはいないようで、沖で釣りをするボートも見かけません。北湖で釣りをしているボートは本当に少なく、ごくたまにバスボートが沖を走ってる程度です。近江舞子で会ったアングラーの話では、知内、浜分、北小松、中浜など湖西の岸釣りポイントはどこもマメバスが釣れてる程度で、いいサイズは出てないようです。

それと、南湖の木浜や矢橋で漁師がバスの網を入れてるのを見たという話も聞きました。近江舞子でも年末に漁師が網でバスを獲ってしまったから釣れなくなったという話があります。ほかの釣り場も含めて、岸釣りで釣れたり釣れなかったりしてる様子を見ると、確かに漁師の網入れの影響と考えれば説明が付くような気もするんですけど、漁師がこのページ

の情報を見て網を入れてるなんてことはないでしょうね。

琵琶湖周辺に積雪。いよいよ厳冬期に突入か!?

琵琶湖ホット情報 (2003/01/16)

1月14日夜から滋賀県琵琶湖周辺は雪になりました。BBC事務所がある大津市今堅田周辺は、15日朝には約10cmの雪が積もって、どこもかしこも真っ白です。雪は15日の夕方まで降り続き、夜になってやっと小康状態になりました。積雪は15cmぐらいになってます。

雪の影響で琵琶湖周辺の道路があちこちでノロノロ運転になったり、チェーン規制が行われたりしてます。湖西道路の真野から志賀までの区間でもチェーン規制が行われ、それを避けて一般道に降りてきた車で国道19号が終日長い渋滞になりました。天気予報によると、これから天候は回復してくるらしいんですけど、今夜いっぱいには雪が降る可能性があるとのこと、まださらに雪が積もるかもしれません。明日の朝は道路の凍結が心配です。琵琶湖へ釣りに来られる方は、くれぐれも車の運転にご注意ください。

琵琶湖岸は北へ行けば行くほどたくさん雪が積もってます。この雪が解ければ、当然のことながら冷たい水が琵琶湖に流れ込むわけで、水温が下がったり水が濁るなどの影響が出ます。ただでさえ下がってる水温がさらに下がることになるんですけど、港の岸釣りにはかえって好影響があるかもしれません。

特に港内に湧き水が多くて近くに川が流れ込んでるような所では、雪解け水が出ると港内の水温が港外よりも2〜3度以上も高くなる現象が起こります。その結果、港内にバスが集まって、かえってよく釣れるようになることがあります。お正月からこつち、マメバスしか釣れなくなってる岸釣りポイントが、この雪の影響でよくなる可能性があるわけです。厳冬期によく釣れる岸釣りポイントというのは、そういう場所が多いので、これからの釣れ方に注目する必要があります。

県漁連会長らの恐喝未遂事件。メディアの反応に注目!! 琵琶湖ホット情報 (2003/01/22)

滋賀県漁業協同組合連合会長らによる恐喝未遂事件が1月22日午後のテレビニュースと新聞の夕刊でいつせいに伝えられました。滋賀県だけでなく全国レベルで取り上げられたので、すでにニュースや新聞をこらんに持ってご存じ方も多いと思います。

このニュースを見て思うんですけど、これって琵琶湖のことをよく知ってるバスアングラーにとつては別に驚きでもなんでもないんですよね。「やっぱりね」というような感想を持たれた方が多かったんじゃないでしょうか。つまり、県漁連会長と漁協の副組合長や理事らがつるんで、建設業者に対し実際には起こっていない被害を訴えて金を脅し取るつとしたなどというとんでもない事件が、予想の範囲内におさまってしまっぐらいの黒い噂がたくさんあるということです。

今回の一件は、そのうちのひとつがたまたまバレちゃっただけのことだと、そういう受け止め方をしたのが琵琶湖のバスアングラーだけじゃないという事実は、同日付け京都新聞滋賀版の夕刊に掲載された見出しによく表れています。「疑惑の声 以前から」「絶えぬ金品不当要

求」補償各目 漁業関係者に多く、テレビのニュースではここまで言ってませんし、全国の新聞でどう伝えられたかはわかりませんが、さすが京都新聞は地元だけに、よくわかってらっしゃいます。新聞がこれぐらい書くことは、裏には記事にできないようなことが山ほどあるってことです。

それとも一つ、同紙の記事に県水産課の課長補佐のコメントが出ています。

京都新聞滋賀版（1月22日夕刊）からの引用――

また、県漁連の全面的協力を得て外来魚の緊急駆除対策を実施している県水産課の辻章一課長補佐は「まだ詳しいことがわからないから」としながら、「仮に逮捕が事実としても、組織としてはなくあくまで各個人の行為。外来魚駆除の実際の取り組みは、漁業者個々が使命感を持ってやっていただいております。県の政策には影響ない」と語った。

引用終わり――

やっぱり気にしてるんですね、事件が外来魚対策に影響しないかって。そこで必死に影響をなくそうとしてるのが上のコメントなんですけど、これって京都新聞の記者がわざわざこういうことを水産課に聞いたんでしょうか。もし聞いたんだしたら、記者の頭の中には、県漁連会長の悪事から外来魚問題を連想する回路ができてあるということになります。でなかったら、恐喝恐喝事件に関してプロの新聞記者がこんなとんちんかんなこと聞くわけありません。普通に考えたら、今回の事件と外来魚問題って何の関係もありませんからね。

つまり、京都新聞のような地元メディアでさえすでに、外来魚問題に関して漁連に後る暗

いところがあるんじゃないかと疑問に思ってるということじゃないでしょうか。できることなら、この先、漁連や漁協の組織と有力な個人の力関係、補償金や助成金などの流れと帳簿処理などもよく調べて記事にしていたら、いろんなことがよくわかると思うんですけど……って言うか、そんなことすでにこ存じですよ。そのことは恐喝未遂事件の記事や見出しの行間からもよく読み取れます。

と、仮定と推測だけでここまで書いたらちよつと飛躍が過ぎるかもしれませんが、一つの事件に対するメディアの反応から、こういういろんなことが読めるということです。さらに詳しいことはEditorial P……。

それにしても、大阪や京都、愛知の知事の所へ協力のお願いに行ったときに、滋賀県漁連の会長じゃなくて副会長と一緒に行ってよかったですね、國松さん。滋賀県民のかけがえない財産であるところの琵琶湖をあずかる立場の県知事として「琵琶湖の漁業は生態系とともにある」なんて堂々とうそぶかれたのを琵琶湖のバスアングラーは忘れもしません。次になんとおっしゃるか、とても楽しみにしておりますので、よろしくご高配のほどを……。

アングラーがとても少ない極寒の週末

琵琶湖ホット情報（2003/01/25）

1月25日の琵琶湖は、雪は大して降ってないんですけど、北寄りの風が強くて寒い1日になりました。こうなるとアングラーは少ないですね。ボート釣りはよほど根性がないと無理です。カートツバーを車に乗っけて釣りに来たけど、風が強いのでボートを出すのはやめて

岸釣りに変更したアングラーもいたぐらいです。岸釣りも普段の週末の半分以下しか釣りに来てません。

お昼前の近江舞子石積み突堤で釣りをしたバスアングラーは1人だけでした。舟だまりはバスアングラーが2人、ヘラブナ釣り師が2人だけです。その後、午後1時を過ぎた頃からバスアングラーが増えて、一時は3人近くになったんですけど、長続きせず、すぐにどこかへ行ってしまふのは魚が釣れそうにないからでしょうが。それとも寒いから帰っちゃったんでしょうか。

琵琶湖の水位は2日頃から上昇が続いて、内湖から舟だまりへ流れ込むドンドン落ち方は、けっこうな勢いで水が流れています。湧き水よりもドンドン落ちから流れ込む水の方が多くなっているからでしょうか、舟だまりの中の水はちょっと濁ってしまって、小バスの姿が見えなくなっています。

見えなくなっただからと言って、いないことはないと思うんですけどね。バスは誰に聞いても釣れてません。10cm位の小型を何尾か釣ったらまじな方で、20cmを越えるサイズになると本当に釣れないようです。ここ何日か雨が降ったり雪が降ったりして、へんに水位が上昇しているのがよくないんじゃないでしょうかね。

釣り場がこんなに空いてると、アングラーの人数よりも釣りをしているのを見てネコの数が多いくらいです。魚がよく釣れるときは、ネコもやる気一杯で1尾でも多く釣れた魚をもらおうとするんですけど、この日は魚が釣れてないから暇そうでした。

琵琶湖で続発する事件の二エースを見て思ったこと

琵琶湖ホット情報(2003/01/26)

今日も琵琶湖の沖では漁船が漁をしてました。寒い中、沖へ出て漁をするのは、本当にたいへんな仕事です。ご苦労さんなことです。こうやって法律や規則を守りながら真面目に漁をしている人達は、きつとくやしい思いをしておられるでしょうね。心中お察します。

「生態系と共存している」はずの琵琶湖の漁師の一部の人達が、またやっちゃいました。「琵琶湖で操業している約300隻の漁船のうち、3割がエンジンの馬力数を実際より小さく偽装し、漁船法と罟の漁業調整規則に違反している疑いが強いとして、これらの漁船に対し、任意の立ち入り検査を行う」(京都新聞二エース1月22日からの引用)っていうんですけど、琵琶湖にある漁船のうち約300×0.3=約270隻って言ったら、けっこうな数ですよ。

先日のお喝未逮捕事件も、4年も前から滋賀県警に不当要求対策室が設置されてたということなんですけど、漁業調整規則に違反する高馬力エンジンを積んでる漁船がこんな数になるまで本当に気付かなかったとしたら、お役所の目は節穴です。こんなにでっかい節穴が開いてたら、助成金がちゃんと使われているかどうかなんてわかりっこないでしょうね。テレビニュースに写った漁船のエンジンなんか、けっこう古そうだったし、検査なんかはどうなっていたんでしょうか。あるいは、お役所も最初からグルなんじゃないかと、そう思ってる人も少なくないと思います。ぜひ県知事のご意見をうかがいたいものです。

漁業調整規則違反の高馬力エンジンを積んでる漁船が漁をしているところを現行犯で押さえて船長を逮捕したら、これは手が後ろに回る犯罪になります。道交法違反で罰金や免許停ん

て甘いもんじゃなくて、罰金刑や懲役刑を課せられて前科にもなります。「任意の立ち入り検査」なんて言っていないで、今すぐ水上警察の船艇を出して取り締まりをやったらどうなんでしょうかねえ。在来魚の保護のためには、絶対にそうするべきです。なんてことを昨日のテレビで海上保安庁の実録番組を見ながら思ったんですけど、できない事情が何かあるんでしょうか。

さて、ここから先が重要です。外来魚駆除に支出される助成金のことをEditorial Vol.18で書いたんですけど、その後、漁業調整規則違反の記事を見たり、近江舞子へバスの岸釣りの様子を見に行ったりときに沖で漁をしてる漁船の様子を見たりしてるうちに、ふと思いました。漁師が獲った外来魚を助成金で買い上げてますよね。これって、最終的には完全駆除が目的のはずですから、どんどん獲っていったら外来魚が減っていったら、そうなる当然だんだん獲れなくなります。漁獲量が減っていったら漁師は今の値段では仕事にならなくなるはずなんですけど、そのときは1kg1000円とかに値上げするんでしょうか。

だけど、値上げてまた獲り続けたら、さらに獲れなくなるから、また値上げしないといけないくなります。そのまま外来魚がいなくなるまでずっと続けていったら、1kg2000円、3000円、5000円、1万円、10万円と上がっていったら、最後の1尾は1億円とかの値段を付けてでも獲らないと完全駆除はできません。あくまで仕事で魚を獲ってる漁師にまかせると、理論的にはそういうことになります。完全に駆除し終わるまでに何10億円かかるのか、何兆円かかるのか、本当にざっとした話でもいいから、見込みをおたずねしたいと思うんですけど、行政や研究者や駆除派の方でどなたか、そんなことを考えたことがありでしょうか。

あるいは、こういうこともかもしれません。ある一定のところまでは漁師に獲ってもらって、そこから先は漁師の仕事としては採算が合わなくなるので、何か別の方法で駆除するとかです。だけど、誰が、どんな方法でやるんでしょうか。完全駆除ということになったら、広い琵琶湖のことですから、労働量を考えてもたいへんな予算が必要になるはず。それでもなんとかしたいというのであれば、今「駆除、駆除」って言うてる人達が駆除釣り大会にきた人達やその他大勢をかき集めて、ボランティアで駆除するなんてのも一つの方法がもしありません。そのための駆除釣り大会の参加者名簿などをぜひ大切に保管されるようにお勧めします。でないと、手が足りなくなったらたいへんでしょうから……。

ボランティアによる外来魚駆除の際には、いい機会ですから、県知事が大阪や京都、愛知へ協力のお願に行ったりときに知事の隣りにおられた環境保護グループ女性代表の方ならびにリリーヌ禁止条例に満場一致で賛成された県会議員の皆さん、県環境課、水産課職員の皆さん、琵琶湖博物館学芸員の皆さんは、ぜひウエイター履いて琵琶湖へ立ち込んで1尾1尾駆除してみてください。そういうことを誰よりも率先してやっていただければ、琵琶湖の自然環境がどんなことになってるか自分の目でしっかり見る事ができますし、自然を大切にすることというのはこういうことなのかと身を持って感じる事ができますよ。ああ、そうか、こういう人達は知事と一緒に立派な船の上で県職員の説明を聞きながら作業の様子を眺めるのでしたね。どうも失礼しました。まあ、そういうことも含めた駆除計画や費用の試算なんてものがあるんです。ぜひ公表していただきたくようにお願ひ申しあげます。

そういう完全駆除に向かっている計画はまだないけど、とりあえず在来種を保護するために、

今できる手段を使って外来魚を駆除するんだということなのかもしれない。だけど、それにして、漁師まかせの駆除がはずれ行き詰まることは間違いありません。そのときにどうするかの計画や見通しもなく毎年何億円もの税金が注ぎ込まれるのは問題です。それぐらいのことをちゃんと説明できませう。完全駆除なんて非現実的なことを言っているのは大嘘つきではありません。

これって、ゼネコンに世間一般より高い値段で工事を発注して、完成したときには最初の計画よりも何倍も予算がかかってたあげく、できあがったものは赤字山積みの高速度道路や売れもしないマンション、水の需要のないダム、飛行機の着陸料がバカツ高いから航空会社に次々と逃げられてる海上空港なんていう公共事業と同じですね。琵琶湖の外来魚駆除を公共事業と考えたら、とてもよくわかるような気がします。琵琶湖のバスアングラーや釣具店、レンタルポート店の人は、公共事業で強制的に立ち退かされる住民だったらまだいいんですけど、言い分を聞いてもらえない上に立ち退き料も出ないわけですから、ある日突然工事が始まって住み家を追い出される野良犬や野良猫と扱いは同じです。ワンワン、ニャーニャーと抗議しても何も聞いてもらえません。

BBC服部がこういふことを考えるようになったのは、今日でもっとも注目を集めてる人物、猪瀬直樹の「日本国の研究」(文春文庫488円)という本を読んだからです。「続・日本国の研究」(同488円)もすぐ読んでみたいと思ってます。どちらも、ちょっと大きな本屋さんだったら平積みになってるから、簡単に手に入ります。

今年の4月1日以降は琵琶湖へ行って釣りをしないで、こういふ本を読んでるっていうのもいいですねえ。大勢のバスアングラーが釣りをしないで、みんな同じ本を読んだら、ちょっと恐い景色だと思っんですけど、バイブルや毛沢東語録に匹敵する何かいい本はないでしょうか。これから作っても間に合うから、いっそのこと地下出版したるかな……。赤い表紙で、タイトルはやっぱり「琵琶湖の研究」か。

世界水フォーラムで琵琶湖の浚渫船は消えるか

琵琶湖ホット情報(2003/01/31)

3月に滋賀、京都、大阪の3府県にまたがって開催される世界水フォーラムの滋賀県でのイベントの概要が発表されました。それによると、フォーラムの分科会がびわ湖ホールと大津プリンスホテルの両会場での21日に、コンサートやミュージカルの上演、パネル展示、シンポジウムなど様々なイベントが行われる水フェアが16、21日に県立体育館、なぎさ公園、ピアザ淡海の各会場を中心に開催されるということです。

3月21日は春分の日がらみの3連休初日で、ワールドプロトーナメントの初日もあります。4月1日からの外来魚のリリース禁止を目前に、大勢のバスアングラーが琵琶湖に集まるんじゃないかと思うんですけど、そこで一つ見ていただきたいことがあります。浚渫船が南湖の沖にいつも通り浮かんで、琵琶湖の水を茶色く濁らせながら作業してるかどうかです。

2000年4月に大津市での環境担当大臣会合(環境サミット)が開催されたことです。そのときもちょうど田マススターズプロトーナメントが琵琶湖で開催されていました。世界の

主要先進国の偉いさんが集まる会議で、琵琶湖の視察なんかが行われたら、航行規制があるんじゃないかなどと噂してたんですけど、なんとこのとき南湖の浚渫船がきれいさっぱりいなくなっただけです。

そのときの様子は Bassett がかわら版でお伝えしました。上の写真はトーナメント前日の7日に加藤誠司プロのブラクティスを取材中に撮影したものです。赤野井沖なんですけど、いつも大きな顔して南湖の真ん中に浮かんでる浚渫船がいなくなってます。沖の浚渫船だけじゃなくて、赤野井湾内や北山田のテトラの内側で作業してた台船や作業船も見事にいなくなっ、工事の跡形も消えてなくなってます。

世界水フォーラムの新聞記事を見て、環境サミットのときに琵琶湖の浚渫船が消えたことに気付いて、「すごいことするねえ」と加藤プロと話し合ったのを思い出しました。今回の世界水フォーラムはちょうど「E」ワールドの開催週でもあり、バス関係のメディアも琵琶湖に集合するはずですよ。トーナメントの様子だけじゃなくて、こういうこともぜひしっかりと見て帰ってほしいものです。

水位、水温ともに落ち着いた琵琶湖。一発狙いの季節か!? 琵琶湖ホット情報 (03/02/06)

2月4日から5日にかけて琵琶湖南部は日中そんなに寒くなくて晴れ間がのぞいたりしてたんですけど、6日になってまた雪空になりました。北の方はきつと雪でしょうね。1月末から、いい天気の日がなかなかなくて、いかにも冬の琵琶湖って感じの天候が続いています。

この冬は天気よくない日が例年より多いような気がします。

天気がよくないから、平日はバスアングラーがとてもなく、釣り場はガラ空きです。6日正午の近江舞子は石積み突堤に1人、舟だまりに1人、釣りをしないで様子を見てるだけの人が2人、そんな感じでした。見学ネコの姿が見えないのは、魚が釣れてないからでしょうか。

バスはあいかわらず舟だまりの中に小型がたくさんいます。ルアーではなかなか釣れないんですけど、生きエビのエサ釣りなら毎日ほとんど入れ食い釣れますから、コンディションは落ち着いているようです。サイズは10cmちょっとがメインで、大きくても20cm前後までですけどね。石積み突堤はずっと釣れてなくて、アングラーもあまりいません。

琵琶湖の水位は2月に入ってマイナス10cmをちょっと超えたところで落ち着きました。石積み突堤の石畳の隙間が水に漬かっているけど、石畳の上に立って釣りをするのは問題ないレベルです。内湖から舟だまりへ流れ込むドンドン落ちは、一時よりも水量が少なくなってます。水温も下がりが切ったところで落ち着いているし、ちょうどこのあたりが状況の分かれ目かもしれません。これからは浜や石積み突堤で一発狙いが面白いんじゃないでしょうか。ただし、寒くても、ちょっとぐらい釣れなくてもがまんできる根性があればの話ですけどね。

今週末は千葉の幕張メッセで国際釣り博、来週は大阪南港のインテックス大阪でフィッシングショー OSAKA が開催されます。毎年、フィッシングショーの頃になると、琵琶湖で大きなバスが釣れ始めます。下野正希プロが得意のロングビルサスペンドミノーで大きいのを釣って、フィッシングショーのセミナーで「こんなとこ来てたらあかんよ」と憎まれ口をた

たく、あのパターンです。すでにポート釣りで大きいのが出始めてるみたいですから、早めに釣り方を切りかえた方がいいかもしれませんね。

このところジギングばかりやってた杉戸繁伸プロは、8日の土曜日にひさしぶりに琵琶湖へ出て一発大物を狙うそうです。「ヒラマサやメジロ狙いのジギングで、がまんの練習はさんざんしたから、何のアタリもなくても1日釣り続ける自信はある」と言っていました。杉戸プロのレポートをお楽しみに……。

琵琶湖は冬のどん底。平日の釣りはガラ空き

琵琶湖ホット情報(03/02/14)

今日からフィッシングショーOSAKAですね。だからということもないんですけど、滋賀県琵琶湖はバスアングラーがぜんぜんいません。14日午後3時頃の近江舞子は、舟だまりに1人いただけです。石積み突堤は無人で、駐車場にもう1台いたバスアングラーの車は、BBC服部が到着するのと入れ違いで帰っちゃいました。うーん、これってバスが釣れてないから、だんだんとアングラーが少なくなってるってことなんじゃないか。

そのたった1人、舟だまりの奥の隅っこで釣ってたアングラーに聞いたら、「ちっちゃいのは釣れるけど、20cmオーバーは釣れてない」と言っていました。近江舞子へはよく釣りに来るとのことです。だいたいいつも日中は小さいのばかりで、午後4時を過ぎる頃から20cmオーバーが釣れだして、夕方暗くなったら終わってしまうそうです。ほかのアングラーから同じような話を聞いてますから、これが今の近江舞子のパターンみたいですね。

琵琶湖周辺は9日の日曜日からこつち暖かい日が続いてたんですけど、13日の午後からちよつと寒くなってきました。と言っても、薄めの上着を着てれば手袋なしでも平気なぐらいですから、普通の真冬にくらべたらぜんぜん寒くないんですけどね。比良山から吹き下ろす風が強くなり始めてますから、これから寒くなって週末は荒れるかもしれませんよ。

琵琶湖の水位はマイナス30cm近くまで上昇しました。水温も今週はわずかに上がってます。内湖から舟だまりへ流れ込むドンドン落ちの水の勢いが、一時にくらべるとずっと緩やかにになりました。これは雨や雪解けで流れ込む水の勢いが落ちてることもあるんですけど、本湖の水位が上昇して内湖との水位差が小さくなってる影響が大きいと思います。これで何日か暖かい日が続いたら、舟だまりの中の水温がポツと上がって、それにつられていいサイズのバスが動くということも考えられるんですけどね。南湖で大きなバスが数は少ないけど釣れてるのは、もしかしたらそういうことがもっと大きなスケールで起こってるのかもしれないですね。

今の調子で季節が進んだら、去年に負けないぐらい早く春がやって来る可能性がありそうです。もしそうなってくれたら、リリース禁止になる前にちよつとでもスポニングシーズンの釣りが楽しめるからうれしいんですけどね。

ミノーにグッドサイズ。琵琶湖の春がスタートか!?

琵琶湖ホット情報(03/02/22)

滋賀県琵琶湖は春の釣りがスタートしてます。水深2〜3mのシャローエリアでスピナー

ベイトやミノーに40〜50cm、大きいのは60cm近くあるようなバスがヒットし始めてます。

2月22日の午前中だけフィッシングガイドに出た杉戸繁伸プロのゲストは、40cmオーバのバスをキャッチしました。ルアーはロングビルサスペンドミノーのDDスクワレル7SP。場所は南湖で、この時期の定番中の定番ポイントです。これって、杉戸プロがもっとも得意としている釣りの一つなんですけど、今シーズンはちょっと早めにパターンが進んでるみたいですね。

23日は午前中曇り空で、次第に寒く、風が強くなってきました。午後からは雨です。午前中だけガイドに出た杉戸プロは、うまくやってます。翌23日には「Bトナー」ナメントがあつて、そのプラクティスのポイントもかなり出てました。杉戸プロの報告によると、要所要所に2、3隻ずつはポイントがいたとのことなんですけど、午後は雨に降られて寒かったんじゃないでしょうか。

午後になって雨が降りだしてから近江舞子へ岸釣りの様子を見に行っただけですが、バスアングラーは舟だまりに1人しかいませんでした。ほかにヘラブナ釣り師が2人いただけで、石積み突堤には誰もいませんでした。

近江舞子へよく釣りに行ってるアングラーの話によると、舟だまりはあいかわらずママバスが釣れてるけど、石積み突堤はかなり粘っても何も釣れないそうです。この冬に限ってなのかどうかはわかりませんが、石積み突堤はぜんぜんダメでした。もう2月下旬ですし、南湖のボート釣りは上に書いたような状況ですから、大きいのを狙うんだったら岸釣りもシャローエリアに切りかえた方がいいかもしれませぬ。

南湖東岸の各岸釣りポイントはアングラーがそこそこいて、早くもアシ原に立ち込んでるアングラーもいるそうです。寒い夜に浅い所で釣りをしてるアングラーも少なからずいるそうです。今シーズンは早めにそういう釣りを始めた方がいいのかもしれないよ。

リリース禁止まで1カ月の琵琶湖にバスアングラー戻る 琵琶湖ホット情報(03/03/02)

4月1日からのリリース禁止まであと1カ月というところで、琵琶湖のバスフィッシングがにわかには春めいてきました。大きいのもポロポロ上がってます。上の写真は2月28日に野洲郡中主町のイシツカマリンからバスボートで釣りに出た西山隆規さんがキャッチした50cm、273g。場所は膳所沖で、ルアーはサスペンドミノーだったそうです。

3月2日の「Bトナー」ナメントでも大きいのが釣れてるみたいですね。バスをキャッチした選手の割合も約5%までアップしてます。1日の雨で水位がグッと上昇したし、水温も上がってきてますから、いよいよバスがスポーニングに向かい始めてるのかもしれないね。プラクティス中に40cmクラスをキャッチしたという話を数人のアングラーから聞きました。釣れないと言っアングラーもまだまだ多いんですけど、少なくとも厳冬期のめっちゃ難しい状況から脱してるのは間違いないようです。

3月に入ってバスアングラーも多くなりました。さすがに土砂降りの雨だった1日の土曜日は「トナー」ナメント以外の一一般のアングラーは少なかったですけど、2日の日曜日は岸釣りもボート釣りも目立って多くなっています。近江舞子は石積み突堤に数人、舟だまりにも2人

ぐらいのバスアングラーがいました。2月のアングラーが少なかったときは、誰もいなかったり1人とか2人、多くても5人までだったのにくらべると、はつきりと増えてます。

バスの釣れ具合は、石積み突堤はいかかわらずダメとのことでした。舟だまりはマメの活性が一時よりもアップしてるようです。舟だまりの奥の隅に20cm弱ぐらいまでのが浮いてるのがたくさん見えて、ちっちゃいワームを使ってるアングラーは見てる前で何尾も釣ってました。ドンドン落ちから流れ込む水量が増えて、水温も上がってるので、それがいい方へ作用してるみたいです。ただし、ましなサイズが釣れたという話は聞きませんでした。

レンタルポートのお客さんも急に増えてます。志賀町小野のレンタルポート店ひさの屋は2隻ほどのポートが出てました。2月中は本当にお客さんが少なくて、こんなに来たのはひさしぶりだそうです。釣果は1尾釣れたとか、ぜんぜん釣れないとかで、お天気がよ過ぎたからなのかどうか、思いのほか難しかったみたいです。しばらく前には20cmオーバーを1人で5尾釣ったとか、20cm前後を何尾も釣ったアングラーがいたそうなんですけど、いつもそうはうまくいかないようです。

だけど、フィッシングショーが終わって、3月に入って、休日がいい天気になったら、釣れるかどうかよりも、とにかく釣り場へ行きたくなるんですよ。この春の琵琶湖は、早いタイミングで大きなバスが大挙して浅い所へ押し寄せて来そうですから、ギャンブルのもりで早めに動くのは正解だと思いますよ。

春とは名ばかり。3月に吹雪の琵琶湖

琵琶湖ホット情報(03/03/09)

滋賀県琵琶湖は雨が降ったり雪が降ったり風が強かったりで、めっちゃ寒い日が続いています。3月8日は琵琶湖開きだったというのに、春とは名ばかりです。9日はさらに寒くなって一部では吹雪になりました。まわりの山は真っ白です。

こうなると、さすがにバスアングラーは少ないですね。午前中の近江舞子は石積み突堤に2人、舟だまりには1人しかいませんでした。石積み突堤のアングラーは、ぜんぜん釣れないと言っていました。舟だまりのアングラーは、まだ釣り始めたばかりとのことだったんですけど、横なぐりの雪が降る中でちよっとつらそうです。

午後3時頃から、今度は琵琶湖大橋を渡って南湖東岸の赤野井湾や下物周辺を見て回ったんですけど、岸釣りアングラーはどこにもいません。朝から風が強くて雪も降ったりしたので、釣りに来てたアングラーも帰っちゃったのかもしれないけど、中主の吉川漁港でやっとアングラーの姿を見付けました。吉川漁港では数は多くないけどバスが釣れてて、サイズもちよっと大きくなって25cm前後が釣れるようになったとのことでした。

ポート釣りはZBCチャプター湖南トーナメントが開催されたため、寒い中をそこそこ釣りに出てがんばってました。名鉄沖は、かなり沖の方に浮いてるポートが多くて、岸寄りの浅い所で釣ってるのはわずか2、3隻です。まだバスのポジションがそのあたりなんです。うね。レンタルポートは天気がよかった2日の日曜日にくらべると半分以下です。今のところ、アングラーが増えてきたとは言っても、バスフィッシングが本当に好きな人達が主体で、

手軽に釣りに来るタイプのアングラーはまだ少ないみたいですね。

3月に入ってからというものの、強い雨がたびたび降って、琵琶湖の水位は急上昇しています。1週間前とくらべて20cmくらい上昇していますから、琵琶湖の面積を考えればすごい増え方です。これでいよいよスポーニングと言いたいところなんですけど、あまりにも急に水位が上昇したことに加えて、寒い日が続いているため、水温は下がりがり気味になっちゃっています。こちらあたりで雨が止んで、天気がよくて暖かい日が続いてほしいところです。そうなったらいよいよシャローの釣りが本格化するんじゃないでしょうか。

ニュースステーション琵琶湖特集放送延期の理由

琵琶湖ホット情報 (03/03/17)

3月11日夜放送のテレビ朝日ニュースステーションが、滋賀県琵琶湖の外来魚問題を取り上げる予定だったのが、急きょ延期されました。予告を見る限り、今までに何度もあった特にとつてことない類型的範囲を出ない内容のはずだったんですけど、その中に例によって滋賀県漁連青年会長が出てきて、インタビュアーに答えておられるシーンがあったそうです。(注 B.C.服部が使ってるパソコンはアップルのPowerBookG4で、WindowsMediaPlayerはインストールしてないので、予告編を見ることができません。ですから、青年会長が出てたというのは見た人から聞いた話です)

この人って、滋賀県漁業調整規則第8条の制限を越える高馬力エンジンを自分の船に積んだのが水産課による立ち入り検査で見付かり、漁船登録の取り消しとアコ沖すくい網漁の認可取り消しをくらって、現在操業できない状態に追い込まれてるんですよ。そのことは滋賀県水産課が認めています。法律を無視して魚を獲った漁業者に、外来魚がどこのこののなんて言う資格があるのかって、もし本当にニュースステーションの特集に姿を現したらテレビ朝日に抗議するつもりだったんですけど、その前に放送延期になっちゃいました。

予告まで流してた特集の放送を延期するぐらいですから、よほどの事情があったはずなんですけど、イラク攻撃が間近にせまっているのに、琵琶湖の外来魚問題なんかやってる場合じゃないってことなんじゃないでしょうか。同番組のメインキャスターのコメントでは、延期は放送時間の関係で、近日中に放送することとしたから、まあそういうことなんじゃないかな。県漁連の青年会長がやばいことしたから延期したなんて、もし本当だったとしても言えるわけありません。なぜ延期したのかと局に電話して聞いても、番組内で説明した通りですとか答えてもらえないはず。本当に電話した知人の話では、特集はできあがってるから必ず放送しますと電話で応対した女の人がきっぱりと言いつつ待たせてました。それなら楽しみに待ってまじょうか、抗議するときのセリフをよく考えながら……。

それにしても、特集の予告に出たという琵琶湖のお魚の先生は、こんな漁業者と一緒に話にされていいんじゃないでしょうか。その点、どう考えなんでしょうか。あるいは同類だから何も感じないとか……。本当に近日中に放送するとしたら、青年会長はそのまま出てくるんじゃないか。それとも完パケを今から作りかえるんですけど、それもたいへんですよね。だけど、それにしても、裏で何やってるかわからない漁業者のお相手をいつまでもしてたら、それこそ沢ダイオキシン野菜報道の二の舞になっちゃいますよ。テレビ朝日さんには、老

婆心ながら、「ご忠告申しあげる次第です。

とりあえず、特集の放送を楽しみにしています。青年会長が出てくるシーンをカットしたらカットしたで、言いたいことは思い切りありますから。それと、これから先、他のテレビ局や新聞などがこの漁業者のことをどう扱うかがとても楽しみになってきました。

アメリカのイラク攻撃と外来魚リリス禁止の共通点

琵琶湖ホット情報(03/03/20)

3月20日正午前にアメリカを中心とする米英豪連合軍によるイラク攻撃が始まりました。日本はアメリカの行動を支持するが攻撃には参加しないと小泉総理大臣は言ってるんですけど、海上自衛隊のイージス艦や補給艦がインド洋西海域に出動しています。日本国内のアメリカ軍基地から出動してる艦船や航空機もいて、日本はそれを支えるために毎年多額の予算を支出しています。つまり、支持するかしらないか、攻撃を手伝うか手伝わないかなって議論をしているのは日本の国会とメディアだけで、日本はすでに戦争に参加している状態なわけです。ブッシュアメリカ大統領は自国民に対してそのように説明してるはずですよ。

そういう背景があるから、小泉総理大臣は誰から何と言われようとアメリカ支持の姿勢をかえなかったんじゃないでしょうか。その裏には、ブッシュ大統領との間で選択肢のない何らかの約束があったとしか思えません。つまり、現在の日本が置かれている立場は、上のイラストのようなものじゃないでしょうか。

今回のイラク攻撃に突き進んだアメリカのやり方は、あらゆる反対意見を無視し、民主

義のルールを破ってリリス禁止条例を押し通した滋賀県の手法にそっくりな気がします。そんな滋賀県の言い分を飲んで、バスを駆除するトーナメントを開催するなんて言ってるトーナメント団体は、上のイラストのアメリカに対する日本の立場と同じですね。滋賀県の作った枠組みの中に入り込むことで自分達がおいしいめをできればそれでよい、一般アングラーのことなんかどうなってもよいという判断を下したわけですね。

それで琵琶湖のバスフィッシングがどうなるかということとはEditorialで近いうちに書きたいと思います。戦争のことは専門家である軍事アナリストの小川和久さんや軍事評論家の江畑健介さん達におまかせして、BBC服部はあくまでバスフィッシングの方でがんばりたいと思いますので、どうかお楽しみに……。

世界水フォーラムで南湖の浚渫船が消えた

琵琶湖ホット情報(03/03/22)

1月31日のBBCホット情報で予想した通り、琵琶湖南湖の浚渫船は世界水フォーラムのイベントを迎えて、きれいさっぱり姿を消しました。2000年4月の環境サミットのときと同じです。湖上で大きなイベントがある度に隠すことは、よほど一般市民やメディアの人達、さらには世界の人達に見られたくないんでしょうね。

上の写真はしばらく前に撮影したものです。こういう風に、普段は一般市民が湖上に目を向けてないのをいいことに、浚渫船が南湖のあちこちに浮かんで琵琶湖の水を茶色く濁らせながら湖底を掘り返してます。そのことはバスアングラーがよく知ってます。

毎日のように高速の調査船で大波を立てながら琵琶湖を走り回っている琵琶湖研究所の先生方は、こんな誰が見てもわかることに気が付いてないんでしょうか。気付いてないとしたら役立たずの大バカ者ですし、知ってて知らないふりしてるんだとしたら悪党です。南湖の浚渫はもうすぐできなくなると言われてるんですけど、もうすぐなんて言っていないで今すぐやめるべきです。それを言わない人達が外来魚について口やかましく言つのは、漁業調整規則を守らずに魚を獲ってた魚業者が在来魚の保護なんて言うのと同じです。そんなことで琵琶湖の環境なんか守れるわけありませんよ。

3月22日には世界水フォーラムに合わせたイベントとして漁船のパレードが行われました。例の琵琶湖独特の精悍な白い船体の漁船が、いつになく行儀よくおとなしく走っています。確か、漁業調整規則に違反する高馬力エンジンを積んだことがバレて、立ち入り検査で引っ掛かって登録を取り消された漁船が多かったはずなんですけど、どうやって数そろえたんでしょうか。なにしろ立ち入り検査が始まった1月末以降は、漁に出る漁船がガタ減りして、湖上がとても静かになっただくらいですからね。

これには裏話があつて、漁船の整備をしている工場で書類を山積みにして大急ぎで登録の手続きをしているのを見たという話を聞いてます。そういうことをして間に合わせたんですね。ということは、漁船登録をするのは滋賀県の水産課ですから、水産課もそれを手伝ったか、協力したか、あるいはしぶしぶでも登録を認めたということになります。

こういう漁業者やお役所のメンタリティーって、とても理解できません。悪いこととして漁船登録を取り消されたんだったら、パレードなんか辞退するのが常識ですよ。そういうことを考えもせず、大きな顔して出てくるということは、悪いことなんかしてないと居直ってるか、あるいは辞退することさえもできないほど立場が悪くなっちゃってるということなんじゃないでしょうか。つまり、辞退したらしたで、なぜかと聞かれたときに答えられないとか、そういうことです。自分達の都合の悪いことに蓋をし続けて、嘘に嘘を重ねてきたのが、ついにここまで来ちゃったかという感じです。

22、23日には県主催の外来魚虐殺大会も開催されています。県が付けた名称は「駆除釣り大会」とか言うらしいんですけど、魚釣りっていうのは、小さな魚は逃がすというようなマナーも含んだ遊びです。大きな魚も小さな魚も何でもかんでも殺すのは釣りとは言えません。やっつけることは魚釣りに見えるかもしれませんが、中味と精神は大違いです。皆さんが楽しまれているバスフィッシングと、こういうバカげたイベントを一緒にされたくありませんよね。ですから、虐殺大会と言いかえるのが適当かと思えます。

テレビのニュースで見たら、小さなブルーギルが2尾だけ写ってました。釣れなかったみたいですね。普通のバスアングラーとはまったく違う家族連れとかが護岸に並んで釣りをしている様子が写ってたんですけど、これも知ってる人が見たらいかにも苦しまぎれです。こういうことを考える人達に、キャッチアンドリリースのことなんか理解できるわけありません。テレビのインタビュアーに答えて「釣りをしてる方にもご理解いただいて……」なんて言うてる國松滋賀県知事の言葉が空々しいつらありませんでした。

世界水フォーラムに合わせて琵琶湖で開催されたそんなイベントのことを伝えるびわ湖放送のニュースに出てたのは國松県知事だけでした。普通はもうちょっといろんな人が出てく

ると思うんですけど、捕まるやつは捕まっちゃうし、摘発されるやつは摘発されちゃうし、逃げるやつは逃げちゃうしで、きつとこんなあほらしいイベントのインタビュに答えるのは知事ぐらいしかいなくなっちゃったんでしょね。そう言えば、メディアの取り上げ方もずいぶん冷ややかになってますし、本当にお気の毒な限りです。だけど、これぐらいでは終わりませんよ。本当にリリース禁止が始まるのは、まだこれから先のことです。4月1日まではあと10日。その間に、せいぜい覚悟しておいてくださいな。

リリース禁止前最後の3連休の琵琶湖は意外と平穏

琵琶湖ホット情報(03/03/24)

琵琶湖は春分の日がらみの3連休の滋賀県琵琶湖は、バスアングラーがどっと繰り出すかなと思っただんですけど、意外とそうでもありません。あちこちでトーナメントがあったり、いろんなイベントが開催されたりで、一部はにぎわってたんですけどね。それ以外の岸釣りポイントには空いているし、ボートも特別多いというわけではないし、リリース禁止前の最後の連休には何事もなく過ぎたって感じですよ。一般のアングラーはリリース禁止になる前にしらげちゃってるのかもしれないな。

あいかわらずボートが多かったのは南湖の浜沖です。先週の(日)トーナメントから状況があまりかわってないようで、ここしか釣れないという感じでボートが密集してます。釣れるポイントが岸から近いので、岸釣りアングラーも大勢集まって、ボートと岸から狭み撃ちしてます。それでも釣れてるから、すごいですね。名鉄沖はボートが多くなって、主に沖の方で釣りをしています。一部、岸にくっついて釣ってるボートもいるんですけど、まだ本格的ではないようです。

岸釣りアングラーは一部を除いて普段の休日並みです。岸から大きなバスが釣れるようになるには、まだちょっと早いかなくて感じですね。(日)正午前の近江舞子は、舟だまりに5人ぐらいアングラーがいました。釣れてるのは10~20cmのマメです。石積み突堤は誰もいません。(日)午後の吉川漁港は5人のアングラーがあっちへ行ったりこっちへ行ったりしながら釣ってました。「寒くて釣れない」と言いながらがんばってるのは、たまたま20cmぐらいのが釣れるからなんですよな。だけど、ここも1週間前よりスローになっている感じですよ。やっぱり寒さがこたえてるのかもしれないな。

大津市今堅田のリブレではマリーナメンバーとレンタルボート対象のオープントーナメントが(日)に開催されました。約60人の参加でバスを釣ってきたのが(日)人。ウェイイン率(%)以上の上々の成績です。大きいのは2匹、オーバー2尾と1匹、オーバーは何尾もキャッチされてました。一つ間違ったらオーフィッシュで終わることも多い今の時期にこれだけ釣ってるのは立派なものです。

去年の今頃、天神川のサクラ並木はもう散ってたんですけど、今年はまだやつと三分咲きになったばかりです。去年にくらべて(日)日以上遅れてるんですけど、これで平年並みか、平年よりちょっと早いぐらいでしょうか。3月中旬から寒い日が続いて、サクラの開花が足踏みしてるんですね。おそらく、これから暖かくなったら一気に咲くんじゃないでしょうか。

バスフィッシングのパターンも現在足踏み中なんですけど、サクラと同じで水温がグッと

上がったら一気に浅い所で釣れるようになるかもしれません。リリース禁止前の週末は残り1回。大きなバスが釣れ始めるのが早いかな、リリース禁止になるのが早いかな、タイミングがとても微妙になってきました。

今月の琵琶湖

常吉リグ、ネコリグに続く岸釣りの新テクニク発見!!

1月の琵琶湖

滋賀県琵琶湖のバスの岸釣りで、この半年ほどの間にワームの胴体をチョン掛けにするアングラーが急に多くなった。こういうワームのセットの仕方をワッキーリグと言つが、琵琶湖では何年も前から同様のリグがネコリグの名前でよく知られている。

ネコリグを琵琶湖でポピュラーにしたのは、有名な常吉リグの発案者である村上晴彦さんだ。今から10年近く前のことだが、雑誌で最初に常吉リグのことが取り上げられた当時、村上さんはすでにネコリグも同時に使っていた。雑誌でも相前後して取り上げられたのだが、先に有名になったのは常吉リグの方で、ネコリグの普及は何年も遅れた。なぜかということ、常吉リグは誰にでも簡単にバスが釣れるリグであるのに対して、ネコリグの方はある程度の使いこなしを要し、基本的にはより釣りにくいバスを釣るためのリグだからだ。

それがなぜ今になってネコリグが脚光を浴び始めたのかというと、バスが釣りにくくなったからにはかならない。もはや常吉リグは誰でも使ってるわけだから、バスはすっかりなれてしまっている。ネコリグの見慣れないアクションにより積極的にバスが反応するのは当然のことだし、常吉リグでは手が出ないポイントに従来よりも繊細に釣ることが可能になった。というわけで現在の琵琶湖の岸釣りはネコリグやワッキーリグがたいへんなブームになっ

ているわけだが、当の村上さんはすでに、さらに進んだリグを使った新しい釣り方に注目している。そのリグとは、環付きのマスバリの軸の部分にこく小さなスプリットシンカー（村上さんはガン玉オモリを使っている）を打ち、このフックで3インチ前後のワームをチョン掛けにする。ラインは2ポンドと極細だが、それでもなれないとキャストするのに苦勞するほどの超軽量リグだ。

これを狙うポイントにキャストしてボトムまで沈ませ、あとはロッドティップを小刻みに上下させながら、たるんだ分のラインだけをリールで巻き取る感じでこくゆっくりと引いてくる。つまり、ワームがボトムにかすかに付いているかいないかの状態でアクションさせ、ラインも限りなく張ってるか張ってないかの状態にして、スレバスをだまそうというわけだ。名付けてフワ釣り。「この釣りはまだ開発中で、現在は完成途上の仮の姿だ」と村上さん自身が言っているが、これから先、さらに釣りにくくなっていくであろう岸釣りのバスを攻略するには使えそうなテクニクである。

年末年始の雪と1月中旬の温かい雨の影響は？

2月の琵琶湖

昨年10月から続いていた滋賀県琵琶湖の水位の低下が1月中旬になってマイナス60cm台半ばに達したところようやく落ち着き、雨が降り続いた15日から16日にかけてわずか数cmではあるがピクリと上昇した。

琵琶湖南部の周辺では、ほとんど毎年1月半ばにまとまった雨が降る。この雨をきっかけ

に、それまで下がり続けていた水位が上昇に転じるのだが、お正月が明ける頃から20日頃までの間に雨が降る確率はかなりのもので、ここ10年以上の記憶をたどってもほぼ例外なく雨が降り、それ以降、水位は春まで上昇し続けている。

それが昨年1月は大量の雪が積もった後の雨だった。冷たい雪解け水が流れ込んだために水温が一気に下がり、琵琶湖のバス達は沈黙してしまった。1月中にさらに雪が降って水温が下がり続けたために、まともにバスが釣れるのは北湖の港ぐらゐのものになってしまった。この冬は、その雪が年末年始に降り、いつもよりも一足早く水温が下がったようだ。普通なら1月中旬頃までは岸釣りでもボート釣りで常吉リグなどのソフトベイトでそこそこはバスが釣れる冬の初めのパターンが成立する時期がしばらく続くものだ。ところがこの冬に限っては、それを飛ばして真冬のパターンになってしまい、早くも1月始めにはリップレスミノメタルジグなどでバスを誘って反射的に飛び付かせるような方法でないと釣れなくなってしまったのだ。

そこへもってきて1月中旬になっての雨と水位の上昇である。気温も上昇して3月下旬並みの暖かい日が続き、溪流釣りの解禁頃に降る菜種梅雨のような暖かい雨が1月に降った。もちろん、こんなに暖かい日が続くわけもなく、いつかは寒くなり2月から3月始めには琵琶湖とその周辺が1年間でもっとも寒くなる季節がやってくるはずだが、1月上旬から中旬にかけての気候変動がこれから先の真冬のバスフィッシングにどういった変化をもたらすだろうか。

確かに北湖の港ではバスが釣れているが、本格的な釣れ方にはもう一息だ。港外の水温があともう少し下がり、湧き水がたまって温かく保たれる港内との水温差がはつきりとしてくれば、たくさんさんのバスが港内に入り込んで本格的によく釣れるようになる。それがこの冬は例年より早まるのではないかと予想していたのだが、どうやら予想通り順調に進みそうにならな状況になってきた。

かと言って、冬の琵琶湖のバスフィッシングは、暖かい雨が降ったり、暖かい日が続いたからと言って、急によく釣れるようになるなんてことはまずない。へたをすると、港の外のバスは釣りにくい、港の中にはバスが少ないという、きわめてどっち付かずの状況が続いてしまう可能性もあるから、そのあたりのことをよく理解した上で攻略する必要がある。いったんリップレスミノメタルジグの釣りに移行したからには、この先もソフトベイトはきつぱりとあきらめて、バスが反射的に飛び付くのを狙う釣りに徹した方がよいのではないだろうか。港の外で釣る場合は、わずかでバスの活性が上昇するチャンスを見逃してはいけない。そのタイミング、場所のどちらかを間違えただけで何も釣れない結果になってしまうというぐらゐの覚悟を決めてかかる必要があるだろう。港内ではルアーのアクションをできるだけいいにすること、かすかなアタリを見逃さないこと。ほかのアンギュラーが釣れないバスを釣るためには、何よりもこの2点を極めることだ。

雪が少なく絶不調の琵琶湖。春の準備をお早めに

3月の琵琶湖

この冬の滋賀県琵琶湖周辺は、例年にくらべると雪がたいへん少ない。この時期の湖北の

釣り場は、湖岸に数cmの雪が積もっているのが普通だ。そのため、車を停める場所がないわ、湖岸に近付くのはたいへんだわで、なかなか思うように釣りができないのだが、この冬に限ってはそういうことがまったくない。駐車場は広々、湖岸にも楽々アプローチできて、どこでも好きな所で釣りができる。

ところがである。雪が少ないのはけっこうなのだが、バスフィッシングは例年になく不調なのだ。これは岸釣りもボート釣りも様子はかわらない。岸釣りは港の中に集まるバスが少なくないようで、なれたアングラーが手を尽くしても魚の顔を見るのがやっと、数釣りなんてとんでもない状況だ。

普通なら12月末から1月中頃には港内の漁船の陰などに小バスの大群が浮いているのが見えるようになる。それがこの冬は、2月に入ってやっと見えるようになった。この小バスに続いて、25~30cmのバスが釣れるようになるのが1月末から2月初め頃なのだが、この冬はその兆候がまったく見られない。釣れないまま冬が終わってしまうのではないかと心配してしまうほどだ。

ボート釣りの方はもっと厳しい状況である。バスプロやフィッシングガイドなどトップレベルのアングラーが釣りをしてもノーフィッシュがちつともめずらしくない。たまに釣れれば25~30cmとサイズはよいのだが、そういうのに当たらなければ、アタリも何もなしというのがあたりまえの厳しさなのだ。

そんな状況の中、このコーナーにたびたび登場しているリブレフィッシングガイドの河畑文哉プロが2月8日に47cm、9日に50cmと立て続けにグッドサイズのバスをキャッチした。

それもなんと、ロングビルミノーのDバスワレル79を使って、水深2m台のシャローウォーターで釣ったのだ。

ということとは、つまり、大きなバスはすでに春の産卵に向かって浅場へ動きだしているということなのだろうか。現時点でそう決め付けるのは早過ぎるかもしれないが、2月末から3月初めにかけても雪が降らないまま季節が進むようだと、そう判断して早めに春の釣りに切りかえた方がよいかもれない。

港の岸釣りは上層の水温が上がりに始める季節なので、それにつられて浮いたバスを狙う小型サスペンドシャッドやミノーなど、ここ数年不振だった釣りが復活する可能性がある。例年より遅れてバスが港の中に集まり、上層の水温が上がりに始めるタイミングと重なれば、そういうことが起こる可能性が大いにある。つまりこれも春の初めの釣りというわけで、岸釣りもボート釣りに春に向かっての準備を早めにした方がよさそうだ。

スノーニングが早くて釣るのが難しい春の原因と対策

4月の琵琶湖

今年のサクラの開花前線は、例年より10日前後早いペースで日本列島を北上しているようだ。滋賀県琵琶湖周辺のサクラも、例年よりもずいぶん早く、一部は3月前半に花を開き始めている。中でも早かったのは、大津市北部の堅田と衣川の境を流れて琵琶湖に注ぐ天神川沿いの桜並木だ。3月9日にはすでに三分咲きになり、写真を撮りに行った14日には五分咲きを通り越して七、八分咲きになっていた。

琵琶湖周辺のサクラの開花は、大阪あたりとくらべて1週間から10日遅く、例年4月中旬頃に満開になる。北部ではさらに遅く、海津大崎のサクラが満開になるのは4月後半のことだ。それが3月の下旬に、1本や2本だけではなく、天神川沿いの^⑧本ぐらいの並木全体が咲き始めたのだから、これってどう考えても異常な早さだ。

その天神川のサクラが開花し始めたのと同じ頃、雄琴や堅田のサクラはまだつぼみが硬くて、ぜんぜん咲きそうな気配もなかった。15日頃になって、ようやく天神川以外でもちらほらと開花しかけたサクラを見るようになったが、まだつぼみが硬いままのサクラも多い。場所によって、木によって開花時期にかなりのズレが出て、3月末頃になってようやく開花を始めた、開花はまだまだ先というサクラもあるかもしれない。

このような季節的なズレはバスフィッシングにも通じるものがある。それは前回のこのコーナーで「春の準備をお早めに」と書いた通りだが、それに加えて用心しないといけないのは、春の産卵に向かってのバスの動きが例年より早く始まった年は、決まって産卵シーズンの釣りが難しくなるということだ。

なぜそういうことになるかというと、一部のバスはすでに産卵を始めているのに、他のバスはまだ産卵の準備段階だったりというようなズレが生じるからだ。その結果、どんな場所でもどんな釣り方をすればよいのかということを絞り込むのが難しくなってしまう。

さらに加えて、春のバスの動きが早く始まったからといって、その分早く終わるわけではないということがある。そんな年でも例年と同じ頃まで産卵行動をしているバスがたくさんいて、バス全体の動きを見ると産卵行動がダラダラと細く長く続いているように見えるのだ。

そのため、ある釣り場、釣り方にはまって釣れる可能性のあるバスの数は少なく、さざ波のようにバラバラとしか釣れない。つまり、釣りにくいということになる。それよりは、産卵行動が遅く始まって、一気に大波のようにバスが動く春の方が場所も釣り方も絞り込みやすく釣りやすいのだ。

それでは、このような釣りにくいバスをどうやって釣ったらいいのだろうか。岸釣りの一例をあげると、産卵でアシ原に入っているバスをテキサスリグやラバージグで狙おうとするのであれば、徹底してその釣り方を押し通して釣れる場所を探す。完全に早過ぎるとか、遅過ぎるといふことでなければ、ダラダラと続く分、その釣り方で釣れるバスがどこかにいるはずだから、それを根気よく探そうというわけだ。

自分が釣りをしている場所に他のアングラーがまったくいないからといって、釣れないわけではない。そういうほかのアングラーが見逃している場所に大当たりのチャンスが転がっていることが、この春のようなシーズンには多い。それも、4cmも50cmもあるビッグフィッシュをゲットするチャンスが……。そのことを忘れず、あとは自分の釣りに信念を持ってチャレンジしてほしい。

異常づくめの春。早くも3月末には大釣りのチャンスか!?

4月の琵琶湖 改訂版

今年にはサクラの開花が異常に早く、東京では3月15日に開花宣言があった。これは例年より12日早く、観測史上もっとも早いとのこと。滋賀県琵琶湖周辺でも、大津市北部の堅田と

衣川の境を流れて琵琶湖に注ぐ天神川沿いの桜並木はなんと3月上旬に花が開き始め、17日には満開になって花びらが舞い始めた。

琵琶湖周辺のサクラの開花は、大阪あたりとくらべて1週間から10日遅く、例年4月中旬頃に満開になる。北部ではさらに遅く、海津大崎のサクラが満開になるのは4月後半のことだ。それが3月上旬に、1本や2本だけではなく、天神川沿いの20本ぐらいの並木全体が咲き始めたのだから、これってどう考えても異常な早さだ。

バスフィッシングの方も例年よりはるかに早いペースで季節が進んでいる。すでに2月下旬の時点で、浅場でクランクベイトやロングビルミノーにバスが反応し始め、その後、例年よりも2、3週間早いペースで春の釣りが進行しているのだ。

こういう風に、春先の時期の釣りが例年より早く始まった年は、その後の釣れ具合が不順になることが多い。春が早く始まったからと言って、その分、早く終わるわけではなく、バスの産卵行動はたいは例年と同じ頃まで続く。その間延びした分だけ、パターン変化がゆっくりダラダラと起こる。つまり、バスの産卵行動が散発的に起こるようになってしまつので、アングラーにとっては釣り場や釣り方をたいへん絞り込みにくくなつてしまつのだ。

著者は3月上旬頃までのバスの釣れ方を見ていて、今年の琵琶湖の春もおそらくそういうことになるのではないかと思つていた。ところが、その後、著者の予想を覆すようなことが次々を起つたのである。

まず、3月まじめ頃まで浅場でクランクベイトを使ってビッグフィッシュを立て続けに釣つていたりプレフィッシングガイドの河畑文哉プロから、12日から14日のガイドでは同じ釣り方で30cmクラスが数釣れるようになったという報告があつた。さらに、同じリプレフィッシングガイドの杉戸繁伸プロらも17日に30cmクラスを2人で20尾以上キャッチし、さらに場所をかえて同行の大地昭政さんが50cmジャストを上げた。

岸釣りでは16日に松井悟さんが真野漁港付近で50cmの大物をキャッチ。南湖のあちこちのポイントでは30~40cmが釣れるようになっていた。

このような状況を見ると、春が早く始まった年はその後の釣りが難しくなるという定石が今年に限ってはあてはまらないかもしれないと思えてくる。ひよっとしたら、早く始まつた春が一気に進んで、早く終わつてしまつことになるかもしれない。そうなること、この原稿が掲載される3月末から4月初め頃は、まさに春真っ盛りの大釣りのチャンスになっている可能性が大いにある。

ということ、このタイミングをくれくれも見逃さないようにしていただきたい。他のアングラーが気付いていない分、ビッグチャンスかも。

岸から狙うなら、思い切った浅場でシャロークランクベイトかスピナーベイトを引くが、アシ原をテキサスリグ、ラバージグなどで攻めてみよう。うまくタイミングが合えば、それこそ何年かに1回の大釣りのチャンスに出合えるはずだ。

南湖はドアフター。北湖のブリスボーンに期待したいゴールデンウィーク 5月の琵琶湖

前回のこのコーナー（4月の琵琶湖改訂版）で、滋賀県琵琶湖のバスフィッシングは、春の季

節の進み方が早い影響で、パターン変化も大幅に早まるという予想を書いた。蓋を開けてみれば実際にその通りで、南湖では産卵に向かうバスの浅場への動きが例年より2、3週間も早く始まり、4月上旬から中旬にかけてが産卵行動のピークとなった。

「トーナメントが開催されていた4月12日、名鉄沖はボートが密集状態になっていた。そのボートのほとんどが岸にくく近い所で釣りをしている。つまり、それだけバスが岸寄りの浅い所に集まっているということで、浅場でのバスの産卵にドンピシャリのタイミングでトーナメントが開催されたわけだ。

問題は、この後どうなるかだが、バスの産卵行動は湖の全域でいっせいに行われるものではない。広い琵琶湖の南と北では何週間も差があるし、南湖に限っても1週間から10日の差がある。

南湖のバスの産卵は早い所ではすでに終わっているし、遅い所でも4月末まで続かないだろう。ゴルデンウィーク頃の南湖は、産卵に疲れ切ったバスの体力がまだ回復していない、一番釣りにくい時期にはまる確率が高い。

それなら南湖はゴルデンウィーク頃がちょうどいいタイミングになるんじゃないかと期待したいところだが、これがまた微妙。4月中旬現在の南湖の水温は、沖合でやっと10度を越えたばかりで、南湖が15〜16度もあるのにくらべるとずいぶん低い。この水温がどれくらい上昇するかで状況が大きくかわってくる。

4月中旬までの状況から見て、ゴルデンウィークころの南湖で一番有望なのは、アシ原などに立ち込み、その沖側に近付いてきてるバスをノーシンカーのソフトスティックベイトなどで狙う方法だろう。場所によってはスピナーベイトやバイブレーションプラグ、シャロークランクベイトなどが有効かもしれない。どんなルアーを使うかは、バスがどれくらい浅場まで近付いてきているかと、藻や障害物が多いか少ないかで決めればよい。

こういう釣り方はまれば、今年のゴルデンウィークの琵琶湖北湖は、本当のゴルデンウィークになる可能性がある。もし、そうでなかったら……南湖は終わった後、北湖は始まる前という谷間のどん底にはまる可能性もあるが、それでも皆さんがせっかくの休みに釣りなかないということはないはず。どうせ行くなら、一発大当たりを狙ってみてほしい。今年のゴルデンウィークの琵琶湖北湖は、そんなチャンスがけっこうありそうな気がするのだが、この予想、前回同様、大当たりするだろうか。

琵琶湖と池原ダムで連日50UP。河畑文哉プロだけなせ釣れる

6月の琵琶湖

リブレフィッシングガイドの河畑文哉プロがこのところ絶好調。滋賀県琵琶湖でも奈良県池原ダムでも立て続けに50cmオーバールのバスをキャッチしている。

池原ダムでは5月9日に54.5cm、10日に51.5cmと56.5cmをキャッチ。琵琶湖では15日に50cmと56.5cm、16日に50.5cm。いずれもゲストが釣った分を合わせた成績だが、釣りに出た日のうち50cmオーバーを釣らない日よりも釣る日の方が倍くらい多いというすごい確率だ。もちろんその間、50cmオーバーが釣れない日でも、50cmにわずかに届かない魚はたくさん釣っているのだから、50cm前後でいじめるならほんと毎日釣っていることになる。



河畑プロが池原ダムでフィッシングガイドを始めたのは今シーズンからで、本格的にガイドがスタートするまでは「琵琶湖とかけ持ちで、お客さんにちゃんと釣ってもらえるんだろっか」などと心配していた。それが蓋を開けてみれば現在の好調ぶりである。これにはさすがと言っほかないが、釣り方はいたってオーソドックス。特別にかわつたテクニクなどを使っているわけではない。

釣っているポイントは自然湖の琵琶湖と人造湖の池原ダムではまったく異なる。琵琶湖は沖の水深2〜3mのウィードエリア。池原ダムは湖岸沿いの切り株や立ち木、ブッシュなど。池原ダムのビッグバスは産卵のために浅い所へ上がってきたのを目で探して釣るアングラーが多いが、河畑プロは見えバスをほとんど釣っていない。これは意識的に見えバスを避けているのではなく、ゲストの希望の合わせて見えバスを狙ってみることもあるが、見える魚は釣りにくい格言通り、河畑プロのテクニクを持ってしてもなかなか釣れない。それよりも普通に釣ってて大きなバスが釣れる確率の方がはるかに高いのだそつだ。

メインルアーはジグヘッドリグとダウンショットリグ(常吉リグ)で、ジグヘッドリグにはパークレイのヌードルまたはジャツカルのダーツ4インチをセット、ダウンショットリグにはパークレイのパワーホグ3インチをセットして使っている。琵琶湖では5月前半までダウンショットリグでも釣れていたが、現在はジグヘッドリグの方がよいとのこと。

確かに琵琶湖も池原ダムも日本屈指のバス釣り場だが、それだけバスアングラーも多く、大きなバスが簡単に釣れるということはない。そこでこれだけの成績を上げることができる理由を河畑プロに聞いたら、次のような返事が返ってきた。

「琵琶湖はアタリが本当に少ない。池原は琵琶湖よりも数釣れるけど、それでもアタリがたくさんあるわけではない。問題はそれをきっちり釣ることができるかどうか。これは自分が選んだ場所や釣り方が正しいと信じてやり切るしかない。大部分のアングラーは、ちょっとアタリがないとあきらめてしまっけど、それでは釣れない。今の時期は正しい釣り方と場所を選んだら、あとはどれだけ根気よくがまんできるかが勝負になる。琵琶湖も池原もバスはたくさんいるんだから、ちゃんとやってれば釣れますよ」

バスがトップで釣れそつで釣れないときの新対策

7月の琵琶湖

バスが水面を意識してはいるのだが、いまいちルアーには出切らないということがある。トップウォータープラグを見に来るが食い付かない。あるいは、姿が見えているバスのすぐそばにルアーを通すと、一瞬ルアーの方を向くが、深追いはしてこないというようなケースだ。

こういうバスを釣るための代表的なテクニクとして、ノーシンカーリグにクラブをセッ

トしてテイルをヒラヒラさせながら水面を引いてくるという方法がある。同じノーシンカーリグでもストリート系のワームをセットした場合、バスがいると思われる所の水面上までスイスイとワームを泳がせてきて、バスの目の前に来たところでラインを緩めて沈ませてやる。

トップウォータープラグに食いつかないバスが、これで一発で釣れることがある。つまりバスに与える刺激をかえてやるわけで、いずれもトップウォーターゲームの好機である梅雨時期に忘れてはいけない欠かせないテクニクだ。

さらにもう一つ、今年の梅雨から新しい釣り方が加わった。6月

上旬にジャックカルから発売されたバニーというプラグを使った釣り方なのだが、これが、ただ投げて引くだけと至って簡単。それだけのことで、他のルアーには反応しなかったバスがどこからともなく現れてきてパクツと食いつくから、あーら不思議である。

一見、お尻が太く太くずんぐりむっくりとした形のクランクベイトにしか見えないバニーをキャストし、深く潜らないようにロッドを立てながら水面直下を引いてくる。すると、他のルアーではとても起きないような強い引き波が立つ。この引き波がバスに対しては、これまでになかった刺激で、思わず反応してしまつたらしい。

このバニーを使えば面白そうな釣り場の例としてあげておきたいのが奈良県の七色ダムだ。周年、水位が安定している七色ダムは、湖岸の立ち木が水面に覆い被さり、その下の陰

にバスが付いている。このバスをどう釣るかというときに、バニーが新しい武器になつてくれそうなのだ。

難しいことを考えずに、木の枝の下にどんどんバニーを投げ込んで引いてくる。これだけのことで数釣れれば、さぞ爽快な釣りじゃないかと思うのだが、やってみるならなるべくお早めに。なにしろ今時のバスは、新しいルアーになれるのも早いですからな。

それと、ふたまりほど小型のベビーバニーも追って発売されるとのことだ、こちらの方は野池などでぜひお試しあれ。

台風2連発の急増水と濁りがサマーパターンにどう影響するか

8月の琵琶湖

7月に入って二つの台風が相次いで近畿地方に接近した。10日の台風6号と15日の台風7号である。いずれも梅雨時期の台風らしく大量の雨を降らせ、各地に大きな被害が出た。釣り場への影響も甚大である。

北寄りに展開していた梅雨前線が台風に刺激されて活発化したことにより、各地で洪水の被害が出た。この梅雨前線の端っこが滋賀県に引っ掛かっていたため、琵琶湖周辺にも大量の雨が降り、水位が急上昇すると同時に泥濁りがほぼ全域に広がってしまった。

雨は滋賀県東部と南部に集中したため、湖東に流れ込む野洲川や愛知川の濁りが特にひどい。そのため毎年夏場のバスフィッシングの好ポイントになる沖島周辺などはアマゾン川のような水質になってしまつている。それ以外にも急な増水で濁つた川が多く、消火栓から流

入する濁りで局地的にひどい水質になってしまった所があちこちにできている。その沖合には薄茶色の濁りが広がり、岸から何キロ離れても水質がクリアにならない状態だ。

奈良県池原ダム周辺にも大量の雨が降り、下がっていた水位が一気に回復した。こちらは減水がひどくて一雨ほしいところだったので、まさに恵みの雨と言ってもいいくらいだが、水位が100以上も一気に入上昇したのと、本流である北山川のバックウオーターから濁った水が流れ込んだため、やはり影響は小さくない。特に梅雨から初夏にかけて好ポイントになる本流の上流部が濁ってしまったのが痛い。

二つの台風がもたらした大雨が、これから夏に向かってどのように影響するかだが、琵琶湖も池原ダムも水況が落ち着いてバスが濁りに慣れてくれば、よく釣れるようになる可能性がある。そのタイミングは、海の日の連休頃から8月初め頃までの間になりそうだ。

琵琶湖はその後も影響が残って、今年は本当の夏のパターンがなかったということになる可能性もある。真夏らしいディープウオーターパターンやストラクチャーのシェード狙いよりも、水深3〜4mのウイドエリアのアウトサイドエッジを狙った方がバスがよく釣れるという中途半端な夏になる可能性が大きい。

池原ダムは最初のうちは濁りを避けて釣った方がよいはずだが、しばらくたつたら思い切った逆の発想をしてみよう。バスが濁りになれてくると、「こんなひどい濁りの中で」と思うような所で意外と大きなバスが釣れたりするから、タイミング次第で狙ってみるのも悪くないと思う。

その後の池原ダムは、次第に通常のサマーパターンに移行するものと思われるが、それでも早朝のトップウオーターとか日中に意外に浅いタナで釣れたりとか、そういうパターンがいつまでも残る可能性はある。

地球温暖化や天候異変などで、これから先、今年のように台風が立て続けにやってくるようなことが多くなるかもしれない。そのなつたときにバスフィッシングのパターンを考えるには、今以上に柔軟な発想が必要になるはずだ。この夏は、そのシミュレーションシーズンになりそうな気配濃厚である。

エルニーニョと日本のバスフィッシングの関係

9月の琵琶湖

前回の話題は台風がもたらすバスフィッシングへの影響だった。今回はさらに話を大きくして、エルニーニョの影響について書かせていただきたい。

気象庁は8月中旬、エルニーニョ現象が発生の初期段階にあり、少なくとも年内は続くという予想を発表した。この発表を聞いて、「今頃何を言ってるのか」と思ったのだ。

6月にグアムヘカジキ釣りに行ったときに、すでに現地のアングラーの間でエルニーニョのことが大きな話題になっていた。今シーズンのグアムはカジキだけではなく、カツオもとても少ない。おまけに近くで台風が次々と発生して大荒れの天候が続いている。それがエルニーニョのせいだというのだ。

話を日本の釣り場に戻そう。エルニーニョ現象が起きると、日本では冷夏、暖冬の傾向があるとされている。これが本当かどうかはわからない。京阪神で連日30度を越える最高気温

が記録されているのは、エルニーニョによる冷夏の傾向と温暖化が相殺した結果だろうか。

そんな都会の暑さから逃げ出してバス釣り場を訪れると、夏らしくない釣れ方をしているところがあちこちにある。奈良県池原ダムは7月下旬に台風の影響で増水してからというもの、8月に入ってからもずっと1人平均2尾前後、多いアングラーは3尾という、ここ数年のサマーシーズンにはとても考えられなかったような釣れ方をしている。滋賀県琵琶湖でも、水温が例年より高い北湖の水深2メートルラインのウイードエリアで1人で3尾も釣ったアングラーがいる。

いずれもバスが釣れている水深が浅いのが特徴で、これは典型的な冷夏のパターンだ。そのことをもう一步踏み込んで考えると、このまま夏のディーブパターンがやってくることなく、秋の初めのパターンに移行していく可能性がある。現時点でそこまで予想するのは気が早過ぎるかもしれないし、釣り場による違いも考慮する必要があるのだが、そういうことを頭の隅に置きながら釣りをしていただければ、他のアングラーに先駆けて大当たりのパターンを見付けることができるかもしれない。

エルニーニョが起こっているという一つの情報が、このような思考のヒントになる。釣れない原因探しなら「潮が悪い」と言っていればいいのだから、ことは簡単だ。そうではなく、自分の力で魚を釣るためには、有益な情報を多く集めるとともに、はるか遠くで起こっているエルニーニョのような自然現象をも自分の釣り場に取り込んで考えようとする態度が欠かせない。

同じ釣りをするなら、その方が面白いというのが、釣りという遊びに対する著者のスタンスだ。その点でグアムのアングラーに一步先んじられたのと、日本の気象庁は今頃になってしまったという、今回はワールドワイドな話題をお届けした。次回は宇宙的な観点からバスフィッシングを論じてみたいと思うのだが、これは著者の情報収集能力ではしよせん無理なことだろうか。

アングラーが多い秋の連休を賢く乗り切るための方法

10月の琵琶湖

この秋は9月から11月までの祝祭日がすべて週末にくっ付いた連休になっている。土曜日と合わせて3連休が多いのが特徴だ。

その最初の連休となった9月14日から16日の3日間、奈良県池原ダムを訪れたバスアングラーは日によって極端に多かつたり少なかつたりした。アングラーが最も多かったのは3連休中日の15日で、レンタルボート店は予約で一杯、昇降業者もいっぱい降ろしていて、最盛期のゴールデンウィークにも負けないにぎわいとなった。池原ダム全体で300隻くらいはボートが出てたんじゃなくかという話もあったくらいだ。それに比べると、連休初日の14日は半分くらい、最終日の16日はそのさらに半分以下だった。

連休の特定の日にアングラーが集中する傾向は、ここ数年、特に顕著になりつつある。池原ダムに限らず、またバスフィッシングに限らない釣り一般にも共通する傾向のようだ。このパターンを読むことができれば、アングラーが少ない日も予想できるはず。これって釣りに行くのにとっても有利なんじゃないかということも少々考察してみたい。

例え休みが長期であつても、何日も続けて釣りをするアングラーは減る傾向にある。これは不景気の影響がもしれない。それでも連休中の1日ぐらいは釣りに行こうというアングラーは少なくない。それが特定の日に集中する。問題はその日がいつかだ。

連休の最後の日ぐらゐ家でゆっくりしたいとは誰でも思う。だから最終日はアングラーが少ない。これは休みが長期に渡るほどはつきりしている。

池原ダムではレンタルボート店や昇降業者のトーナメントがなぜか5日に集中して行われた。多くのアングラーを集めるトーナメントや釣り大会は2連休なら初日、3連休なら初日か中日に開催されることが多い。こつこつ日は避けるに越したことはない。

池原ダムのすぐお隣の七色ダムでは、アングラーの多さが3連休を通じて池原ダムよりも平均していた。これはレンタルボートの総数や昇降業者のキャパシティーが池原ダムにくらべて小さく、その分3日間に分散したということだ。

このことから次のように考えられる。アングラーの需要がレンタルボート店などの供給を上回る人気釣り場は連休を通じてアングラーが多い。不人気釣り場は連休でも空いている。微妙なのは、池原ダムのように需要と供給がバランスしているか、供給の方がやや上回り気味の釣り場だ。こつこつ釣り場で、先に書いたような理由から、連休の特定の日にアングラーが極端に集中するという現象が起こるのではないだろうか。

そこで対策だが、人気釣り場はなるべく早くレンタルボートなどを予約するしか方法はなない。この場合、行けるなら連休のうち早めの日、できれば初日がベスト。日を追うにつれ、連休のプレッシャーを受けて魚が釣れなくなっていくことをお忘れなく。

特定の日にアングラーが集中する釣り場は、レンタルボート店などに予約状況をよく聞いて、なるべく空いている日に釣りに行こう。それが無理なら最終日。釣り難いのを覚悟で行くのなら、アングラーがむちゃくちゃ多いよりは、空いてゆっくり釣れる方が気持ちがいいというものだ。

琵琶湖バスのリリース禁止条例が滋賀県議会で可決成立。その影響と環境問題への危惧

11月の琵琶湖

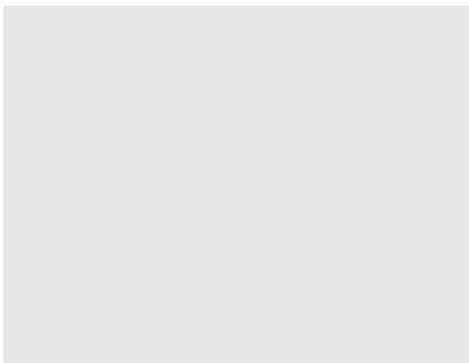
琵琶湖で釣ったバスのリリースを禁止する「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」が滋賀県議会9月定例会の最終日となった10月16日に可決成立した。同条例が釣りに影響する部分は次の通り。

- 1 法律で指定されたバス、ブルーギルを含む外来魚の琵琶湖への再放流の禁止
- 2 サイクルエンジンの2008年4月からの使用禁止（既所有の2サイクルエンジン付きプレジャーボートは2008年4月から使用禁止）

さらに加えて同議会12月定例会では「湖面利用税」についての審議が行われる予定。滋賀県から発表された湖面利用税の概要によると、琵琶湖での船舶利用者に届け出義務を課し、1隻あたり年間3000～30000円を徴収することになっている。

これらがすべて施行されると、バスアングラーは次のような影響を受けることになる。

まず、琵琶湖で釣ったバスをリリースできなくなる。釣り上げたバスは持って帰って食べ



るが、県が設けた回収用の入れ物に入れるか、そうでなければ他の生ゴミと一緒に捨てるかしないといけない。ボート釣りに、さらに二重の制限が加わる。2サイクルエンジンは2006年4月から使えない。すでに所有しているものでも2008年4月からは使えなくなるので、現在の愛艇を琵琶湖に浮かべて釣りを楽しもうと思えば、4サイクルエンジンに載せかえるしかない。

湖面利用税については現段階で細かいところがどうなるかまではわからないのだが、県発表の概要通りだと、これまたやっかいなことだ。前もって登録しておかないといけないということは、「来週の連休は天気がよくさうだから、ひさしぶりに琵琶湖へボートを持って行って釣りをしようか」なんてことはできなくなる。年に数回しか琵琶湖で釣りをしないボートアングラーでも1年分の利用税を支払わないといけないということになったら、彼らは事実上閉め出されてしまうだろう。

そんな状況を知ってか知らずか、体育の日がらみの3連休中日の10月13日は快晴微風的好天に恵まれたこともあって、この秋一番ではないかと思われるほど大勢のバスアングラーが琵琶湖で釣りをしていた。釣り場の混雑は3連休の中日が一番ひどく、初日がそれに次ぎ、

最終日は大したことないというのは、前回のこのコーナーで解説したパターン通りの結果であった。

右ページの写真はその13日に撮影したもので、場所はバスの岸釣りではトップクラスの人気釣り場である近江舞子の石積み突堤。このポイントでバスがよく釣れるようになるのは、例年11月後半頃になってからのことだが、すでに足元には小型のバスがたくさん見えているし、中には30cm近いですませますのサイズもいた。

この日はたくさん釣ったアングラーで10尾ほど。普通は2、3尾も釣ればよい方で、さすがにこれだけ混み合うとノーフィッシュのアングラーも多い。それでも今の時期、連休の混雑中であることを考えれば、まずまずの結果だ。

現在、琵琶湖の水位、水温ともにグングン下がりに続けていることを考えれば、この冬の岸釣りは意外と早く好シーズンを迎えるかもしれない。せめて、リリースを禁止する条例が施行されるまでの間だけでも、バスがよく釣れてほしいものだ。

注 サンケイスポーツ紙の連載終了にともない、今月の琵琶湖は2002年11月が最終回になりました。最終回の原稿は、内容の一部がサンスポの紙面では削除されています。ここに掲載した原稿は、著者が書いた通りのものです。さらに、サンスポに出稿した原稿は著者が最初に書いたものを大幅に書きなおしたものでした。最初に書いた原稿はEditorial Vol.91(55ページ)掲載し、なぜこういうことをしたかという説明も加えさせていただきました。